

茨城県教育財団文化財調査報告第240集

宮後遺跡 2

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

上巻

平成17年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第240集

^{みや}宮 ^{うしろ}後 遺 跡 2

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

上 卷

平成17年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



第62号土坑墓出土垂飾



遺跡近景



第1889号土坑出土土器



第1161号土坑出土土器



第1160号土坑出土土器



第1614号土坑出土土器



第955号土坑出土土器



第1445号土坑出土土器



第1209号土坑出土土器



第1859号土坑出土土器



第1253号土坑出土土器



第1994号土坑出土土器



第1168号土坑出土土器



第1913号土坑出土土器

序

茨城県は、21世紀の社会として、高齢者や障害者、子どもをはじめとして、誰もが安心して生き生きと暮らせるやさしいまちづくりを推進しております。このような状況の中で、保健・医療・福祉サービスや世代間の交流などの機能を備えたまちづくりのモデルとしてやさしさのまち「桜の郷」整備推進事業が計画・整備されているもので、その事業地内には宮後遺跡をはじめ、石原遺跡、大塚遺跡、綱山遺跡など多くの遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成10年4月から平成12年3月まで宮後遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は、平成14年3月に刊行された『宮後遺跡1』の報告書に続き、宮後遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会、茨城町特定開発課をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成17年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤 佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成11年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町大字近藤に所在する宮後遺跡^{みやうしろ}の発掘調査報告書である。
- 2 本書が報告の対象とするのは、宮後遺跡2区の縄文時代の遺構と遺物である。
- 3 当遺跡の発掘調査期間および整理期間は、以下の通りである。

調 査	平成11年4月1日～平成12年3月31日
整 理	平成13年4月1日～平成14年3月31日
- 4 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久のもと、調査第1班長瓦吹堅、主任調査員川又清明、藤田哲也、和田清典、吹野富美夫、長谷川聡、浅野和久、副主任調査員荒蒔克一郎が担当した。
- 5 当遺跡の整理および本書の執筆・編集は、整理第一課長川井正一のもと、主任調査員和田清典、吹野富美夫、浅野和久、副主任調査員荒蒔克一郎、駒澤悦郎が担当した。執筆は、第1・2章、第3章第2節を和田が、第3章第3節1 竪穴住居跡、2 屋外炉、3 土坑（第1909号土坑～第2023号土坑）、5 土器埋設土坑を荒蒔が、3 土坑（第953号土坑～第1097号土坑）を駒澤が、3 土坑（第1098号土坑～第1464号土坑）、6 ピット群、7 ピット、8 陥し穴を和田が、4 土坑墓を和田と駒澤が、9 遺構外出土遺物を浅野が、3 土坑（第1465号土坑～第1908号土坑）、第4節まとめを吹野が担当した。なお、校正は整理第一課長瓦吹堅のもと荒蒔が担当した。
- 6 本書の作成にあたり、縄文土器の地域的様相について、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター塚本師也氏に御指導いただいた。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、宮後遺跡はX軸=+36,040m, Y軸=+51,840mの交点を(A1a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C..., 西から東へ1, 2, 3...とし、その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa, b, c...j, 西から東へ1, 2, 3...0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1」, 「B2b2」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付して併記した。

3 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SK-土坑 P-柱穴・貯蔵穴 p-ピット群の柱穴
遺物 P-土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 TP-拓本土器
土層 K-攪乱

4 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである

 炉・焼土  硬化面  土器  土製品  石器・石製品

5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社)を使用した。

6 遺構・遺物実測図の掲載方法については、以下のとおりである。

(1) 遺跡全体図は縮尺250分の1とし、各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

7 「主軸方向」は、炉を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。なお推定値を[]を付して示した。

8 土器の計測値の単位はcmである。なお現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

9 調査時の遺構番号を整理時に変更した。一覧表の最後に発掘番号として表した。

抄 録

ふりがな	みやうしろいせき							
書名	宮後遺跡2							
副書名	やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第240集							
編著者名	和田清典, 吹野富美夫, 浅野和久, 荒蒔克一郎, 駒澤悦郎							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行年月日	2005(平成17)年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地							
みやうしろいせき 宮後遺跡	いばらきけんひがしいばらき 茨城県東茨城 ぐんいばらきまちおおあぎ 郡茨城町大字 こんどうあぎみやつけ 近藤字宮附222 ほんち 番地の3ほか	08302 — 228	36度 19分 21秒 (36度) 19分 (32秒)	140度 24分 45秒 (140度) 24分 (33秒)	24 ~ 29m	19980401 ~ 20000331	39,064m ²	やさしさのまち 「桜の郷」整備 事業に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮後遺跡	集落跡	縄文時代中期	竪穴住居跡 62軒 屋外炉 3基 土坑 1026基 土坑墓 238基 土器埋設土坑5基 ピット群 1か所 ピット 359基 陥し穴 3基		縄文土器(浅鉢・深鉢・鉢・甕・器台), 土製品(土器片円盤・耳飾), 石器(石斧・石鏃・石皿・磨石・凹石・敲石), 石製品(翡翠製垂飾・琥珀製垂飾・挾状耳飾・石棒)		縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。特に、縄文時代中期に大規模な環状集落が形成され、その中央部に土坑墓群が分布していた。土坑墓からは翡翠製垂飾、琥珀製垂飾などが出土している。フラスコ状土坑からは良好な一括資料が出土している。	

総目次

—上 卷—

序	
例言	
凡例	
抄録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 竪穴住居跡	11
2 屋外炉	128
3 土坑	130

—下 卷—

3 土坑	325
4 土坑墓	530
5 土器埋設土坑	545
6 ピット群	550
7 ピット	553
8 陥し穴	559
9 遺構外出土遺物	561
第4節 まとめ	566
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

やさしさのまち「桜の郷」整備事業は、福祉・医療・健康増進・生きがいづくり等の機能を備えた、高齢化社会に対応できる総合的な「人にやさしいまちづくり」のモデルとなる新たなまちづくりプロジェクトであり、茨城県のほぼ中央に位置する茨城町において整備を目指している。

工事に先立ち、平成9年1月20日、茨城県は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は、平成9年3月14日から、近藤・大戸地区の試掘調査を実施し、工事予定地内に石原遺跡、宮後遺跡、大塚遺跡、綱山遺跡が所在する旨を茨城県に回答した。茨城県は、平成10年3月2日、茨城県教育委員会にその取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は、茨城県と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であることから、平成10年3月31日、茨城県に対し、石原遺跡、宮後遺跡、大塚遺跡、綱山遺跡を記録保存とする旨の回答を行い、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成10年4月1日から平成11年3月31日にかけて、宮後遺跡、石原遺跡の発掘調査を実施することとなった。そのうち宮後遺跡については、表土除去後に確認された業務量をもとに委託者及び茨城県教育委員会文化課と協議の結果、調査期間が1年間（平成12年3月31日まで）延長された。平成10年度は、宮後遺跡1・3区、石原遺跡の調査を終了した。平成11年度は、宮後遺跡の残り2・4・5区、さらに大塚遺跡、綱山遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

宮後遺跡2区の発掘調査は、平成11年4月1日から平成12年3月31日までの1年間にわたって実施された。11月には、契約内容の変更があった。以下、宮後遺跡2区の調査の経過について、特記事項とともに、概要を表で記載する。

当遺跡は、当初から遺構の重複が激しかった。調査が進むにしたがって、奈良・平安時代の遺構の下に、縄文時代中期の遺構が確認されるなど、業務量が予定より多いことが判明した。11月9日、宮後遺跡、大塚遺跡、綱山遺跡の残りの総業務量を算出し、業務量変更の打ち合わせを持った。協議の結果、宮後遺跡の調査終了が最優先され、大塚遺跡の人員を宮後遺跡に移動することになった。大塚遺跡は、平成13年度2か月の調査となった。

工程	平成11年										平成12年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
調査準備及び遺構確認	■												
遺構調査	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
遺物洗浄 遺物注記 写真整理		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
補足調査及び撤収												■	



第1図 宮後遺跡縄文時代遺構全体図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

宮後遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字近藤字宮附222番地の3ほかに所在している。

茨城町の地形は、町のほぼ中央部を東流する涸沼川と、その東に展開する涸沼によって、台地を南北に二分されている。北部の台地は、標高25～30mの東茨城郡北部台地の先端部を形成し、北西から流れる涸沼前川を含む大小の支谷が涸沼を中心に南面して開口している。南部に発達する台地は、西から大谷川、南から寛政川が涸沼に流入し、その間に大小無数の支谷が台地深くまで侵入し、北部台地に比べて起伏も多く一層複雑な地勢を成している。これらの河川流域の沖積低地は水田として、台地は畑地・樹園地として利用されている。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で、岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常総粘土層、関東ローム層の順に重なっており、これらの地層はいずれもほぼ水平層である。

当遺跡は、茨城町の北西部の近藤・大戸地区にあり、涸沼前川の支流である小橋川に開析された標高25m～29mの台地縁辺部に位置している。当遺跡の東側は小橋川から伸びる小支谷が入り込んでおり、水田として利用されている。調査前の現況は陸田・畑地・山林である。

第2節 歴史的環境

当町周辺は、涸沼を中心として、涸沼川、涸沼前川など水運に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきたため、縄文時代から中近世にかけての遺跡が数多く存在している。(第1図)ここでは、宮後遺跡に関連する主な遺跡について、時代別に述べることにする。

(1) 縄文時代

宮後遺跡<1>に当時の人々の痕跡が確認されるようになった縄文時代前期前半は、縄文海進により海水面が現在より高かったことが想定される。涸沼川及び涸沼前川流域では小鶴遺跡<14>・東山遺跡<16>・シッペイ沢遺跡<17>・奥谷遺跡<27>などに小集落が営まれ、越安貝塚<23>・シッペイ沢遺跡・南小割遺跡<41>などでは貝塚が形成された。

中期後半になると、前期より遺跡数が増加し、当遺跡のような大きな集落が営まれるようになった。塚越遺跡<12>・赤坂南坪遺跡<26>・天古崎遺跡など、町内全域で見られるようになる。

後期になると遺跡数が減る傾向にあり、当遺跡でも後期の土器片は数片が確認されただけである。

(2) 弥生時代

当遺跡と同時期の後期後半(十王台式期)の集落として、涸沼前川流域には、平成7年度に調査された矢倉遺跡<8>、平成8年度に調査された大畑遺跡<9>、平成10年度に調査された石原遺跡<2>、平成11年度に調査された綱山遺跡<4>、平成11・12年度に調査された大塚遺跡<3>、その他に稲荷宮遺跡<5>、大戸下郷遺跡<7>・台畑遺跡などがあり、遺跡数が多い。この時期には、涸沼川流域を中心とする文化圏があったことが想定されている。十王台式期の遺物を比べると、大畑遺跡、矢倉遺跡、石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、当遺跡1・3区とでは頸部文様の施文及び範囲などに違いが見られることから、遺跡間の継続的つながりが考

えられる。また、十王台式土器と違う文様の土器も出土しており、他地域との交流が想定される。

(3) 古墳時代

古墳時代になると遺跡数が増加する。平成10年度に調査された石原遺跡、平成11年度に調査された綱山遺跡、平成11・12年度に調査された大塚遺跡では、弥生土器と土器器が一緒に出土した住居跡が確認され、弥生時代から古墳時代に移るこの地域の様相を知る手がかりとなると思われる。涸沼前川の下流に位置する奥谷遺跡からは、古墳時代前期の豪族居館跡の溝や住居跡⁶⁾が、涸沼前川を挟んで対岸の台地上に位置する南小割遺跡からも、前期の小波状口縁をもつ土器や住居跡が確認され、近くには昭和60年の周溝の調査で、茨城町地方では最も古い時期（4世紀末～5世紀初頭）に位置づけられた前方後方墳である宝塚古墳〈25〉がある。それに続く中期から後期にかけての古墳が61基、埴輪製作跡の小幡北山埴輪製作遺跡〈43〉⁷⁾がある。後期の大きな集落として前述の奥谷遺跡・南小割遺跡などがある。

(4) 奈良・平安時代

律令制下の奈良・平安時代の茨城町域は、那賀郡八部郷、茨城郡島田・安俣・白川郷、鹿島郡宮前郷に属していた。この時期の遺跡は、町内全域に確認され、100遺跡を数える。奥谷遺跡からは、百数十点の墨書土器のほか円面硯や刀子が出土している。特に、墨書の「曹カ司」は、宮中・官衙などの庁舎・宿直所・局・部屋などの意味があり、当時の奥谷遺跡が官衙的あるいは公共的な施設を含む集落であったことを示している。⁹⁾ 面山遺跡〈28〉⁸⁾からは、「土師神主」と書かれた墨書土器が、大山原からは、「前家□□」と書かれた須恵器坏が出土している。¹⁰⁾ 隣接する大塚遺跡からは「コ」の字状に並ぶこの地域の中心的な遺構と考えられる掘立柱建物跡群が確認され、墨書土器や円面硯・灰釉陶器も出土している。綱山遺跡でも掘立柱建物跡が確認され、円面硯・灰釉陶器・墨書土器も出土しているので、3遺跡の関連が注目される。

(5) 中世・近世

常陸大掾氏系の吉田清幹に始まる大戸氏一族の所領であった前田地区の万東山地区からは、13世紀前半と思われる「青白磁蓮牡丹文梅瓶」¹¹⁾が出土している。涸沼前川・涸沼川沿いには、当時も有力な氏族がいたことがうかがえる。

中世の遺跡は、主に城館跡である。現存する町内の城館跡の中で小幡城跡^{おぼた}が最大規模であるが、築城者については不明である。他に、宮ヶ崎城跡^{みやがさき}¹²⁾、海老沢館跡^{えびさわ}、鳥羽田城跡^{とりはた}、奥谷館跡^{おくま}、飯沼城跡^{いひぬま}、谷田部城跡^{やたべ}、水戸市平須館跡〈32〉などが所在している。奥谷遺跡からは、堀、地下式墳、方形竪穴状遺構、土坑、井戸が確認され、土師質土器や陶器が出土している。大畑遺跡からは、堀を除く同様な遺構・遺物が出土している。

近世になると、町の中心部を南北に走る水戸街道に沿って、長岡、小幡は宿駅として発展した。涸沼南岸の網掛、宮ヶ崎、海老沢は水上交通の要所として栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩など奥州諸藩と江戸を結ぶ物資輸送の中継地として重要な役割を果たしていた。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図の該当番号と同じである。

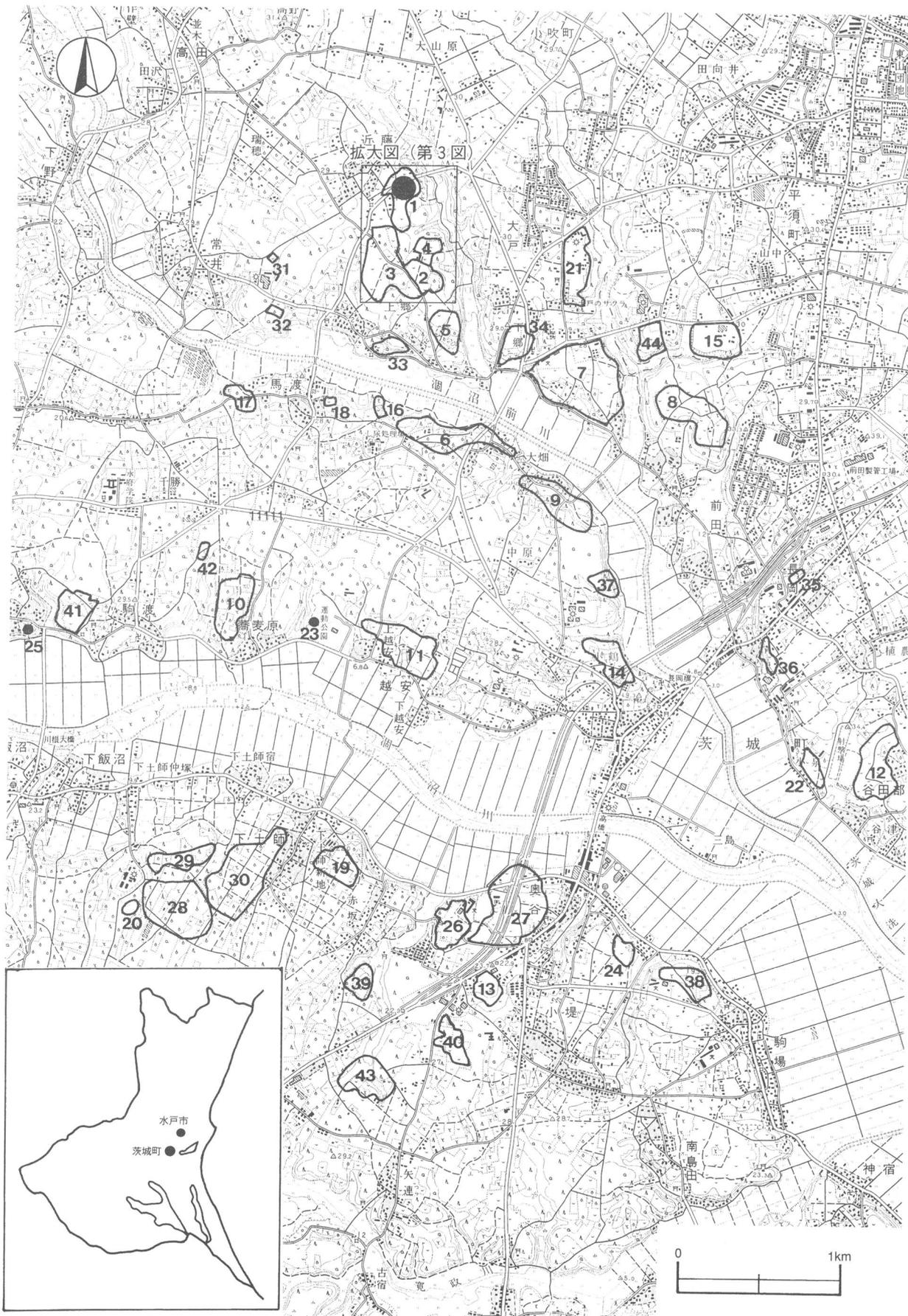
註

- 1) 鯉淵和彦 「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡・小幡遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集 1989年3月
- 2) 中村敬治・江幡良夫 「茨城中央工業団地造成工事地内文化財調査報告書Ⅳ 南小割遺跡・権現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 1998年3月

- 3) 飯島一生 「北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第135集 1998年3月
- 4) 長谷川聡 「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第136集 1998年3月
- 5) 村上和彦 「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第163集 2000年3月
- 6) 茨城町史編さん委員会 『茨城町史 通史編』 茨城町教育委員会 1995年2月
- 7) 大塚初重・井上義安ほか 『小幡北山埴輪製作遺跡』 茨城町 1989年2月
- 8) 註6) に同じ
- 9) 註6) に同じ
- 10) 註6) に同じ
- 11) 註6) に同じ
- 12) 野田良直 「主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 宮ヶ崎城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第141集 1998年3月

参考文献

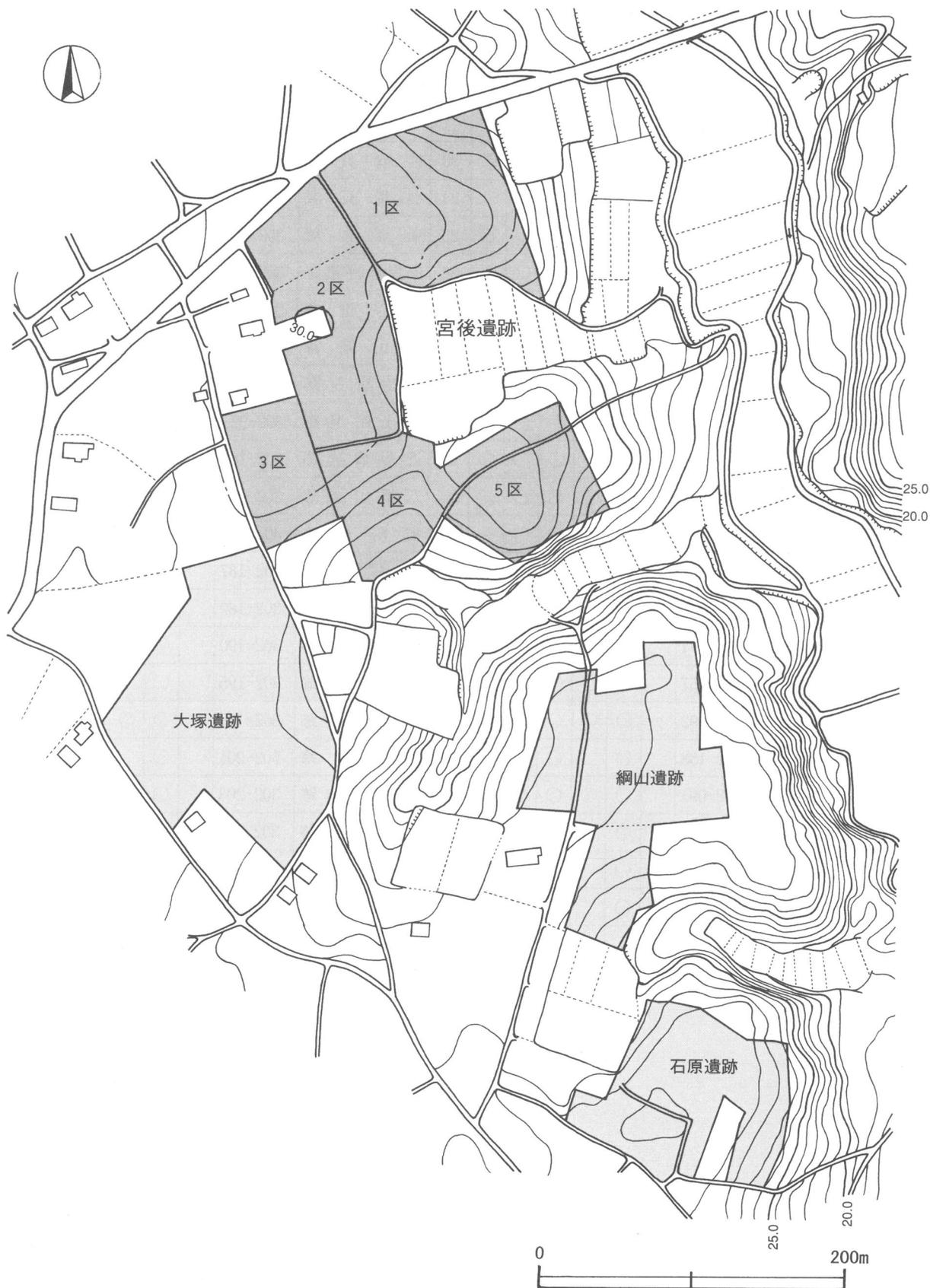
- ・竹内理三編 「角川日本地名大辞典 8 茨城県」 角川書店 1983年12月
- ・中山信名（栗田寛補訂）『宮崎報恩会版 新編常陸国誌』 崙書房 1979年12月
- ・茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 2001年3月
- ・水戸市史編さん委員会 『水戸市史 上巻』 水戸市 1963年9月



第2図 宮後遺跡周辺遺跡分布図(1)

表1 宮後遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	市町村遺跡番号	時代					番号	遺跡名	市町村遺跡番号	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平				中・近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中・近世
①	宮後遺跡	302-093		○	○	○	○	○	23	越安貝塚	302-066		○				
2	石原遺跡	302-220		○	○	○	○		24	小堤貝塚	302-067		○	○	○		○
3	大塚遺跡	302-107		○	○	○	○	○	25	宝塚古墳	302-017				○		
4	綱山遺跡	302-219		○	○	○	○	○	26	赤坂南坪遺跡	302-030		○		○	○	
5	稲荷宮遺跡	302-094			○	○	○		27	奥谷遺跡	302-123		○	○	○	○	
6	上の前遺跡	302-118		○	○	○	○		28	面山遺跡	302-039		○		○	○	
7	大戸下郷遺跡	302-077		○	○	○	○		29	小山台遺跡	302-121		○		○	○	
8	矢倉遺跡	302-109		○	○	○	○		30	下土師遺跡	302-029		○		○	○	
9	大畑遺跡	302-078	○	○	○	○	○	○	31	近藤前遺跡	302-182		○		○	○	
10	宮上遺跡	302-119		○	○	○	○		32	八幡山遺跡	302-183		○		○	○	
11	中畑遺跡	302-032		○	○	○	○		33	猫崎遺跡	302-185		○	○	○		
12	塚越遺跡	302-111		○		○	○		34	寺坪遺跡	302-187		○	○	○	○	
13	富士山遺跡	302-031		○		○	○		35	後久保遺跡	302-189		○				
14	小鶴遺跡	302-134		○	○				36	長岡神宮寺遺跡	302-190		○		○		
15	山中遺跡	201-157		○	○	○			37	蔵作遺跡	302-195		○		○		
16	東山遺跡	302-092		○	○	○	○		38	三ツ塚遺跡	302-197		○	○	○	○	
17	シッペイ沢遺跡	302-138		○		○			39	仲丸遺跡	302-201		○		○		
18	東畑遺跡	302-091		○	○	○	○		40	北山東遺跡	302-203		○			○	
19	下土師東遺跡	302-122		○		○	○		41	南小割遺跡	302-216	○	○		○	○	○
20	高山遺跡	302-120		○		○	○		42	大作遺跡	302-218	○	○		○		
21	大戸神宮寺遺跡	302-108		○		○	○		43	小幡北山埴輪製作遺跡	302-080				○		
22	上野堀ノ内遺跡	302-110					○		44	平須館跡	201-158						○



第3図 宮後遺跡周辺遺跡分布図(2)

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

宮後遺跡の調査区域は、当遺跡の広がりから考えると、遺跡の南部分と推定される。調査区は便宜上、1～5区に分けた。1・3区は、平成10年度に、2・4・5区は平成11年度に調査を実施した。遺構の検出状況から、縄文時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、奈良・平安時代の3期にわたり、この地域の中心的な集落が形成されたことが判明した。縄文時代中期の集落の構造は、中心部にあたる直径40mの範囲に中央部を中心に放射状に土坑墓群が配置され、その周りにフラスコ状土坑や住居が巡っている。その後、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて再び集落が形成され、時を経て奈良・平安時代にもこの地域の中心的な集落等が形成された。

当遺跡から検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡104軒、屋外炉12基、土坑1974基、土坑墓239基、陥し穴9基、遺物包含層1か所等である。遺構は、中期中葉から後葉にかけての時期が主で、1区と2区の北部に密集し、直径が160mに及ぶ環状集落を形成している。調査区内における遺構の分布状況を見ると、集落は全体の南半分にあたる。環状集落の中央部にあたる径40mの範囲には土坑墓が密集し、土坑墓群域を形成している。土坑墓群域は1区と2区にまたがっており、1区では攪乱が著しいため分布状況は不明であるが、2区では土坑墓が土坑墓群域の中央部を中心に放射状に配列されていた。土坑墓群域の周囲には竪穴住居跡とフラスコ状土坑が巡る住居跡群域が形成されている。竪穴住居跡とフラスコ状土坑は濃密に分布しているため重複が著しく、中期中葉の遺構は後葉の遺構に掘り込まれているものがほとんどで全容が確認できるものは少ない。

2区の調査で検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡62軒、土坑1026基、陥し穴3基、屋外炉3基、土器埋設土坑5基、土坑墓238基、ピット群1か所、ピット359基等である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に492箱出土している。縄文土器、石器（石鏃・敲石・凹石・砥石・石皿・磨石・石錐・打製石斧・磨製石斧）、土製品（耳飾り・土器片円盤・土器片錘）、石製品（翡翠製垂飾り・琥珀製垂飾・垂飾・抉状耳飾・石棒）等が出土している。

第2節 基本層序

当遺跡の2区中央部（E3区）にテストピットを設定し、深さ約2.5mまで掘り下げて、土層の堆積状況を確認した。（第4図）

第1～3層は、40～44cmの厚さで黒褐色の耕作土層である。

第4層は、8～20cmの厚さで、ローム小ブロックを微量含んだ黒色土である。

第5層は、6～14cmの厚さで、白色礫を微量含んだ褐色のソフトローム層である。

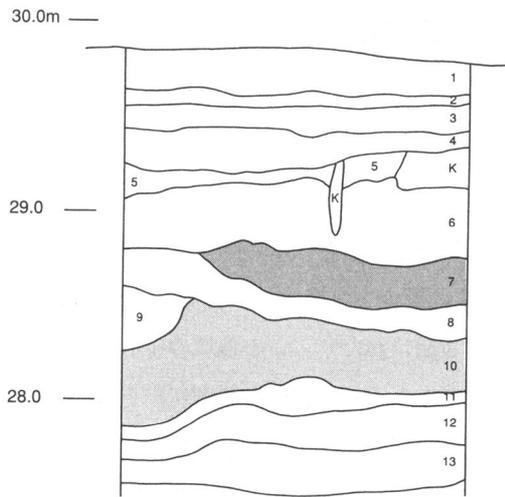
第6層は、30～48cmの厚さで、褐色のハードローム層である。

第7層は、18～24cmの厚さで、褐色のハードローム層である。第二黒色帯（BB II）と考えられる。

第8層は、16～40cmの厚さで、鹿沼パミス小ブロックを中量含んだ褐色のハードローム層である。

第9層は、30～38cmの厚さで、鹿沼パミス中ブロックを中量含んだ褐色のハードローム層である。

第10層は、32～40cmの厚さで、橙色の鹿沼パミス層である。



第4図 基本土層図

第11層は、10～16cmの厚さで、暗褐色のハードローム層である。

第12層は、10～20cmの厚さで、黒色粒子を微量含んだ褐色のハードローム層である。

第13層は、12～24cmの厚さで、褐色のハードローム層である。

住居跡・土坑等の遺構は、主に第6層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

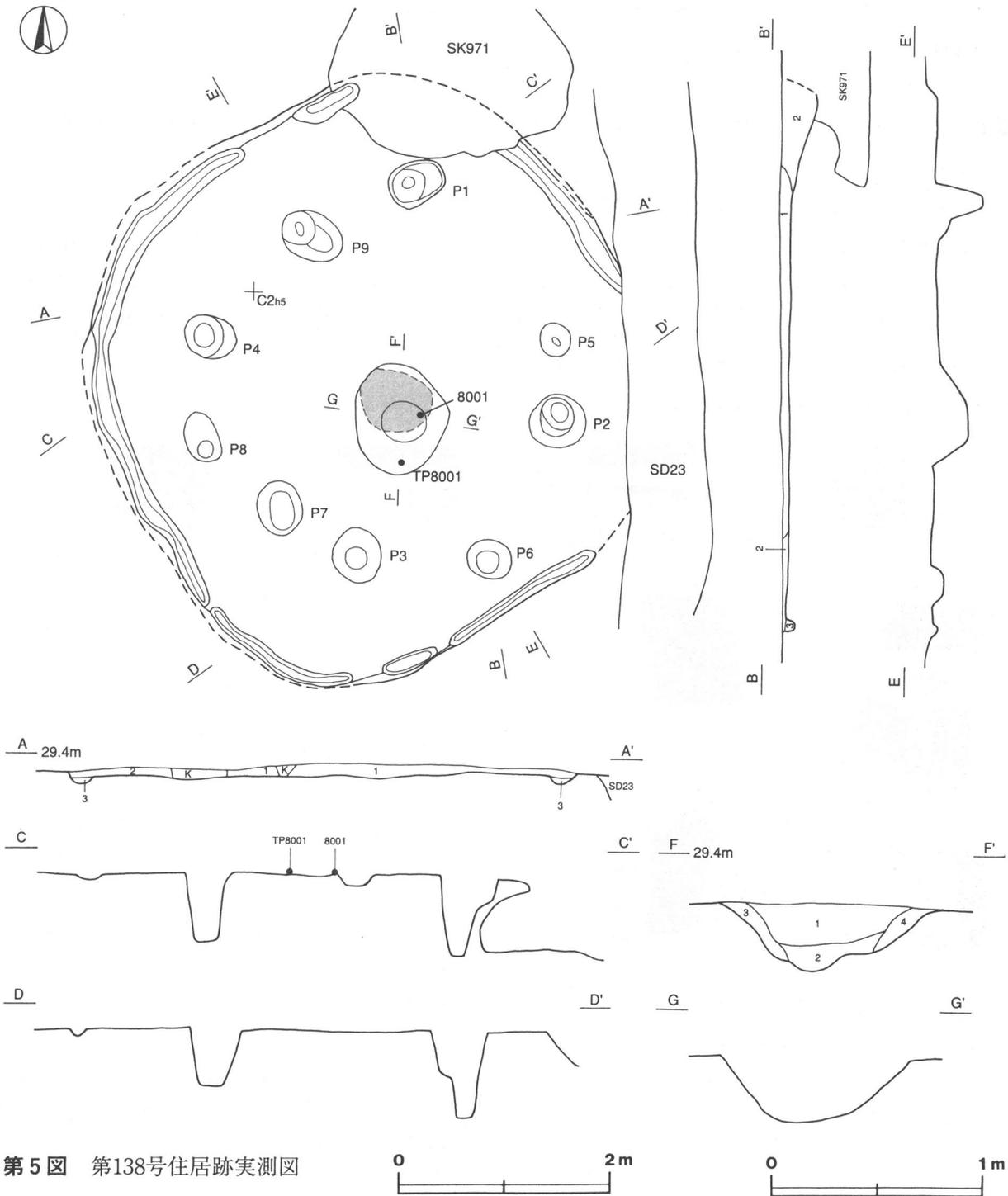
1 竪穴住居跡

2区の調査において、縄文時代の竪穴住居跡62軒を検出した。以下、それらの住居跡について記載する。

第138号住居跡 (第5・6図)

位置 調査2区の北部、C2h5区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第971号土坑を掘り込み、第23号溝に掘り込まれている。



第5図 第138号住居跡実測図

規模と形状 平面形は長軸5.28m、短軸5.18mの隅丸方形である。主軸方向はN-33°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は7cmである。

床 ほぼ平坦で、わずかに踏み固められている。床面から6cmほどの深さで、U字形の断面形をもって掘り込まれた壁溝がほぼ全周する。

ピット 9か所。P1～P4は深さ55～81cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。P5～P9は深さ15～44cmであり、P1～P4より浅く規模が小さいこと、炉を中心に環状に巡っていること等から、補助的な柱穴との想定が可能である。

炉 中央部やや南寄りに付設されている。長径104cm、短径80cmの楕円形プランで、床面を55cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床及び炉壁北側は、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量

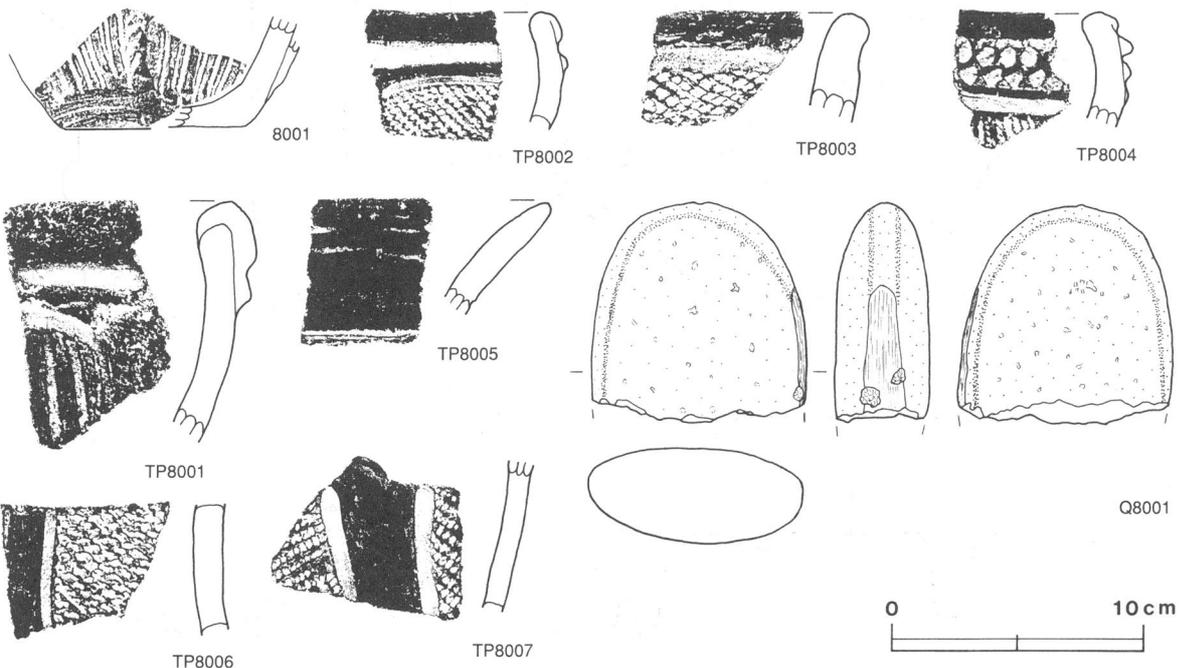
覆土 3層に分層される。全体的にロームブロックを含み、やや締まりがある。第3層は壁溝の覆土である。

土層解説

- 1 黒色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片522点、磨石1点が出土している。土器のほとんどが細片で、覆土上層から中層にかけて散在する状況で出土している。8001及びTP8001の深鉢片は、床面から出土しており、時期決定の指標となる遺物である。またTP8003、TP8006の深鉢片はP9の、TP8005の浅鉢片はP1のそれぞれ覆土から出土している。Q8001の磨石は、覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第6図 第138号住居跡出土遺物実測図

第138号住居跡出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8001	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	[7.0]	キザミを有する隆帯が垂下。半截竹管による平行沈線文を縦位に施文。	長石・石英・雲母・赤色粒子	普通	赤褐	床面	

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8001	縄文土器	深鉢	—	(9.4)	—	沈線が沿う隆帯による区画文。区画内は沈線を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	
TP8002	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	沈線が沿う隆帯文。L Rの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土	
TP8003	縄文土器	深鉢	—	(4.4)	—	沈線が沿う隆帯文。L Rの単節縄文を斜方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	P 9 覆土	
TP8004	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	—	口縁部は交互刺突による連続コの字状文。胴部は撚糸文を施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土	
TP8005	縄文土器	浅鉢	—	(4.5)	—	無文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	P 1 覆土	
TP8006	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。L R Lの複節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	P 9 覆土	
TP8007	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。L Rの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明褐	覆土	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8001	磨石	(8.7)	8.6	3.8	(401.1)	安山岩	使用面は片側縁。使用面に敲打痕。	覆土	被熱痕あり

第139号住居跡 (第7・8図)

位置 調査2区の北部, C2 d5区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第980号土坑の覆土上面で床が確認された。また第979号土坑を掘り込んでおり, 第23号溝に掘り込まれている。

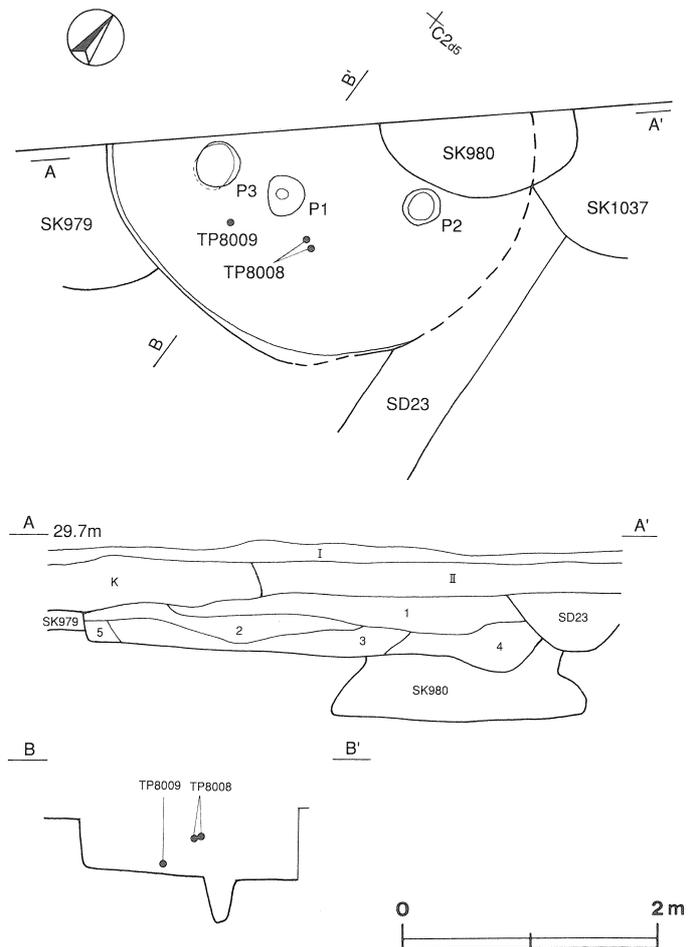
規模と形状 北西部の約半分が調査区域外に及ぶため全容は不明であるが, 南部に残存する壁の様相から径3.50mの円形と推定される。壁はほぼ直立し, 壁高は38cmである。

床 ほぼ平坦で, わずかに踏み固められている。

ピット 3か所。P1は深さ37cmで, 規模及び配置から柱穴と考えられる。P2・P3は深さがそれぞれ11cm, 23cmとP1に比べて浅く, その性格は不明である。

炉 確認されなかった。

覆土 5層に分層される。全体的に微量の炭化粒子を含み, やや締まりがある。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。



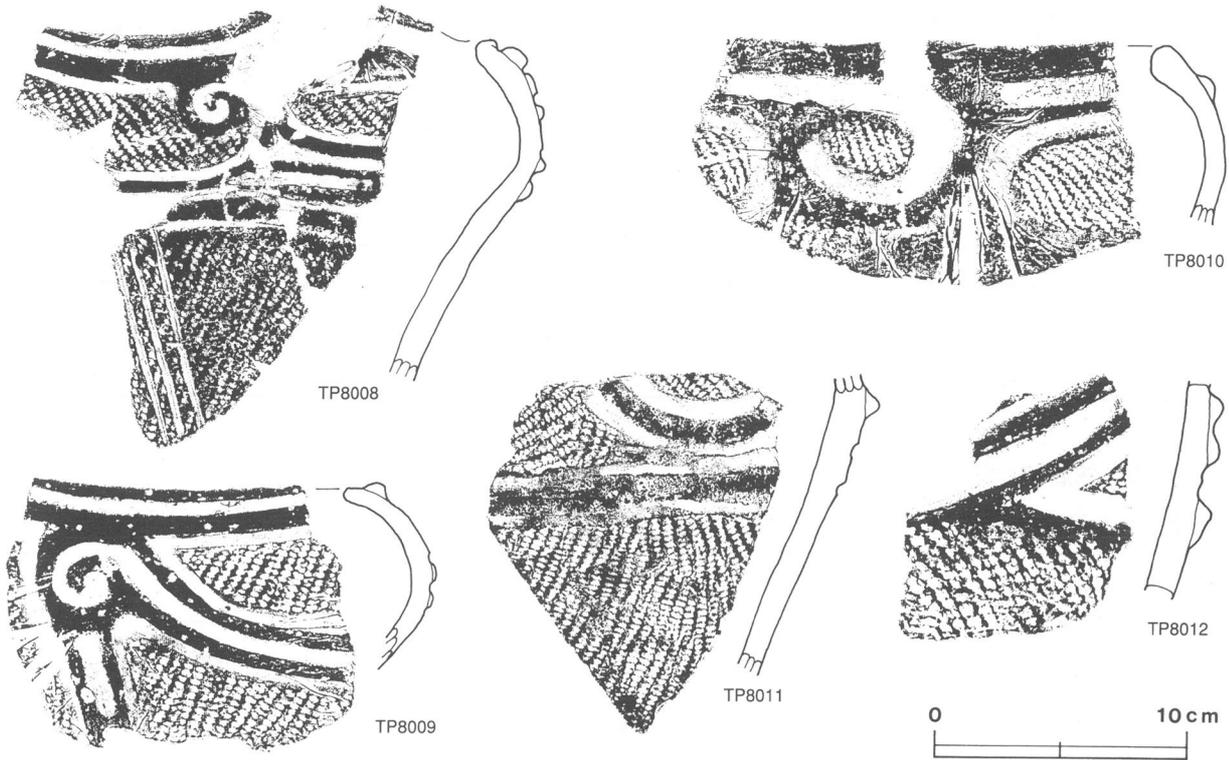
第7図 第139号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片160点, 打製石斧1点が出土している。土器のほとんどが細片で, 確認面から床面まで廃棄されたような状況で散在しており, 出土位置に特異な傾向は認められない。TP8008の深鉢片は覆土中層から, TP8009の深鉢片は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器及び重複関係から中期後葉(加曾利 E I ~ II 式期)と考えられる。



第8図 第139号住居跡出土遺物実測図

第139号住居跡出土遺物観察表(第8図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8008	縄文土器	深鉢	—	(13.6)	—	口縁部は沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文。胴部は沈線が垂下。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐	覆土中層	
TP8009	縄文土器	深鉢	—	(7.4)	—	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土下層	
TP8010	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文。RLの単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土	
TP8011	縄文土器	深鉢	—	(11.4)	—	口縁部は沈線が沿う隆帯による区画文。胴部はRLの単節縄文を斜方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明黄褐	覆土	
TP8012	縄文土器	深鉢	—	(8.6)	—	口縁部は沈線が沿う隆帯による区画文。胴部はLRLの複節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土	

第140号住居跡(第9・10図)

位置 調査2区の北部, C2c5区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1037・1108・1023・1056号土坑を掘り込み, 第714~717号ピットに掘り込まれている。また, 第1022号土坑の覆土上面で床が確認されている。

規模と形状 北西部の約半分が調査区域外に及ぶため全容は不明であるが、平面形は長径4.60m、短径4.00mの楕円形と推定される。主軸方向はN-46° -Eと推定される。壁はほぼ直立し、壁高は45~50cmである。

床 ほぼ平坦であり、中央部が特に踏み締まっている。床面から13~16cmの深さでU字形に掘り込んだ壁溝が、南壁際の一部を除きほぼ全周するものと考えられる。なお壁溝は、断続的に深く掘り込まれている。

ピット 2か所。P1とP2は、それぞれ深さ43cm・44cmであり、規模と配置から柱穴と考えられる。

炉 ほぼ中央部に付設されている。床面から皿状に10cmほど掘りくぼめられた地床炉である。北西部が調査区域外であり、また南部及び北東部を第715・716号ピットに掘り込まれているため全容はつかめないが、長径115cm、短径70cmほどの楕円形と推定される。炉床は火熱を受けて硬化しているが、顕著な赤変は認められない。

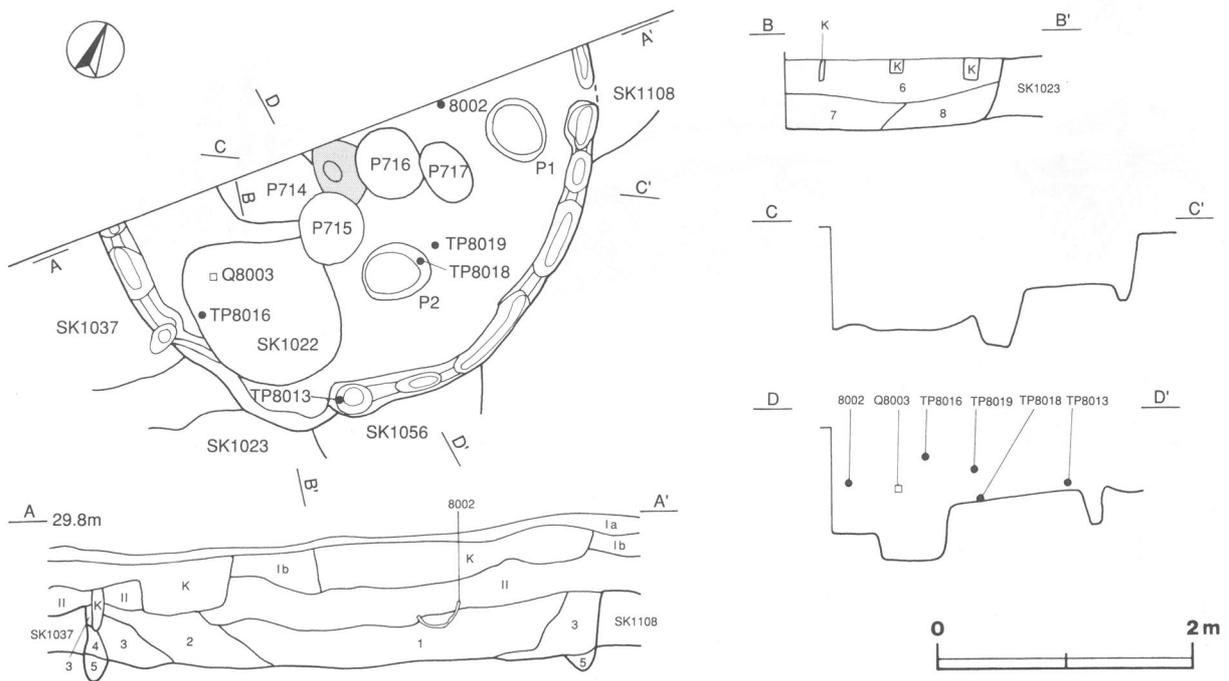
覆土 8層に分層される。全体的にロームブロックを含み、黒褐色を基調としている。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。第5層は壁溝の覆土である。

土層解説

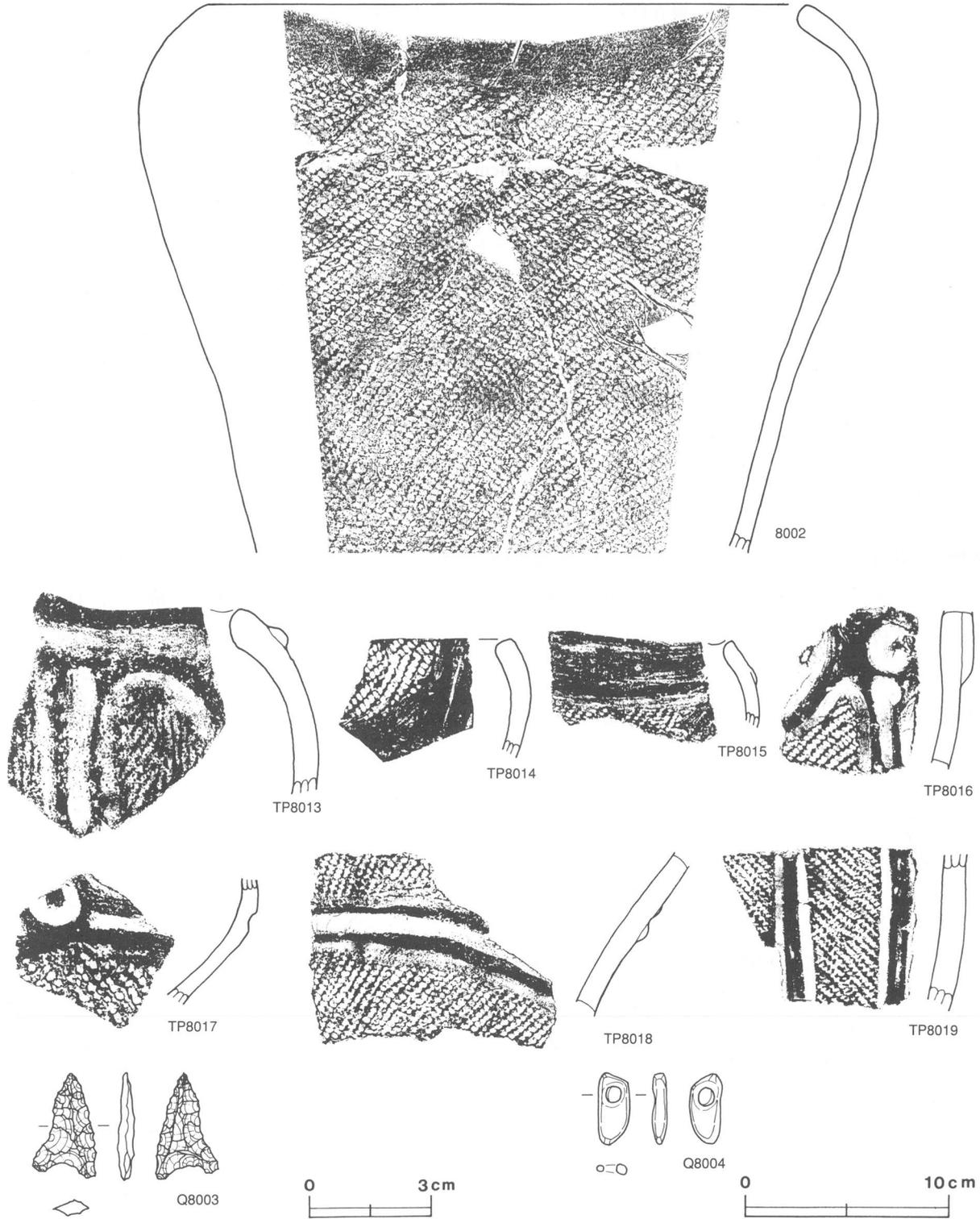
- | | | | |
|-------|------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 縄文土器片1061点、石鏃1点、石製垂飾1点が出土している。土器のほとんどが細片で、覆土上層から下層にかけて廃棄されたような状況で散在している。8002の深鉢は覆土中層から横位で、TP8013、TP8014、TP8018の深鉢片は床面からそれぞれ出土している。またQ8003の石鏃は床面から、Q8004の垂飾は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第9図 第140号住居跡実測図



第10図 第140号住居跡出土遺物実測図

第140号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8002	縄文土器	深鉢	29.2	(27.0)	—	口唇部は無文。口縁部から胴部にかけてR Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	覆土中層	P L 40
TP8013	縄文土器	深鉢	—	(9.1)	—	微隆帯により文様を描出。L Rの単節縄文を施文。	長石・石英	普通	にぶい橙	床面	

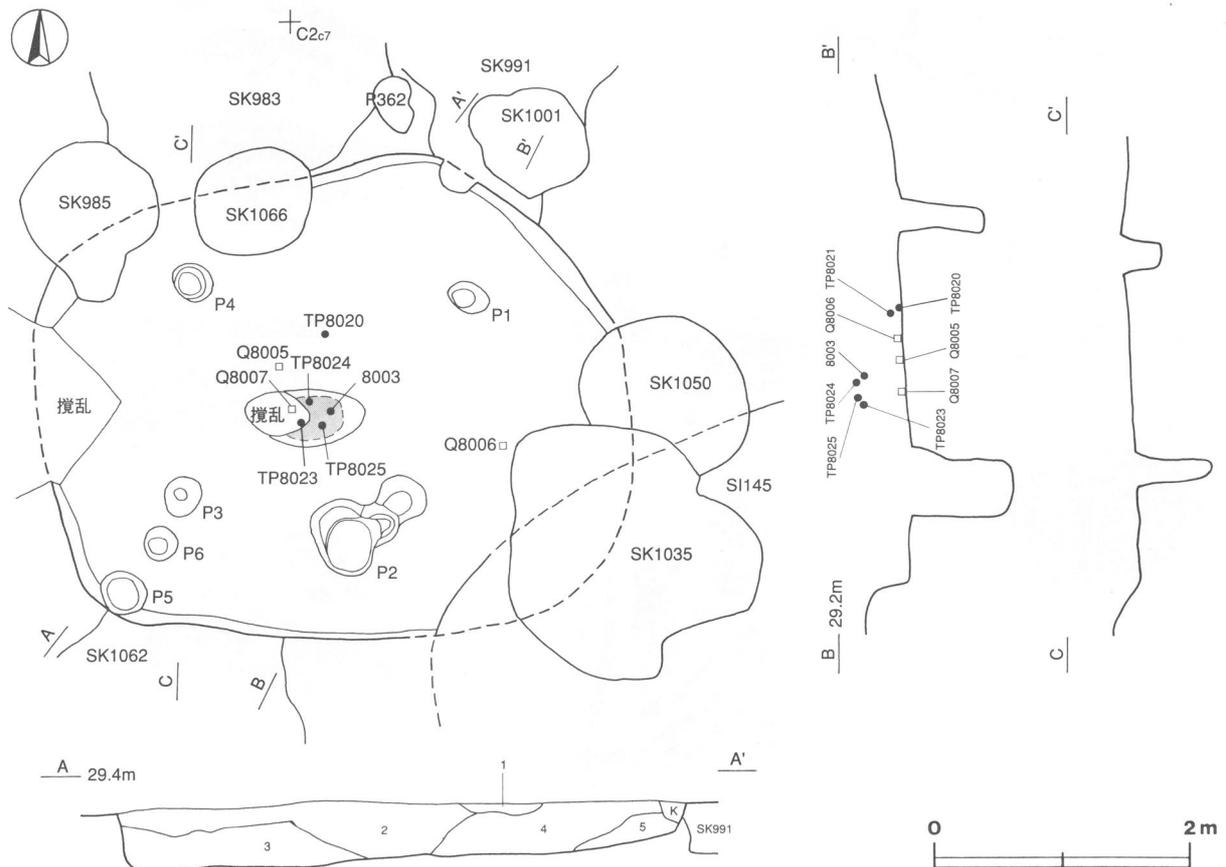
番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8014	縄文土器	深鉢	—	(5.9)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。L Rの単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	
TP8015	縄文土器	深鉢	—	(4.4)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土	
TP8016	縄文土器	深鉢	—	(7.8)	—	沈線が沿う隆帯による区画文。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土上層	
TP8017	縄文土器	深鉢	—	(6.2)	—	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文。L R Lの複節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土	
TP8018	縄文土器	深鉢	—	(8.1)	—	2本一組の隆帯により文様を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	
TP8019	縄文土器	深鉢	—	(7.7)	—	2条一組の沈線による懸垂文間を磨り消す。L R Lの複節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土下層	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8003	石 鏃	2.6	1.6	0.5	1.1	チャート	基部中央が湾入する。	床面	P L 59
Q8004	垂 飾	3.5	1.5	0.7	5.4	蛇紋岩	器面をよく研磨している。上部に径0.8cmの穿孔。	覆土下層	P L 58

第141号住居跡 (第11～13図)

位置 調査2区の北部, C 2 c7区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第991号土坑を掘り込み, 第1035号土坑に掘り込まれている。また第145号住居跡及び第983・985・1050・1062・1066号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。



第11図 第141号住居跡実測図

規模と形状 ピット及び残存する壁の様相から、平面形は長軸4.65m、短軸3.83mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-90°-Eと推定される。壁はほぼ直立し、壁高は30~45cmである。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 6か所。P1~P4は、床面からの深さ32~82cmで、やや規則性を欠くが、その規模と配置から主柱穴と考えられる。P5・P6の性格は不明である。

炉 ほぼ中央部に付設されている。床面を炉床とする地床炉であり、西側の約3分の1が攪乱を受けているため全容はつかみ難いが、長径88cm、短径45cmの楕円形と推定され、ほぼ床面を炉床とする地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

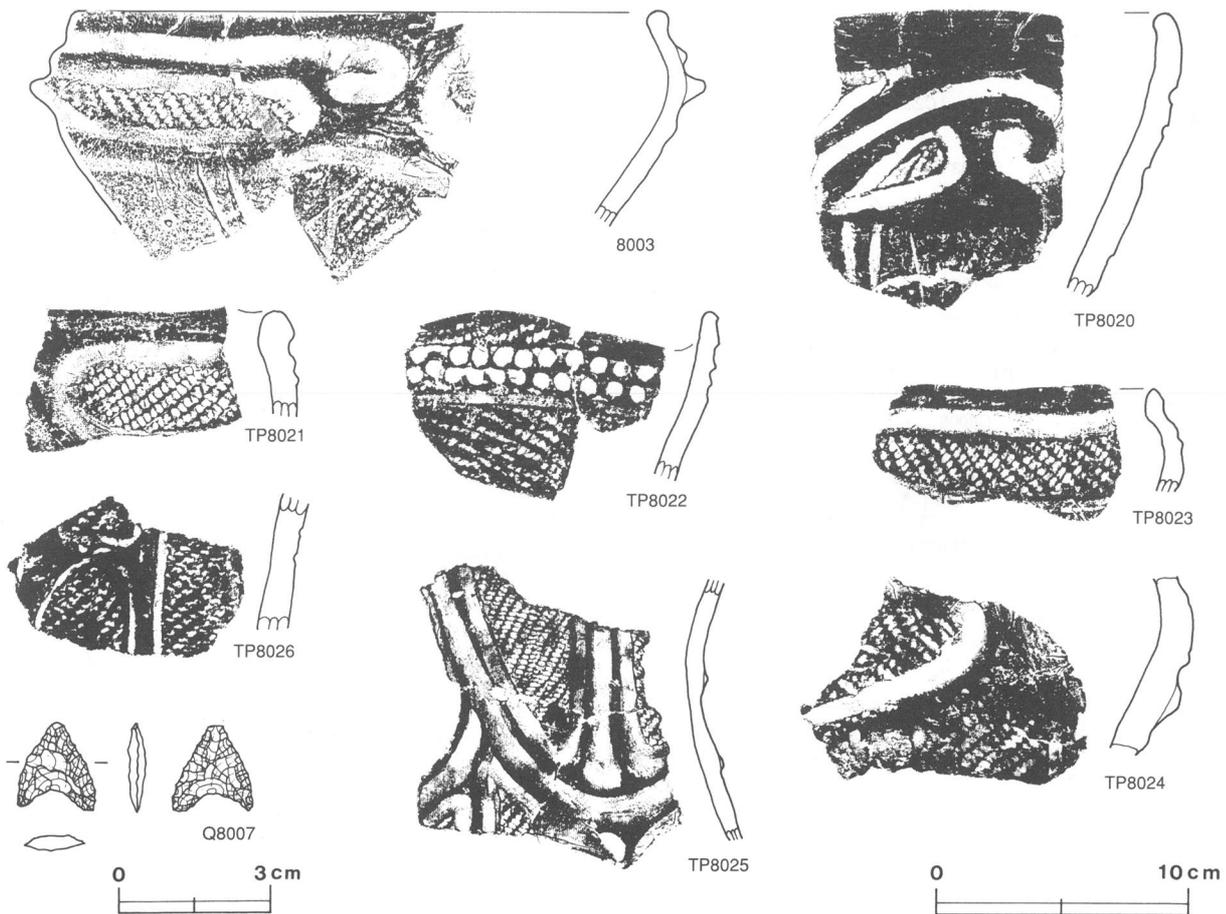
覆土 5層に分層される。全体にロームブロック・粒子を含み、やや締まりがある。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

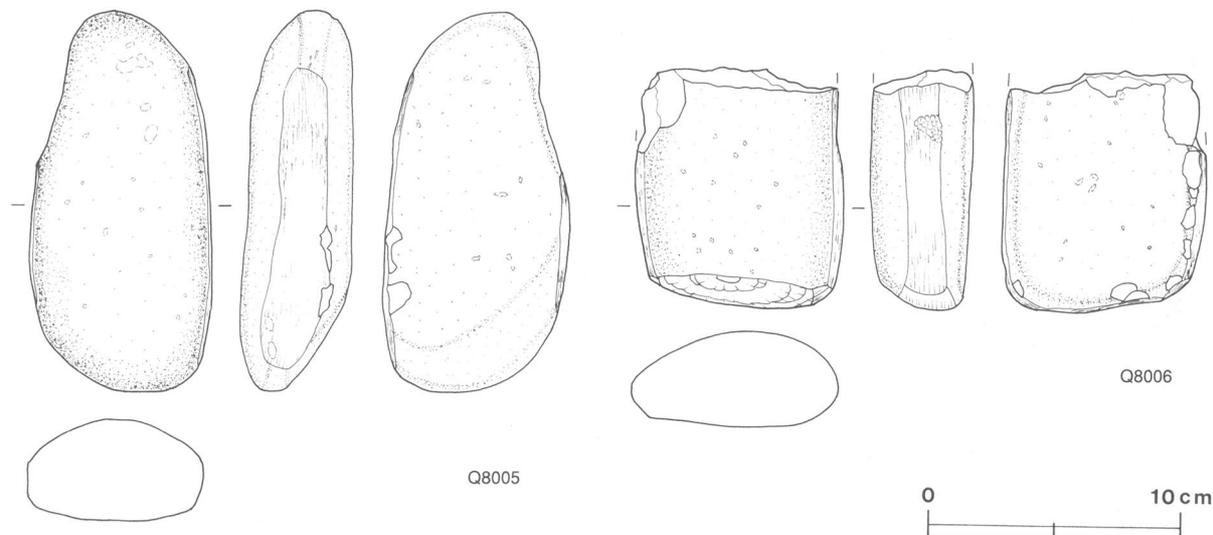
- | | | | |
|--------|---------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片1040点、磨石2点、石鏃1点が出土している。中央部の出土密度がやや高い傾向が看取でき、確認面から床面にかけて散在している。土器のほとんどが細片で、覆土から出土している。8003の深鉢片は覆土上層から出土している。Q8005、Q8006の磨石、Q8007の石鏃は、床面よりやや浮いた状況で出土している。TP8020の深鉢片は床面からの出土であり、時期決定の指標となる遺物である。

所見 時期は、出土土器から、中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第12図 第141号住居跡出土遺物実測図（1）



第13図 第141号住居跡出土遺物実測図(2)

第141号住居跡出土遺物観察表(第12・13図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8003	縄文土器	深鉢	[22.8]	(8.5)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯文。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文。	長石・石英	普通	明褐	覆土上層	
TP8020	縄文土器	深鉢	—	(10.7)	—	口縁部は沈線による区画文。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消す。LRの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	橙	床面	
TP8021	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	沈線に沿う隆帯による区画文。区画内にはLRの単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	覆土中層	
TP8022	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	口縁部は沈線による区画内に複列の刺突文を施す。LRの単節縄文を斜方向に施文。	長石・雲母	普通	にぶい褐	覆土	
TP8023	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	口唇部直下に沈線が巡る。RLの単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明赤褐	覆土上層	
TP8024	縄文土器	深鉢	—	(7.1)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯文。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文。	長石・雲母	普通	灰白	覆土上層	
TP8025	縄文土器	深鉢	—	(10.6)	—	沈線に沿う微隆帯文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明褐	覆土上層	
TP8026	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	2条一組の沈線文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	褐	覆土	

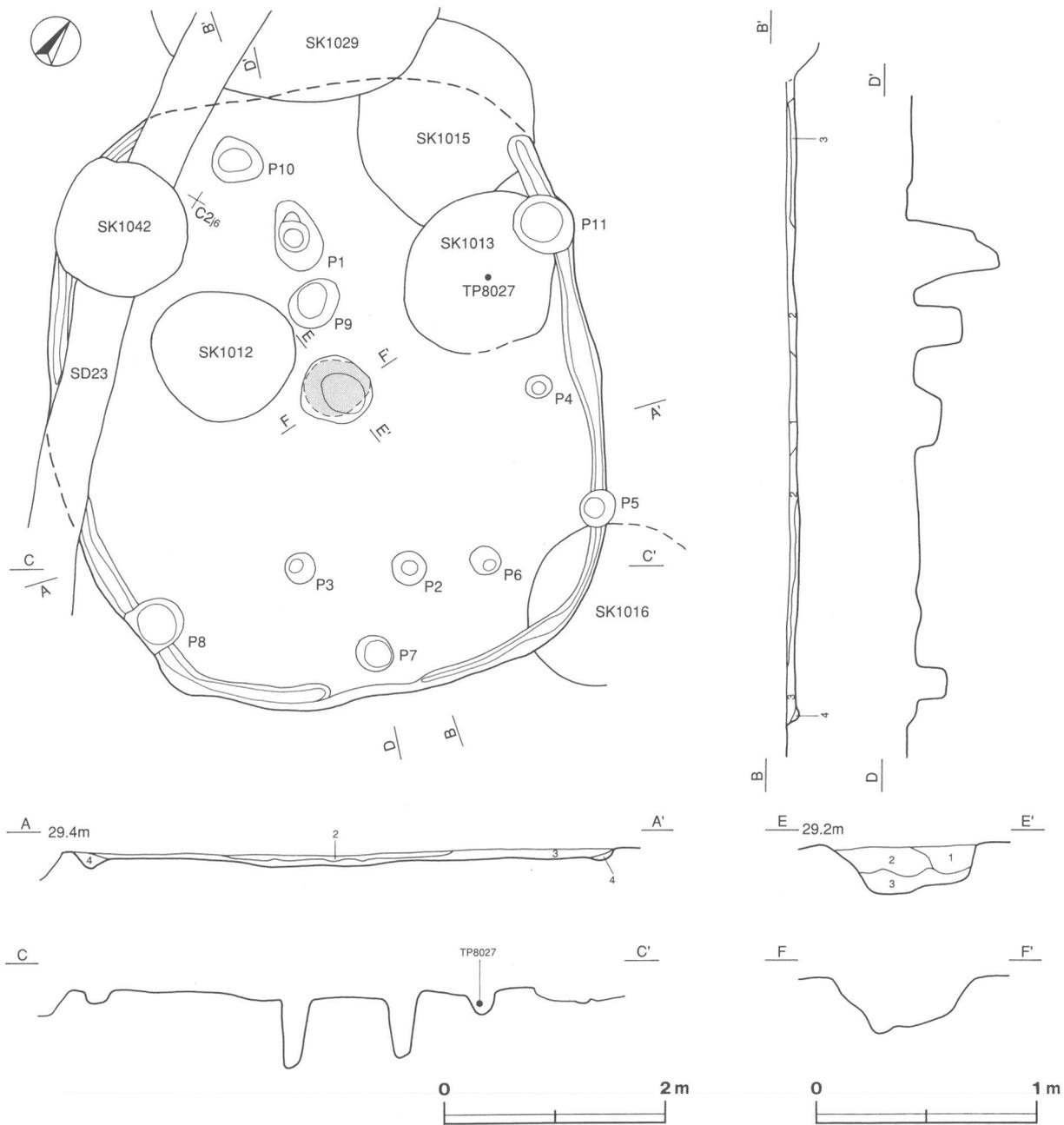
番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8005	磨石	15.1	7.1	4.3	683.9	砂岩	使用面は両側縁。	床面	
Q8006	磨石	(9.5)	8.0	3.8	(490.9)	砂岩	残存する側縁全体に使用痕あり。片側縁に敲打痕。	床面	
Q8007	石鏃	(1.6)	1.6	0.3	(0.7)	チャート	基部中央が湾入する。	床面	PL59

第142号住居跡(第14・15図)

位置 調査2区の北部, C2j6区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第23号溝及び第1012・1013・1015・1016・1029・1042号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第23号溝及び第1015・1029号土坑に掘り込まれているため壁は検出されなかったが、壁溝及び柱穴の配置から、平面形は長軸5.54m, 短軸4.80mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-41°-Wと推定される。残存する壁は緩やかに立ち上がり、壁高は7~12cmである。



第14図 第142号住居跡実測図

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。U字形に掘り込まれた深さ10~15cmの壁溝は、北西部の切り合い部は不明なもの、南東部の一部を除きほぼ全周するものと思われる。

ピット 11か所。P1~P3は深さ56~80cmで、その配置及び規模から支柱穴と思われる。壁際で確認されたP5・P8・P11は、炉を中心として対称的な位置関係が看取でき、壁柱穴としての想定が可能である。またP7は、南東壁際中央部、壁溝の一部途切れた箇所に位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径70cm、短径65cmのほぼ円形で、床面を22cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床から炉壁部にかけて、火熱を受けて赤変硬化している。

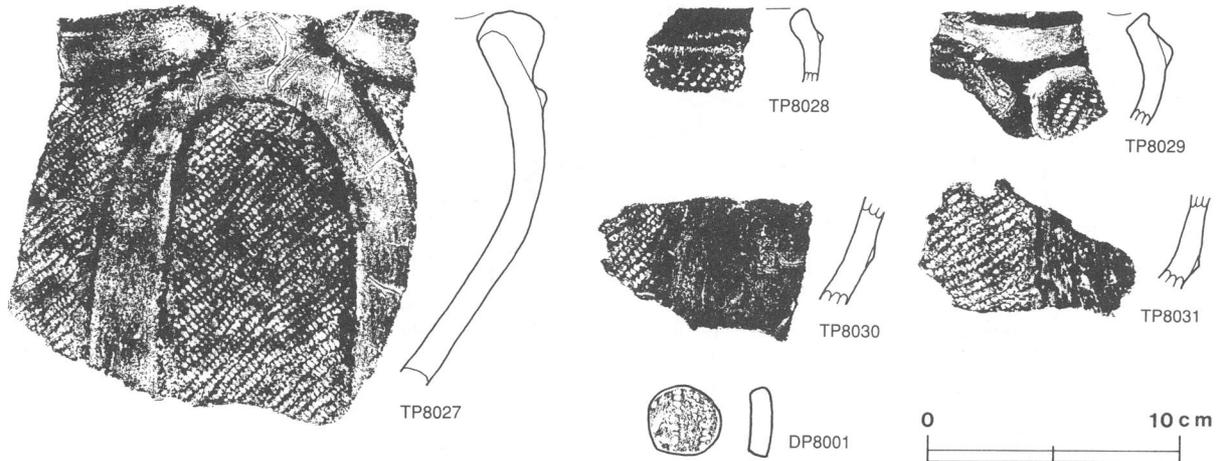
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。第4層は壁溝の覆土である。

土層解説

- 1 黒色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片335点, 石棒1点, 土器片円盤1点が出土している。覆土が薄かったため, ほとんどの遺物は床面に近い覆土からの出土である。TP8027の深鉢片は床面から, TP8028, TP8029, TP8030, TP8031の深鉢片及びDP8001の土器片円盤は覆土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉(加曽利E IV式期)と考えられる。



第15図 第142号住居跡出土遺物実測図

第142号住居跡出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8027	縄文土器	深鉢	—	(14.8)	—	2本一組の微隆帯により逆U字状の懸垂文を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	床面	
TP8028	縄文土器	深鉢	—	(2.9)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。R Lの単節縄文を縦方法に施文。	長石・雲母	普通	暗褐	覆土	
TP8029	縄文土器	深鉢	—	(4.4)	—	沈線に沿う微隆帯文。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土	
TP8030	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	微隆帯により文様を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土	
TP8031	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	微隆帯により文様を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土	

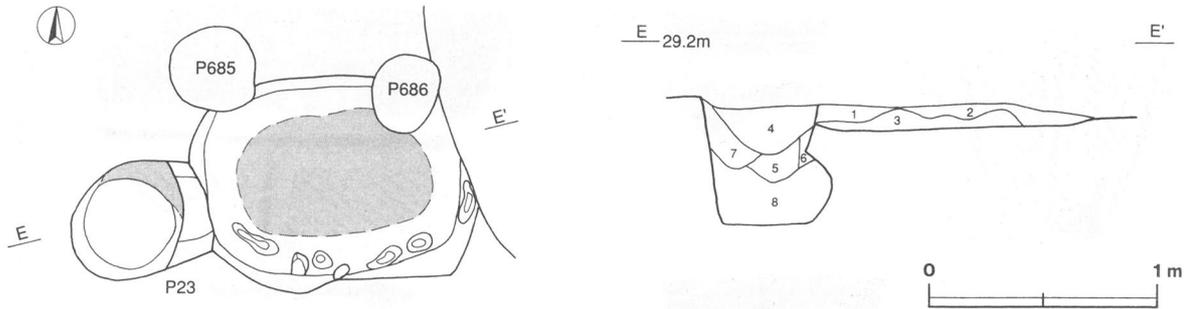
番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)				
DP8001	土器片円盤	2.8	2.8	0.9	8.4	長石・石英・雲母, にぶい橙	周縁部を部分的に研磨。L Rの単節縄文。	覆土	P L 59

第145号住居跡(第16~19図)

位置 調査2区の北部, C 2 d8区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第8号屋外炉及び第1036・1070・1073・1078号土坑を掘り込んでおり, 第1035・1075・1076・1104・1105号土坑及び第685・686号ピットに掘り込まれている。また第1072・1088・1089号土坑と重複しており, 土層では確認することができなかったが, 出土土器からはそれらより古いと考えられる。第141号住居跡及び第1050・1081・1084・1086・1109・1148・1182・1197・1198・1210号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 残存する壁及び断続的に巡る壁溝の様相から, 平面形は長軸9.70m, 短軸6.90mの隅丸長方形と



第17図 第145号住居跡実測図(2)

推定される。主軸方向はN-85°-Eと推定される。西壁の北部に20cmほど住居内に張り出している箇所が認められ、出入口に伴う施設の痕跡である可能性が考えられる。残存する壁はほぼ直立し、壁高は13~22cmである。床土坑との重複が著しく全容はつかめないが、残存している部分はほぼ平坦であり、全体的によく踏み締まっている。壁溝は、東壁から南西コーナー部にかけて断続的に確認された。壁溝の深さは7~18cmで、断面形はU字形である。

ピット 23か所。この内P1~P4は、深さ60~104cmであり、やや規格性を欠いているもののその規模と配置から主柱穴と考えられる。P10~P12, P14の深さは、P10が63cm, P11が38cm, P12が18cm, P14が92cmで、いずれも住居内に壁が張り出している個所に位置しており、出入口と関わりのあるピットの可能性が考えられる。その他のピットの性格は不明である。

炉 中央部やや東寄りに付設されている。長径125cm, 短径95cmの楕円形と推定され、床面を10cmほど掘りくぼめた石囲炉である。炉石は南側の炉壁際に残存するのみで多くは失われている。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。炉の西側をP23に掘り込まれている。P23の北壁上部は火熱により赤変硬化しており、また覆土中には焼土粒子が含まれ、第6層には多量の炭化粒子が認められることから、炉との関連が想定できるが、その具体的な性格は不明である。

炉土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | | |

P23土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------|-------|-----------------------------------|
| 4 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 7 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子・鹿沼バミス粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・鹿沼バミス粒子少量 |
| 6 褐色 | 炭化粒子多量, 焼土粒子少量, ロームブロック微量 | | |

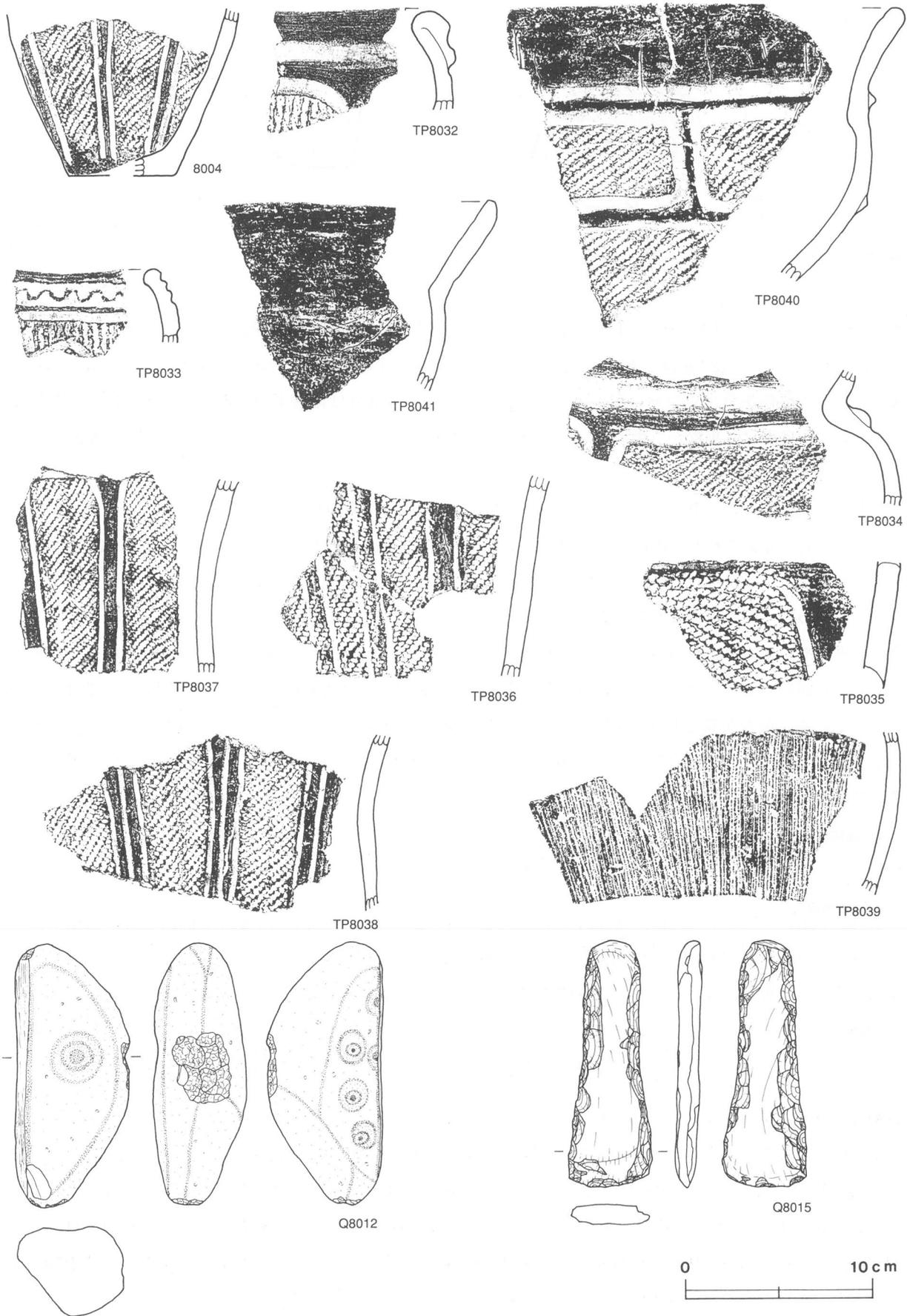
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

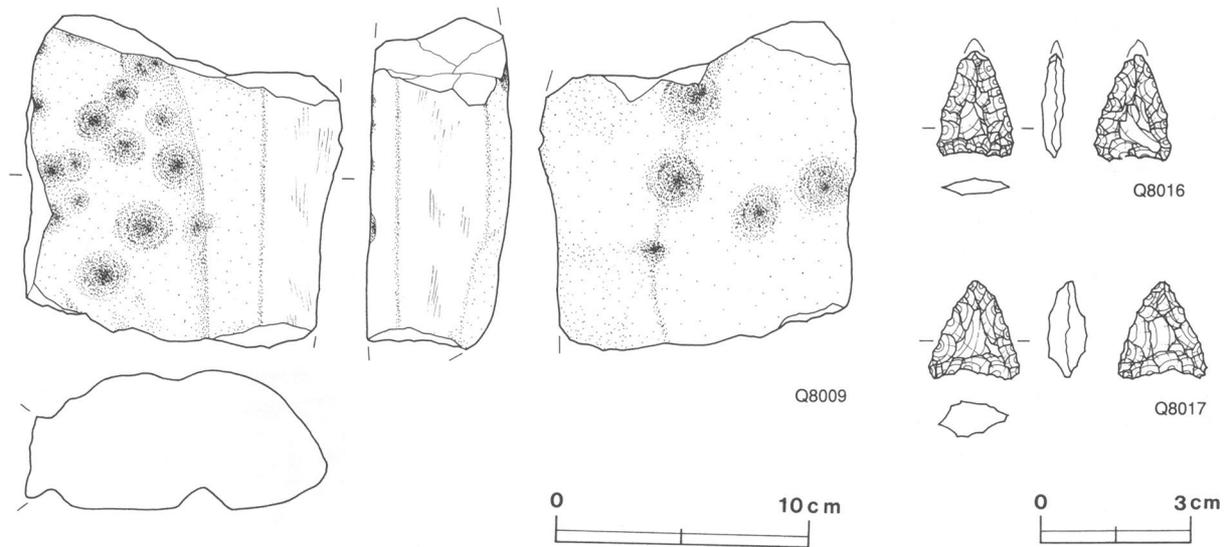
- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片4101点, 石皿1点, 凹石2点, 磨石2点, 磨製石斧2点, 石鏃2点, 削器1点, 骨片1点が出土している。ほとんどの土器が細片で、覆土下層から床面まで散在する状況にあって、特に炉とその周辺の出土密度が高い。TP8034の鉢片, Q8009の石皿はいずれも床面よりやや浮いたレベルで出土している。TP8038, TP8039の深鉢片は、覆土中層と床面の破片が接合したものである。8004, TP8032, TP8035~TP8037の深鉢片, TP8040, TP8041鉢片はいずれも床面から出土しており、時期決定の指標となる遺物である。またQ8015の磨製石斧も床面から出土している。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期後葉(加曽利EⅢ式期)と考えられる。



第18图 第145号住居跡出土遺物実測図(1)



第19図 第145号住居跡出土遺物実測図(2)

第145号住居跡出土遺物観察表(第18・19図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8004	縄文土器	深鉢	—	(8.6)	[5.6]	2条一組の沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・赤色粒子	普通	にぶい橙	床面	
TP8032	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	沈線が沿う隆帯による区画文。区画内には捺糸文を施文。	長石・雲母	普通	橙	床面	
TP8033	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	沈線による区画文。口縁部は沈線が沿う交互刺突文。捺糸文を施文。	長石・雲母・赤色粒子	普通	にぶい橙	覆土	
TP8034	縄文土器	鉢	—	(7.2)	—	沈線が沿う隆帯による区画文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土下層	
TP8035	縄文土器	深鉢	—	(6.9)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	床面	
TP8036	縄文土器	深鉢	—	(10.5)	—	2条一組の沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	床面	
TP8037	縄文土器	深鉢	—	(10.5)	—	沈線による逆U字状の懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	床面	
TP8038	縄文土器	深鉢	—	(8.9)	—	3条一組の沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土	
TP8039	縄文土器	深鉢	—	(8.6)	—	櫛歯状工具による条線文を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	床面	
TP8040	縄文土器	鉢	—	(14.6)	—	口縁部無文。胴部は沈線が沿う隆帯による区画文。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	床面	
TP8041	縄文土器	鉢	—	(10.2)	—	無文。	長石・石英・雲母	普通	橙	床面	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8009	石皿	(13.1)	(12.5)	5.5	(1119.2)	花崗岩	側面に擦痕あり。凹石併用,表面15孔,裏面5孔。	覆土下層	
Q8012	敲石	14.0	6.2	5.0	513.5	砂岩	敲打痕3か所。磨石・凹石に併用。	覆土	
Q8015	磨製石斧	13.1	4.5	1.3	104.4	緑色凝灰岩	刃部及び基部を局部研磨。	床面	P L 60
Q8016	石鏃	(2.1)	1.6	0.4	(1.1)	チャート	基部中央が浅く湾入。	覆土	P L 59
Q8017	石鏃	1.9	1.8	0.8	2.0	赤色チャート	基部中央が浅く湾入。	覆土	未製品, P L 59

第147号住居跡（第20図）

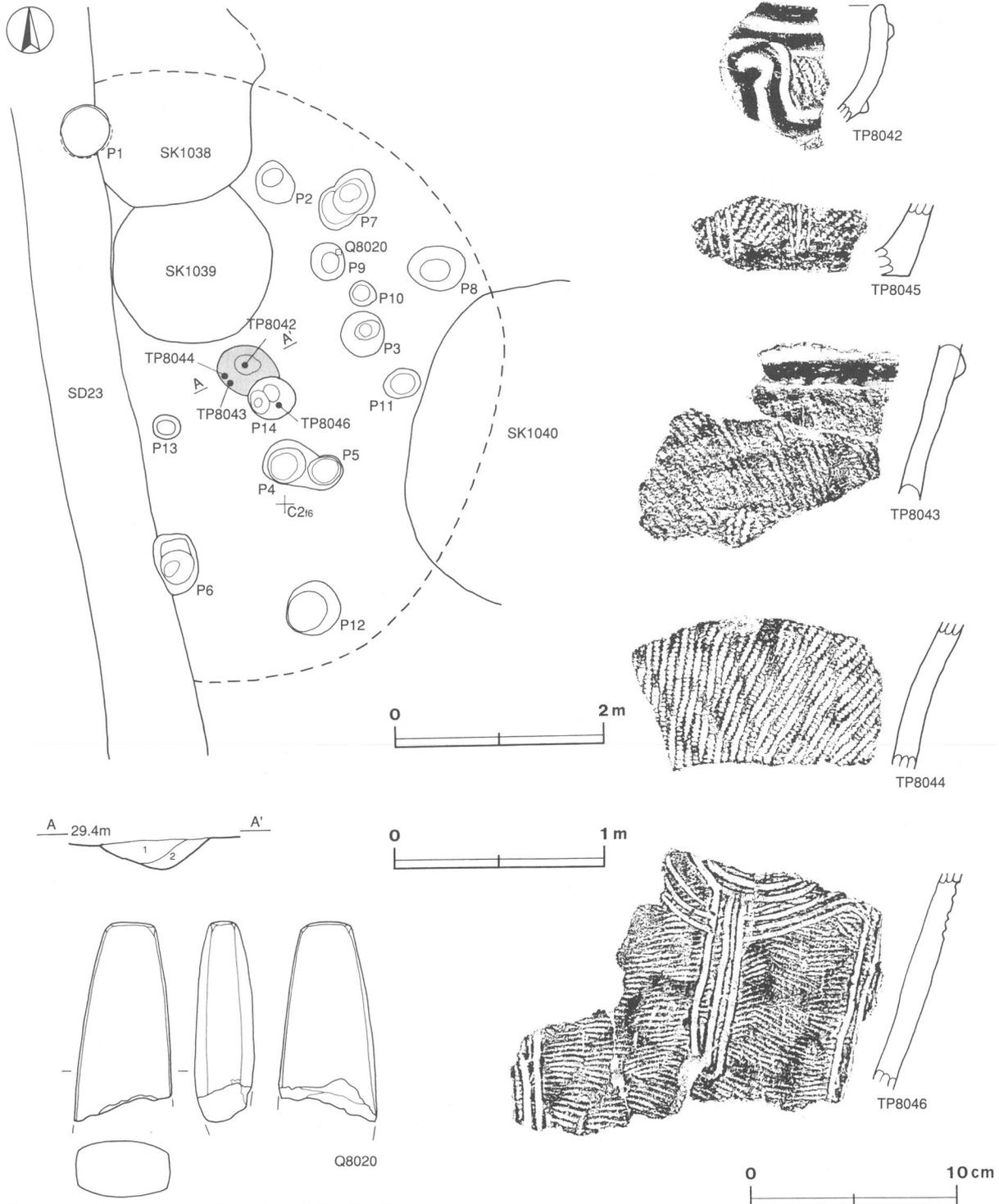
位置 調査2区の北部，C 2 e5区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第23号溝に掘り込まれている。第1038～1040号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が確認されなかったため明確ではないが，柱穴及び炉の配置から径6.20mの円形と推定される。

床 ほぼ平坦であり，特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 14か所。この内P1～P6は深さ34～141cmで，やや規則性を欠くが，その規模及び配置から支柱穴と考えられる。その他のピットの性格は不明である。



第20図 第147号住居跡・出土遺物実測図

炉 本跡の範囲が明確でないため判然としないが、中央部やや東寄りに位置すると考えられる。長径59cm、短径50cmの楕円形と推定され、床面を14cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床の南東部にはP14が検出されたが、本炉に伴うものかどうかを含めその性格は不明である。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量 2 暗赤褐色 焼土粒子中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片39点，磨製石斧1点，磨石1点が出土している。出土した土器はすべて細片で，炉とピットからの出土である。TP8042，TP8043，TP8044の深鉢片は炉の覆土から出土している。TP8045の深鉢片はP11の，TP8046の深鉢片はP14の，Q8020の磨製石斧はP9のいずれも覆土からの出土である。

所見 時期は，出土土器及び重複関係から中期後葉（加曾利E I式期）と考えられる。

第147号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8042	縄文土器	深鉢	—	(5.6)	—	沈線に沿う隆帯による区画文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	炉覆土	
TP8043	縄文土器	深鉢	—	(7.5)	—	隆帯文が横位に巡る。上位がLRの単節縄文，下位がRLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	赤褐	炉覆土	
TP8044	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	RLの単節縄文を斜方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	炉覆土	
TP8045	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	3条一組の沈線による懸垂文。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	P11覆土	
TP8046	縄文土器	深鉢	—	(10.5)	—	3条一組の沈線により文様を描出。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	P14覆土	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8020	磨製石斧	(9.5)	(4.7)	2.7	(200.4)	緑色凝灰岩	定角式。器体研磨入念。刃部欠損。	P9覆土	P L60

第149号住居跡（第21図）

位置 調査2区の北部，C3e1区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1146・1166号土坑の覆土上面に本跡の炉が構築されている。第1247号土坑とP3が，第1153号土坑とP4がそれぞれ重複しているが，いずれも新旧関係は不明である。

規模と形状 炉とピットのみを検出で床も不明確であるため，規模と形状は不明である。

床 残存部はほぼ平坦であり，特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 4カ所。P2～P4は，その配置及び規模から柱穴と思われる。P1の性格は不明である。

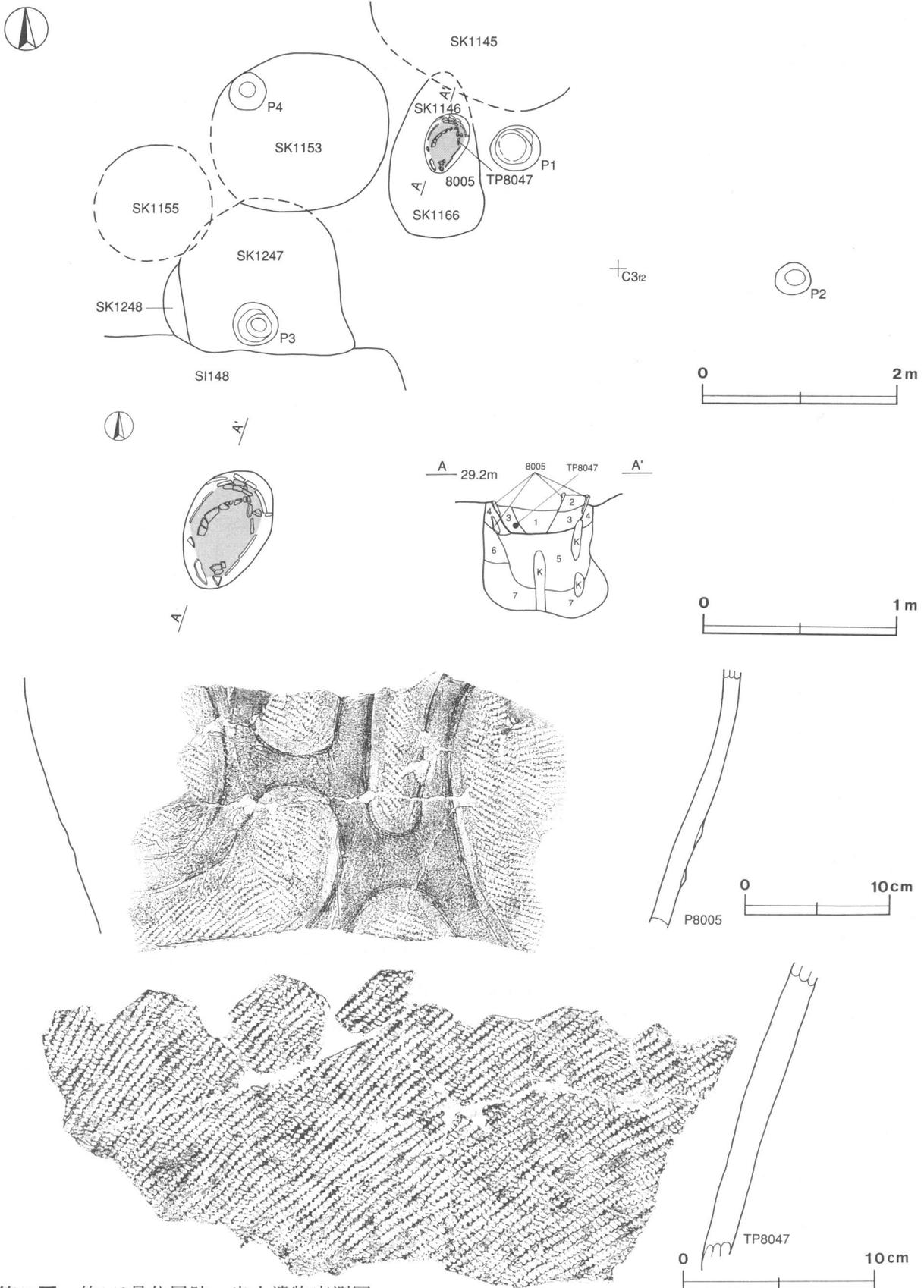
炉 ほぼ中央部に位置すると推定される。長径64cm，短径40cm，深さ65cmの楕円形を呈する掘り方の上部を深鉢の胴部片で囲った土器片囲炉である。北側炉壁の様相から，炉を囲む土器片は大きく二重になっていることが看取でき，内周の土器片の内側が燃焼部であったと考えられる。床面から20cmほどの深さに位置する第1層の下面を炉床としていたと考えられ，炉床は火熱を受けて赤変硬化している。第2・3層は，内・外周の土器片の間に充填された土，第4～7層は，焼土粒子を含む掘り方の覆土である。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子・灰少量 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化物少量
 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 6 暗赤褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量
 3 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量 7 暗赤褐色 炭化物・焼土粒子中量，ローム粒子少量
 4 極暗赤褐色 ローム粒子・炭化物少量，焼土ブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片31点、磨製石斧1点が出土している。出土したすべての縄文土器片が、土器片囲炉の構築材として使用された土器片である。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期後葉（加曾利 E III～IV式期）と考えられる。



第21図 第149号住居跡・出土遺物実測図

第149号住居跡出土遺物観察表（第21図）

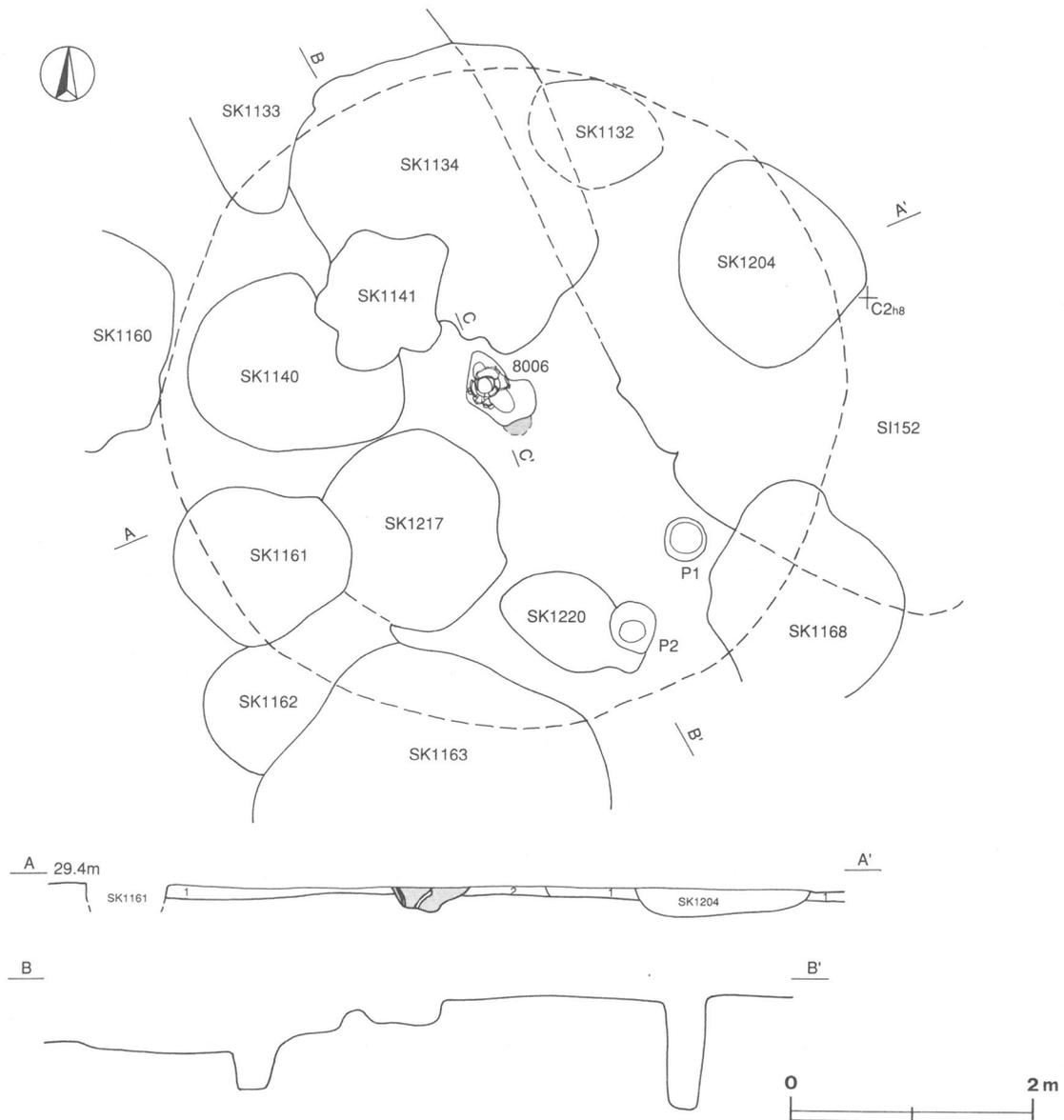
番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8005	縄文土器	深鉢	—	(18.2)	—	2本一組の微隆帯により文様を描出。微隆帯間はよく研磨されている。LRの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	橙	炉	
TP8047	縄文土器	深鉢	—	(16.2)	—	R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	炉	

第151号住居跡（第22～24図）

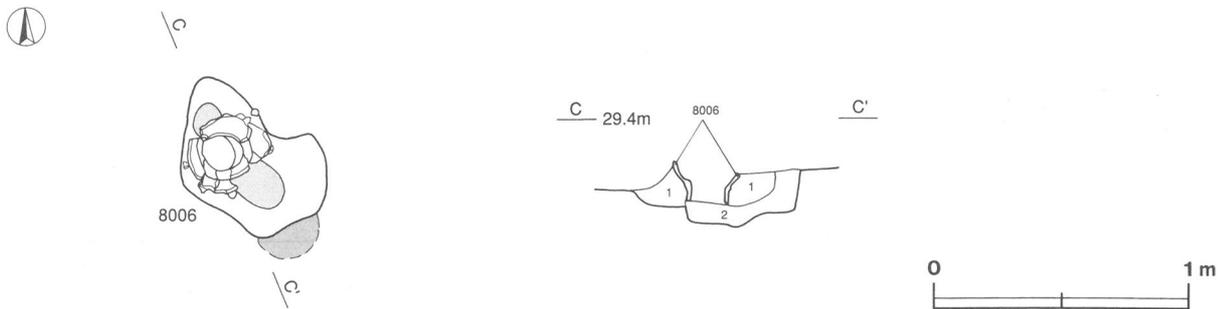
位置 調査2区の北部，C2h7区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1220号土坑を掘り込み，第152号住居，第1204号土坑に掘り込まれている。第1134・1160・1163・1168号土坑と重複しており，土層では確認することができなかったが，出土土器からはそれらより古いと考えられる。第1132・1133・1140・1141・1161・1162・1217号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が確認されなかったため明確にはつかめないが，柱穴及び炉の配置から径5.60mの円形と推定される。



第22図 第151号住居跡実測図（1）



第23図 第151号住居跡実測図(2)

床 残存部はほぼ平坦であり、特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 2か所。P1は深さ84cm、P2は深さ94cmで、規模及び配置から柱穴になる可能性が考えられる。

炉 ほぼ中央部に位置すると推定される。長径80cm、短径52cm、深さ20cmの不定形の掘り方に、胴部下半を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設炉である。埋設土器は、掘り方の中央部やや北寄りに埋設されている。炉の南側の床面では、一部赤変硬化が認められた。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック中量

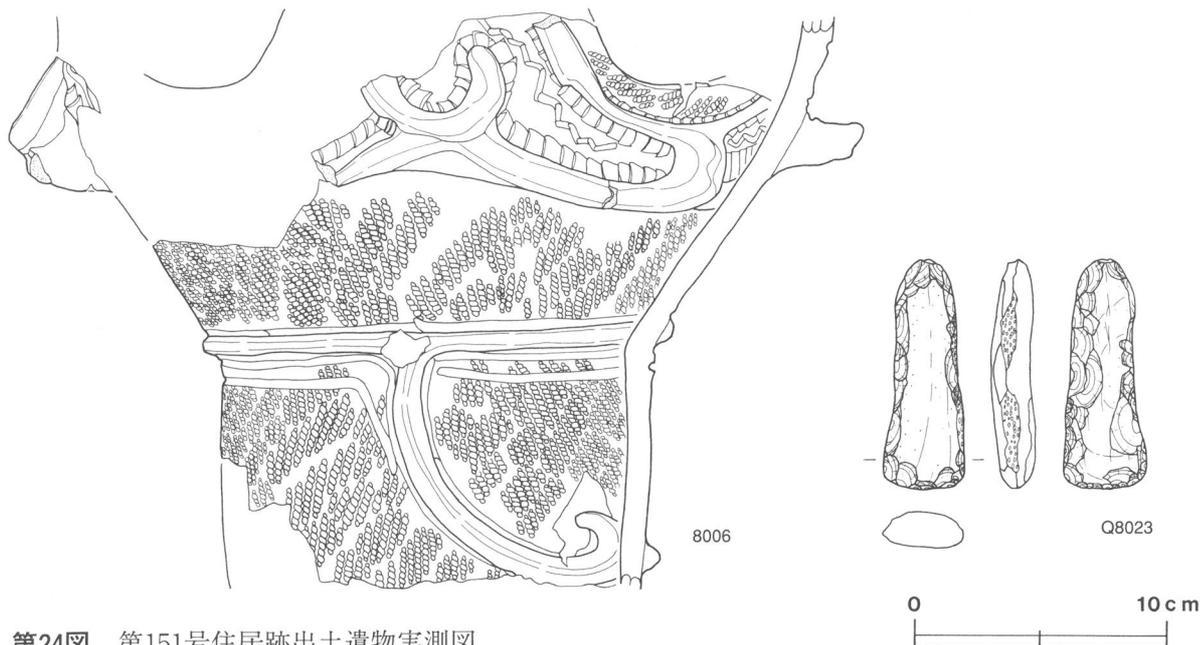
覆土 2層に分層される。ローム粒子を含む、やや締まりのある覆土である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量 2 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片193点、磨製石斧1点が出土している。炉埋設土器以外の土器は、すべて確認面及び覆土から出土した細片である。8006の深鉢は炉の埋設土器である。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第24図 第151号住居跡出土遺物実測図

第151号住居跡出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8006	縄文土器	深鉢	—	(22.5)	—	口縁部は隆帯に沿って爪形文を施文。胴部は沈線に沿う隆帯文。LRの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉埋設土器	P L 40

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8023	磨製石斧	9.1	3.2	1.6	67.9	粘板岩	裏面に原礫面を広く残す。刃部付近を局部研磨。	覆土	PL60

第152号住居跡（第25・26図）

位置 調査2区の北部，C2g8区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第151・157号住居跡を掘り込んでおり，第1132・1134・1173・1174号土坑の覆土上面に本跡が構築されている。出土土器から第153号住居跡より新しい。第31号土坑墓，第1195・1199号土坑及び第393号ピットに掘り込まれている。第1106・1107・1116・1124・1135・1168・1169・1175・1177・1178・1179・1181・1183・1197・1204・1214・1215号土坑及び第387～392，399～401号ピットと重複しているが，いずれも本跡との新旧関係は不明である。

規模と形状 重複が著しく床や壁が明確ではないが，炉とその周辺を巡るピットを確認したことから，住居跡と判断した。断続的に残存する壁溝の様相から，平面形は長径9.15m，短径7.93mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-52°-Eと推定される。

床 残存部はほぼ平坦である。炉の周辺が一部踏み締まっている。

ピット 14か所。P1～P4は深さ89～113cmで，その規模及び配置から支柱穴と考えられる。その他のピットの深さは，P7～P9が17～36cm，P11・13が48cm，P5・P6・P10・P12・P14が62～99cmであり，いずれも性格は不明である。

P2土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子・鹿沼バミス粒子少量 | 5 黒褐色 | 炭化粒子・鹿沼バミス粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |

炉 ほぼ中央部に付設されている。南側を第31号土坑墓に掘り込まれているため全容はつかめないが，長径120cm，短径90cmほどの楕円形を呈する石囲炉と推定される。炉石は北側の一部に残存するのみで，多くは失われている。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|------------------|
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量，ローム粒子微量 |
|-------|---------------------|--------|------------------|

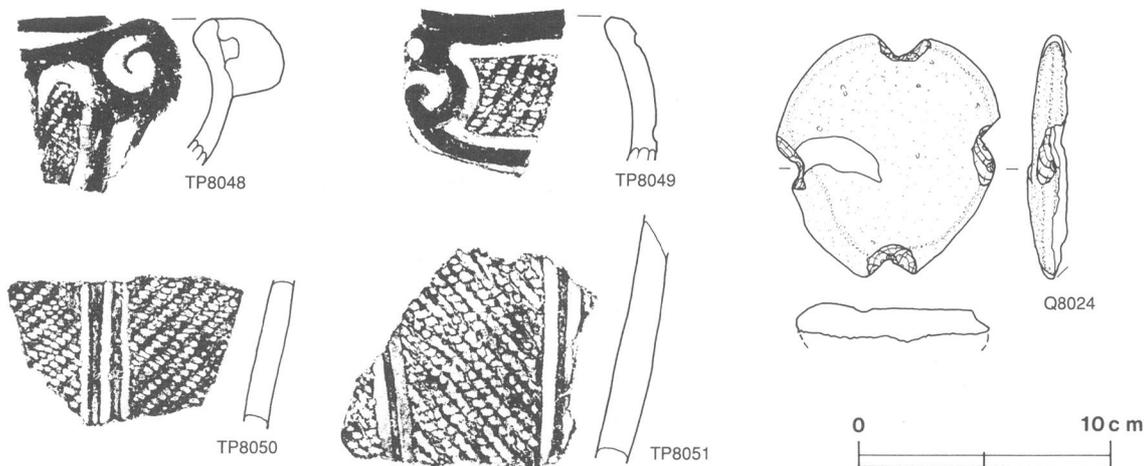
覆土 単一層である。黒褐色を基調とし，やや締まりがある。

土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
|-------|-----------------------|

遺物出土状況 縄文土器片159点，石錘1点，石鏃1点，砥石1点，磨石1点が出土している。土器のほとんどが細片で，確認面から床面まで廃棄されたような状況で散在して出土している。他遺構との重複が著しく混入したものも多いため，本跡の遺物と判断できるものは少なく，また復元可能な土器はなかった。TP8050の深鉢片は覆土から出土している。TP8048の深鉢片は覆土上層から，TP8049の深鉢片はP1の覆土からそれぞれ出土している。TP8051の深鉢片，Q8024の石錘は床面から出土しており，特にTP8051は時期決定の指標となる遺物である。

所見 時期は，出土土器及び重複関係から中期後葉（加曽利EⅡ式期）と考えられる。



第26図 第152号住居跡出土遺物実測図

第152号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8048	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	沈線に沿う隆帯文。沈線による渦巻文を加飾した把手を有する。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土上層	
TP8049	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	沈線に沿う隆帯による渦巻文・区画文。口唇部直下に刺突文を施す。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	P1覆土	
TP8050	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	沈線による懸垂文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土	
TP8051	縄文土器	深鉢	—	(9.7)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8024	石錘	9.5	8.7	(1.5)	(139.5)	砂岩	扁平礫を素材とし、側縁4か所を打ち欠く。片面欠損。	床面	

第153号住居跡（第27・28図）

位置 調査2区の北部，C2f9区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1255・1311号土坑の覆土上面に本跡の炉が構築されており，第148号住居に掘り込まれている。出土土器から第152号住居より古い。第1087・1097・1155・1167・1178・1179・1181・1190・1191・1215・1216・1241・1242・1252号土坑及び第386・404・407号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面で炉とその周りを巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。柱穴及び炉の配置から径8.32mの円形と推定される。

床 残存部はほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

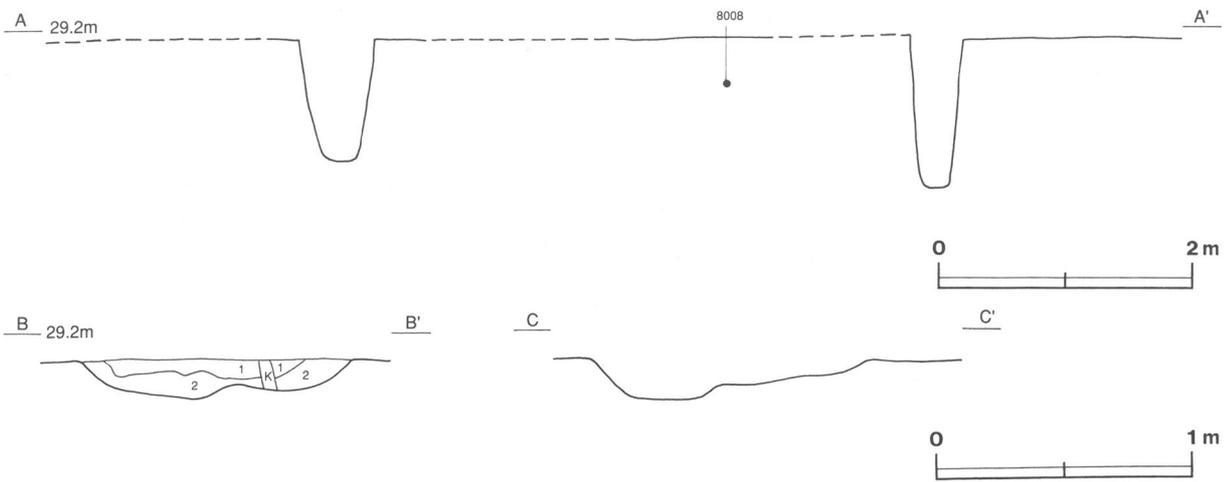
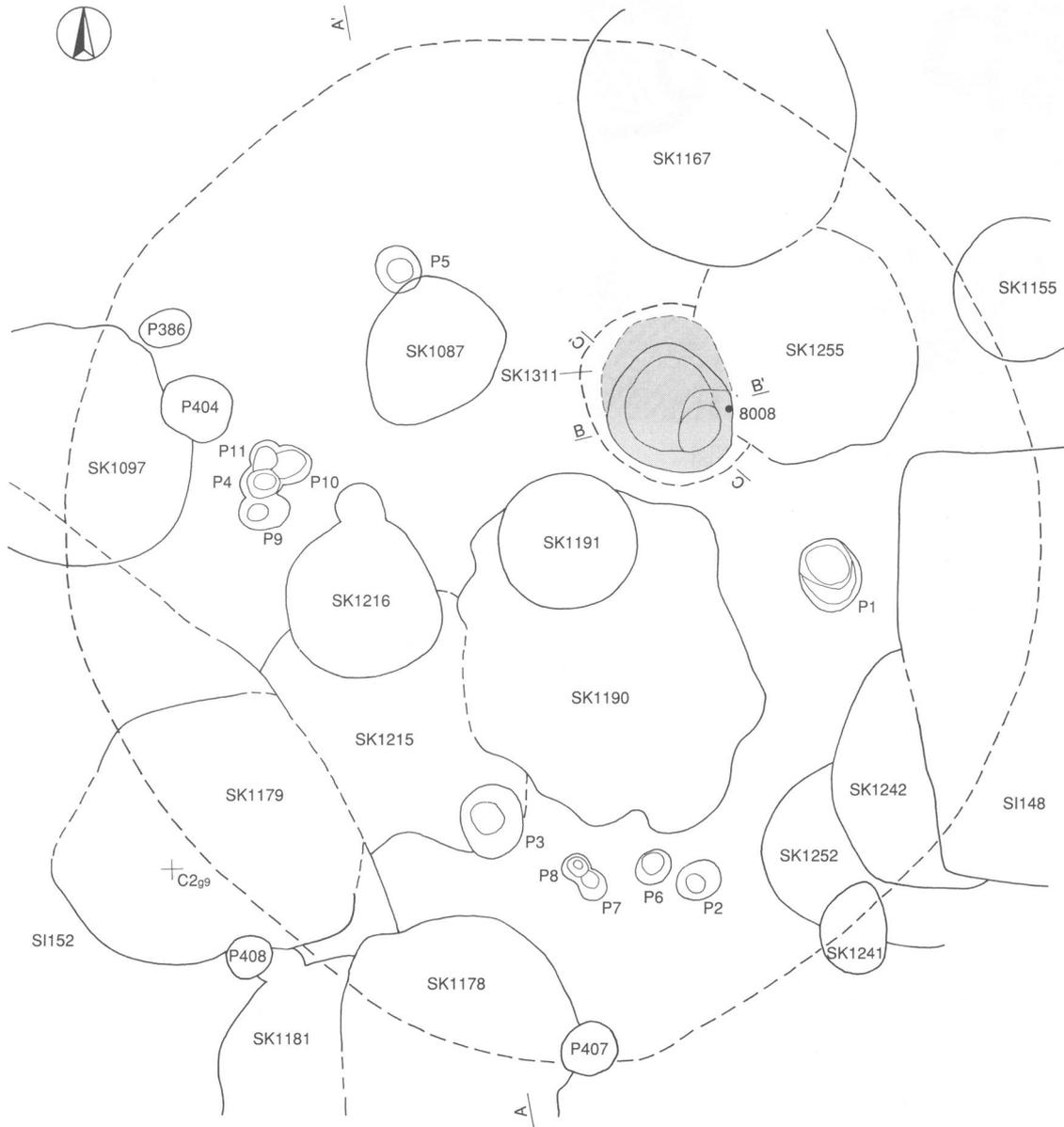
ピット 11か所。P1～P5は深さ70～121cmで，やや規則性を欠くが，その規模及び配列から主柱穴と考えられる。その他のピットは，住居プラン内を環状に巡る配列状況から，補助的な柱穴との想定が可能である。

炉 北東寄りに位置すると推定される。長径134cm，短径110cmの楕円形で，床面を15cmほど掘りくぼめた地床炉である。南東部がやや深く掘りくぼめられている。覆土中に焼土ブロックを多く含み，焼土範囲は北西部の床面に及んでいる。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤灰色 焼土ブロック中量，炭化粒子微量

2 暗赤褐色 焼土ブロック多量，炭化粒子微量



第27图 第153号住居跡実測図

第153号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8008	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	9.7	R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英	普通	橙	炉覆土	底部木葉痕

遺物出土状況 縄文土器片43点が出土している。遺物はすべて炉及びピットからの出土である。8008の深鉢片は炉の覆土から横位で出土しており、時期決定の指標となる遺物である。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期後葉（加曽利E I式期）と考えられる。

第154号住居跡（第29～33図）

位置 調査2区北部，C3f2区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1249・1250・1332号土坑の覆土上面に本跡の床が構築されている。第1246号土坑と重複しており、土層では確認できなかったが、出土土器からは本跡が新しいと考えられる。第1376号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 北側と南側の一部で確認された壁の様相，遺物の出土範囲及び炉の位置から，径4.54mの円形と推定される。壁は緩やかに立ち上がり，壁高は16cmほどである。

床 下部遺構の覆土上部に構築されたほぼ平坦な貼床である。ほぼ全面にわたり焼土粒子・炭化粒子が散っており，特に炉の北東部は，広い範囲にわたって赤変硬化している。

ピット 1か所。P1は深さ66cmである。性格は不明である。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径76cm，短径60cmほどの楕円形で，床面を8cmほど掘りくぼめた石囲炉である。炉の北西側で確認された石棒は，炉床から掘り込まれた掘り方内に直立の状態を検出されており，本跡構築時に埋設・樹立されたものと考えられる。石棒の上部には，火熱を受けた痕跡が带状に認められた。

炉・石棒掘り方土層解説

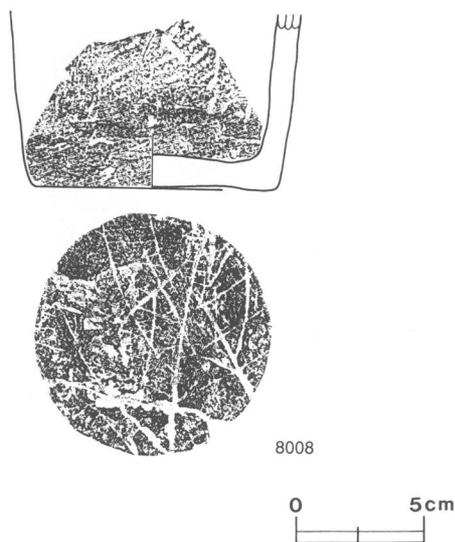
- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えられる。第3層には焼土粒子及び炭化粒子が含まれており，遺物の多くはこの層の上面から出土している。

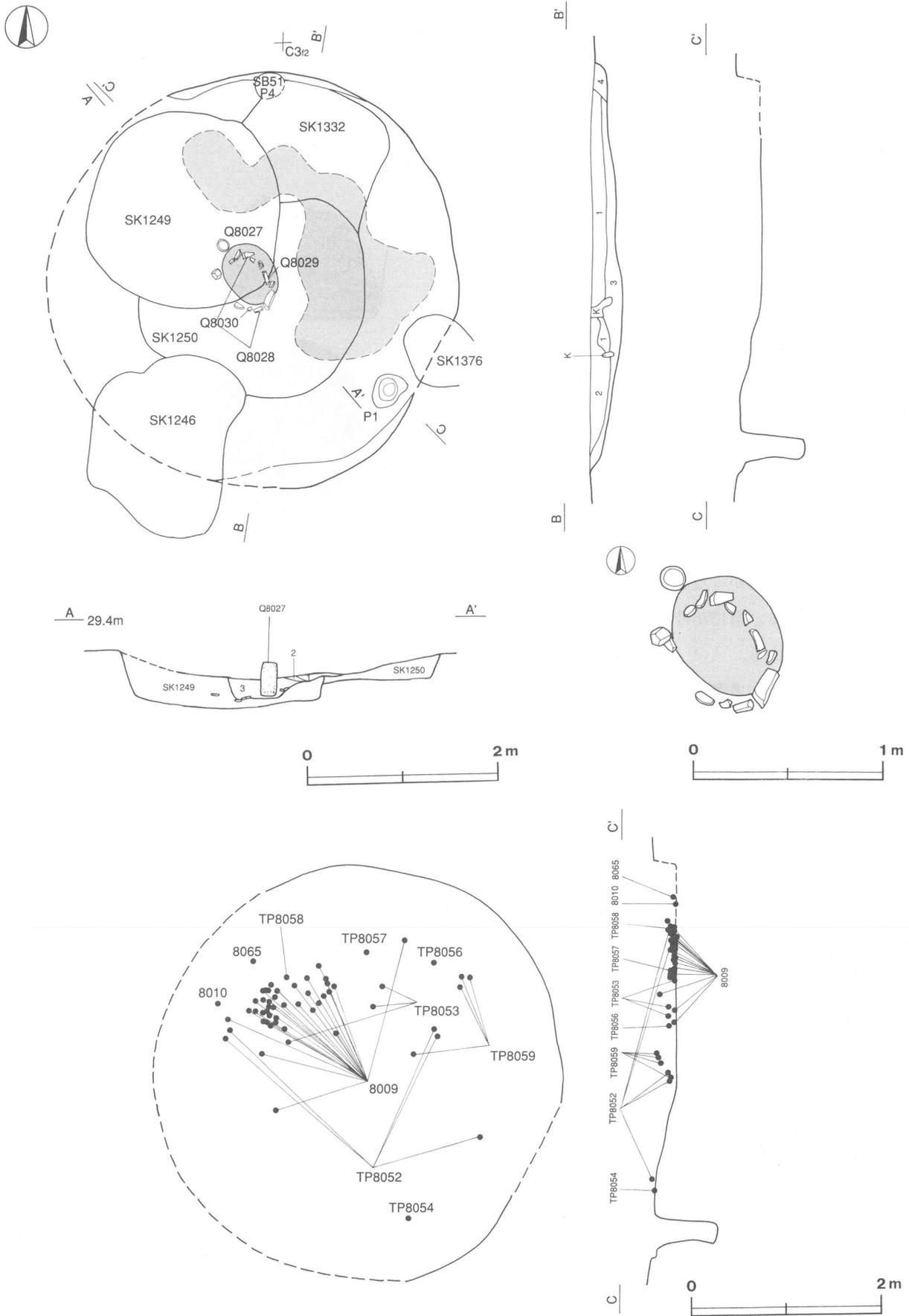
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量，ロームブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片1189点，石棒1点，凹石3点，石鏃1点，不明石器2点が出土している。ほとんどの遺物は，焼土粒子・炭化粒子を含む第3層の上層もしくは上面に敷き詰められたような状態で出土しており，第3層が堆積した時点で廃棄されたものと考えられる。8009の大型の深鉢片は，炉の北西部の第3層上層から粉々の状態で出土した土器が接合したものである。8010の深鉢片は，8009の西側の床面から逆位の状態で



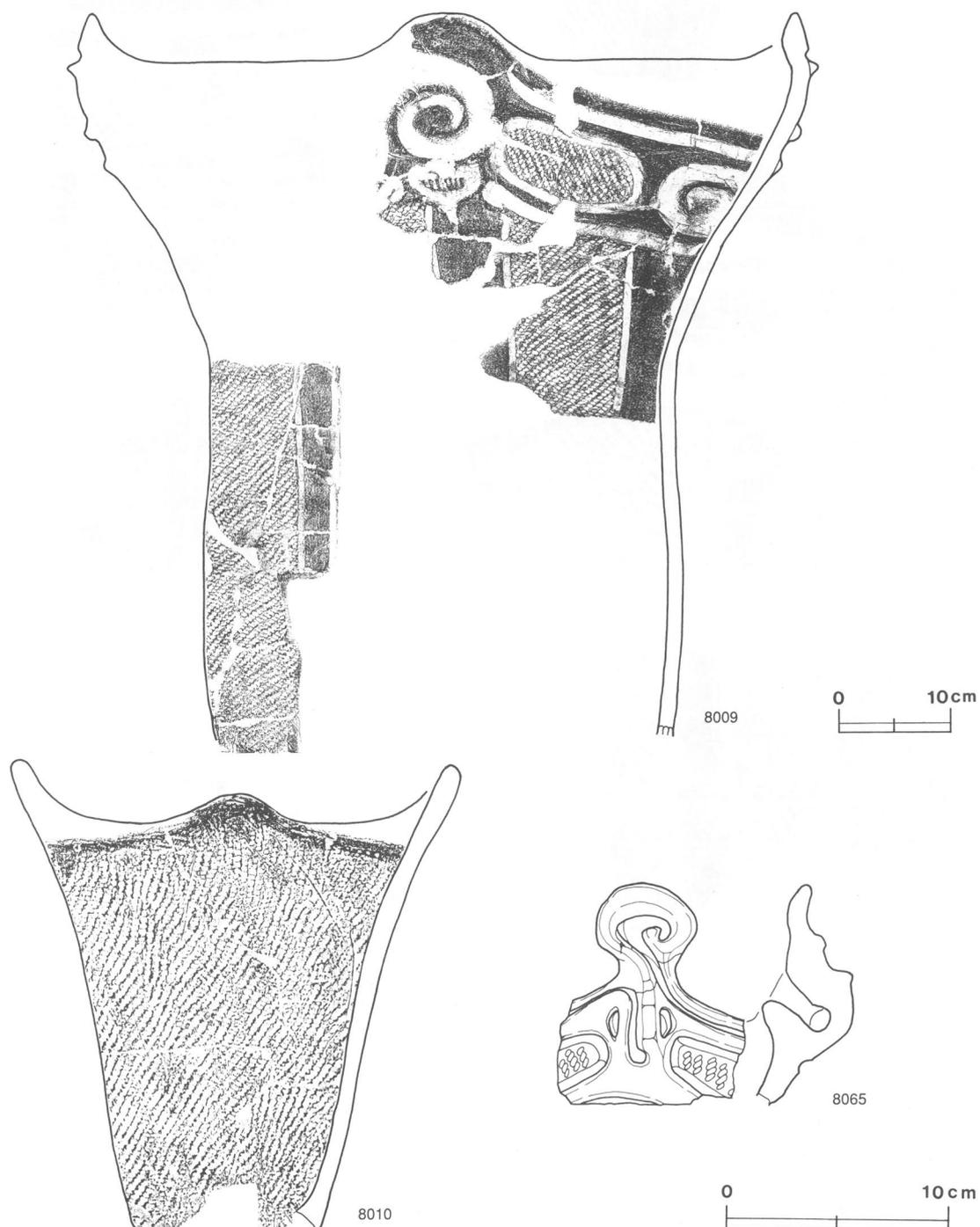
第28図 第153号住居跡出土遺物実測図



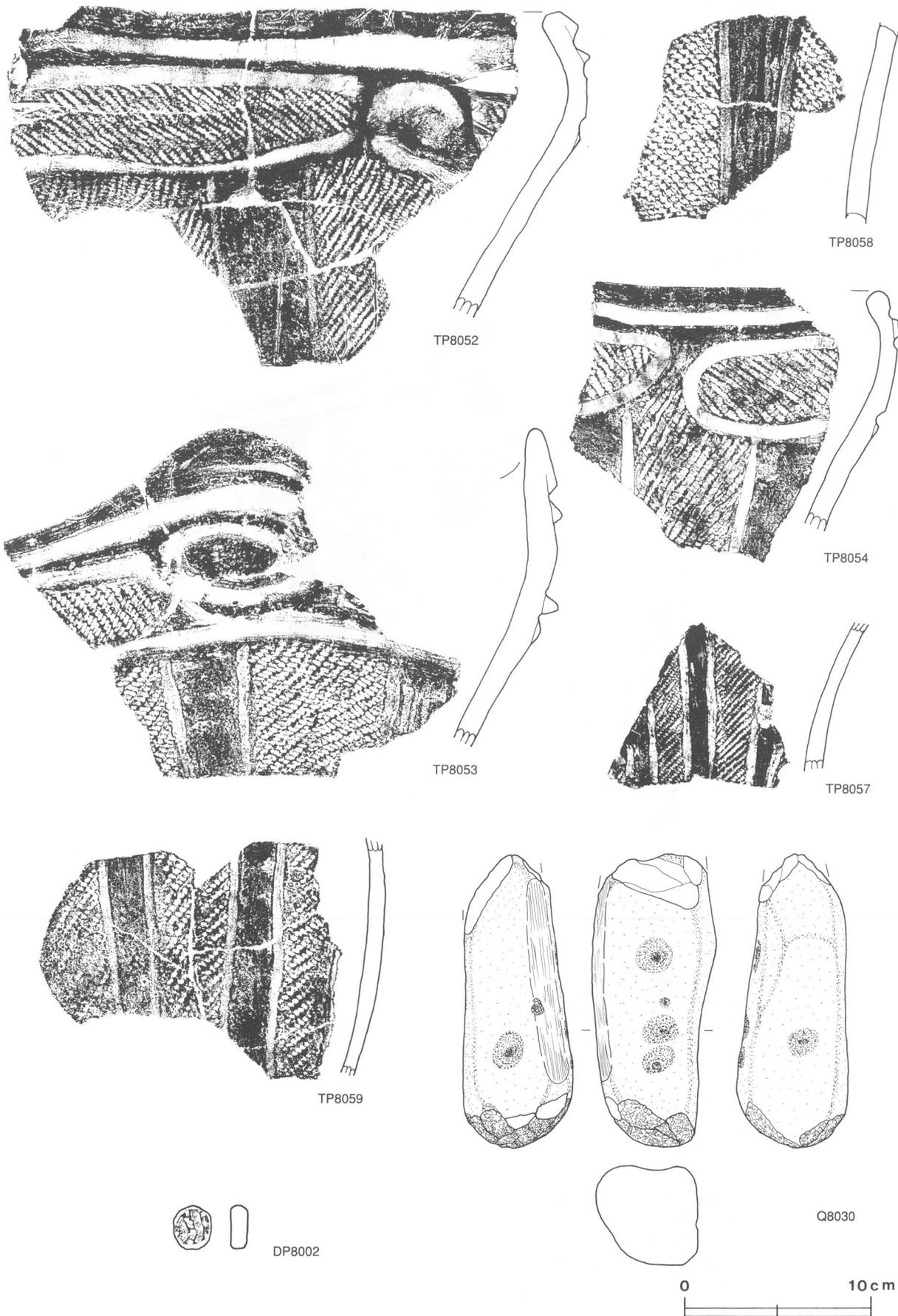
第29図 第154号住居跡実測図

出土している。8065の深鉢把手部は8009の北側から出土している。TP8052の深鉢片は、第3層上層で広範囲に散っていた破片が接合したものである。TP8053, TP8054, TP8057～TP8059の深鉢片はいずれも第3層からの出土である。Q8027は炉の北西に樹立された石棒, 8028, 8029の石皿及び8030の凹石は石囲炉の炉石に転用されたものがある。またDP8002の土器片円盤は覆土上層から出土している。

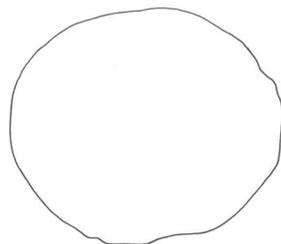
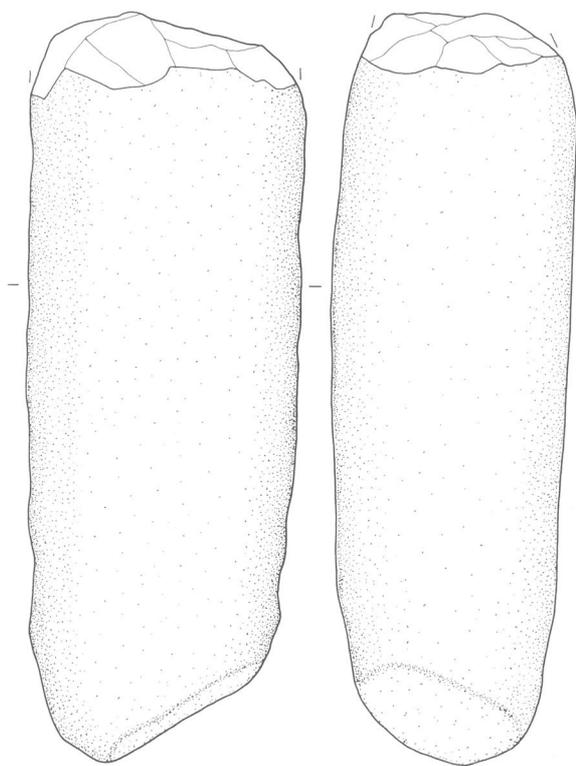
所見 本跡は、石囲炉に近接して石棒を樹立させた住居という大きな特徴を有する。また石棒に被熱した痕跡が認められること、最下層に多量の焼土を含むこと、遺物は最下層上面に敷き詰められたように出土していること等から、廃絶時に意図的に火が焚かれたか、何らかの理由で火熱を受けた可能性が看取できる。炭化材が検出されていないことから、焼失住居との判断は難しい。時期は、出土土器から中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



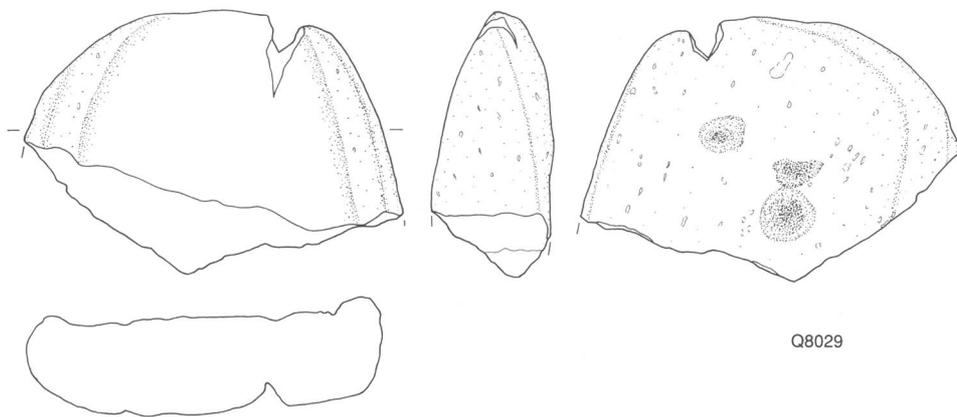
第30図 第154号住居跡出土遺物実測図(1)



第31图 第154号住居跡出土遺物実測図(2)



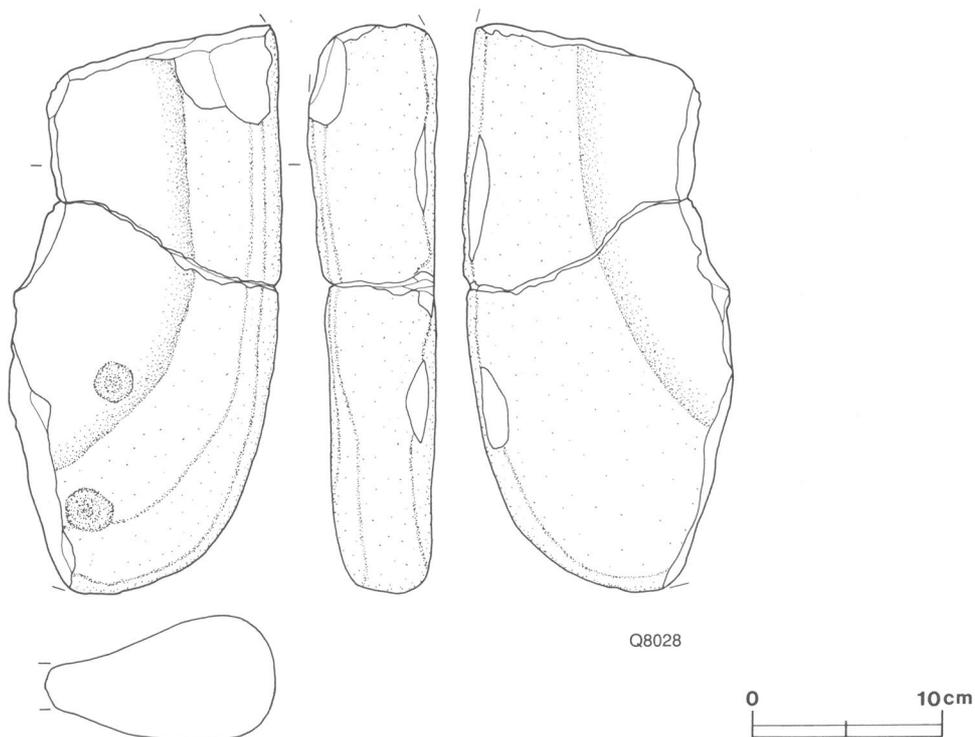
Q8027



Q8029



第32图 第154号住居跡出土遺物実測図(3)



第33図 第154号住居跡出土遺物実測図(4)

第154号住居跡出土遺物観察表(第30~33図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8009	縄文土器	深鉢	[62.6]	(66.2)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯文。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄橙	覆土下層	
8010	縄文土器	深鉢	[19.4]	(21.0)	[7.9]	RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐にぶい橙	床面	
8065	縄文土器	深鉢	—	(9.9)	—	沈線に沿う隆帯文。口縁部の区画内にはRLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	床面	
TP8052	縄文土器	深鉢	—	(16.4)	—	沈線に沿う隆帯による区画文。沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土下層	
TP8053	縄文土器	深鉢	—	(17.0)	—	沈線に沿う隆帯による区画文。沈線による懸垂文間を磨り消す。RLRの複節縄文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土下層	
TP8054	縄文土器	深鉢	—	(12.8)	—	沈線に沿う隆帯による区画文。沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土下層	
TP8057	縄文土器	深鉢	—	(8.0)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土下層	
TP8058	縄文土器	深鉢	—	(10.6)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。LRLの複節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土下層	
TP8059	縄文土器	深鉢	—	(12.8)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土下層	

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP8002	土器片円盤	2.3	2.0	0.9	5.7	長石・石英・雲母, 灰褐	周縁部を部分的に研磨。RLの単節縄文。	覆土	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8027	石棒	(40.0)	14.5	12.9	(12040.0)	花崗岩	原礫を素材とし、軸部上位の被熱痕が帯状に巡る。	床面	P L 62
Q8028	石皿	(30.0)	(14.3)	(6.8)	(3889.0)	花崗岩	両面に縁を有し、機能面が凹む。凹石併用。	炉石	
Q8029	石皿	(14.0)	(20.0)	(6.4)	(1272.2)	安山岩	表面両端に縁を有する。凹石併用、裏面3孔。	炉石	
Q8030	凹石	15.8	6.6	6.0	(785.2)	砂岩	表面4孔、側面各1孔。磨石、敲石併用。	炉石	

第156号住居跡 (第34・35図)

位置 調査2区の北部、C3h1区。住居跡群域に位置する。

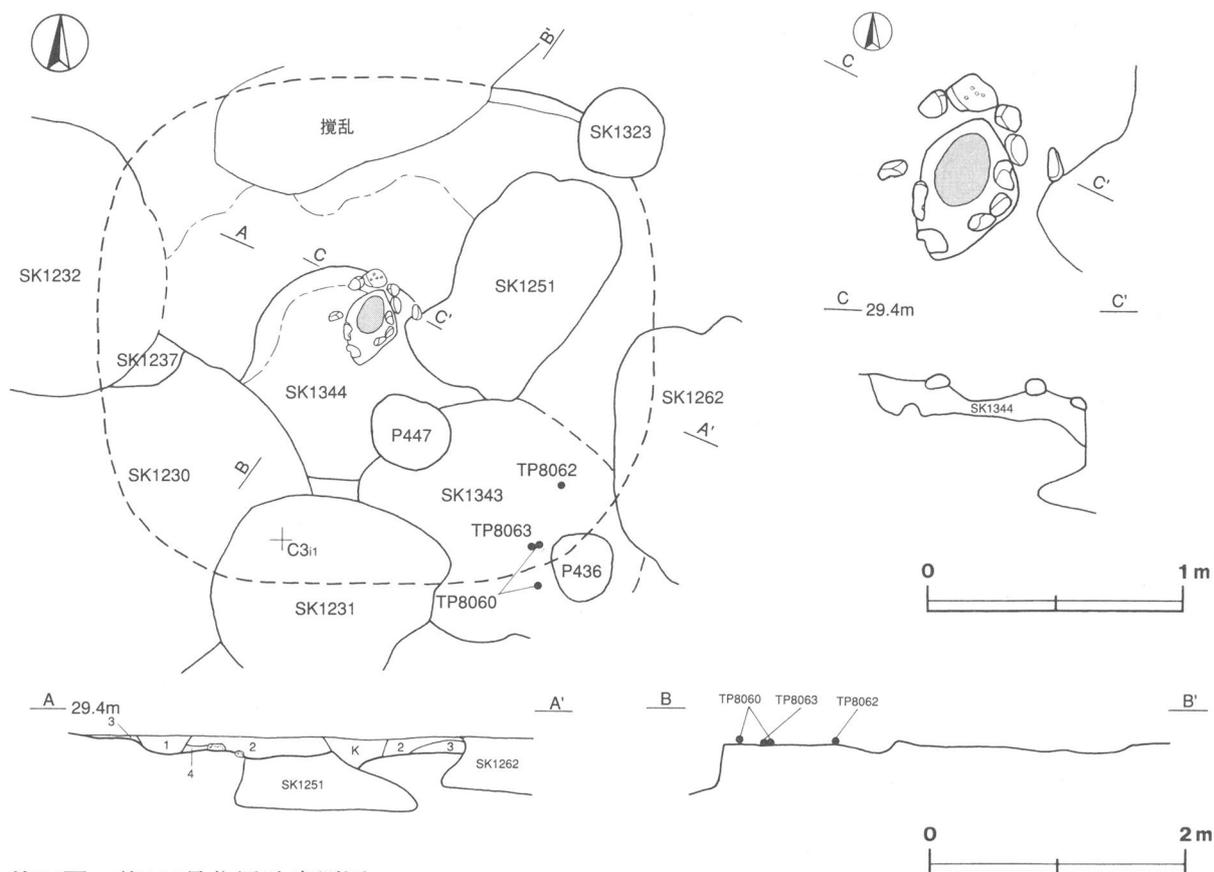
重複関係 第1344号土坑の覆土上面に本跡の炉が構築されており、第1251号土坑の覆土上面で本跡の床が検出された。また第1262・1323号土坑に掘り込まれている。第1230～1232・1237・1343号土坑及び第436・447号ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 覆土のほとんどが削平され、壁も北東部にわずかに残存するのみであるが、炉の位置や残存する壁の様相から、平面形は長軸4.45m、短軸4.00mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-5°-Eと推定される。

床 残存部はほぼ平坦であり、炉の北側から西側にかけてよく踏み固められている。

ピット 他の遺構との重複が著しく、確認できなかった。

炉 ほぼ中央部に付設されていたと推定される。一部で石組みが散逸しているが、長径75cm、短径50cmの楕円形を呈する石囲炉である。炉石は火熱を受けて赤変しており、北端のものには凹石が転用されている。炉床は、確認面から10cmほど掘りくぼめられたレベルにあり、顕著な赤変や硬化は認められなかった。



第34図 第156号住居跡実測図

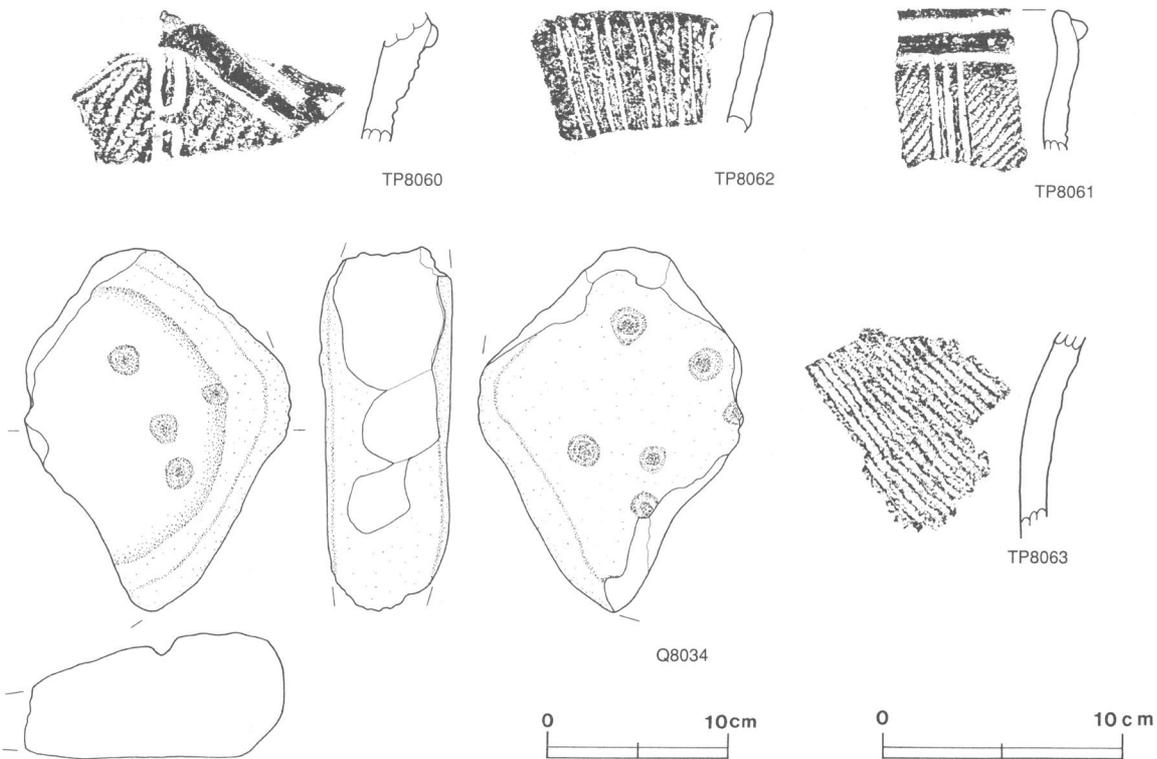
覆土 4層に分層される。全体的に炭化粒子を微量含み、やや締まりがある。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片197点, 凹石1点が出土している。ほとんどの土器が細片で, 確認面及び覆土から廃棄されたような状態で出土している。TP8060の深鉢片は, 覆土から床面にかけて散在していた破片が接合したものである。TP8061の深鉢片は覆土から出土している。TP8062, TP8063はともに深鉢片で, 床面から出土している。Q8034は炉石に転用された凹石である。

所見 時期は, 出土土器及び重複関係から中期後葉(加曾利E I式期)であると考えられる。



第35図 第156号住居跡出土遺物実測図

第156号住居跡出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8060	縄文土器	深鉢	—	(5.4)	—	口唇部直下は沈線に沿う隆帯文。波頂部下は沈線により文様を描出。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	床面	
TP8061	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	口唇部直下は沈線に沿う隆帯文。胴部は沈線による懸垂文。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	褐灰	覆土	
TP8062	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	半截竹管による平行沈線文を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐	床面	
TP8063	縄文土器	深鉢	—	(8.3)	—	LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	床面	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8034	石皿	(20.4)	(14.8)	7.4	(2499.2)	花崗岩	表面は皿状に凹む。凹石併用。	炉石	炉石に転用

第157号住居跡 (第36・37図)

位置 調査2区の北部，C2h8区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第152号住居及び第1172・1181号土坑に掘り込まれている。本跡の床が確認面であったため，第162号住居跡及び第1170・1171・1175・1178・1214・1219・1297号土坑，第406号ピットとの新旧関係は不明である。

規模と形状 床及び壁を確認できなかったため明確にはつかめないが，柱穴の配置と炉の位置から，平面形は長軸4.60m，短軸4.30mの隅丸方形と推定される。主軸方向はN-3°-Eと推定される。

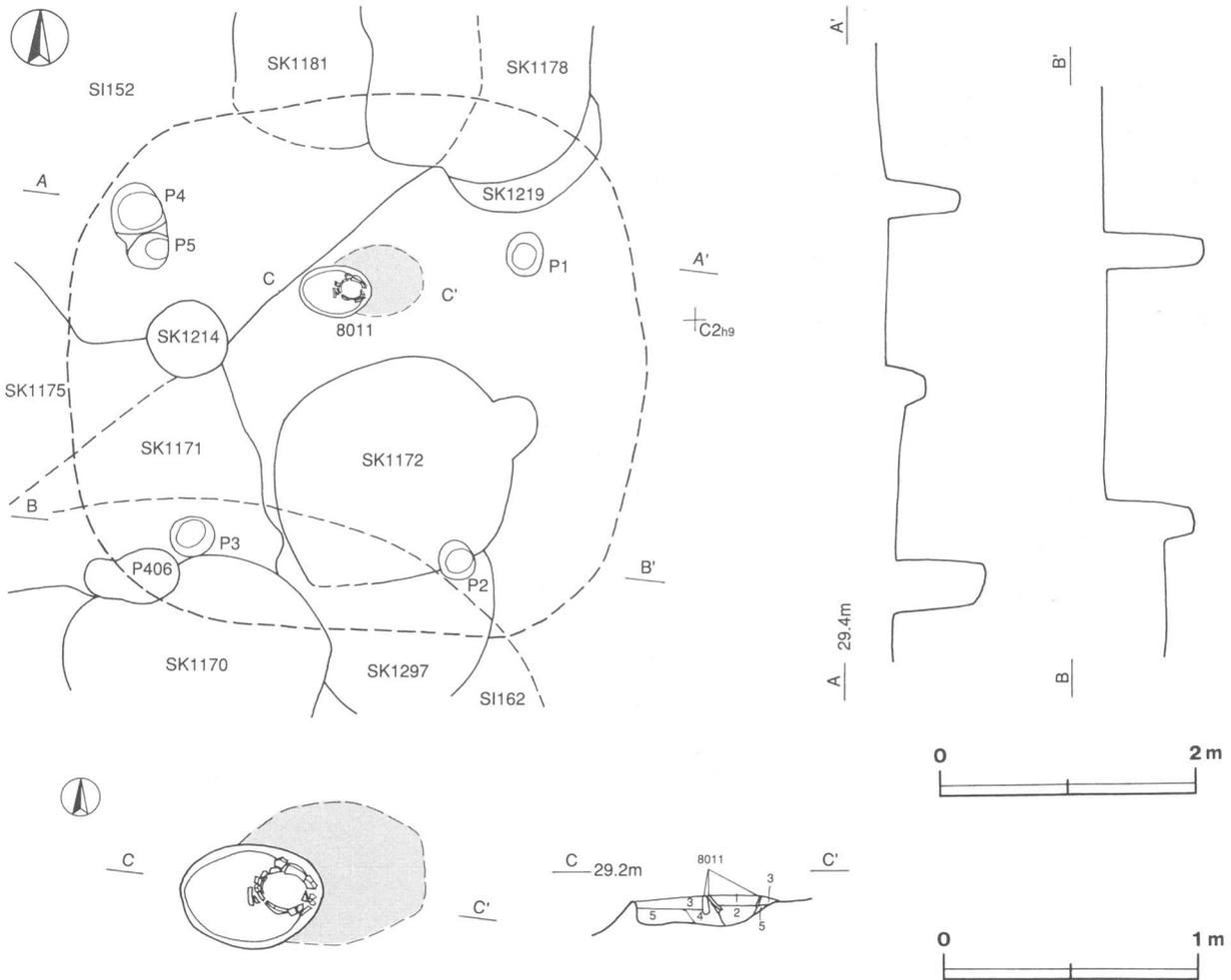
床 確認面をもって床と判断したが，貼り床や硬化面は認められない。壁の推定位置から中央部に向かって皿状に緩傾斜している。

ピット 5か所。P1～P3は，その配置と規模から支柱穴と考えられる。互いに隣接するP4・P5に関しては，いずれかが4本支柱の一柱穴になると考えられる。

炉 中央部北寄りに付設されている。長径56cm，短径41cmの楕円形を呈する土器埋設炉である。床面からの深さ12cmほどの掘り方に深鉢の胴部を埋設している。掘り方及び埋設土器内の覆土には焼土粒子が含まれるが，顕著な赤変硬化は認められない。また炉の東側には焼土粒子の広がりが認められた。

炉土層解説

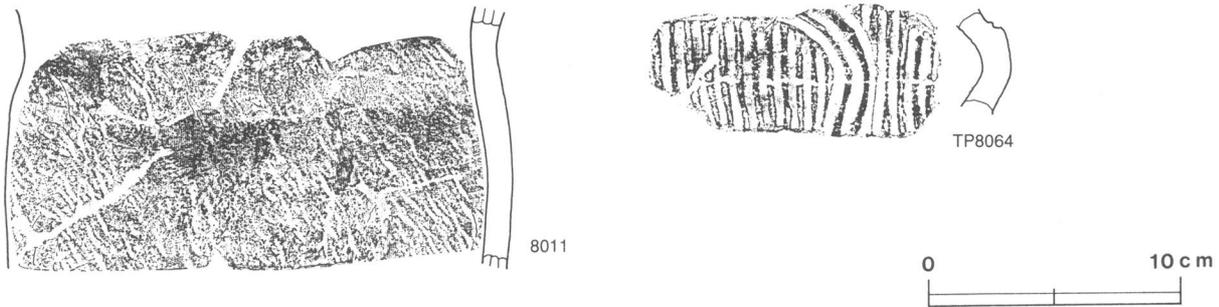
- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 におい赤褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量，ロームブロック微量 | |



第36図 第157号住居跡実測図

遺物出土状況 縄文土器片43点が出土している。縄文土器片の中で13点が炉の埋設土器及び炉の覆土からの出土であり，その他は確認面からの出土である。8011の深鉢は炉の埋設土器である。TP8064の深鉢片は炉の覆土から出土している。

所見 時期は，出土土器及び重複関係から中期後葉（加曾利 E I～II 式期）と考えられる。



第37図 第157号住居跡出土遺物実測図

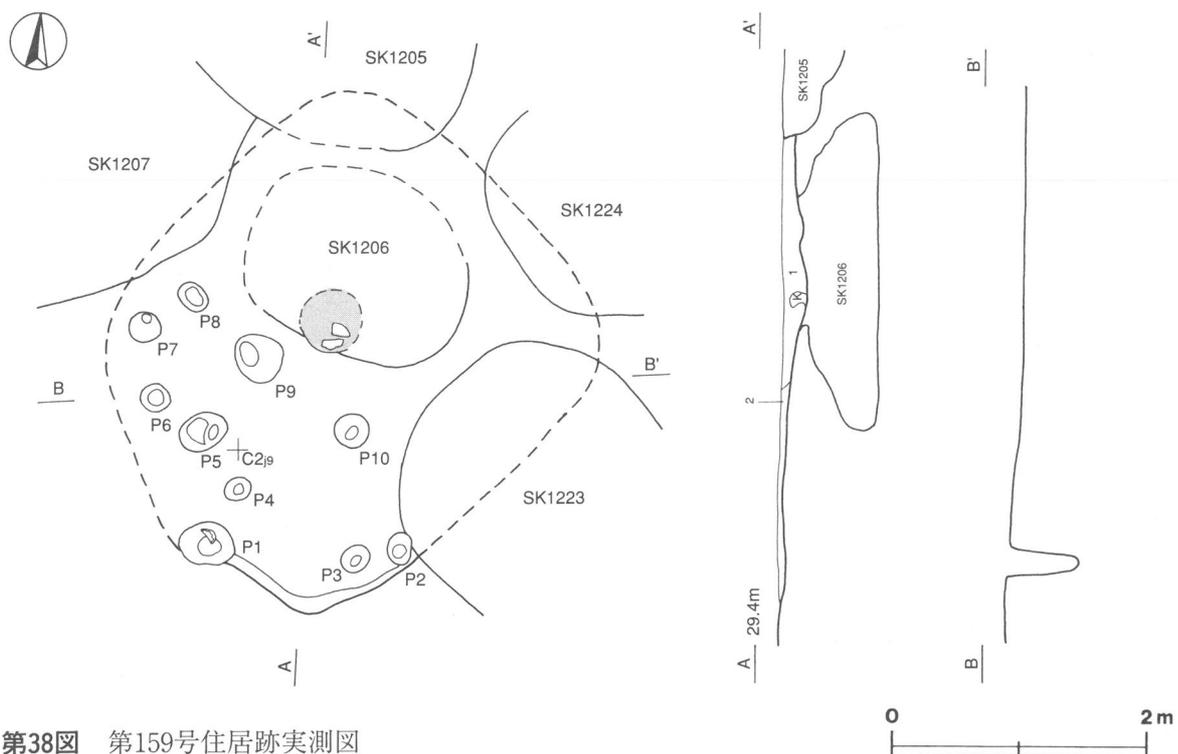
第157号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8011	縄文土器	深鉢	—	(10.3)	—	Lの無節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙 褐灰	炉	
TP8064	縄文土器	深鉢	—	(4.4)	—	沈線を有する隆帯文。棒状工具による沈線を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉覆土	

第159号住居跡（第38・39図）

位置 調査2区の北部，C2i9区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1206号土坑の覆土上面に本跡の炉が構築されており，第1205号土坑に掘り込まれている。第1207・1223・1224号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。



第38図 第159号住居跡実測図

規模と形状 南部に残存するコーナー部の壁，柱穴の配列及び炉の位置から，平面形は長軸3.74m，短軸3.26mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-54°-Eと推定される。残存する壁は緩やかに立ち上がり，壁高は6cmである。

床 残存部はほぼ平坦である。特に硬化している部分は認められなかった。

ピット 10か所。P1・P2・P6・P7は深さ38~64cmで，その配置及び規模から支柱穴と考えられる。P3~P5は，深さ14~26cmと支柱穴に比べ浅く，配列から柱穴の可能性が考えられる。P8~P10の性格は不明である。

炉 ほぼ中央部に付設されていたと推定される。第1206号土坑の開口部上面で確認されたが，残存状況は悪く，全容はつかめない。火熱を受けて赤化した炉石と思われる礫が焼土の範囲内に確認でき，石囲炉であったと考えられる。

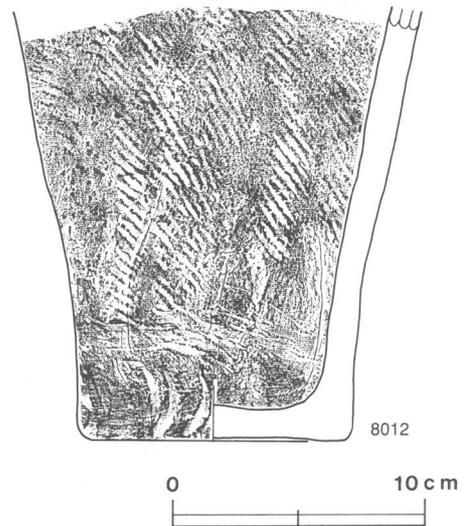
覆土 2層に分層される。全体的にローム粒子を多目に含み，やや締まりがある。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片20点が出土している。ほぼ半数がピットの覆土及び確認面に散在していたもの，残り半数が炉の覆土から出土したものである。8012の深鉢片はP4~P6付近に散在していた土器が接合したものである。

所見 時期は，出土土器及び重複関係から中期後葉(加曽利E I式期)と考えられる。



第39図 第159号住居跡出土遺物実測図

第159号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8012	縄文土器	深鉢	—	(17.0)	10.4	Lの無節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・赤色粒子	普通	灰褐にぶい橙	覆土	

第160号住居跡 (第40図)

位置 調査2区の北部，C2j9区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1272・1273・1279・1346号土坑の覆土上面で床面を確認できた。第1221号土坑に炉の西半分を，第1271号土坑に東部の床面を掘り込まれている。また第1218・1223・1234・1270号土坑と重複しており，土層では確認することができなかったが，出土土器からはそれらより古いと考えられる。第1222・1233・1235・1236・1238・1239号土坑及び第426~428号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 南東部及び北西部に残存する壁，柱穴の配列及び炉の位置から，平面形は長径6.30m，短径5.70mの楕円形と推定される。主軸方向はN-51°-Wと推定される。残存する壁は外傾して立ち上がり，壁高は16cmである。

床 残存する部分はほぼ平坦であり，炉の周辺が楕円形状に硬化している。

ピット 8か所。P1~P8は深さ40~80cmであり，やや規格性を欠くものの，炉を中心にプラン内を楕円形に巡っていることから柱穴と考えられる。

炉 ほぼ中央部に付設されている。第1221号土坑に西半分を掘り込まれているため全容はつかめないが，径

56cmの円形を呈し、床面を14cmほど掘り込んだ地床炉と推定される。炉床、炉壁ともに火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス粒子微量

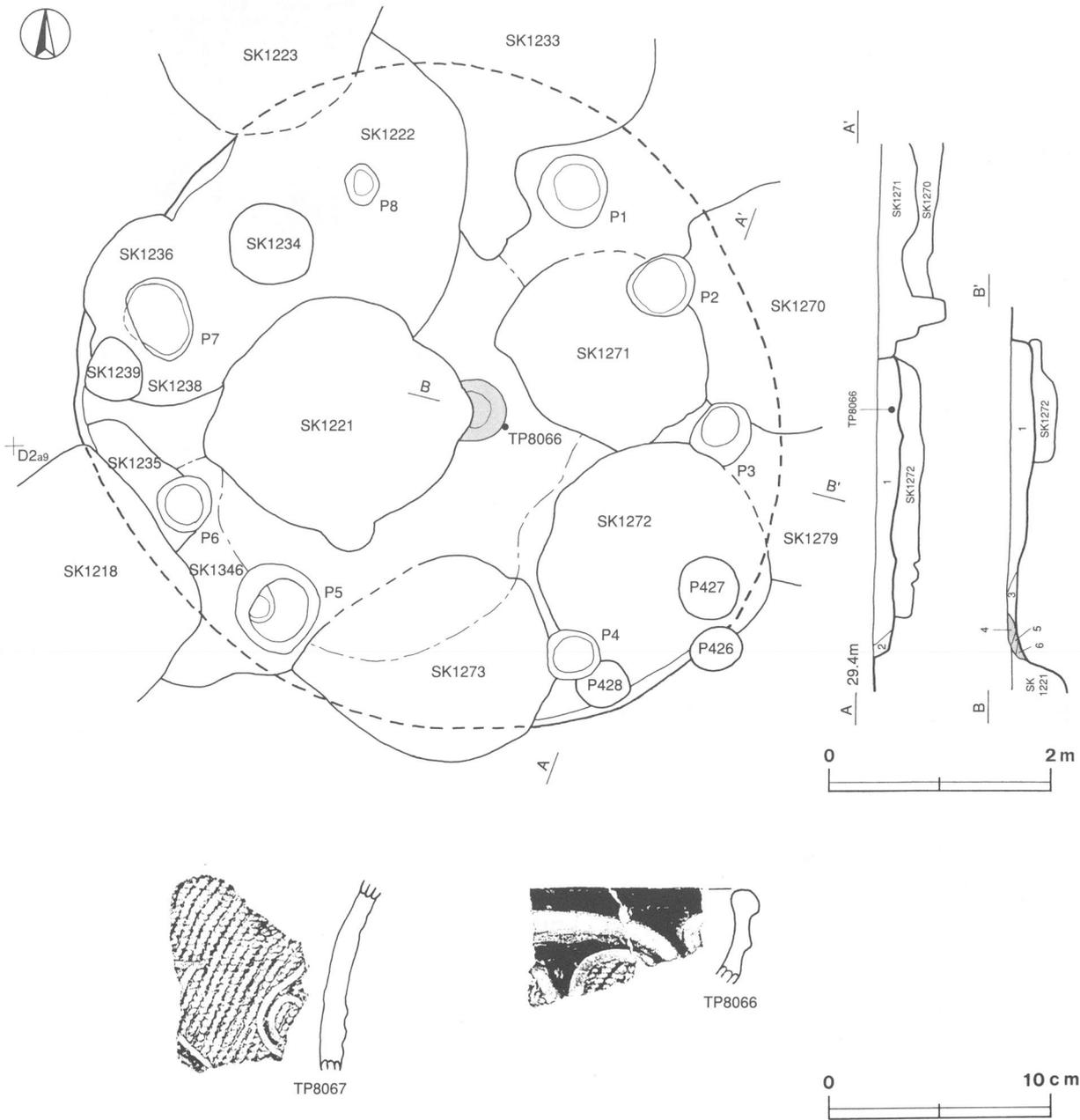
覆土 3層に分層される。ロームブロックを少量含み、黒褐色を基調としている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片74点が出土している。すべての土器が細片で、確認面、覆土及びピットの覆土から出土している。TP8066の深鉢片は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期後葉（加曾利E I式期）と考えられる。



第40図 第160号住居跡・出土遺物実測図

第160号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8066	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	沈線に沿う隆帯による区画文。区画内にはR Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英	普通	橙	覆土中層	
TP8067	縄文土器	深鉢	—	(8.8)	—	沈線により文様を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土	

第162号住居跡（第41図）

位置 調査2区の北部，C2h9区。住居跡群域に位置する。

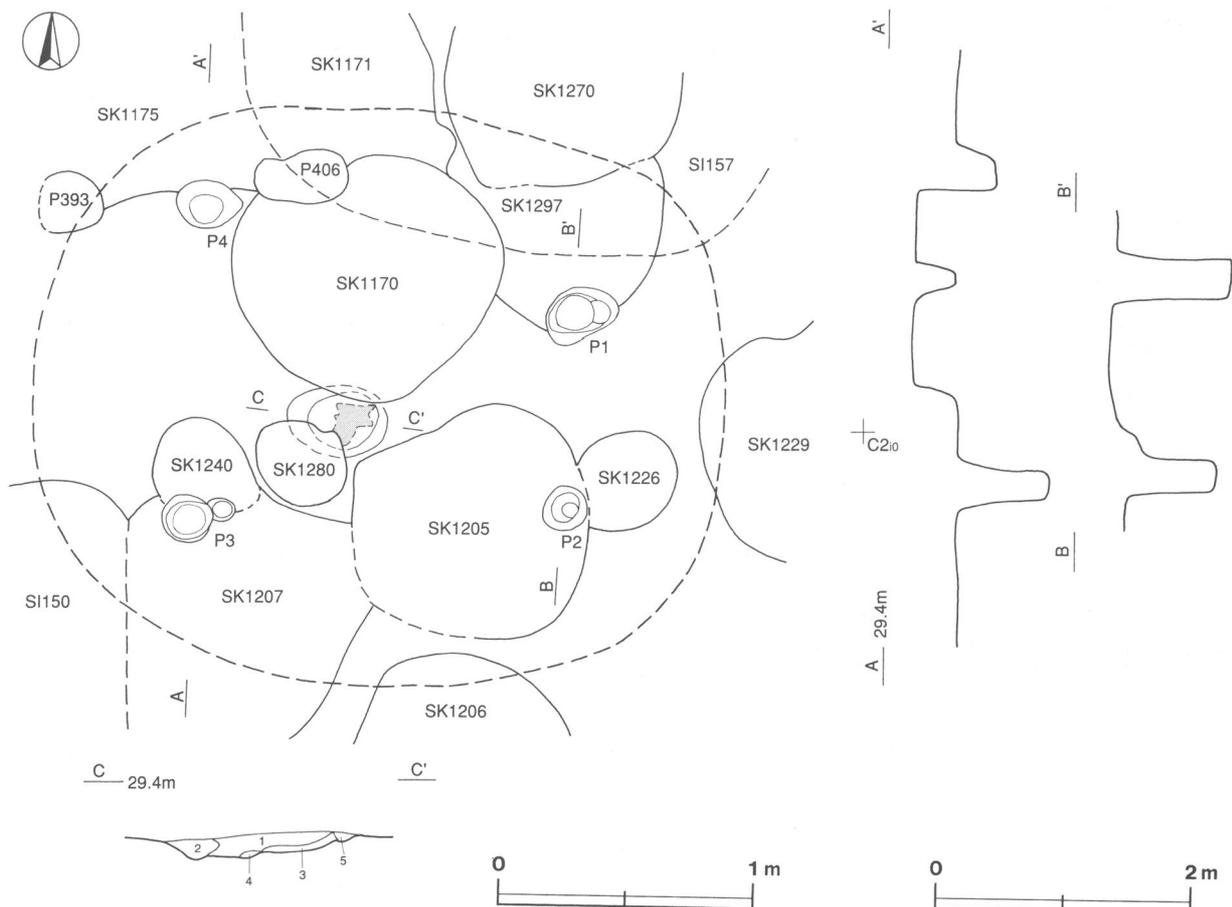
重複関係 第1170・1280号土坑に炉を，奈良・平安時代の第150号住居に南西コーナー部を掘り込まれている。第157号住居跡及び第1170・1171・1175・1205～1207・1226・1229・1240・1270・1297号土坑，第393・406号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面が床面であったため壁を確認できず明確にはつかめないが，柱穴と炉の配置から，平面形は長軸5.40m，短軸4.60mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-87°-Wと推定される。

床 残存部はほぼ平坦である。全体的に踏み固められているが，顕著な硬化面は認められなかった。

ピット 4か所。P1～P4の深さはそれぞれ63～113cmであり，やや規則性を欠くもののその規模及び配置から主柱穴と考えられる。なおP1とP3からは，東側にテラス状の掘り込みが確認されたが，炉及び他のピット等で建て替えの痕跡が認められないことから，これらの掘り込みは補助的に使われた柱穴の可能性が指摘できる。

炉 中央部やや西寄りに付設されていたと推定される。第1170号土坑に北部を，第1280号土坑に南部を掘り込



第41図 第162号住居跡実測図

まれているため全容はつかめないが、長径68cm、短径60cmの楕円形プランを呈し、床面を10cmほど掘り込んだ地床炉と推定される。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|---------------------------------|--------------------------|
| 1 極暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子中量, 炭化粒子少量 | 5 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子中量 |
| 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 縄文土器片16点が出土している。いずれも細片であるため、抽出・図示できるものはなかった。出土した土器片は確認面、炉の覆土、ピットの覆土からの出土である。

所見 時期は、出土土器がいずれも細片のため判断はできないが、加曾利 E I 式期の第1170号土坑に掘り込まれていることから、それ以前の中期中葉と考えられる。

第163号住居跡（第42図）

位置 調査2区の北部、D3a1区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1340・1341号土坑の覆土上面に炉及び床が構築されている。北部を奈良・平安時代の第161号住居に掘り込まれている。また第1331・1339・1350・1361・1397号土坑と重複しており、土層では確認することができなかったが、出土土器からはそれらより新しいと考えられる。

規模と形状 西側部の壁の残存状況及び炉の位置から、平面形は長軸3.60m、短軸3.20mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-55°-Wと推定される。土層によって確認した第1331号土坑と重複する東部の壁はほぼ直立し、壁高は34cmである。一方、西側の壁は10cmほどの高さで緩やかな傾斜で立ち上がる。

床 壁際の床に対し中央部が20cmほどくぼんでいるが、本跡が中央部で重複する土坑上に構築されたため、住居構築後もしくは廃絶後に土圧等で沈み込んだものと考えられる。壁際の床はやや踏み固められている。

ピット 2か所。地山を床面としている西側部だけで確認でき、重複する土坑の覆土上面を床面としている範囲では検出できなかった。P1・P2ともに深さ42cmで、その規模及び2つのコーナー部に対称的に配置されていることから支柱穴と考えられる。

炉 中央部やや南東寄りに付設されている。径40cmの円形で、床面を20cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は第5層上面と考えられ、炉壁とともに火熱を受けて赤変硬化している。なお第5層は掘り方の覆土である。

炉土層解説

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | |

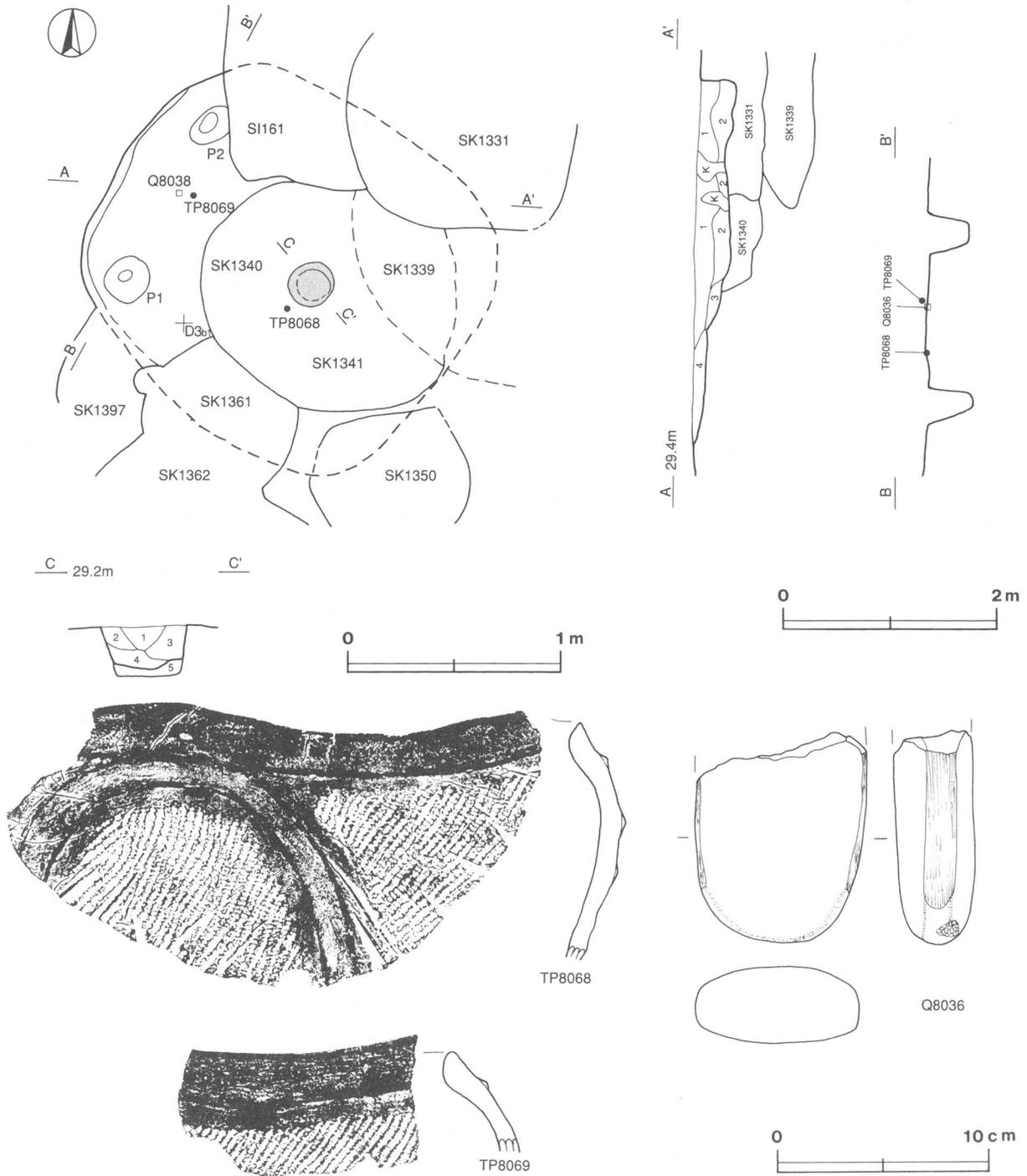
覆土 4層に分層される。全体的にローム粒子を多めに含み、やや締まりがある。レンズ状の堆積状況を呈することから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1 黒色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 縄文土器片80点、磨石1点が出土している。ほとんどが細片で、覆土上層から床面にかけて散在し、床面のものは少ない。TP8068の深鉢口片は炉南側の床面から出土しており、時期決定の指標となる遺物である。TP8069の深鉢片は、床面よりやや浮いた状況で出土している。またQ8036の磨石は床面から出土している。

所見 時期は、出土遺物及び重複関係から中期中葉（加曾利 E IV 式期）と考えられる。



第42図 第163号住居跡・出土遺物実測図

第163号住居跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8068	縄文土器	深鉢	—	(11.5)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。胴部は2本一組の微隆帯文。R Lの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐色	床面	
TP8069	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	口唇部直下に微隆帯を巡らす。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐色	覆土下層	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8036	磨石	(10.0)	8.1	3.8	(550.4)	緑色凝灰岩	使用面は両側縁。一部に敲打痕あり。	床面	

第164号住居跡（第43・44図）

位置 調査2区の北部。C3f2区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1307号土坑に炉が掘り込まれている。範囲が明確でないため重複関係は不明であるが、出土土器から南西部に隣接する第154号住居跡，第1250・1332号土坑及び東部に隣接する第1306・1308号土坑より新しい。北部に隣接する土坑，ピットとの新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面が床面であり，炉と2つのピット及び硬化面の一部のみの検出であったため，正確な規模と形状は不明である。

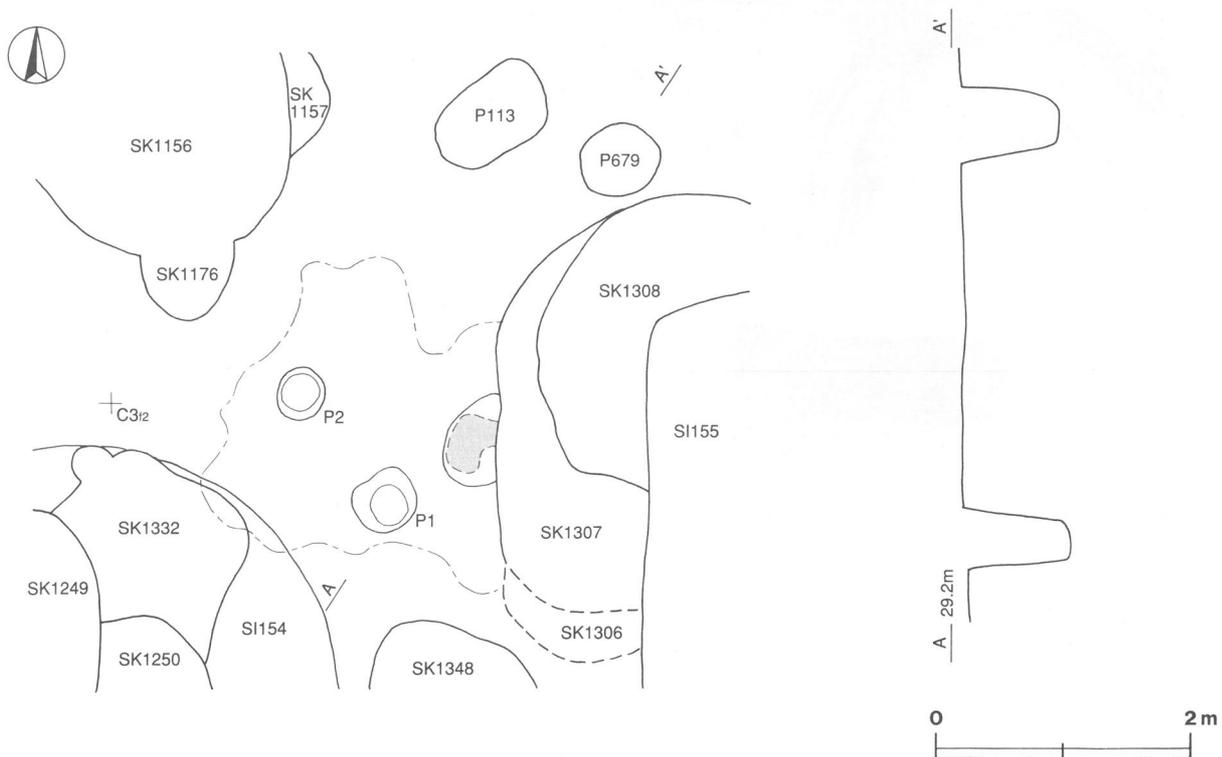
床 確認された範囲では，ほぼ平坦であり，炉の周辺に硬化面が広がる。

ピット 2か所。床面からの深さは，P1が82cm，P2が50cmである。P2は，炉及び硬化面との位置関係から，柱穴の1つであるとの想定も可能であるが，その他の柱穴が確認できなかったため，積極的な判断は難しい。

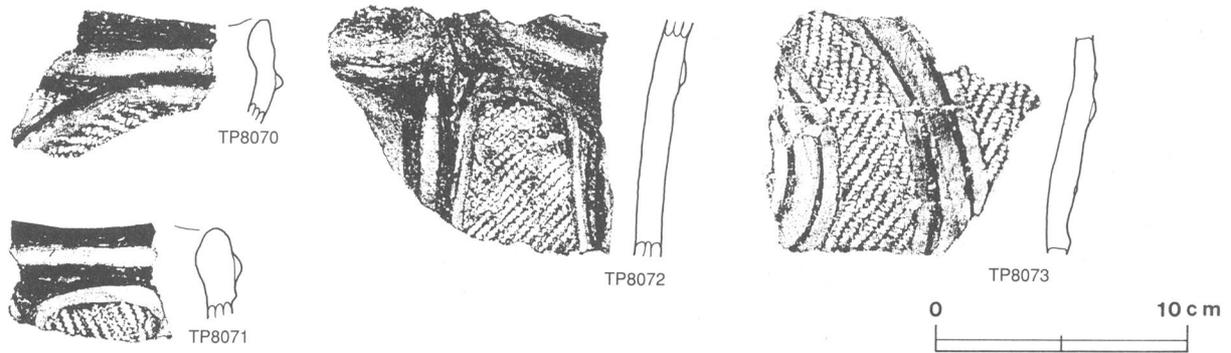
炉 第1307号土坑に東側3分の1を掘り込まれ，また炉床に攪乱が入っているため，全容はつかみ難い。長径76cm，短径56cmの楕円形で，床面を炉床とした地床炉と推定される。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

遺物出土状況 縄文土器片37点，凹石1点が出土している。遺物は確認面とピット覆土からの出土である。TP8070，TP8071，TP8072の深鉢片はP1の覆土から出土しており，時期決定の指標となる遺物である。TP8073の深鉢片は確認面から出土している。

所見 時期は，出土土器及び重複関係から中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第43図 第164号住居跡実測図



第44図 第164号住居跡出土遺物実測図

第164号住居跡出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8070	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	—	沈線が沿う隆帯による区画文。R Lの単節縄文を斜方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	P1覆土	
TP8071	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	沈線が沿う隆帯による区画文。R Lの単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	P1覆土	
TP8072	縄文土器	深鉢	—	(9.4)	—	沈線を有する微隆帯により逆U字状の懸垂文を描出。R Lの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	P1覆土	
TP8073	縄文土器	深鉢	—	(8.8)	—	沈線が沿う複列の微隆帯により文様を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	確認面	

第165号住居跡（第45図）

位置 調査2区の北部、D3b2区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1476号土坑の覆土上面に本跡の炉が構築されている。第168号住居跡及び第1341・1350・1360・1390～1394・1410・1423・1424・1668号土坑、第464・528号ピットと重複しているが、いずれも本跡との新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面が床面であったため壁を確認できなかったが、柱穴の配置と炉の位置から、平面形は長径5.95m、短径5.20mの楕円形と推定される。主軸方向はN-58°-Wと推定される。

床 確認面をもって床と判断したが、貼り床や硬化面は認められない。残存部はほぼ平坦である。

ピット 7か所。P1～P7は、深さこそP3の16cmからP1の116cmと開きがあるが、炉を中心に環状に巡る配列から、いずれも柱穴と考えられる。

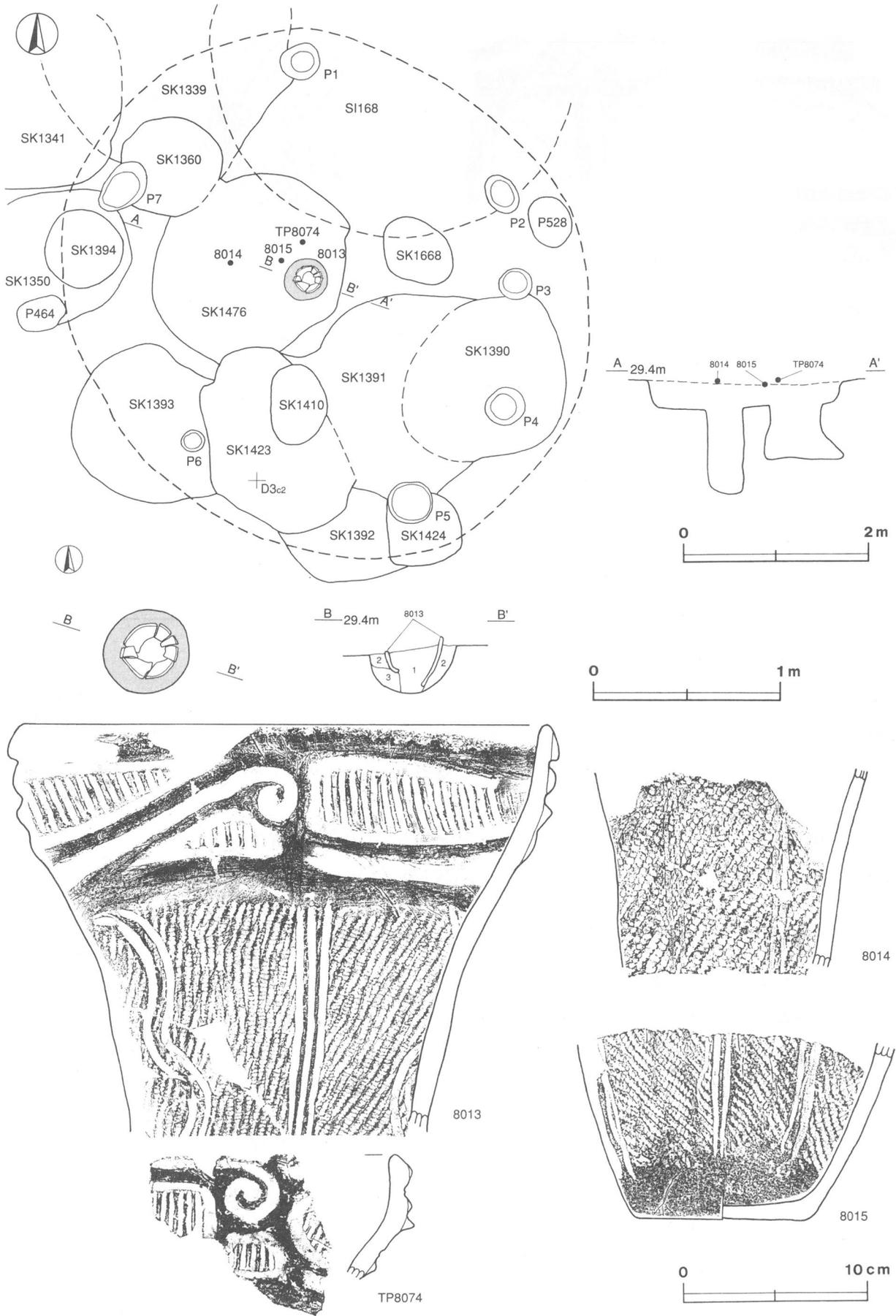
炉 ほぼ中央部に付設されている。径46cm、深さ28cmの椀状の掘り方に、胴部下半を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設炉である。埋設土器内の覆土は、住居廃絶後に堆積したと考えられる単一層であり、炉床は確認できなかった。埋設土器の周囲が赤変していることから、埋設土器外に炉床があったと考えられる。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片189点が出土している。土器のほとんどが細片で、確認面に散在する状況で出土している。8013の深鉢は炉埋設土器である。8014, 8015, TP8074の深鉢片は床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利E I式期）と考えられる。



第45図 第165号住居跡・出土遺物実測図

第165号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8013	縄文土器	深鉢	[28.4]	(22.1)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯による区画文。胴部は沈線による懸垂文。R Lの単節縄文。	長石・雲母	普通	にぶい橙	炉埋設土器	口縁部被熱痕, PL40
8014	縄文土器	深鉢	—	(10.5)	—	3条一組の沈線による懸垂文。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	床 面	
8015	縄文土器	深鉢	—	(9.4)	9.4	2条及び3条一組の沈線による懸垂文。L Rの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床 面	
TP8074	縄文土器	深鉢	—	(6.5)	—	沈線に沿う隆帯による渦巻文・区画文。区画内は沈線を縦位に施文。	長石・石英	普通	橙	床 面	

第166号住居跡（第46・47図）

位置 調査2区の北部，D3a3区。住居跡群域に位置する。

重複関係 奈良・平安時代の第158号住居に掘り込まれている。また炉が存在したと考えられる位置にある第1367号土坑に掘り込まれている。また第1425号土坑と重複しており，土層では確認することができなかったが，出土土器からは本跡が古いと考えられる。第168号住居跡及び第1364・1365・1366・1402・1426・1667号土坑，第530号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 南部の壁の残存状況及び柱穴の配置から，径4.30mの円形を想定した。残存する壁は外傾して立ち上がり，壁高は10cmである。

床 残存部はほぼ平坦であり，特に硬化した部分は認められなかった。

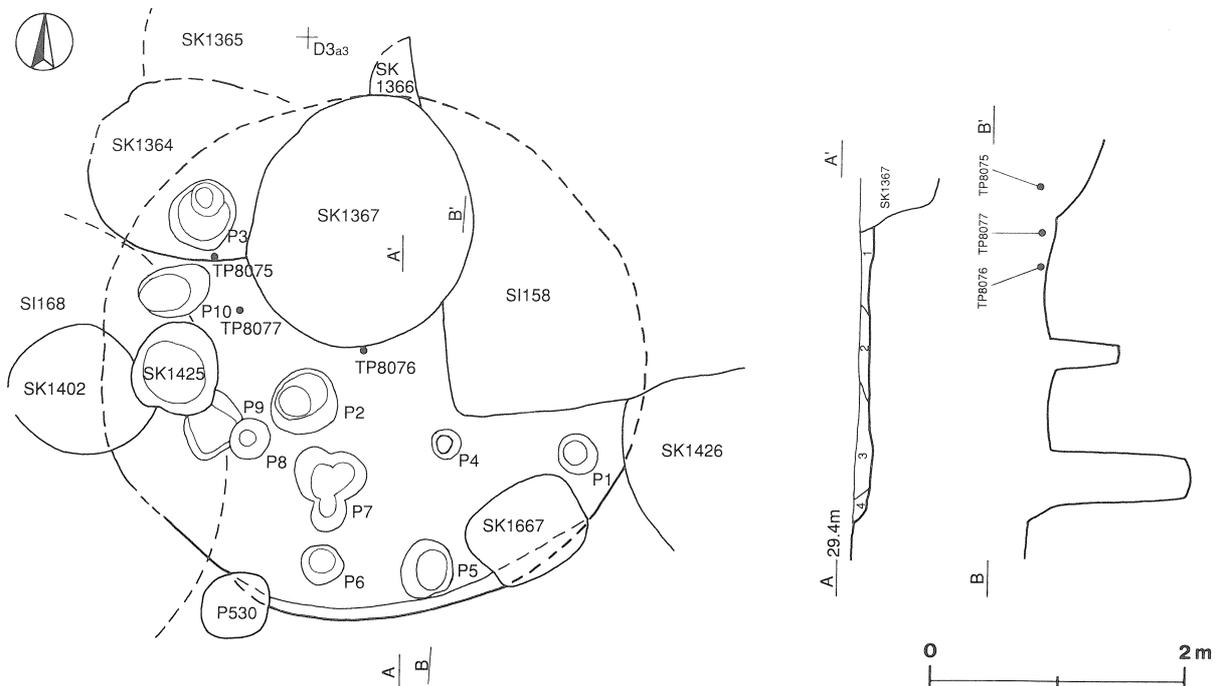
ピット 10か所。P1・P3・P5・P6・P9・P10は深さ29～104cmで，やや規格性を欠くものの環状に巡る配列が認められることから，柱穴と考えられる。その他のピットの性格は不明である。

炉 確認されなかった。

覆土 4層に分層される。全体的にローム粒子を含み，やや締まりがある。

土層解説

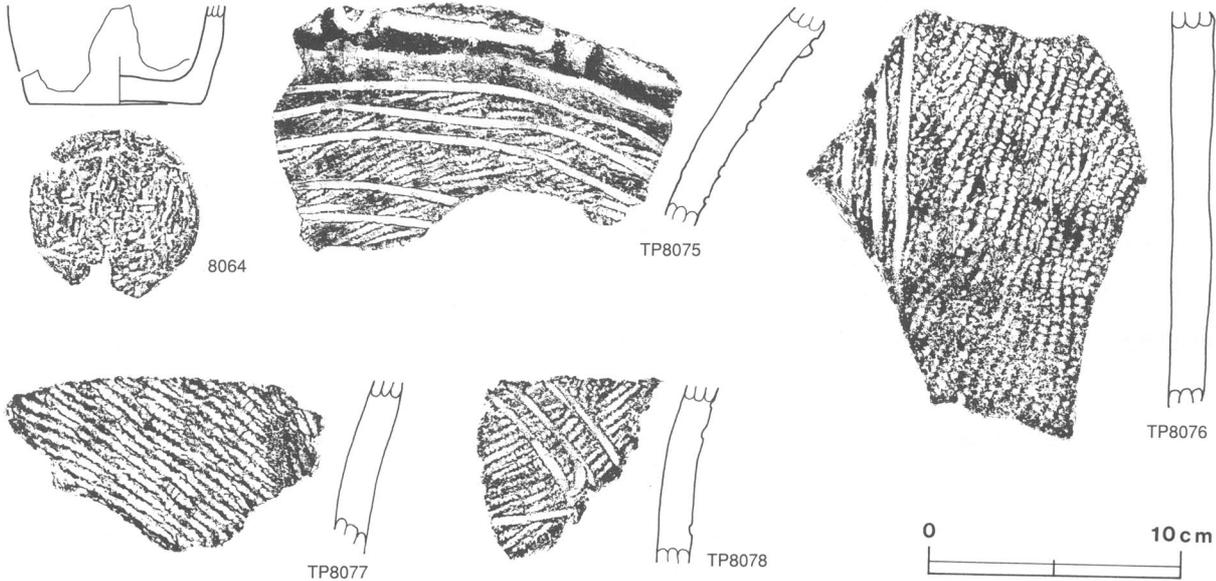
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量 | 3 黒褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |



第46図 第166号住居跡実測図

遺物出土状況 縄文土器片103点が出土している。土器のほとんどが細片で、確認面から床面にかけて散在する状況で出土している。8064の深鉢片はP7の覆土から、TP8075、TP8076、TP8077の深鉢片はほぼ床面から出土しており、時期決定の指標となる遺物である。またTP8078の深鉢片は覆土からの出土である。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期後葉（加曽利EⅠ式期）と考えられる。



第47図 第166号住居跡出土遺物実測図

第166号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8064	縄文土器	深鉢	—	(3.9)	7.1	胴部下端無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	P7覆土	底部網代痕
TP8075	縄文土器	深鉢	—	(8.3)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯による区画文。胴部は沈線が横位に巡る。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	
TP8076	縄文土器	深鉢	—	(15.6)	—	3条の沈線による懸垂文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙にぶい褐	床面	
TP8077	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	床面	
TP8078	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	沈線により文様を描出。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土	

第167号住居跡（第48～51図）

位置 調査2区の北部，D3b4区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第169号住居跡及び第1416号土坑を掘り込んでおり，第1413・1417号土坑に掘り込まれている。第1387・1418・1428号土坑，第482・678号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

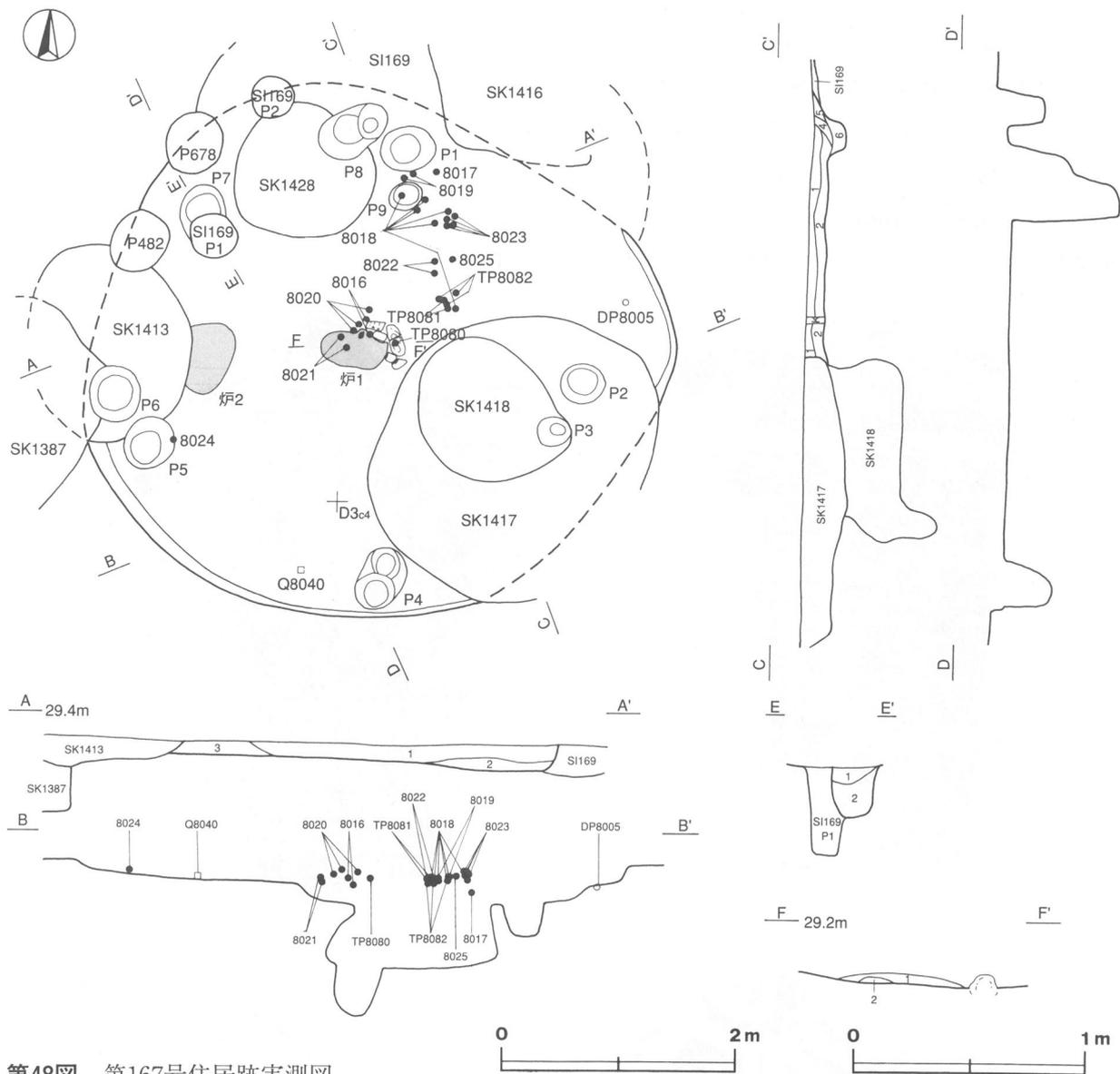
規模と形状 北西コーナー付近及び南部から西部の一部にかけて残存する壁，柱穴の配列及び炉の位置から，平面形は長軸4.75m，短軸4.54mの隅丸方形と推定される。主軸方向はN-61°-Wと推定される。残存する壁は外傾して立ち上がり，壁高は16～22である。

床 残存部はほぼ平坦であり，特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 9か所。床面からの深さは，P1・P2・P4・P9が38～44cm，P3及びP5～P8が55～84cmである。P1～P8は，その配置及び規模から柱穴と考えられる。

P7土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量



第48図 第167号住居跡実測図

炉 2か所。ほぼ中央部に位置する石囲炉（炉1）と西部に位置する地床炉（炉2）からなる。炉1は、長径72cm、短径42cmの楕円形の範囲で確認された。炉石は東側の一部を残すのみで多くは失われている。床面を炉床としており、掘り込みは認められない。炉2は、長径62cm、短径48cmの楕円形と推定され、床面を炉床とする地床炉である。炉床はともに火熱を受けて赤変硬化している。

炉1 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 2 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 6層に分層される。全体的にローム粒子を含み、やや締まりある。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。なお第6層はP9の覆土である。

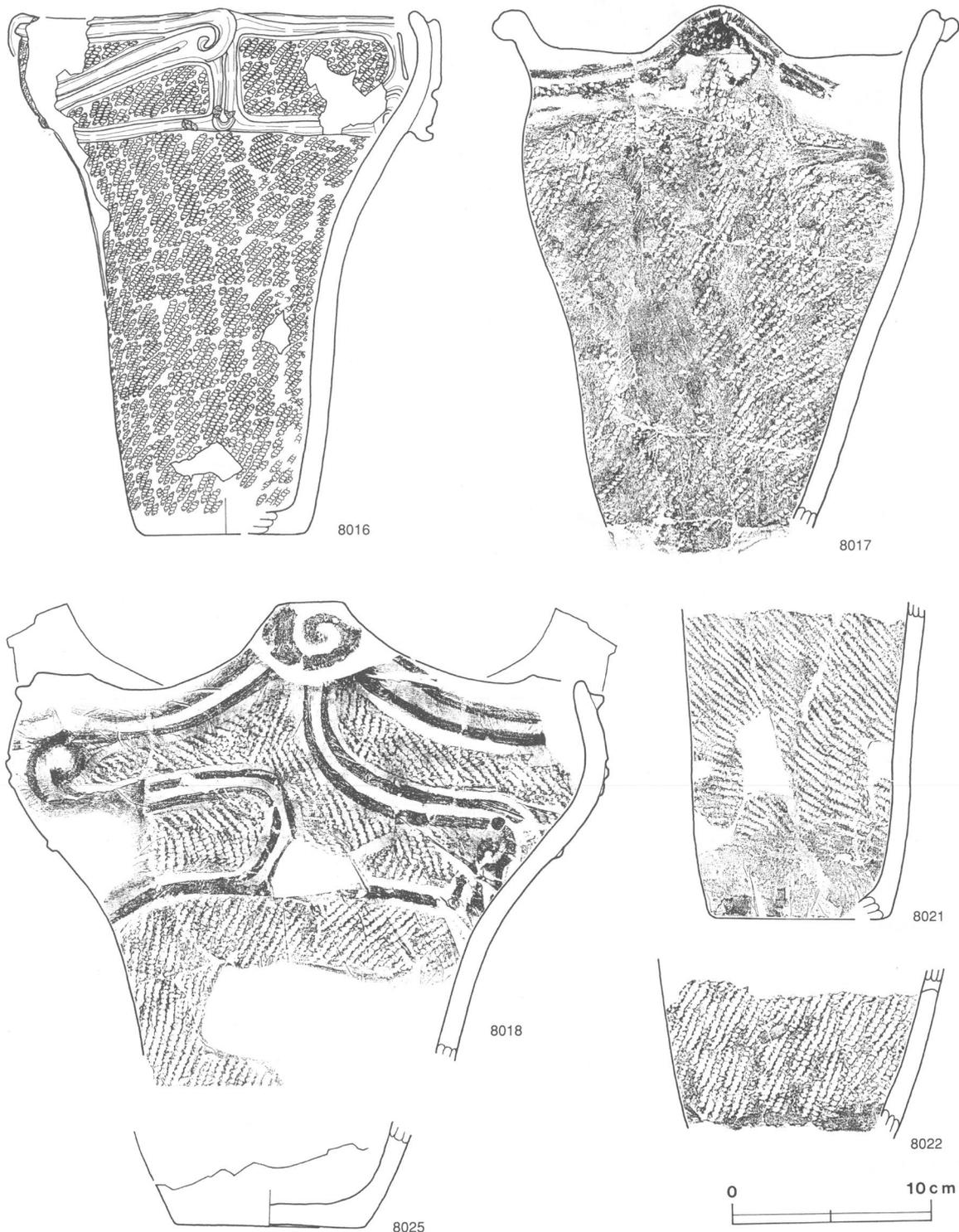
土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック中量 |

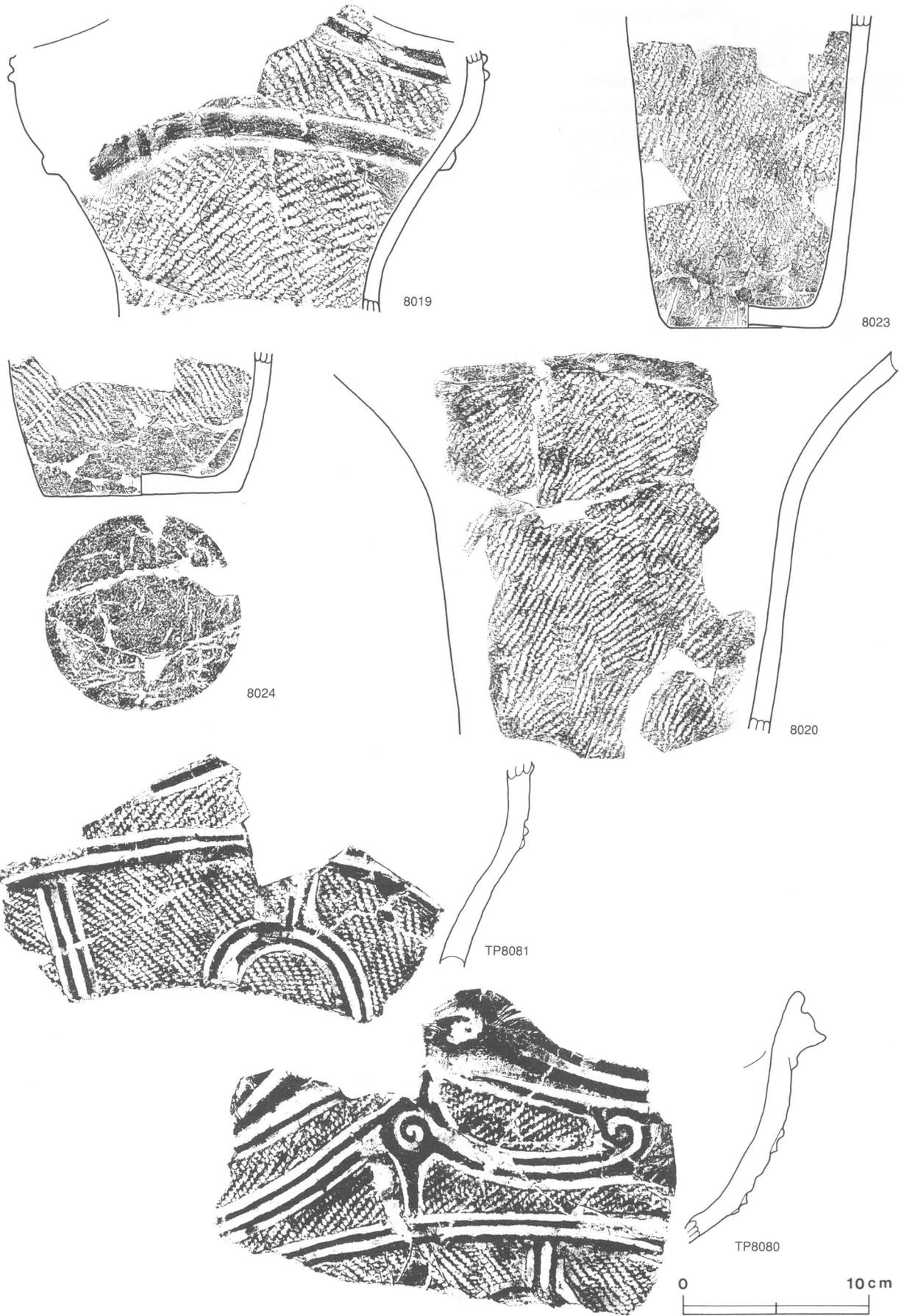
遺物出土状況 縄文土器片689点、磨石1点、敲石1点、凹石1点、不明石器1点、土製耳飾1点、土器片円盤2点が出土している。覆土から出土している土器はすべて細片で、確認面から床面にかけて散在し、廃棄されたような状況で出土している。また覆土下層と床面にかけてのレベルから出土し、抽出・図示した遺物は、

炉1の確認面直上及び北側から集中して出土した。8016はほぼ完形の深鉢で、炉1の上層から出土している。8021, TP8080, TP8081, TP8082の深鉢片も8016とほぼ同位置・同レベルからの出土である。8017の深鉢, 8018, 8022, 8023, 8024, 8025の深鉢片, 8019, 8020の鉢片は、いずれも床面からやや浮いた状況で出土している。またQ8040の敲石は南壁際の、DP8005の土製耳飾は北東コーナー付近のそれぞれ床面から出土している。さらにDP8003, DP8004の土器片円盤は、覆土から出土している。

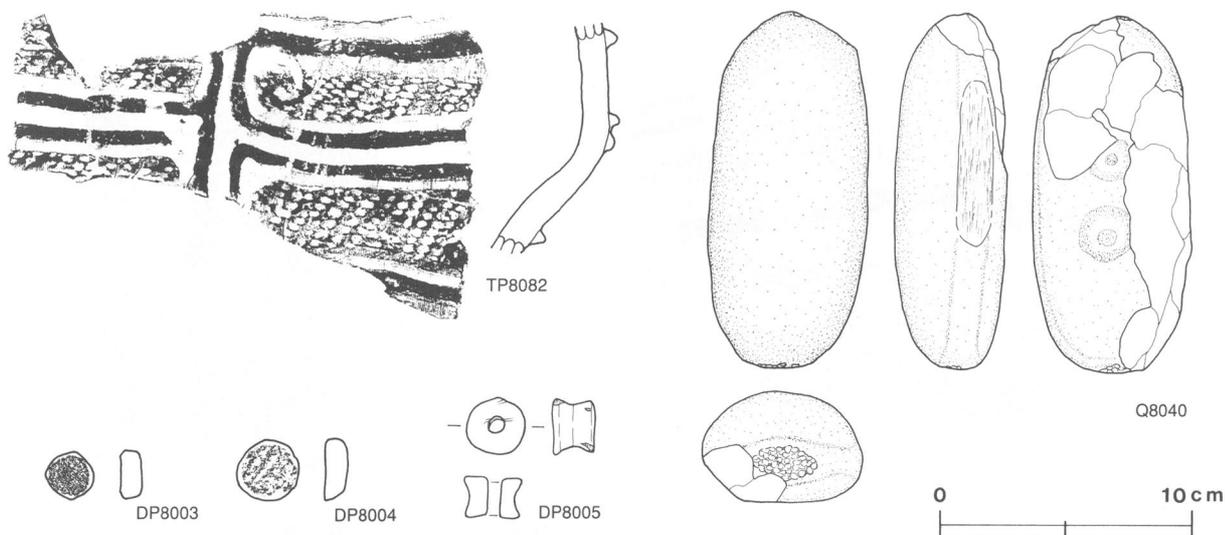
所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期後葉（加曾利E I式期）と考えられる。



第49図 第167号住居跡出土遺物実測図（1）



第50图 第167号住居跡出土遺物実測図（2）



第51図 第167号住居跡出土遺物実測図(3)

第167号住居跡出土遺物観察表(第49~51図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8016	縄文土器	深鉢	[19.6]	26.0	7.8	沈線を有する隆帯による渦巻文・区画文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐 にぶい橙	覆土下層	P L 41
8017	縄文土器	深鉢	20.8	(26.1)	—	口唇部に沈線を有する隆帯を巡らす。胴部はRLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	褐灰 にぶい橙	床面	P L 41
8018	縄文土器	深鉢	[27.2]	(22.9)	—	口唇部には沈線が巡り、波頂部に渦巻文を施す。口縁部は沈線が沿う隆帯文。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母・赤色粒子	普通	黒褐	床面	
8019	縄文土器	深鉢	—	(13.9)	—	口縁部は沈線が沿う隆帯による区画文。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	床面	
8020	縄文土器	深鉢	—	(20.5)	—	RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	褐灰 にぶい橙	床面	
8021	縄文土器	深鉢	—	(16.0)	[8.4]	LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	炉覆土	
8022	縄文土器	深鉢	—	(8.5)	—	RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐	床面	
8023	縄文土器	深鉢	—	(16.8)	8.8	RLの単節縄文を縦方向に施文。	石英・雲母	普通	にぶい赤褐	床面	
8024	縄文土器	深鉢	—	(7.6)	10.4	LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母・赤色粒子	普通	にぶい赤褐	床面	底部網代痕
8025	縄文土器	深鉢	—	(5.4)	9.6	胴部下端無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐	床面	
TP8080	縄文土器	深鉢	—	(13.5)	—	口唇部には沈線が巡り、波頂部に渦巻文を施す。口縁部は沈線が沿う隆帯文。LRの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土下層	
TP8081	縄文土器	深鉢	—	(11.5)	—	沈線が沿う隆帯により文様を描出。LRの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土下層	
TP8082	縄文土器	深鉢	—	(9.0)	—	沈線が沿う隆帯による区画文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土下層	

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP8003	土器片円盤	1.9	1.9	0.9	3.6	長石・石英・雲母, にぶい褐	周縁部は部分的に研磨。無文。	覆土	
DP8004	土器片円盤	2.4	2.4	0.9	5.8	長石・石英・雲母, にぶい褐	周縁部は部分的に研磨。RLの単節縄文。	覆土	
DP8005	耳飾	2.3	2.3	1.7	7.6	長石・石英・赤色粒子, 褐	滑車形。中央部に穿孔。無文。	床面	P L 58

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8040	敲石	14.0	6.3	4.4	(589.9)	砂岩	両端に敲打痕。磨石、凹石併用。裏面2孔。	床面	PL62

第168号住居跡 (第52図)

位置 調査2区の北部, D3a2区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第165・166号住居跡及び第1339・1378・1402・1425・1476・1668号土坑と重複しているが, 本跡との新旧関係は不明である。

規模と形状 覆土を確認できたのはごくわずかで, 壁も検出できなかったため正確な規模と形状はつかみ難いが, 炉の位置及び柱穴の配置から径4.00mの円形と推定される。

床 残存部はほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 4か所。床面からの深さは, P1が133cm, P2が61cm, P3が62cm, P4が95cmで, やや規則性を欠くが, その規模及び配置から主柱穴と考えられる。

炉 中央部やや北寄りに付設されている。長径73cm, 短径35cmの楕円形を呈し, 床面を14cmほど掘り込み炉床としている。炉壁付近で, 炉石と考えられる火熱を受けて赤化した礫が2点出土していることから, 石囲炉であったと推定される。炉床は, 火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子少量

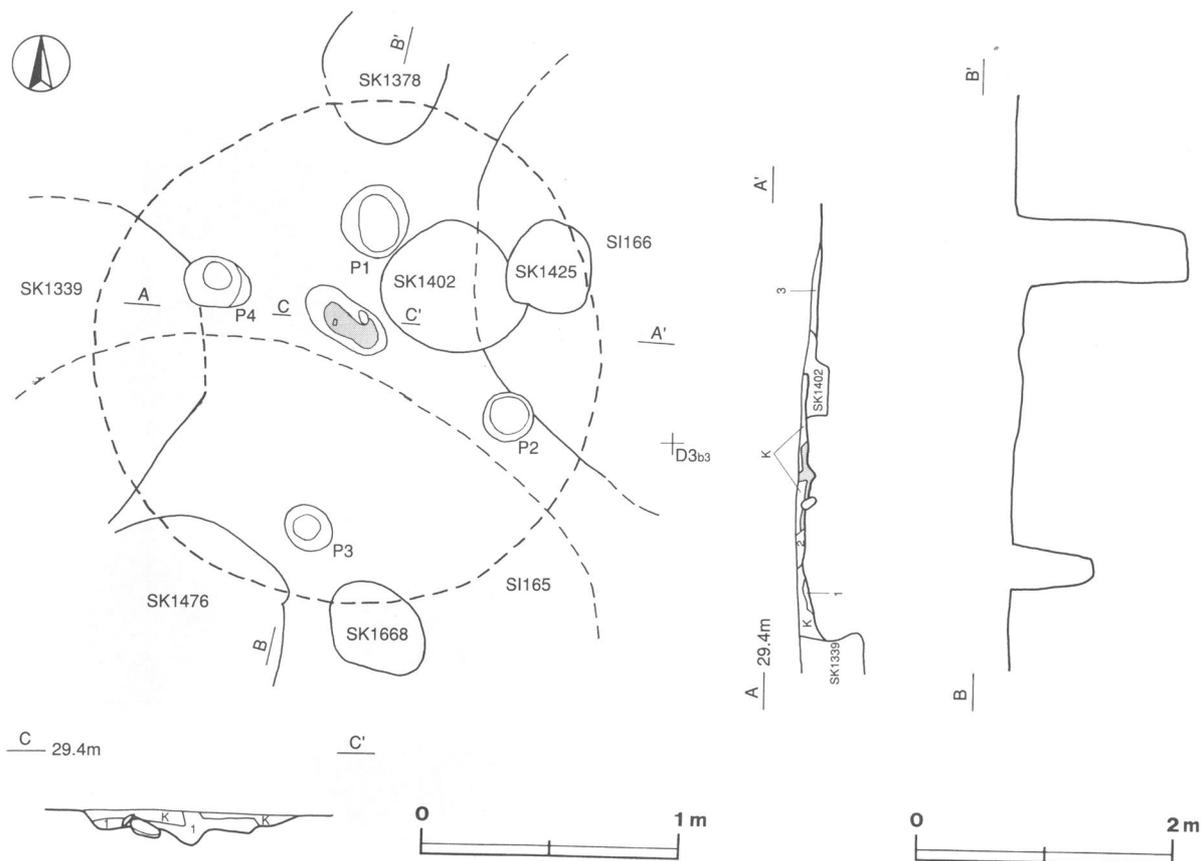
覆土 3層に分層される。全体的にローム粒子を多く含み, やや締まりがある。

土層解説

1 褐色 ローム粒子多量

2 暗褐色 ローム粒子中量

3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量



第52図 第168号住居跡実測図

遺物出土状況 本跡のものと判断できる遺物は出土していない。

所見 遺物が出土していないため、時期は確定し難いが、住居跡の形態等から中期中葉～後葉（阿玉台Ⅳ～加曾利EⅠ式期）と考えられる。

第169号住居跡（第53図）

位置 調査2区の北部，D3b4区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1416号土坑の覆土上面で床が確認されており，また第167号住居及び第1415・1426号土坑に掘り込まれている。第1427・1428号土坑，第482・678号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 覆土を確認できたのはごくわずかで，壁も検出できなかったため正確な規模と形状はつかみ難いが，柱穴の配置及び西部に一部残存する壁から，長軸4.00m，短軸3.70mの隅丸方形もしくは円形と推定される。

床 残存する床面はほぼ平坦で，よく踏み締まっている。

ピット 3か所。P1～P3は深さ43～97cmで，その規模と配置から柱穴と考えられる。

P1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量 2 黒褐色 ロームブロック微量

炉 確認されなかった。

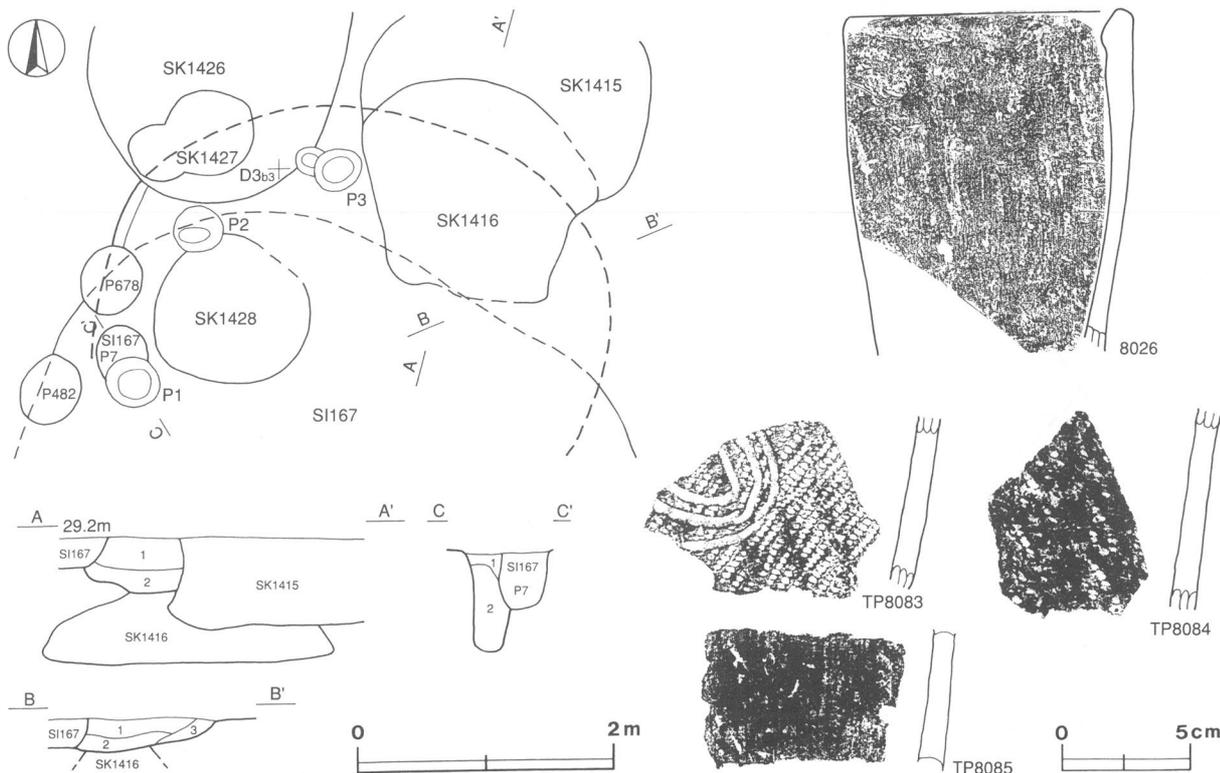
覆土 3層に分層される。全体的にロームブロックを含み，やや縮まりがある。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量 3 極暗褐色 ロームブロック中量
2 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片34点が出土している。土器のほとんどが細片で，確認面から床面にかけて散在する状況で出土しており，比較的大きな破片はP1に集中して出土している。8026，TP8083，TP8084，TP8085はいずれも深鉢片で，P1の覆土から出土しており，時期決定の指標となる遺物である。

所見 時期は，出土土器及び重複関係から中期中葉（阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期）と考えられる。



第53図 第169号住居跡・出土遺物実測図

第169号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8026	縄文土器	深鉢	[10.6]	(13.4)	—	無文。	長石・石英・雲母	普通	黒にぶい黄褐	P1覆土	
TP8083	縄文土器	深鉢	—	(6.9)	—	3条一組の沈線により文様を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	P1覆土	
TP8084	縄文土器	深鉢	—	(8.0)	—	L Rの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	P1覆土	
TP8085	縄文土器	深鉢	—	(4.4)	—	無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	P1覆土	

第170号住居跡（第54・55図）

位置 調査2区の北部，C3h4区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1284・1285・1327・1435・1436・1438・1441・1444・1445・1456・1502・1663号土坑の覆土上面に本跡の床が構築されており，また第1437号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東コーナー付近に残存する壁，柱穴の配列及び炉の位置から，平面形は長軸7.85m，短軸6.64mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-73°-Eと推定される。残存する壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がり，壁高8～10cmである。

床 ロームブロック混じりの土を踏み固めて貼り床としている。南西コーナー付近の一部に凹凸面が認められる他は，ほぼ平坦である。

ピット 4か所。床面からの深さは，P1が37cm，P2が62cm，P3が89cm，P4が104cmで，やや規格性を欠くものの規模及び配置から主柱穴と考えられる。

炉 中央部やや西寄りに位置すると推定される。長径116cm，短径100cmの楕円形で，床面を10～17cmほど掘りくぼめた石囲炉である。火熱を受けて赤化した炉石が北東炉壁際で確認されたが，その他の炉石は失われている。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量，ロームブロック微量
2 暗赤褐色 焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子少量

土器埋設ピット 北東部の第1445号土坑の覆土上面で検出された。径40cmの円形で，深さ25cm程と推定される掘り方に，鉢がほぼすっぽりとする状態で正位に埋設されている。鉢内の覆土はやや締まりのある黒褐色土で，焼土は認められなかった。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

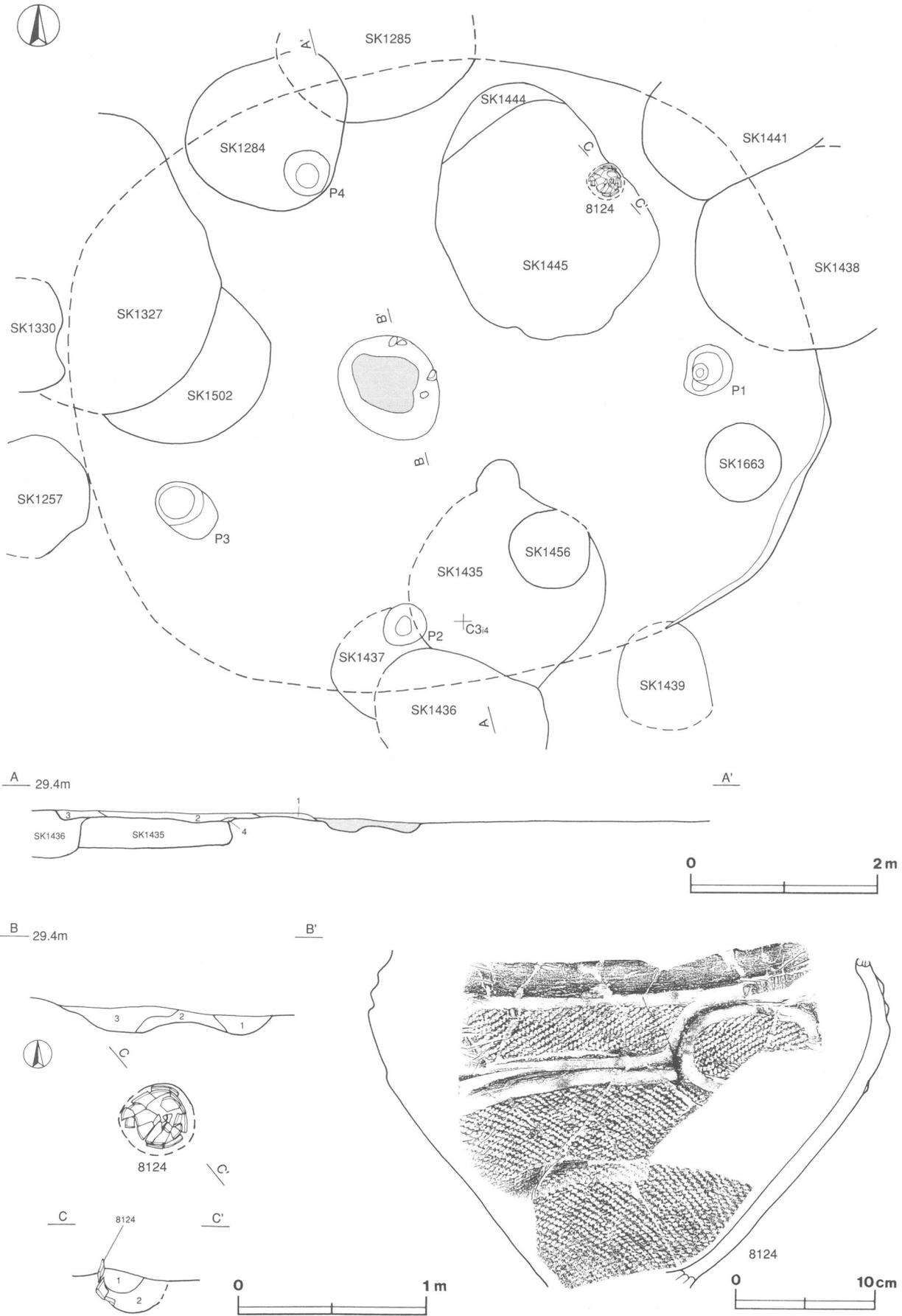
覆土 4層に分層される。覆土が薄く全容はつかみがたいが，レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。第4層は，固く締まった貼り床の層である。

土層解説

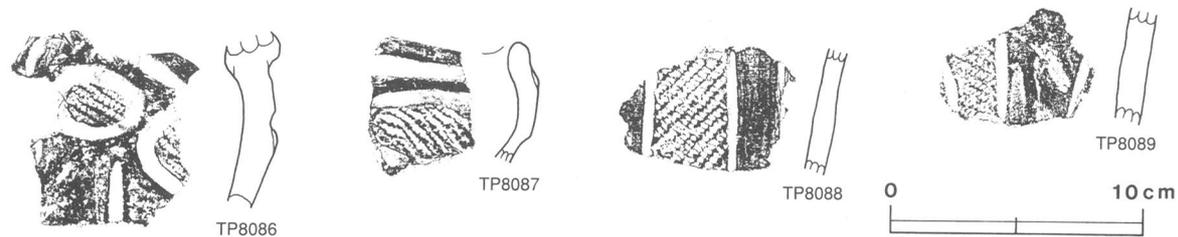
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 極暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 4 黒色 ロームブロック中量，炭化物少量

遺物出土状況 縄文土器片294点が出土している。8124の鉢以外は，ほとんどの土器が確認面から出土した細片で，出土位置に特異な傾向は認められない。8124の鉢片は，北東部の床面に埋設された土器である。TP8086，TP8087，TP8088，TP8089の深鉢片は，いずれも炉の覆土から出土している。

所見 時期は，出土遺物及び重複関係から中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第54図 第170号住居跡・出土遺物実測図



第55図 第170号住居跡出土遺物実測図

第170号住居跡出土遺物観察表（第54・55図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8124	縄文土器	鉢	—	(24.2)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯文。胴部はLRLの複節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母・赤色粒子	普通	にぶい黄橙	土器埋設ピット	外面煤付着, P L 40
TP8086	縄文土器	深鉢	—	(7.1)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯文。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	橙	炉覆土	
TP8087	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	沈線に沿う隆帯による区画文。区画内にはRLの単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐	炉覆土	
TP8088	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉覆土	
TP8089	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明赤褐	炉覆土	

第172号住居跡（第56図）

位置 調査2区の北部，C3e5区。土坑墓群と住居跡群に挟まれた区域に位置する。

重複関係 第1312・1314号土坑に掘り込まれている。第1313・1315・1316号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面において床面を検出し，壁を確認することができなかつたため明確ではないが，柱穴の配置と炉の位置から，平面形は長径6.90m，短径5.95mの楕円形と推定される。また主軸方向はN-39°-Wと推定される。

床 残存部はほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかつた。

ピット 11か所。床面からの深さは，P1・P3・P6が41~56cm，P2・P4・P5・P7~P11が17~30cmである。規模及び配列からP1~P8は柱穴と考えられる。P9~P11からも炉を中心に環状に巡る配列状況が看取でき，柱穴との想定が可能である。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径82cm，短径70cmの楕円形と推定され，床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床及び炉壁は，火熱を受けて赤変硬化している。

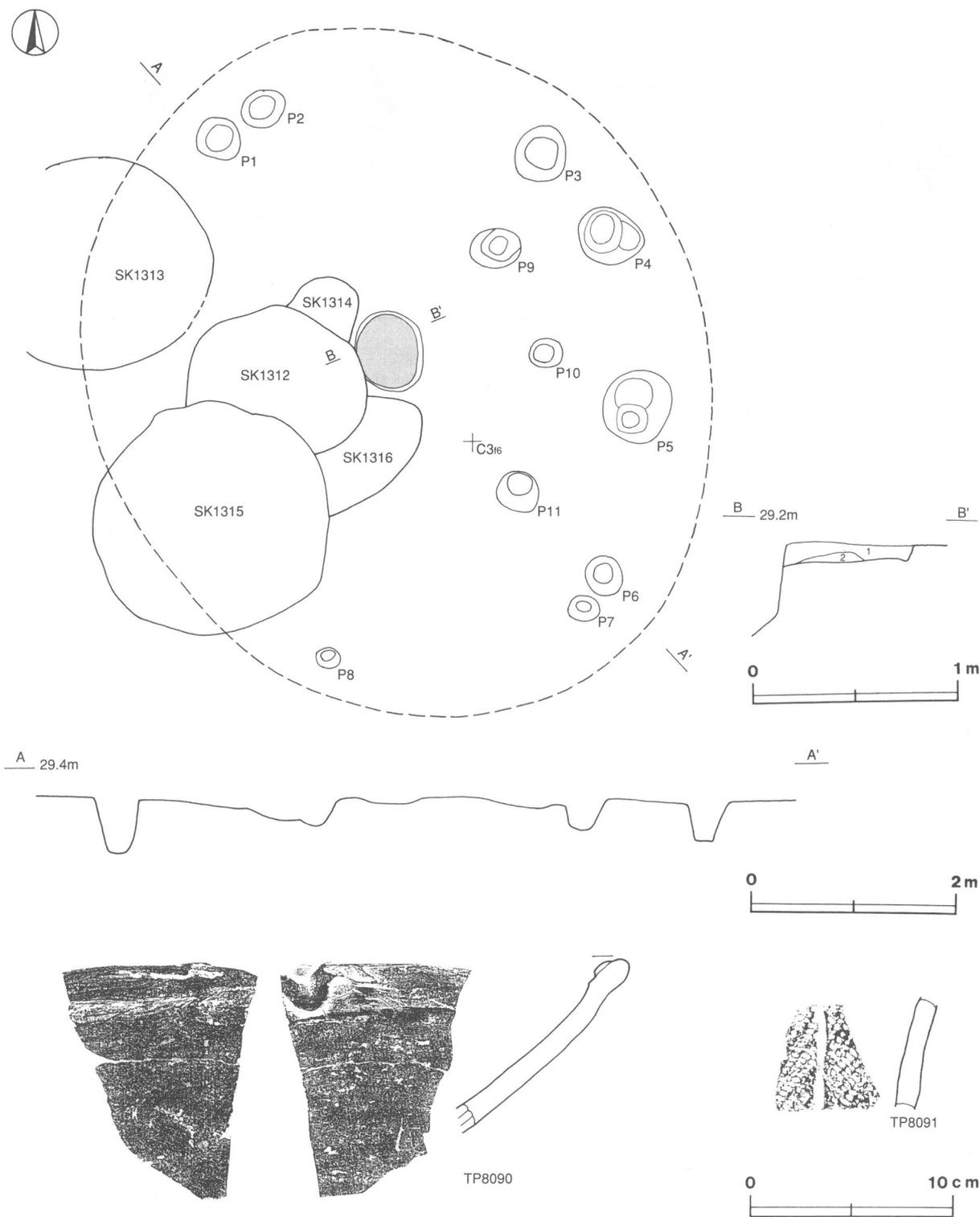
炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量

2 暗赤褐色 焼土ブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片10点が出土している。TP8090の浅鉢片はP8の覆土から出土しており，時期決定の指標となる遺物である。TP8091の深鉢片は炉の覆土から出土している。

所見 時期は，加曾利EI~II式期と想定される第1312号土坑に本跡の炉が掘り込まれていること，及び出土土器から中期後葉（加曾利EI式期）と考えられる。



第56図 第172号住居跡・出土遺物実測図

第172号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8090	縄文土器	浅鉢	—	(8.3)	—	口唇部直下内面に隆帯文。口縁部内面に稜を有する。器面は無文でよく研磨されている。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙黒褐	P 8 覆土	
TP8091	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	沈線による懸垂文。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	炉覆土	

第174号住居跡 (第57・58図)

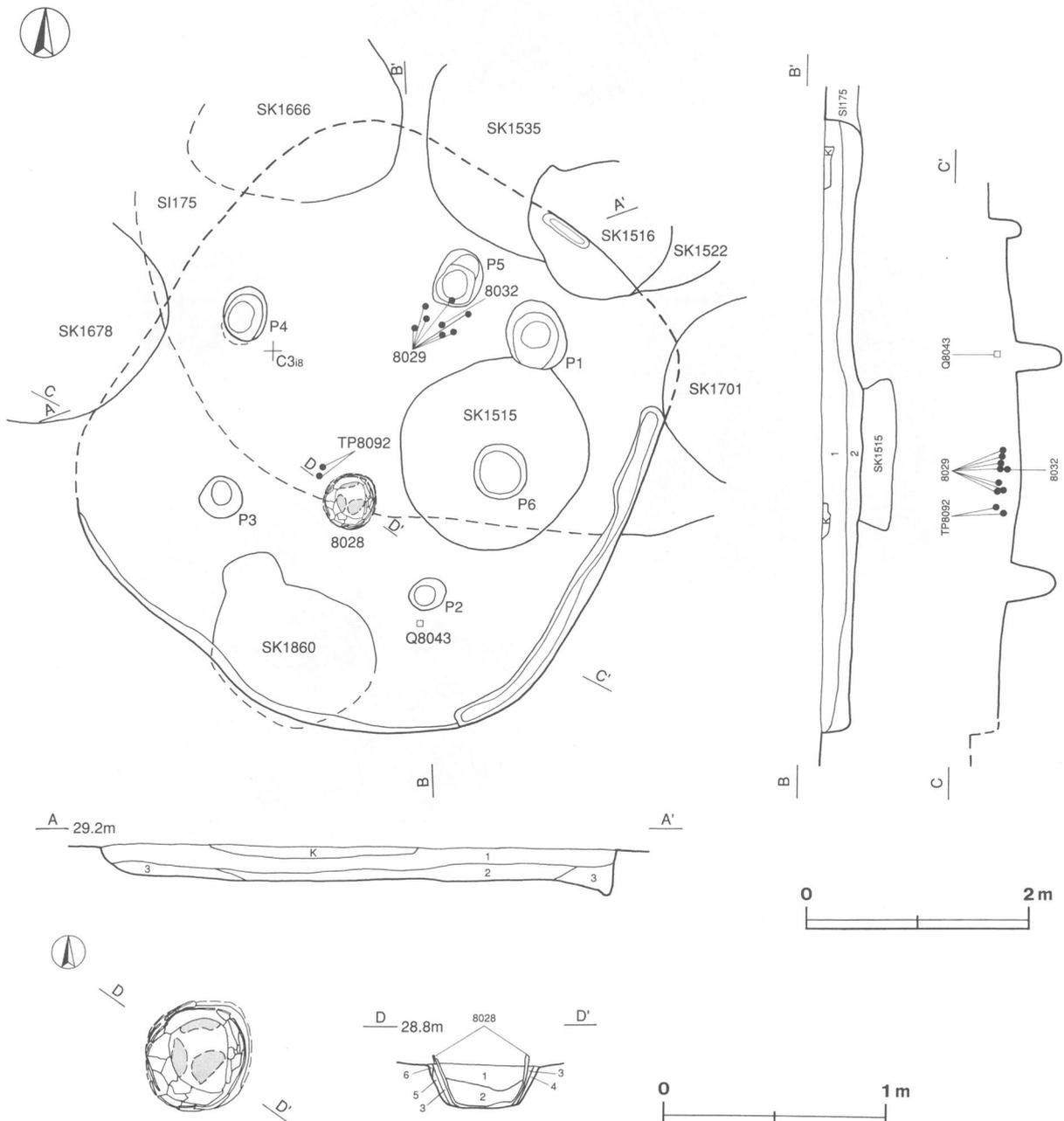
位置 調査2区の北部, C3i8区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第175号住居跡及び第1860号土坑を掘り込んでおり, 第1515・1516号土坑の覆土上面で床が確認された。また形状から, フラスコ状を呈する第1535・1666号土坑より新しいと考えられる。第1522・1678・1701号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

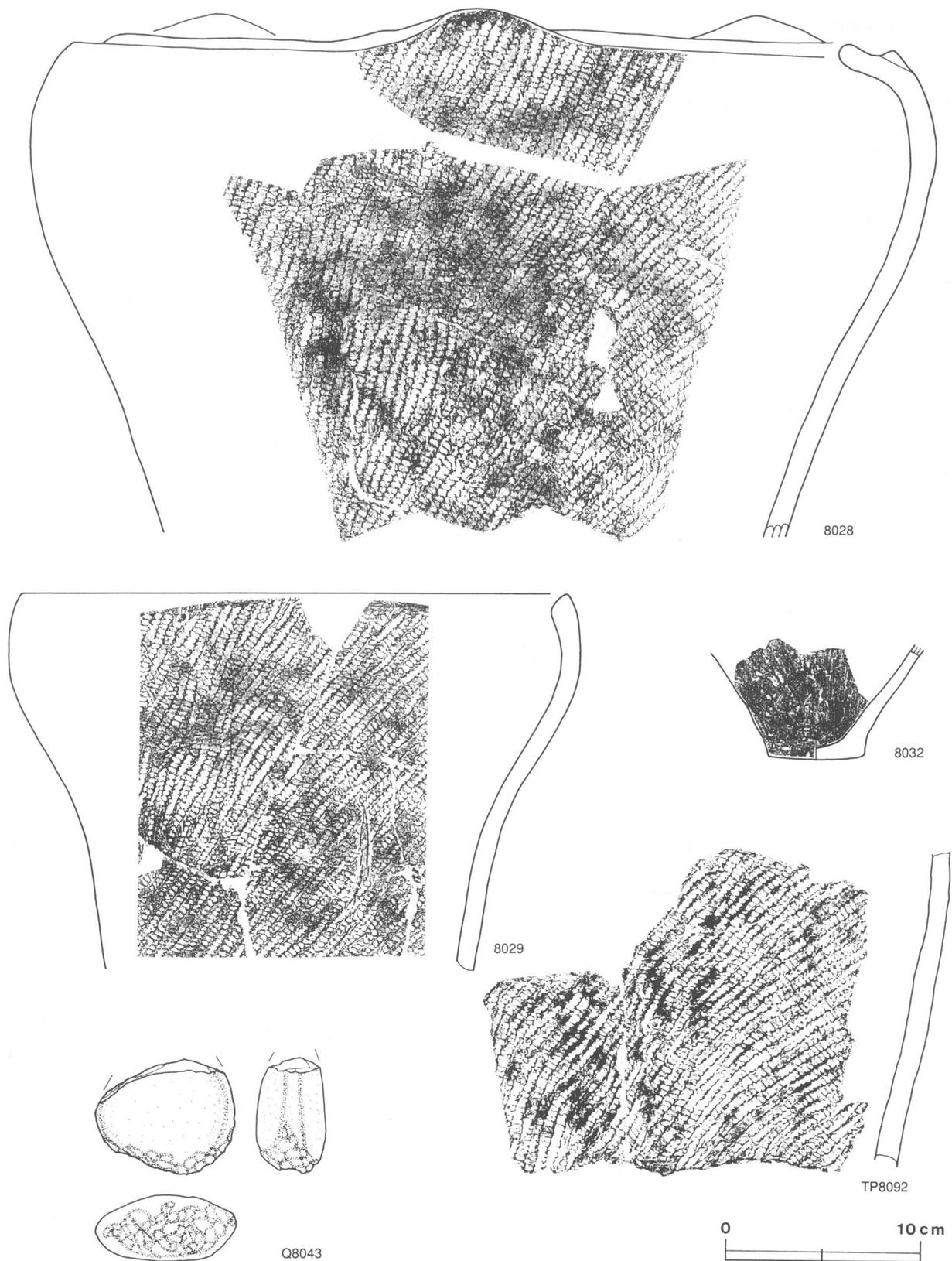
規模と形状 東部から南部にかけて残存する壁・壁溝及び柱穴の配置から, 平面形は長軸5.10m, 短軸4.60mの隅丸長方形と推定される。また主軸方向はN-37°-Eと推定される。残存する壁はほぼ直立もしくは外傾して立ち上がり, 壁高は26~28cmである。

床 ほぼ平坦である。U字形の断面形をもつ壁溝は, 東部壁際で確認され, 床面を13cmほど掘り込んでいる。

ピット 6か所。P1~P6は, 床面からの深さ41~123cmで, その規模においてやや規格性を欠くが, 配列状況から主柱穴と考えられる。



第57図 第174号住居跡実測図



第58図 第174号住居跡出土遺物実測図

炉 中央部南寄りに付設されている。径50cm、深さ20cmの椀状の掘り方に、胴部下半を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設炉である。埋設土器の覆土下層は焼土化しており、炉床に相当する。また第3～6層の掘り方の埋土は、炭化物・灰を含み、炉体の熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|---------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗赤褐色 | 炭化物多量, 焼土ブロック中量, 灰少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物・灰微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |

覆土 3層に分層される。黒褐色を基調とし、やや締まりがある。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片798点、敲石1点が出土している。縄文土器のほとんどが細片で、確認面から床面にかけて散在する状況で出土しており、出土位置に特異な傾向は認められない。8028の深鉢は炉の埋設土器である。8029・8032の深鉢片は覆土下層から出土している。またTP8092の深鉢片、Q8043の敲石とともに覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物及び重複関係から中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。

第174号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8028	縄文土器	深鉢	[37.0]	(26.7)	—	R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉埋設土器	外面煤附着, P L 40
8029	縄文土器	深鉢	[27.6]	(19.2)	—	R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄橙	覆土下層	外面煤附着
8032	縄文土器	深鉢	—	(5.6)	5.0	胴部下端無文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	覆土下層	
TP8092	縄文土器	深鉢	—	(16.1)	—	R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	良好	橙	覆土下層	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8043	敲石	(5.9)	7.1	3.4	(208.0)	砂岩	短軸側の一端に敲打痕あり。	覆土中層	

第175号住居跡（第59・60図）

位置 調査2区の北部、C3h8区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1521・1523・1666・1701号土坑の覆土上面に床が確認できた。また第174号住居及び第1516・1555・1556・1691号土坑に掘り込まれている。また出土土器から第1690号土坑より新しい。第1515・1522・1534・1535・1678・1871・1918・1922・1942号土坑及び第582・583号ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 断続的に確認された壁溝から、平面形は長軸7.10m、短軸6.53mの隅丸方形と推定される。主軸方向はN-90°-Eと推定される。残存する壁はほぼ直立し、壁高は15~18cmである。

床 残存部はほぼ平坦である。重複が著しく全容は不明であるが、壁溝がほぼ全周するものと推定される。

ピット 5か所。P1~P5は、床面からの深さ34~101cmで、やや規則性を欠くもののその規模及び配置から柱穴と考えられる。

炉 確認されなかったが、中央部に重複する土坑に掘り込まれていることも想定される。

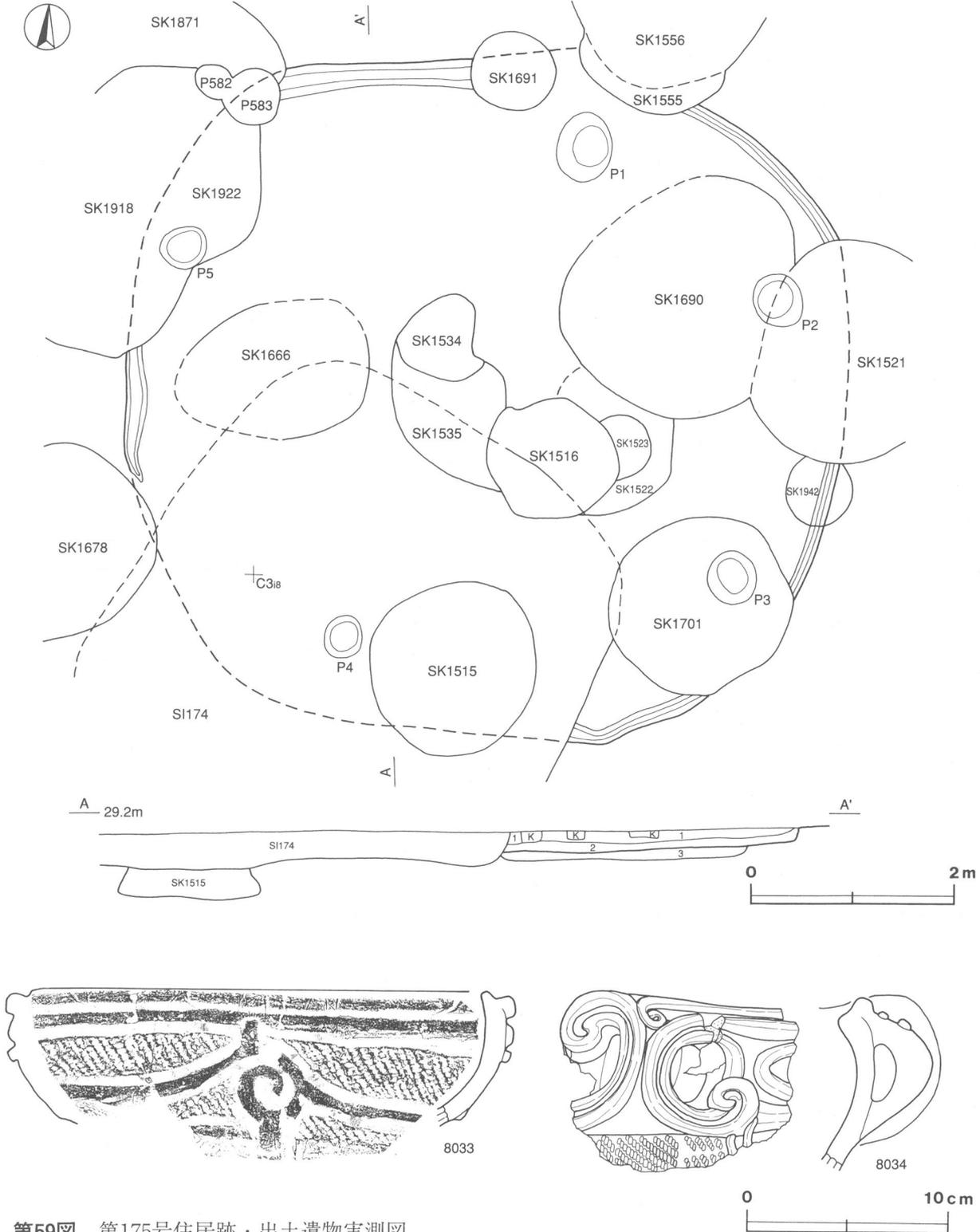
覆土 3層に分層される。暗褐色を基調とし、やや締まりがある。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。なお第3層は掘り方の覆土である。

土層解説

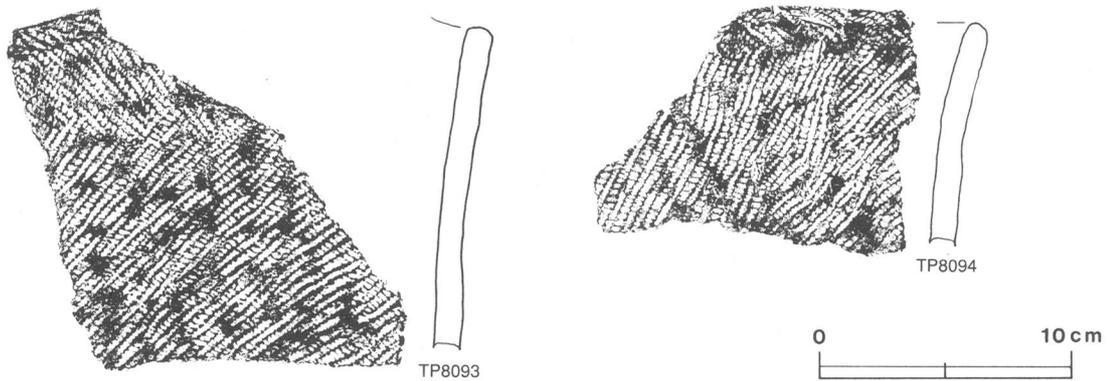
- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片76点, 敲石1点が出土している。遺物は確認面から床面にかけて散在する状況で出土しており, 出土位置に特異な傾向は認められない。8033, 8034, TP8093, TP8094の深鉢片は, いずれも覆土から出土している。

所見 時期は, 出土遺物及び重複関係から中期後葉(加曾利E I 式期)と考えられる。



第59図 第175号住居跡・出土遺物実測図



第60図 第175号住居跡出土遺物実測図

第175号住居跡出土遺物観察表（第59・60図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8033	縄文土器	深鉢	[22.2]	(6.7)	—	沈線に沿う隆帯による渦巻・区画文。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土	
8034	縄文土器	深鉢	—	(8.9)	—	2本一組の隆帯により文様を描出。RLの単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・赤色粒子	普通	にぶい橙	覆土	
TP8093	縄文土器	深鉢	—	(12.8)	—	RLの単節縄文を口唇部から口縁部にかけては横方向に、胴部は縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土	
TP8094	縄文土器	深鉢	—	(8.9)	—	RLの単節縄文を口唇部から口縁部にかけては横方向に、胴部は縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土	

第177号住居跡（第61図）

位置 調査2区の北部、C3i9区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1519号土坑及び第1524～1528号土坑の覆土上面で床が確認された。第1489・1490・1509号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 検出された北西・南西コーナー部の壁及び炉の配置から、平面形は長軸4.05m、短軸3.25mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-25°-Wと推定される。残存する壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がり、壁高は8～10cmである。

床 残存部はほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 確認されなかった。

炉 中央部やや南寄りに付設されている。長径120cm、短径80cmの楕円形で、床面を26cmほど掘りくぼめた地床炉である。掘り込みの中央部西寄りに火熱を受けて赤変硬化した炉床が確認された。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

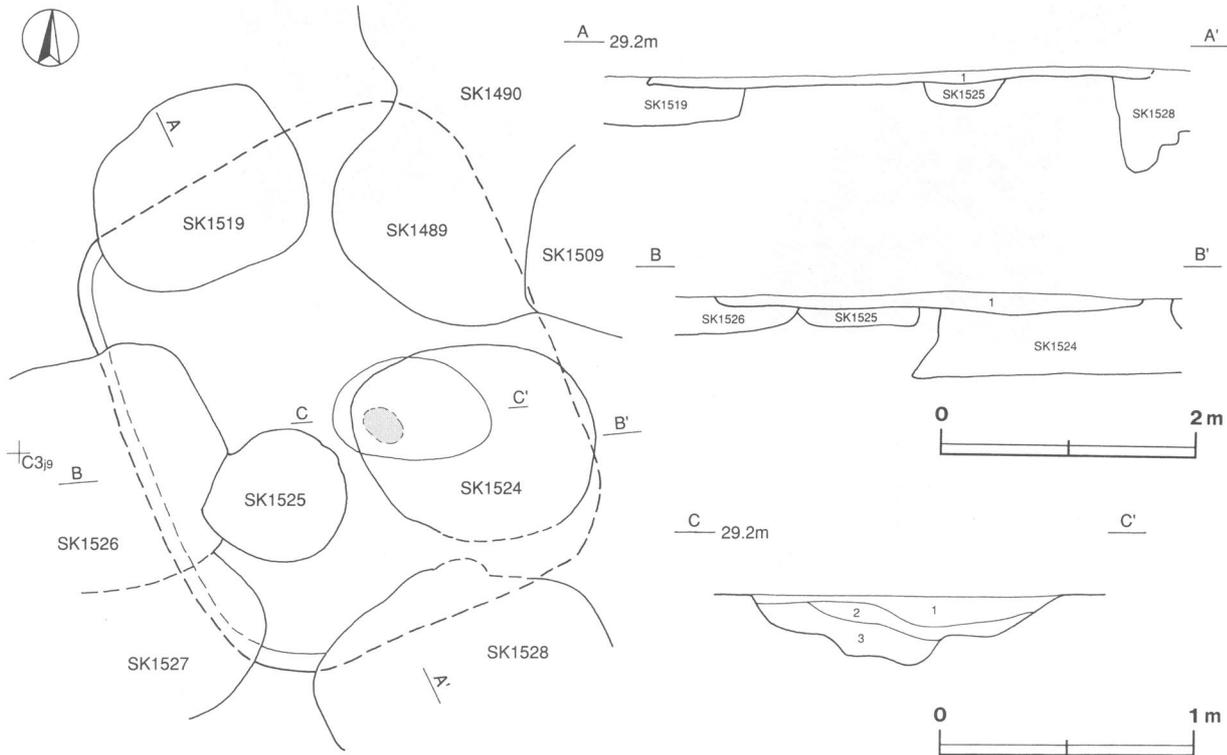
覆土 単一層である。黒褐色を基調とし、やや締まりがある。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片67点が出土している。いずれも細片であるため、抽出・図示できるものはなかった。遺物は確認面から床面にかけて散在する状況で出土している。

所見 時期は、出土土器がいずれも細片のため明確ではないが、重複関係及び住居の形態から縄文時代と考えられる。



第61図 第177号住居跡実測図

第180号住居跡 (第62図)

位置 調査2区の中央部, D2g8区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 第184号住居及び第1610号土坑に掘り込まれている。第210号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 北部の約4分の1が攪乱のため不明であるが、壁溝の残存状況及び柱穴の配置から、平面形は長軸4.45m, 短軸3.25mの隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-6°-Wと推定される。残存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は10~16cmである。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められず、全体的にやや軟弱である。床面から7~10cmの深さでU字形に掘り込んだ壁溝が、北部は攪乱のため不明なもの、南壁際の一部を除きほぼ全周するものと考えられる。

ピット 9か所。P1~P4は、深さ57~79cmで、コーナー部壁際にそれぞれ配されており、その規模と配置から支柱穴と考えられる。また、P6・P7・P8は、深さ28~49cmで、内側に傾斜している状況が看取でき、補助的な柱穴の可能性が示唆される。P5・P8の性格は不明である。

炉 確認されなかった。

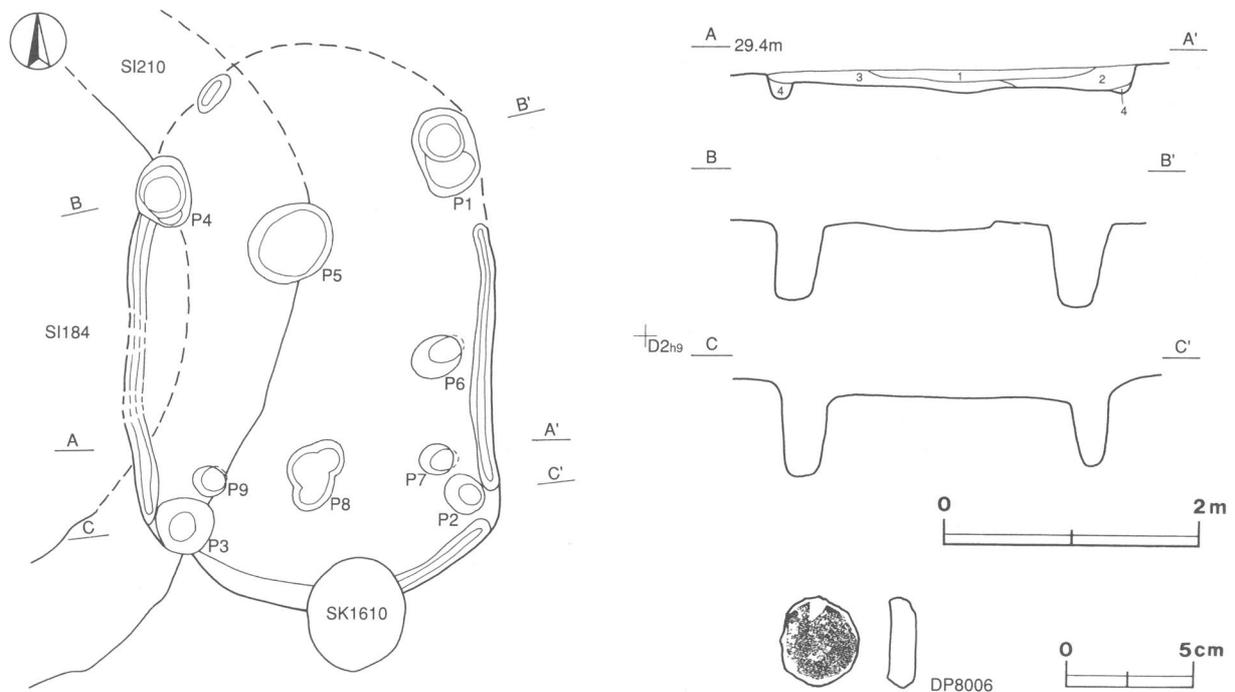
覆土 4層に分層される。黒褐色を基調とし、やや締まっている。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。なお第4層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-----------------|
| 1 黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 黒色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片134点, 打製石斧1点, 土器片円盤1点が出土している。遺物は確認面から床面にかけて散在する状況で出土している。DP8006の土器片円盤はP3の覆土から出土している。

所見 時期は、出土遺物及び重複関係から中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。



第62図 第180号住居跡・出土遺物実測図

第180号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP8006	土器片円盤	3.5	3.1	1.1	13.7	長石・石英, 黒褐	無文。周縁部は部分的に研磨。	P 3 覆土	P L 59

第181号住居跡 (第63・64図)

位置 調査2区中央部, D 2 g0区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 第1581号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南部の約半分が調査区域外に及ぶため全容は不明であるが, 東西軸6.44m, 確認できた南北軸2.20mで, 壁の残存状況及び炉・柱穴の配置から円形と推定される。壁はほぼ直立し, 残存する壁高は38cmほどである。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 10か所。P1～P4は, 床面からの深さ72～101cmで, その規模及び配置から柱穴と考えられる。P5～P10の性格は不明である。

炉 南半分が調査区域外に及ぶため全容は不明であるが, 東西軸112cm, 確認できた南北軸40cmが残存しており, 床面を12cmほど掘りくぼめた楕円形の地床炉と推定される。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 4層に分層される。黒褐色を基調とし, やや締まりがある。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

3 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量

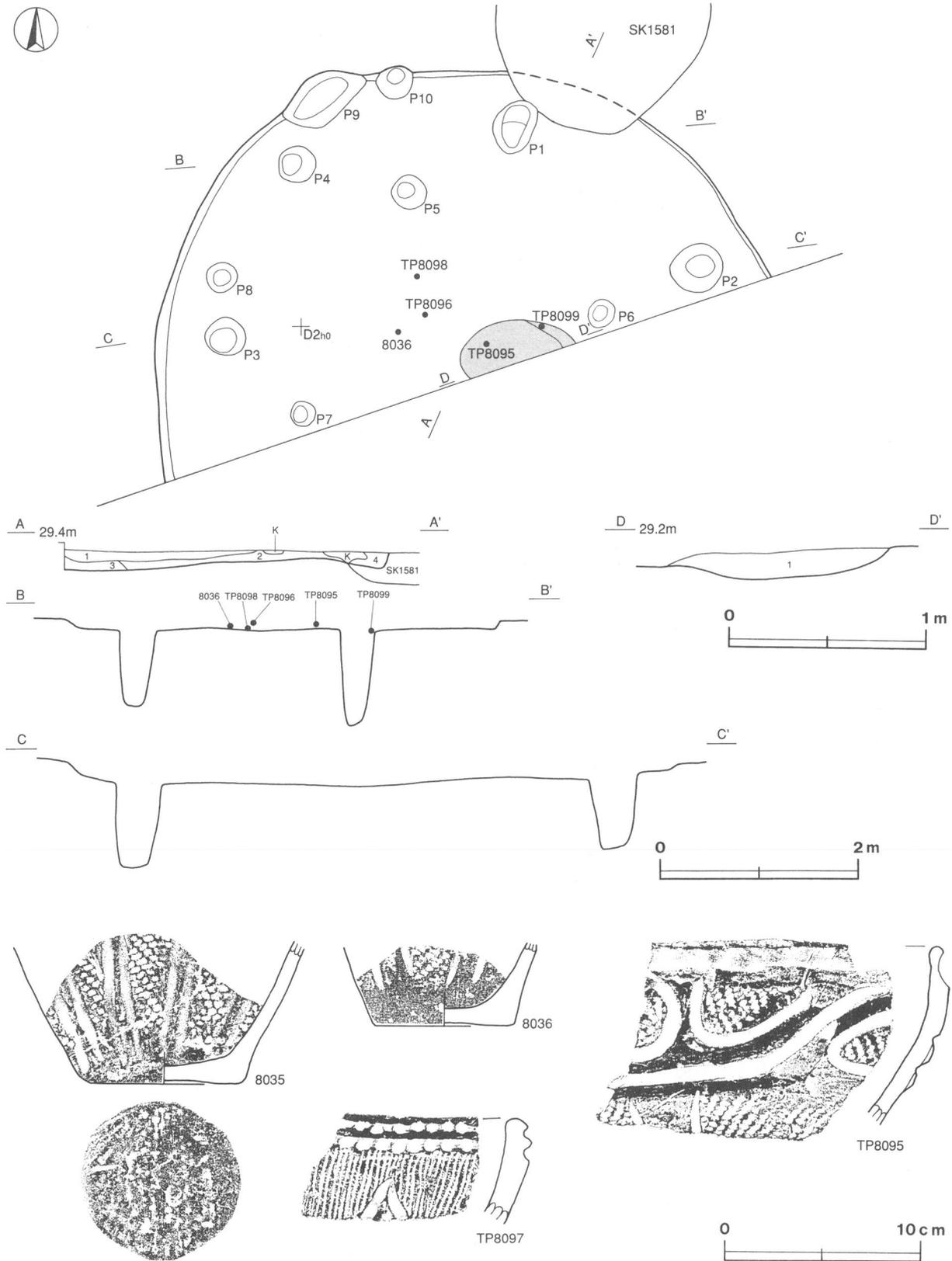
2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

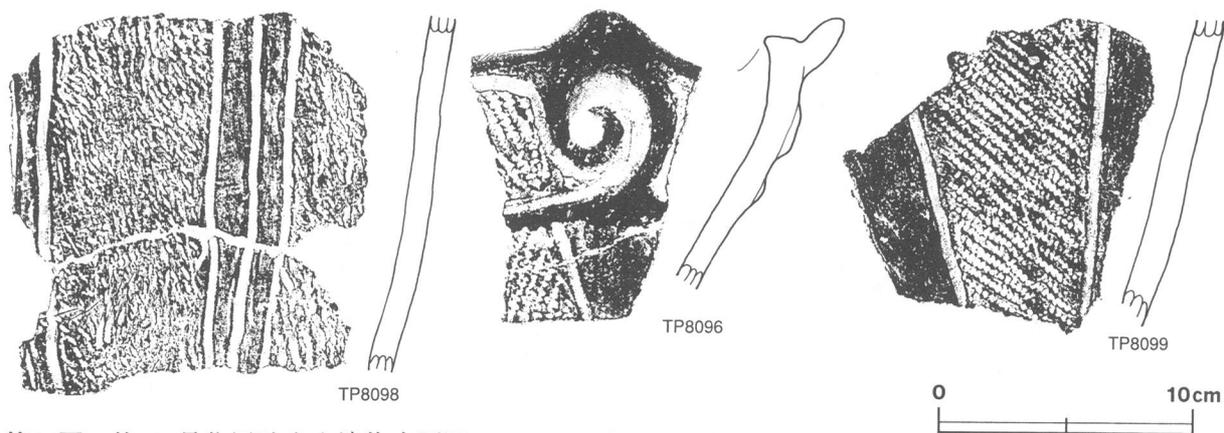
遺物出土状況 縄文土器片768点, 敲石1点が出土している。確認面から床面にかけて廃棄されたような状況で散在しており, 特に炉の周辺に多い傾向がある。8035, 8097の深鉢片は覆土から出土している。TP8095の

深鉢片は、炉の覆土から出土している。8096の深鉢片は、床面からやや浮いた状態で出土している。8036, TP8098, TP8099の深鉢片は床面から出土しており、時期決定の指標となる遺物である。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期後葉（加曾利 E II 式期）と考えられる。



第63図 第181号住居跡・出土遺物実測図（1）



第64図 第181号住居跡出土遺物実測図

第181号住居跡出土遺物観察表 (第63・64図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8035	縄文土器	深鉢	—	(7.3)	8.2	2条一組の沈線による懸垂文。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英	普通	にぶい黄橙	覆土上層	
8036	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	7.2	2条一組の沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	
TP8095	縄文土器	深鉢	—	(9.1)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯文。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	炉覆土	
TP8096	縄文土器	深鉢	—	(10.8)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯文。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土下層	
TP8097	縄文土器	深鉢	—	(5.4)	—	口唇部直下に棒状工具による刺突文が巡る。胴部は半截竹管による平行沈線文が垂下。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土	
TP8098	縄文土器	深鉢	—	(14.0)	—	3本1組の沈線による懸垂文間を磨り消す。燃糸文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	
TP8099	縄文土器	深鉢	—	(12.2)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	

第182号住居跡 (第65図)

位置 調査2区の北部，C4i2区。住居跡群域に位置する。

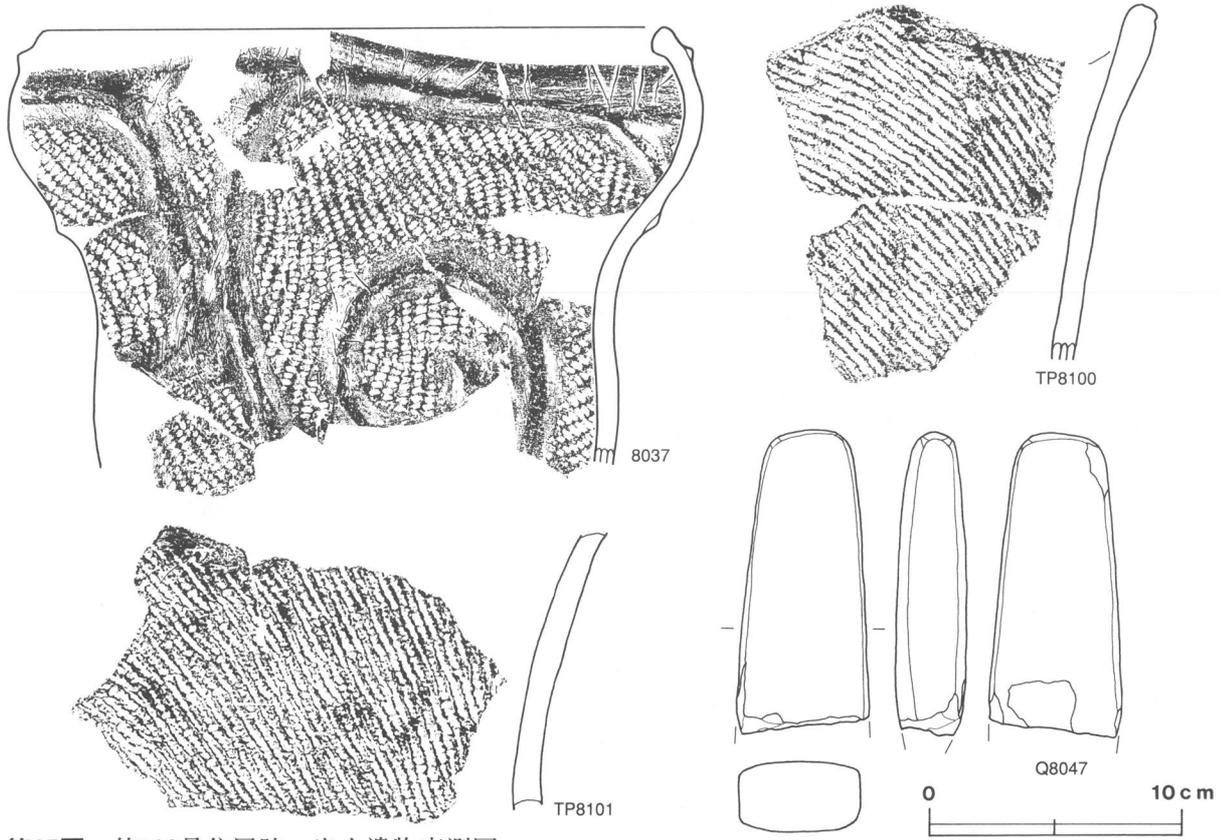
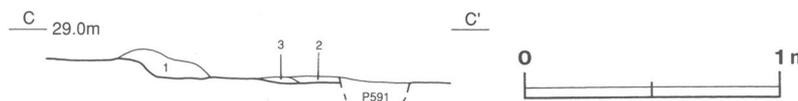
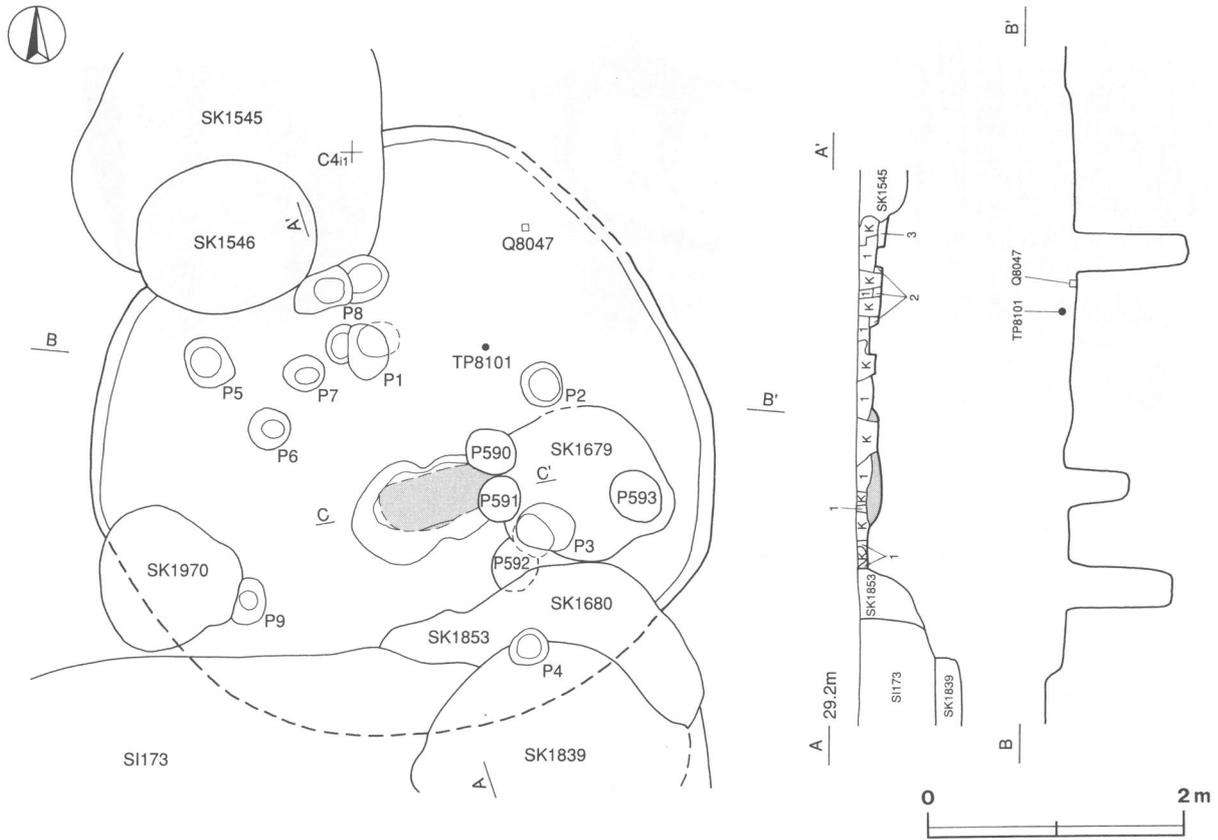
重複関係 奈良・平安時代の第173号住居及び第590・591号ピットに掘り込まれている。第1545・1546・1679・1680・1839・1853号土坑の覆土上面に構築されている。第1970号土坑と重複しており，土層では確認できなかったが，出土土器からは本跡が新しいと考えられる。また第592・593号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 南部の壁が確認できなかったが，径4.65mほどの円形と推定される。壁は外傾して立ち上がり，壁高は12～14cmである。

床 ほぼ平坦である。顕著な硬化面は認められなかった。

ピット 9か所。床面からの深さは，P1～P3・P5が85～143cm，P4・P6～P9が48～69cmである。規模及び配列に規則性が認められず，柱穴との判断はしがたい。

炉 中央部やや南東寄りに付設されている。東部端を重複のため欠くが，長径114cm，短径78cmの不整楕円形を呈する地床炉と推定される。床面をわずかに掘りくぼめて炉床としており，炉床は火熱を受けて赤変硬化している。



第65图 第182号住居跡・出土遺物実測図

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量
 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量
 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量

覆土 3層に分層される。全体的にローム粒子を含み、やや締まりがある。なお第2層はP1の覆土、第3層は貼床の層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量
 3 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片347点、磨製石斧1点が出土している。土器のほとんどが細片で、確認面から床面にかけて廃棄されたような状況で散在している。出土位置に特異な傾向は認められない。8037の深鉢片及びQ8047の磨製石斧は、ほぼ床面から出土している。またTP8100、TP8101の深鉢片は床面からやや浮いた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器および重複関係から中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。

第182号住居跡出土遺物観察表（第65図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8037	縄文土器	深鉢	[24.0]	(17.3)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。口縁部から胴部は微隆帯により文様を描出。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	床面	
TP8100	縄文土器	深鉢	—	(14.1)	—	LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP8101	縄文土器	深鉢	—	(10.9)	—	LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土下層	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8047	磨製石斧	(12.0)	(5.2)	2.8	(325.8)	緑色凝灰岩	定角式。器体研磨入念。刃部欠損	床面	PL60

第184号住居跡（第66・67図）

位置 調査2区の中央部、D2g7区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 第180・210号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西部の約半分が調査区域外に及ぶため全容は不明であるが、南北軸4.20m、確認できた東西軸1.50mで、壁の残存状況及び炉・柱穴の配置から円形が想定される。壁はほぼ直立し、残存する壁高は38cmほどである。

床 壁際から中央部に向かってごく緩やかに下がっている。一部で確認された壁溝は、U字形の断面形で床面から8cmほど掘り込まれている。

ピット 6か所。P1～P5は、床面からの深さが22～84cmで、その規模及び配置から柱穴と考えられる。P6の性格は不明である。

炉 2か所。中央部に1基（炉1）、中央部南寄りに1基（炉2）検出されているが、西側約半分が調査区域外に及ぶため全容はつかみがたい。炉1は、南北軸56cm、確認できた東西軸16cm、炉2は南北軸76cm、確認できた東西軸28cmで、ともにほぼ床面を炉床とする地床炉で、炉床は火熱を受けて赤変硬化している。炉1と炉2の新旧関係は不明である。

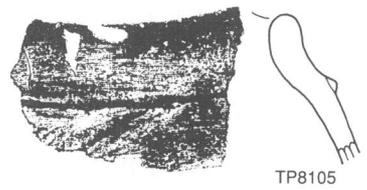
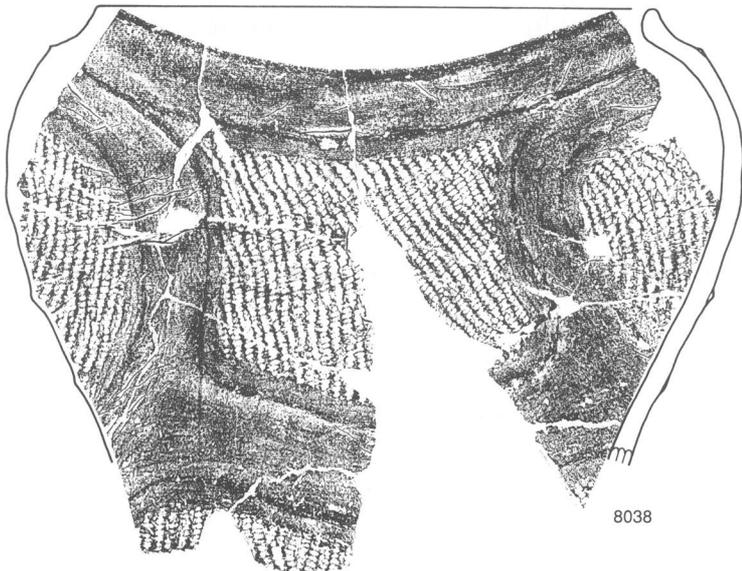
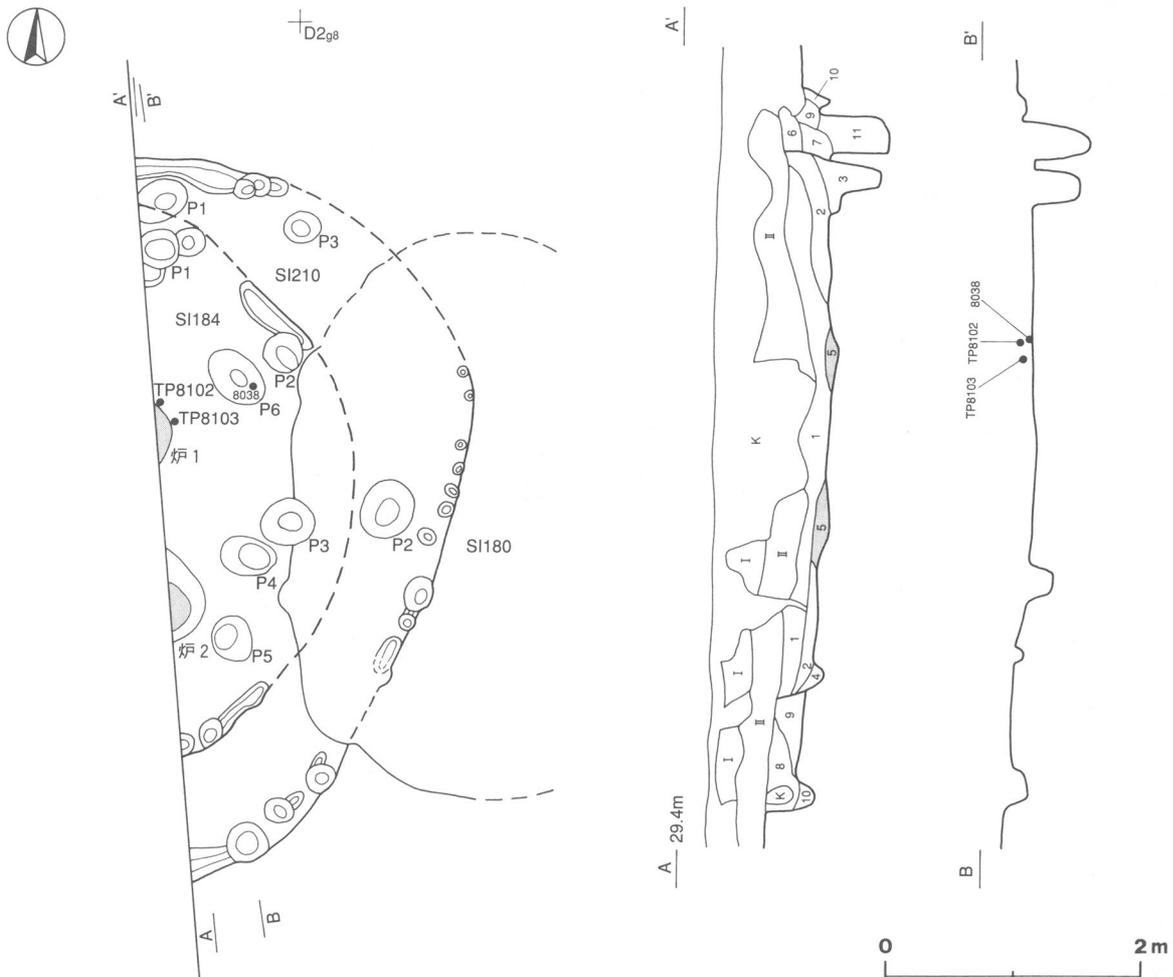
炉土層解説

- 5 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化物微量

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。なお、第3層はP1の、第4層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|-----------|
| 1 黒色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子多量 |



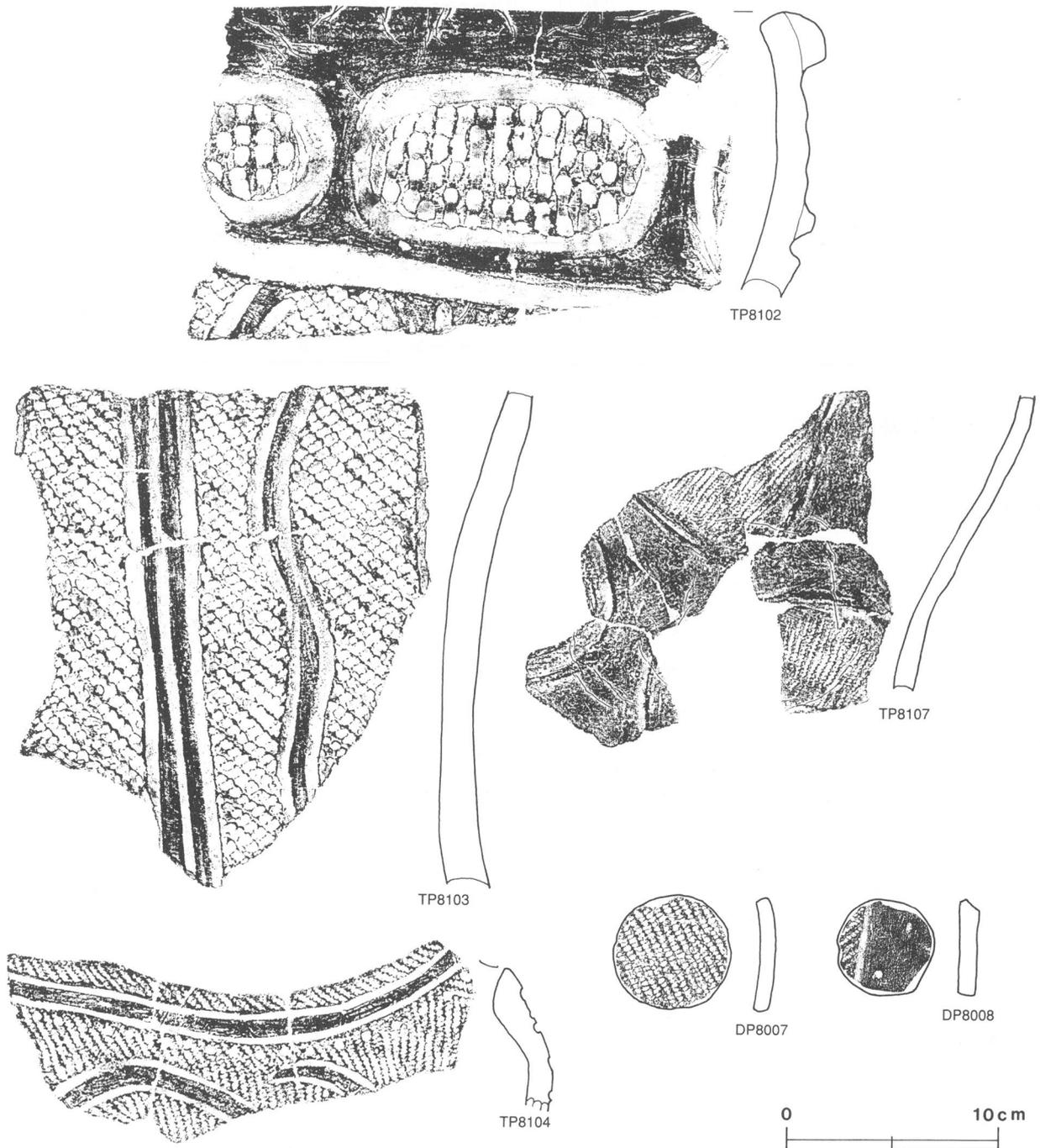
0 2m

0 10cm

第66図 第184・210号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片102点，土器片円盤2点が出土している。土器のほとんどが細片で，確認面から床面にかけて廃棄されたような状況で散在しており，出土位置に特異な傾向は認められない。8038の深鉢片は，ほぼ床面から出土しており，時期決定の指標となる遺物である。TP8102とTP8103の深鉢片は同一個体で，ともに炉確認面の上層に混入したものと考えられる。TP8104，TP8105，TP8107の深鉢片，TP8106の有孔鏝付土器片，DP8007，DP8008の土器片円盤は覆土から出土している。

所見 時期は，出土遺物及び重複関係から中期後葉（加曽利EIV式期）と考えられる。



第67図 第184号住居跡出土遺物実測図

第184号住居跡出土遺物観察表（第66・67図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8038	縄文土器	深鉢	[22.0]	(18.1)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。胴部は2本一組の微隆帯による区画文内にRLの単節縄文を充填。	長石・石英・角閃石・雲母	普通	にぶい橙	床 面	
TP8102	縄文土器	深鉢	—	(13.6)	—	口縁部は沈線に沿う隆帯文。区画内は棒状工具による結節沈線文。LRの単節縄文。	長石・石英・雲母	良好	にぶい褐	覆土上層	
TP8103	縄文土器	深鉢	—	(23.5)	—	3条一組の沈線による懸垂文と波状沈線による懸垂文間を磨り消す。LRの単節縄文。	長石・石英・雲母	良好	にぶい褐	覆土上層	
TP8104	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	口唇部直下に巡らした2条の沈線の下位に竹管による刺突文が巡る。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆 土	
TP8105	縄文土器	深鉢	—	(5.6)	—	微隆帯により文様を描出。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆 土	
TP8106	縄文土器	有孔鐏付	—	(4.8)	—	2条一組の沈線文間にRLの単節縄文を充填。器面はよく研磨されている。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆 土	外面赤彩
TP8107	縄文土器	深鉢	—	(14.2)	—	2本一組の微隆帯による区画文内にRLの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	良好	褐灰	覆 土	

番号	器種	計 測 値				胎土・色調	特 徴	出土位置	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP8007	土器片円盤	5.4	5.5	0.9	29.4	長石・石英・雲母, 灰褐	周縁部研磨。LRの単節縄文。	覆 土	P L 59
DP8008	土器片円盤	4.5	4.6	0.9	24.1	長石・石英・雲母, 橙	周縁部研磨。RLの単節縄文。	覆 土	P L 59

第193号住居跡（第68図）

位置 調査2区の南部，F3h5区。

重複関係 第1744・1745号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 平面形は長軸5.08m，短軸5.00の隅丸方形である。主軸方向はN-3°-Wである。壁は外傾して立ち上がり，壁高は17~23cmをである。

床 中央部がややくぼんでいる他は，ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 8か所。P1~P6は，規模と配置から柱穴と考えられる。P7・P8の性格は不明である。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径96cm，短径67cmの楕円形で，床面から10cmほど掘りくぼめられている。トレンチャーによる攪乱が縦横に入っており，遺存状況は悪い。西炉壁際に被熱した礫が検出され，石囲炉であったと考えられる。炉床は掘り込みの東寄りにあり，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化物微量 | 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量，ロームブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化物少量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量 |

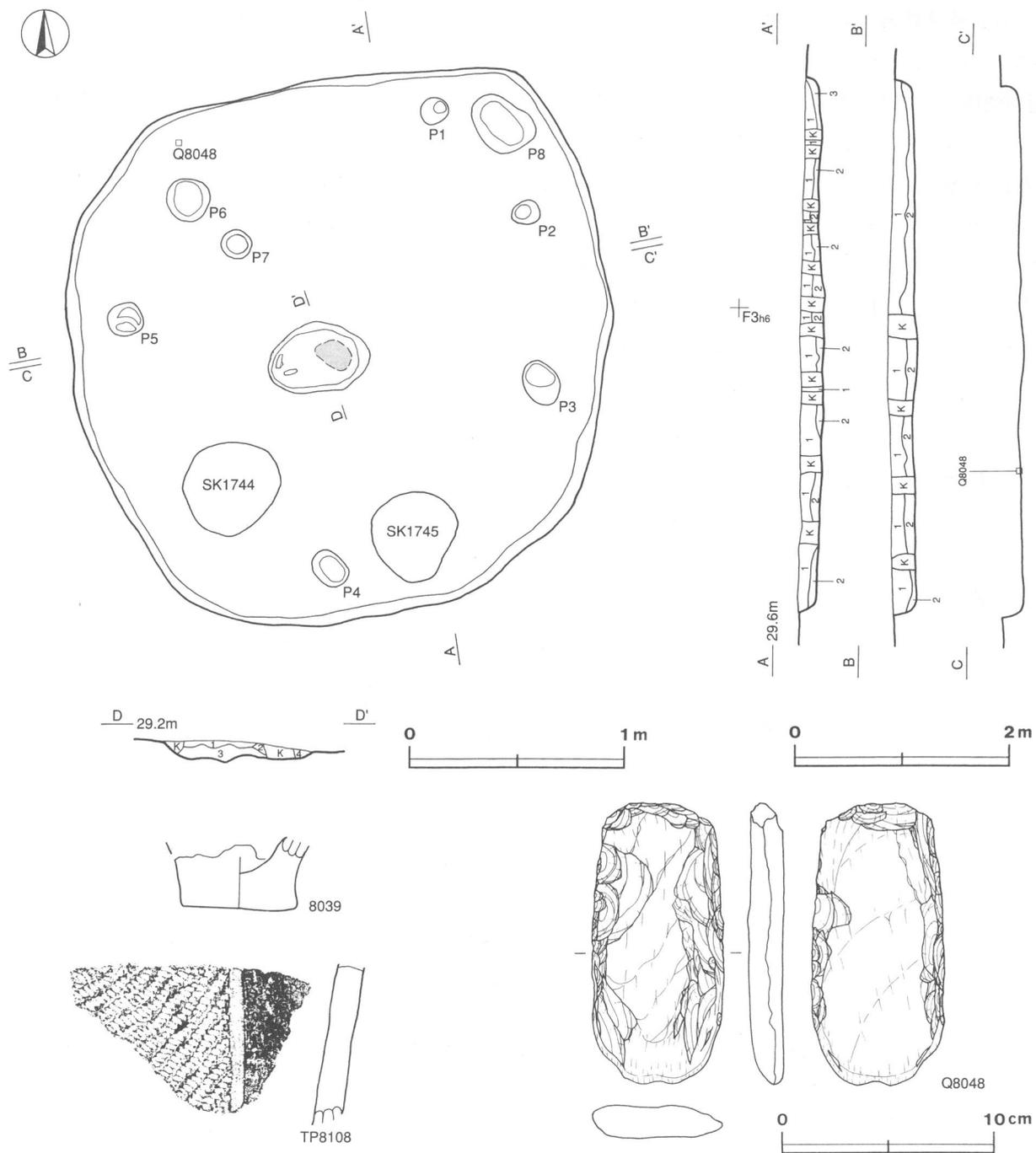
覆土 3層に分層される。ロームブロックを含み，やや締まりがある。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量 | |

遺物出土状況 縄文土器片122点，打製石斧1点が出土している。土器のほとんどが細片で，確認面から床面にかけて廃棄されたような状況で散在しており，出土位置に特異な傾向は認められない。8039，TP8108の深鉢片は，覆土から出土している。Q8048の磨製石斧は，北壁際の床面から出土している。

所見 時期は，出土土器から中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第68図 第193号住居跡・出土遺物実測図

第193号住居跡出土遺物観察表 (第68図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8039	縄文土器	深鉢	—	(3.1)	5.4	胴部下端無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土	
TP8108	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8048	磨製石斧	13.3	6.1	1.8	207.7	粘板岩	刃部及び基部を局部研磨。	床面	

第194号住居跡 (第69・70図)

位置 調査2区の南部, F3 a6区。

重複関係 第239号住居跡を掘り込んでおり, また第1729号土坑の覆土上面で床が確認されている。第1792号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は長軸4.46m, 短軸3.96mの隅丸長方形である。主軸方向はN-77°-Wである。壁の残存状況は悪いが, 緩やかな傾斜をもって立ち上がると推定され, 壁高は7~14cmである。

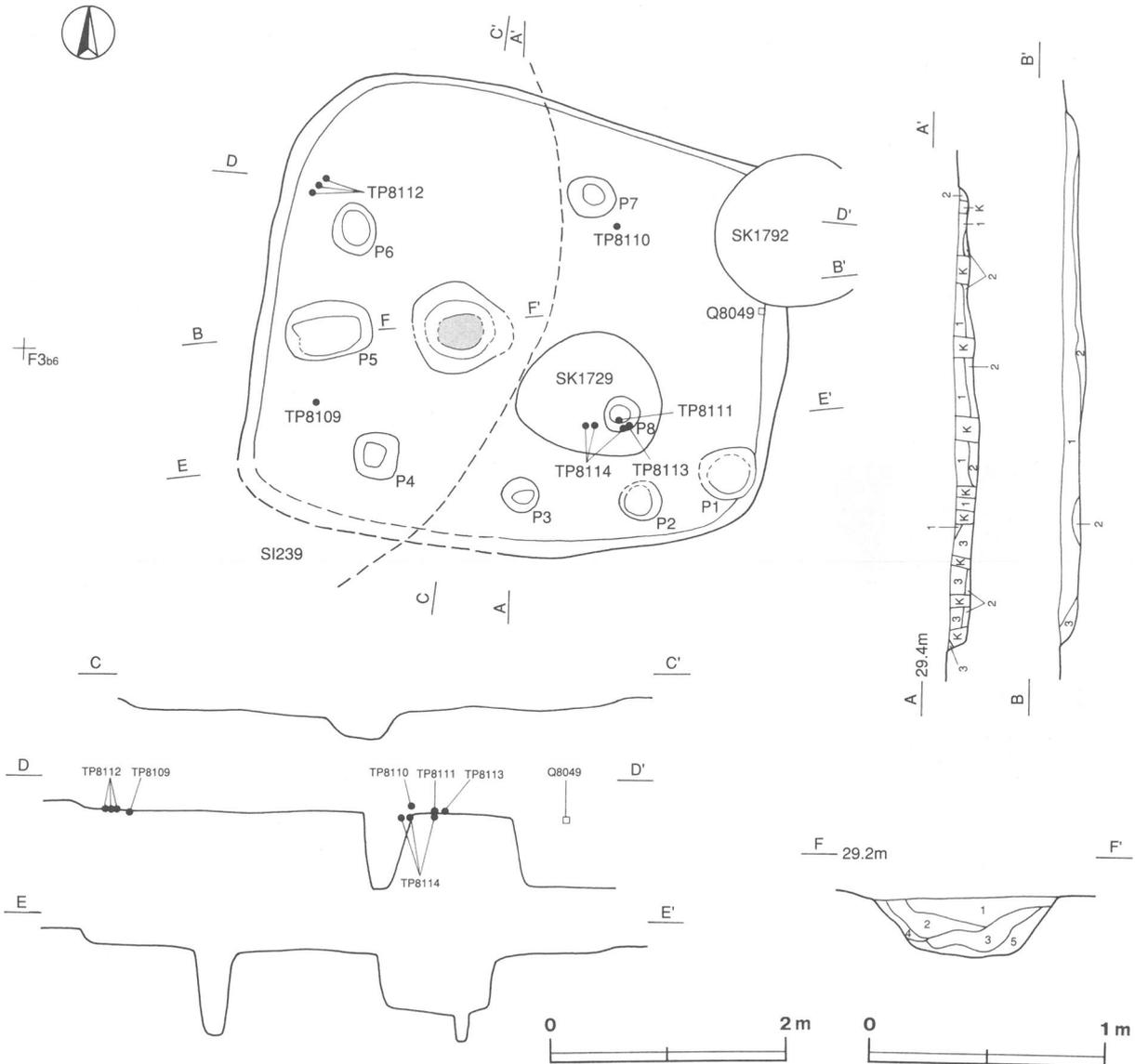
床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 8か所。P4・P6・P7・P8は, 床面からの深さ66~84cmで, その規模と配置から支柱穴と考えられる。P1~P3・P5は, 深さ20cm前後と浅く, 性格は不明である。

炉 中央部西寄りに付設されている。長径88cm, 短径78cmの楕円形で, 床面を25cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は, 火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック微量 | 3 におい赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量 | 4 暗赤褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 |
| | 5 赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック微量 |



第69図 第194号住居跡実測図

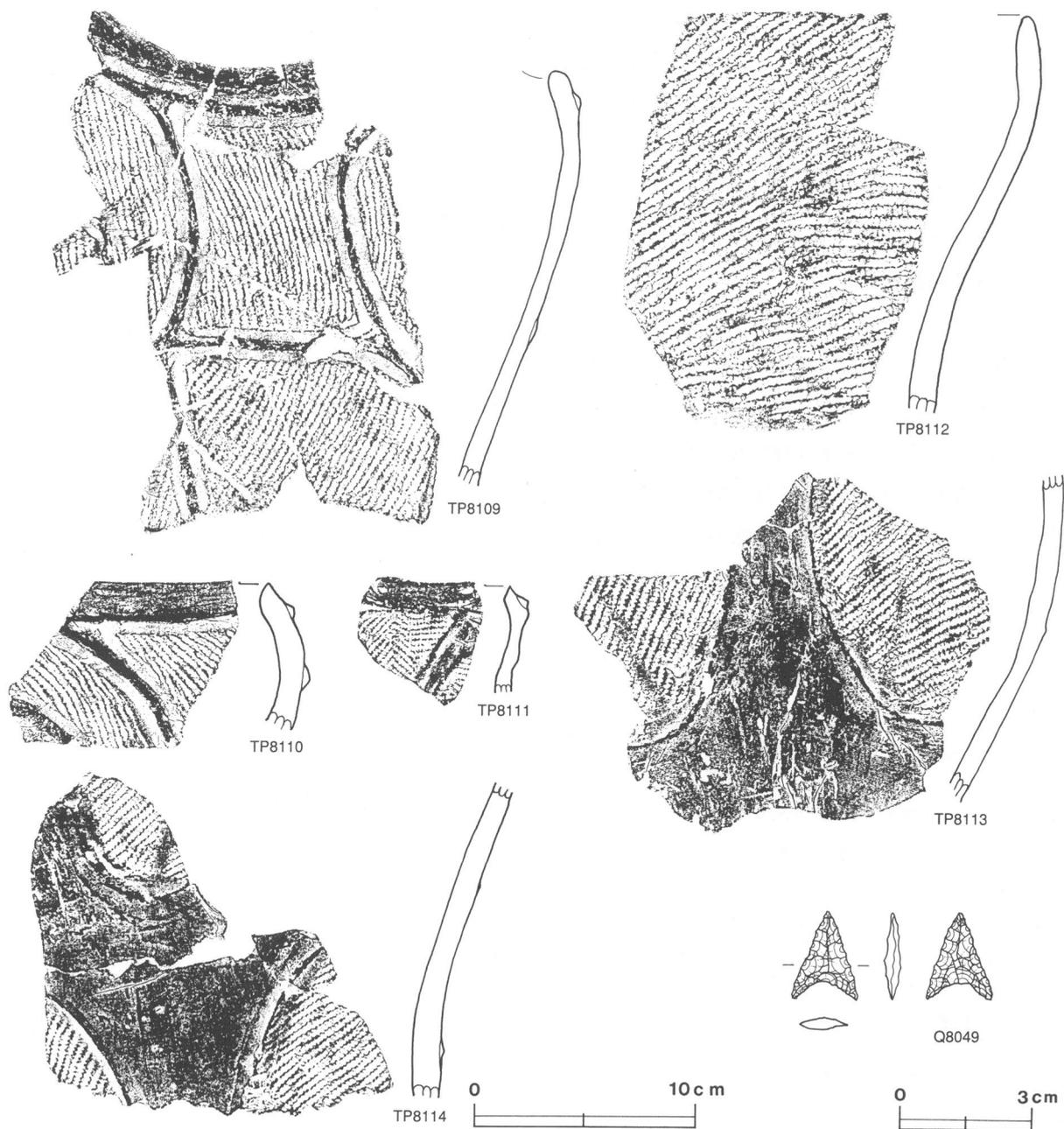
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片245点, 石鏃1点が出土している。土器のほとんどが細片で, 確認面から床面にかけて廃棄されたような状況で散在しており, 出土位置に特異な傾向は認められない。TP8109, TP8111, TP8112及び同一個体であるTP8113, TP8114はいずれも深鉢片で, 床面から出土している。またTP8110の深鉢片は覆土上層から, Q8049の石鏃はプラン内の攪乱からの出土であり, 混入の可能性も考えられる。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉(加曾利E IV式期)と考えられる。



第70図 第194号住居跡出土遺物実測図

第194号住居跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8109	縄文土器	深鉢	—	(19.0)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。胴部は微隆帯による区画文。R Lの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	普通	灰褐色にぶい橙	床面	
TP8110	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。胴部は微隆帯による区画文。L Rの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	普通	褐色	覆土上層	
TP8111	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	微隆帯による区画文。L Rの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	普通	灰褐色	床面	
TP8112	縄文土器	深鉢	—	(18.2)	—	R Lの単節縄文を縦・斜方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	床面	
TP8113	縄文土器	深鉢	—	(14.8)	—	2本一組の微隆帯による区画文内にR Lの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	TP8114と同一
TP8114	縄文土器	深鉢	—	(14.0)	—	2本一組の微隆帯による区画文内にR Lの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	TP8113と同一

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8049	石 鏃	2.0	1.4	0.3	0.6	チャート	基部中央が湾入。	覆土	P L 59

第196号住居跡（第71図）

位置 調査2区の南部，F3f6区。

重複関係 第24号溝及び第12号井戸跡に掘り込まれている。

規模と形状 径4.4mの円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり，壁高は6～18cmである。

床 ほぼ平坦である。顕著な硬化面は認められなかった。壁溝は，床面から20～24cmの深さでU字状に掘り込まれ，他遺構との重複部分を除き全周している。

ピット 8か所。いずれも壁溝の底部を掘り込んでおり，床面からの深さは45cm～66cmであることから柱穴と考えられる。P2は，上部が中心方向を向くように掘られている。

炉 中央部に付設されている。長径80cm，短径57cmの楕円形で，床面を26cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土ブロック微量 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量，ロームブロック少量
 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化物・粘土ブロック微量

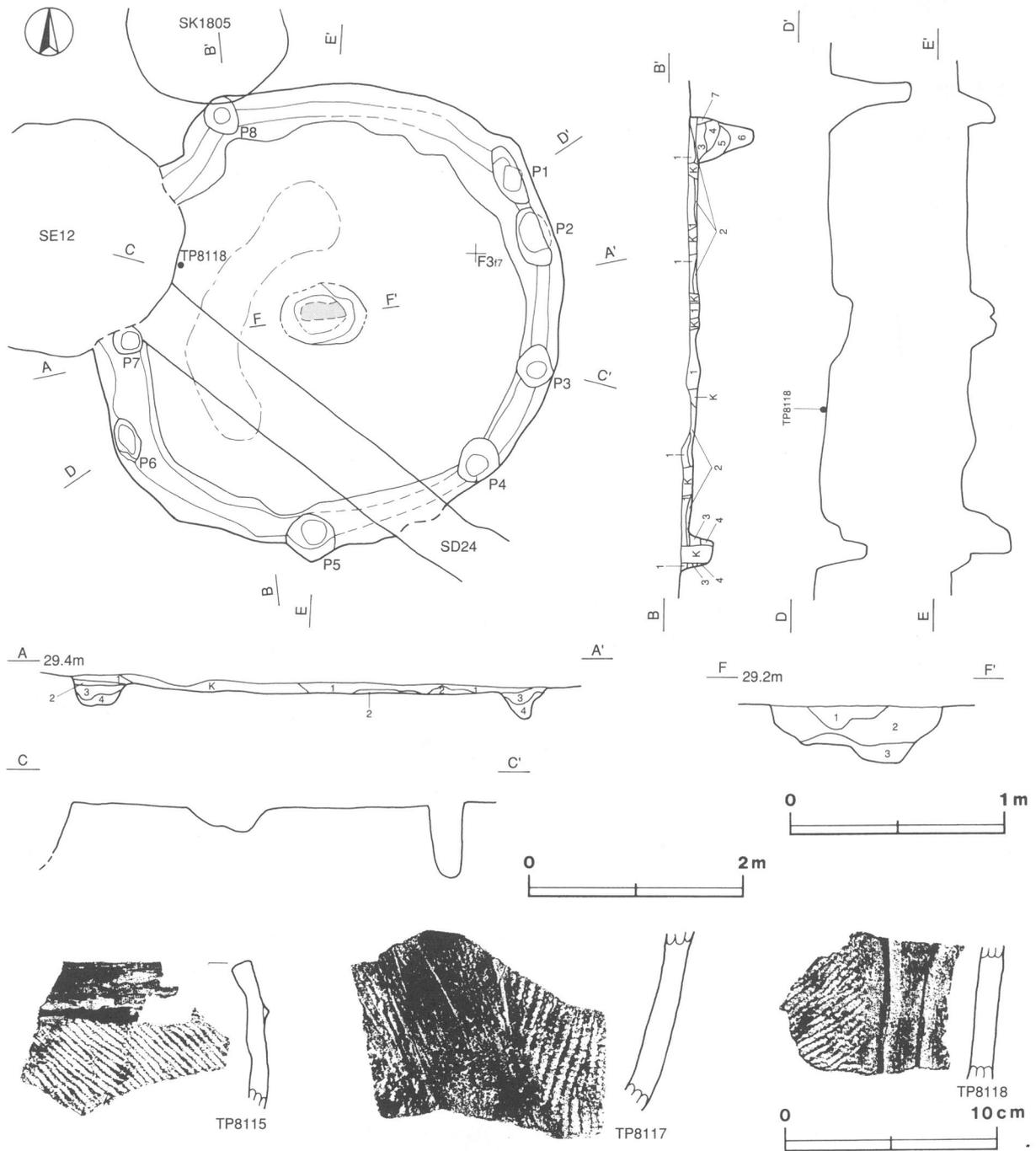
覆土 7層に分層される。攪乱が著しく，また層厚が薄いため，堆積状況の全容は不明である。なお，第3～7層は壁溝及びP8の覆土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 5 褐色 ロームブロック中量
 2 暗褐色 ロームブロック少量 6 褐色 ロームブロック多量
 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 7 黒褐色 ロームブロック少量
 4 褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片195点が出土している。土器のほとんどが細片で，確認面から床面にかけて廃棄されたような状況で散在しており，出土位置に特異な傾向は認められない。TP8115，TP8117の深鉢片はいずれも覆土から出土している。TP8118の深鉢片は床面からの出土である。

所見 時期は，出土土器から中期後葉（加曽利EIV式期）と考えられる。



第71図 第196号住居跡・出土遺物実測図

第196号住居跡出土遺物観察表（第71図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8115	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	口縁部に微隆帯が巡る。胴部はRLの単節縄文を横方向に充填。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土上層	
TP8117	縄文土器	深鉢	—	(8.5)	—	2本一組の微隆帯により文様を描出。RLの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土上層	
TP8118	縄文土器	深鉢	—	(6.2)	—	2本一組の微隆帯により文様を描出。RLの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	

ピット 4か所。P3は下段床面からの深さ26cmで、下段の北東コーナー部に掘り込まれている。類例からみて柱穴の可能性が考えられるが、他に柱穴が検出されず、判断は難しい。P1・P2は深さ16cm・26cmで、配置に規則性が認められず、いずれも性格は不明である。

炉 確認されなかった。

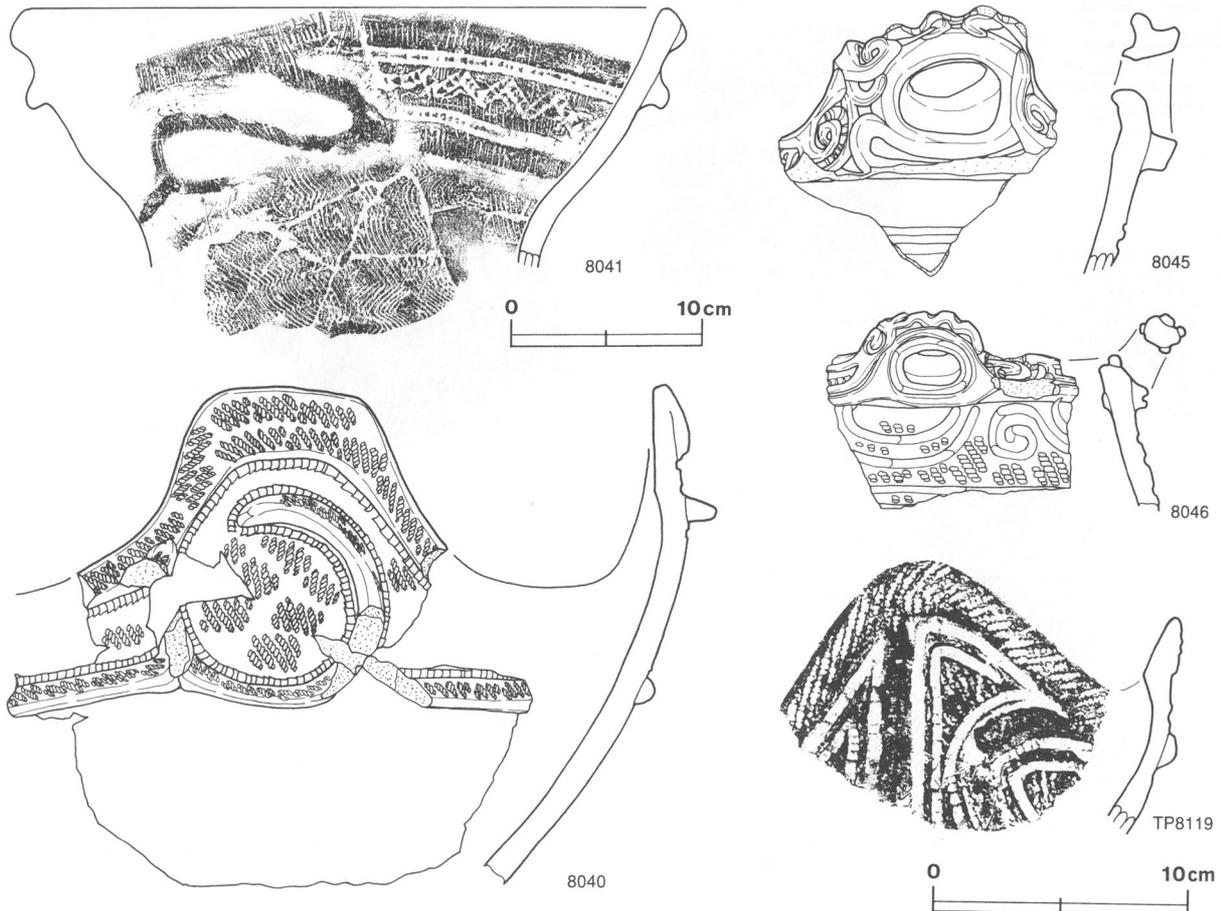
覆土 8層に分層される。全体的にロームブロックを多く含み、下層ほど締まりが強くなっている。第2・3層は人為堆積であり、下段が埋め戻された後は自然堆積したものと考えられる。

土層解説

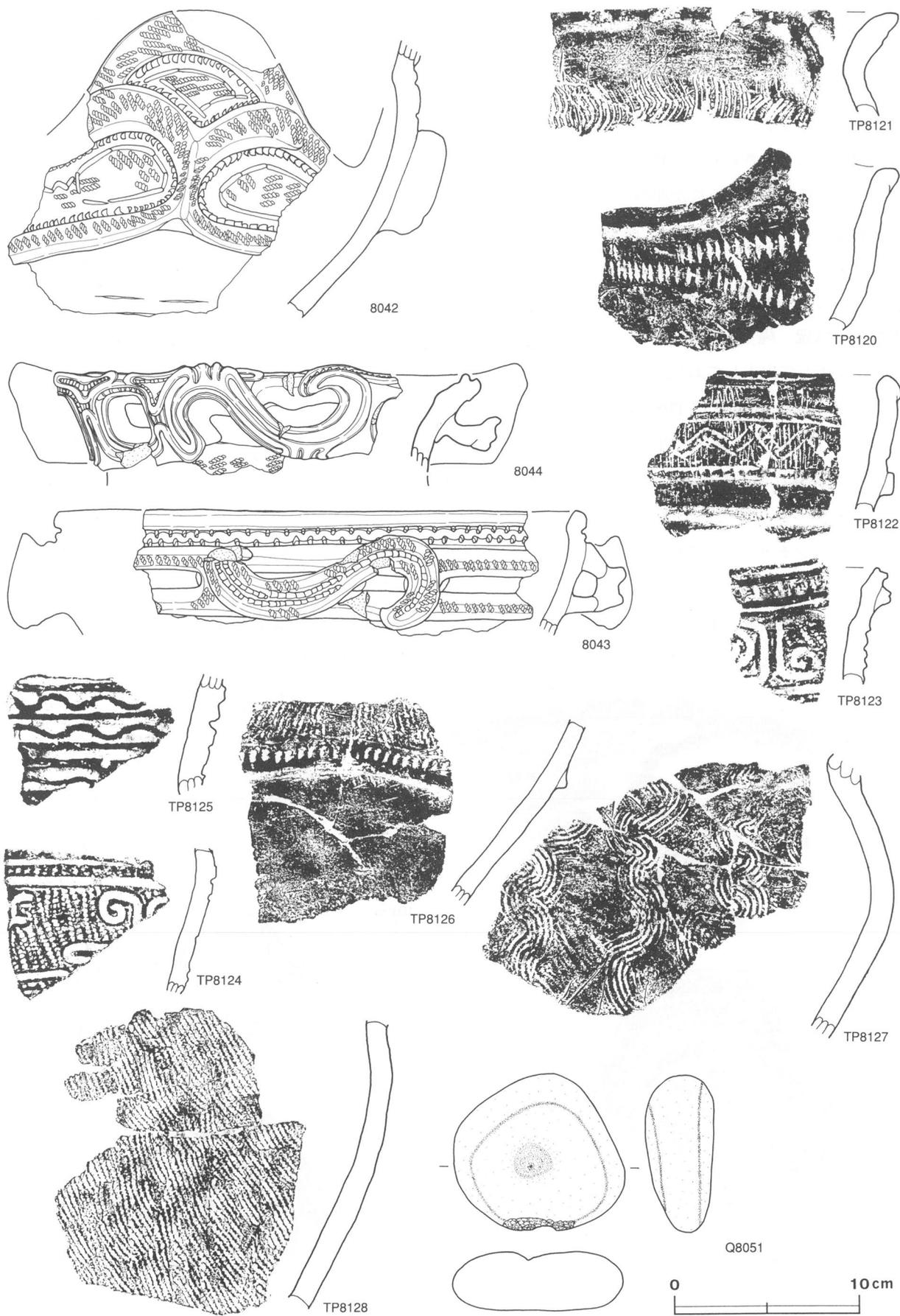
1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック中量	7 褐色	ロームブロック中量
4 褐色	ロームブロック多量	8 褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片657点、石皿1点、敲石1点、凹石1点が出土している。土器片は中層から下層にかけて集中して出土しており、下段の埋め戻しに伴って一括廃棄されたものと考えられる。8040、8041、8042、8043、8046の深鉢片及びTP8127の甕片は、いずれも下段の覆土上面から出土している。8044、8045、TP8120、TP8128の深鉢片、TP8121の甕片及びQ8051の敲石は、いずれも下段の覆土から出土している。またTP8119の深鉢片は下段の床面から出土している。なお8041とTP8122、TP8123とTP8124はそれぞれ同一個体である。

所見 トレンチャーによる攪乱により、プランの確認が困難であったが、確認面における形状から、2軒の住居跡が重複していると想定して調査を開始した。しかし、調査の過程で重複は認められず、二段の掘り込みをもつ有段式の住居跡であることが判明した。また上段と下段の出土土器に時期差は認められず、一括して廃棄されたものと考えられる。時期は、出土土器から中期中葉（阿玉台Ⅲ式期）と考えられる。



第73図 第199号住居跡出土遺物実測図(1)



第74图 第199号住居跡出土遺物実測図(2)

第199号住居跡出土遺物観察表（第73・74図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8040	縄文土器	深鉢	—	(19.7)	—	口縁部は1列の結節沈線が沿う隆帯文。RLの単節縄文を施文。胴部上位は無文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土中層	
8041	縄文土器	深鉢	[33.6]	(13.8)	—	口縁部は1列の結節沈線が沿う隆帯文。胴部は櫛歯状工具による縦位の波状沈線文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土中層	
8042	縄文土器	深鉢	—	(16.4)	—	口縁部は1列の爪形文と沈線が沿う隆帯文。RLの単節縄文を施文。胴部は無文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土中層	
8043	縄文土器	深鉢	[27.6]	(6.7)	—	口唇部直下に連続コの字状文が巡る。隆帯の背にRLの単節縄文及び結節沈線文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土中層	
8044	縄文土器	深鉢	[21.0]	(5.8)	—	沈線を有する2本の隆帯による横S字文。結節沈線により文様を描出。	長石・石英・	普通	にぶい褐	覆土下層	
8045	縄文土器	深鉢	—	(10.6)	—	口縁部は隆帯により文様を描出。隆帯に結節沈線文が沿う。胴部は横位の沈線文。	石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土下層	
8046	縄文土器	深鉢	—	(7.8)	—	口縁部は爪形文が沿う隆帯文。胴部は沈線により文様を描出。LRの単節縄文。	長石・雲母	普通	にぶい褐	覆土中層	
TP8119	縄文土器	深鉢	—	(8.7)	—	結節沈線が沿う隆帯文。LRの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	床 面	
TP8120	縄文土器	深鉢	—	(8.7)	—	口唇部に隆帯を施す。口縁部にはキザミ目列が巡る。	長石・石英・雲母	普通	褐灰	覆土下層	
TP8121	縄文土器	甕	—	(5.8)	—	口縁部から胴部にかけて隆帯が垂下する。胴部は櫛歯状工具による縦位の波状沈線文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐	覆土下層	
TP8122	縄文土器	深鉢	—	(7.3)	—	結節沈線が沿う隆帯による区画文。区画内には鋸歯状の結節沈線と縦位の条線文を施文。	長石・石英・雲母	普通	褐灰	床 面	
TP8123	縄文土器	深鉢	—	(6.3)	—	口唇部は沈線を有する隆帯に沿って結節沈線が巡る。沈線による渦巻文。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆 土	
TP8124	縄文土器	深鉢	—	(7.8)	—	沈線により文様を描出。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆 土	
TP8125	縄文土器	深鉢	—	(6.5)	—	沈線と交互刺突による連続コの字文が横位に巡る。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土中層	
TP8126	縄文土器	深鉢	—	(10.0)	—	キザミを有する隆帯が横位に巡る。Lの無節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	褐灰	覆土下層	
TP8127	縄文土器	甕	—	(15.2)	—	櫛歯状工具による波状沈線文を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土中層	
TP8128	縄文土器	深鉢	—	(15.7)	—	LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土下層	

番号	器種	計 測 値				材 質	特 徴	出土位置	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8051	敲 石	8.4	9.2	3.7	372.4	砂 岩	片側縁に敲打痕。凹石併用、表面1孔。	覆土下層	

第200号住居跡（第75図）

位置 調査2区の南部，E3j4区。

重複関係 第1868号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は長軸4.10m，短軸3.82mの隅丸方形と推定される。主軸方向はN-2°-Eと推定される，壁は外傾して立ち上がり，壁高は42~48cmである。

床 中央部から南部にかけての長方形の範囲で，床が8~10cmほど下がっている。

ピット 21か所。径30~40cmほどの不定形のもの (P1・P2), 径22~40cm程の円形もしくは方形のもの (P17・P19~P21), 長楕円形のもの (P6・P15), 径10cmほどで円形に浅く掘り込まれているもの (P3~P5, P7~P14, P16・P18) に分類できるが, 性格はいずれも不明である。

P1土層解説

6 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

7 暗褐色 ロームブロック多量, 鹿沼バミスブロック少量

炉 確認されなかった。

覆土 5層に分層される。ロームブロックを全体に含み, 黒褐色を基調としている。第4・5層は固く締まっている。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

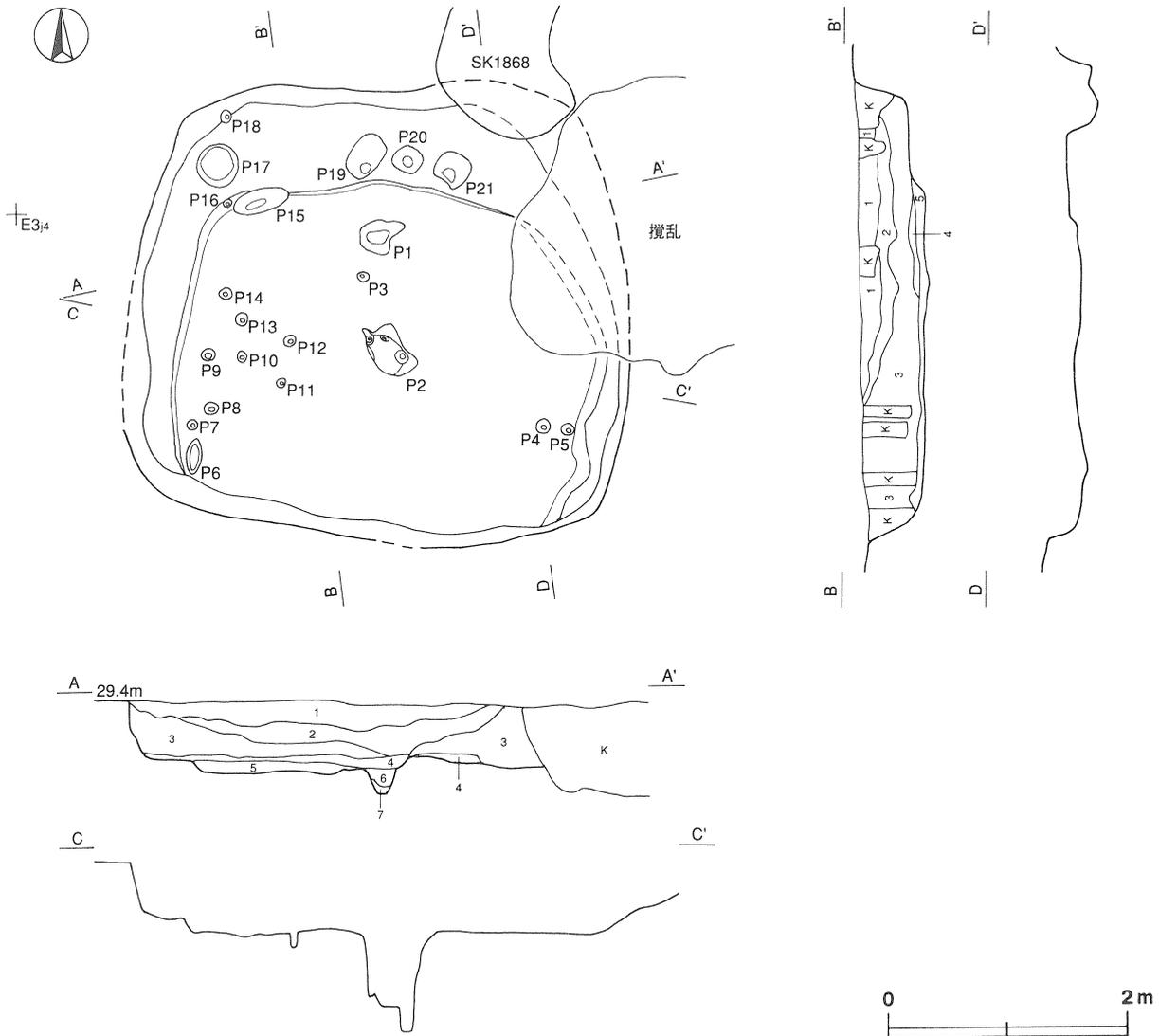
2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量

4 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量

5 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量

遺物出土状況 縄文土器片50点が覆土から出土している。いずれも細片であるため抽出・図示できるものはなかった。出土位置に特異な傾向は認められなかった。

所見 覆土から出土した土器細片がすべて縄文土器片であること等から, 縄文時代の住居跡と考えられる。



第75図 第200号住居跡実測図

第203号住居跡 (第76~78図)

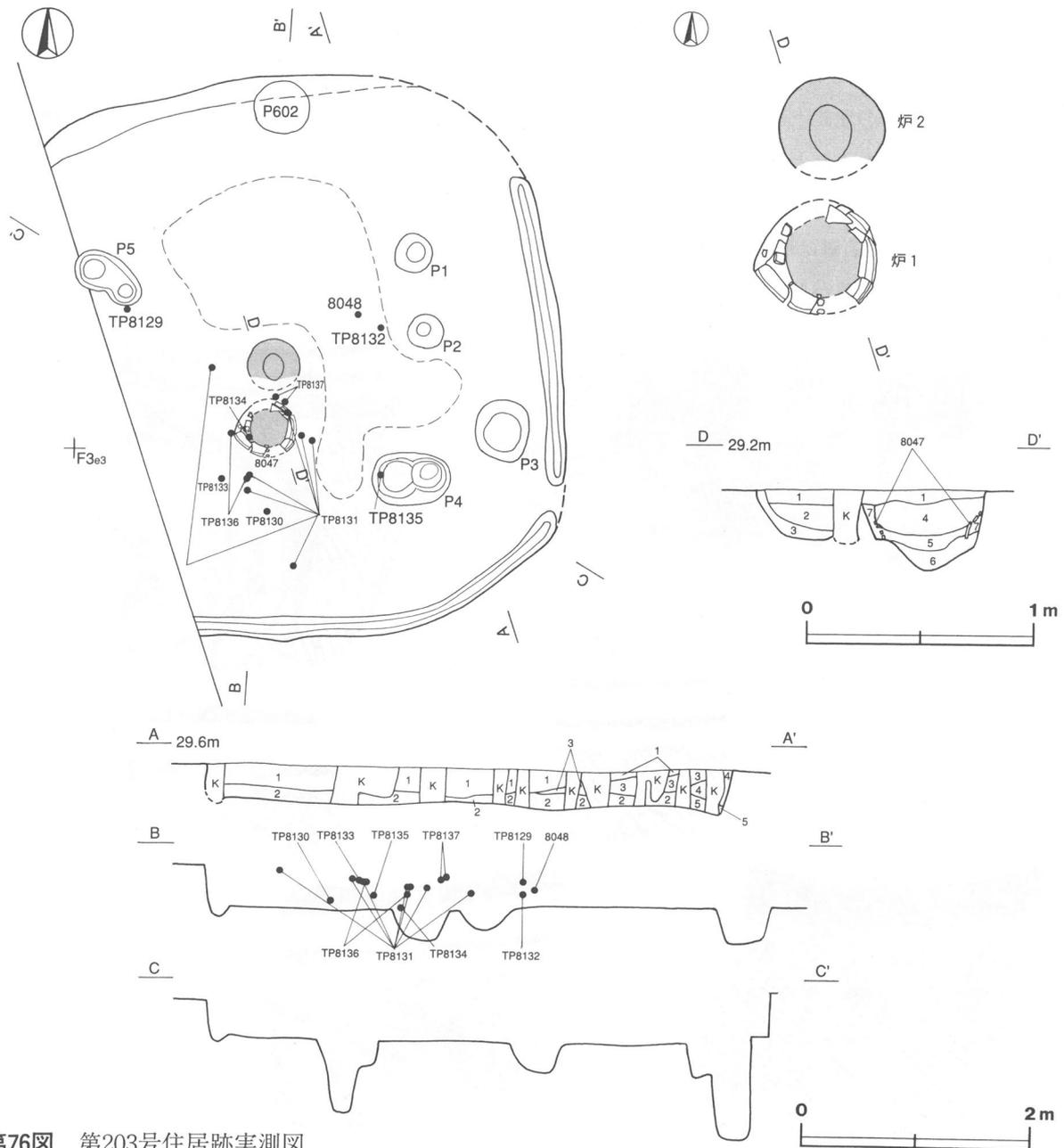
位置 調査2区の南部, F3d3区。

重複関係 第602号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 西側のコーナー部及び壁が調査区域外に及ぶため全容はつかめないが, 南北軸5.00m, 確認できた東西軸3.95mの隅丸方形と推定される。主軸方向はN-8°-Wと推定される。壁は外傾して立ち上がり, 壁高は26~40cmである。

床 ほぼ平坦であり, 中央部が硬化している。壁溝は一部途切れるものの, 床面から6~10cmの深さで東壁から南壁際を巡っている。

ピット 5か所。P1・P4・P5は深さ49~93cmで, 規模と配置から支柱穴と考えられる。P2・P3の性格は不明である。



第76図 第203号住居跡実測図

炉 2か所。中央部南寄りに1基(炉1)、中央部に1基(炉2)検出されている。炉1は、径54cm、深さ34cmの円形の掘り方に、胴部を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設炉である。第6層は掘り方の覆土で、火熱を受けて赤変硬化している。また第6層上面の炉床は焼土化している。炉2は、径46cmの円形で、床面を22cmほど掘りくぼめ炉床とした地床炉である。炉床から北側炉壁にかけて、火熱を受けて赤変硬化している。炉1と炉2の新旧関係は不明である。

炉土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 |
| 4 にぶい赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量 | | |

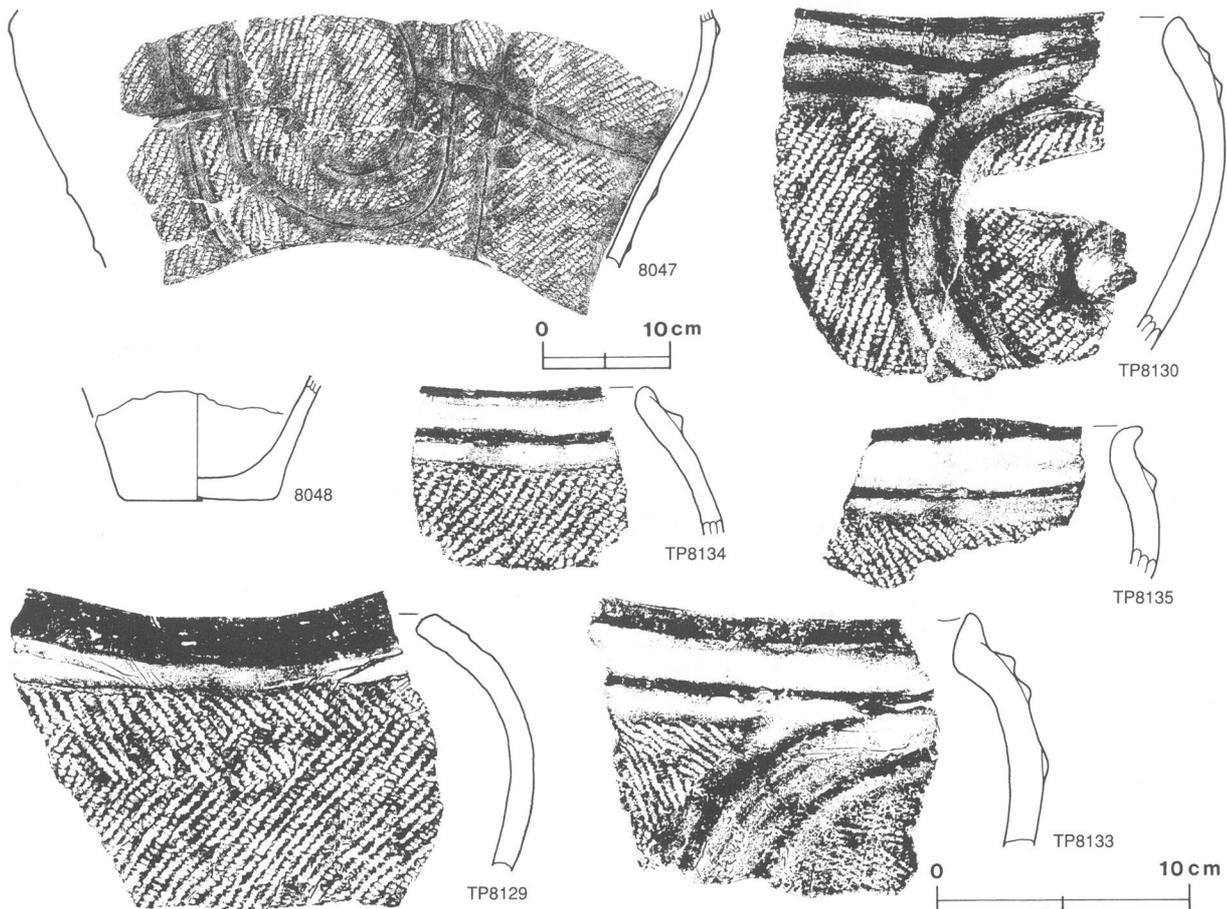
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

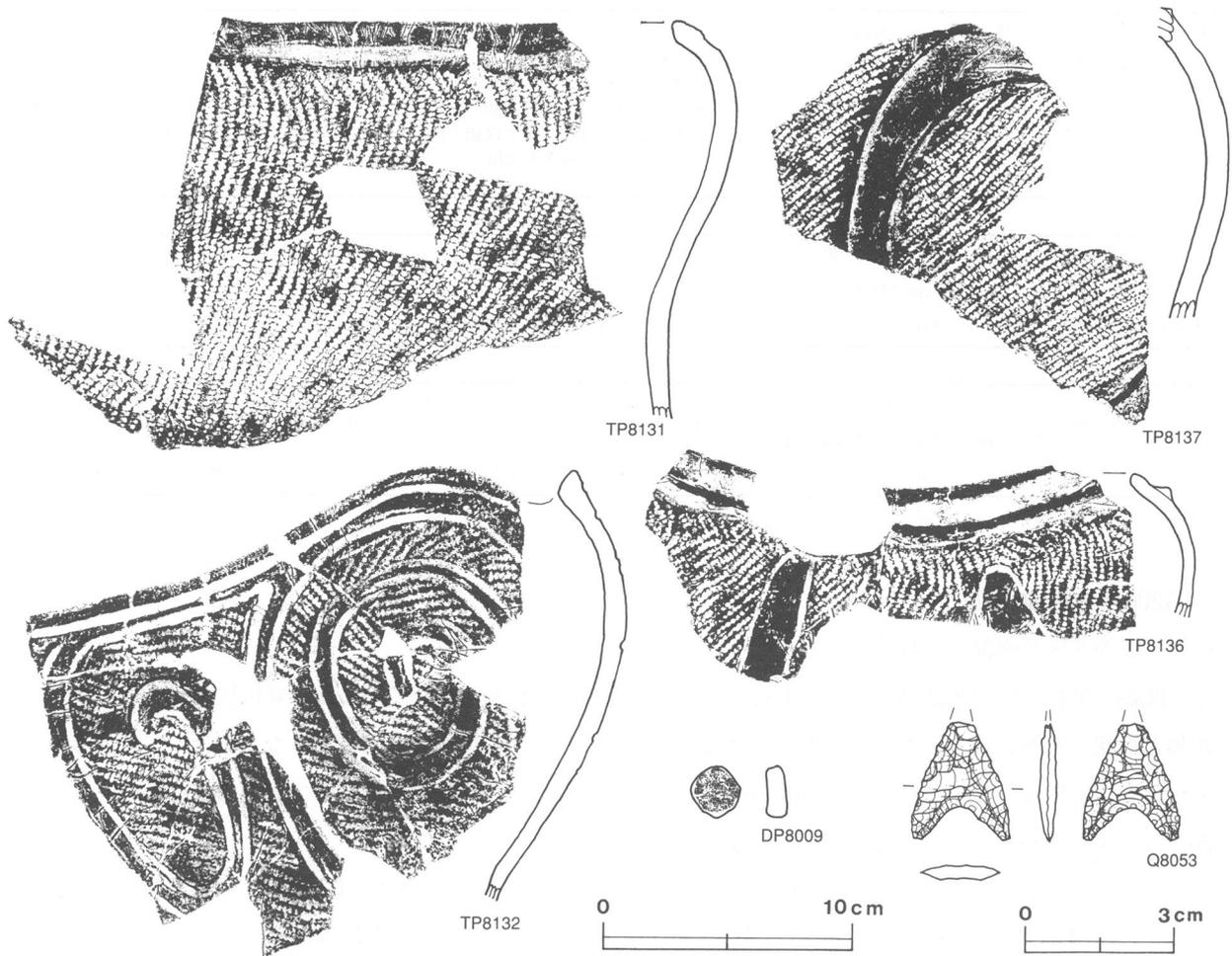
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片1316点、石鏃1点、土器片円盤1点が出土している。土器のほとんどが細片で、覆土中に散在する状況で出土しており、特に中央部の覆土中層から下層にかけて集中している傾向が看取できる。8047の深鉢は炉の埋設土器である。8048の深鉢片は、炉の北東部の覆土下層から出土している。TP8134の深鉢片は炉の覆土から出土している。TP8130、TP8132、TP8135の深鉢片は、いずれも覆土下層から出土している。またTP8131の深鉢片は、炉の南側の覆土中層に散在していた破片が接合したものである。DP8009の土器片円盤、Q8053の石鏃は覆土中層からの出土である。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。



第77図 第203号住居跡出土遺物実測図(1)



第78図 第203号住居跡出土遺物実測図(2)

第203号住居跡出土遺物観察表(第77・78図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8047	縄文土器	深鉢	—	(20.3)	—	微隆帯により文様を描出。R Lの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄橙橙	炉埋設土器	
8048	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	6.0	胴部下端無文。	長石・石英・雲母	良好	にぶい褐	覆土下層	
TP8129	縄文土器	深鉢	—	(10.3)	—	口唇部直下に沈線文が巡る。R Lの単節縄文を口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文。	長石・石英・角閃石・雲母	良好	灰褐	覆土中層	
TP8130	縄文土器	深鉢	—	(13.2)	—	2本一組の微隆帯による区画文。R Lの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	良好	にぶい褐	床面	
TP8131	縄文土器	深鉢	—	(16.0)	—	口唇部直下に沈線が巡る。R Lの単節縄文を口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土中層	
TP8132	縄文土器	深鉢	—	(17.4)	—	2条一組の沈線で文様を描出。L Rの単節縄文を充填。沈線間は無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄褐	覆土下層	
TP8133	縄文土器	深鉢	—	(9.3)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。胴部は2本一組の微隆帯文。R Lの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土中層	
TP8134	縄文土器	深鉢	—	(5.9)	—	口唇部直下に沈線文が巡る。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	良好	灰褐	炉覆土	
TP8135	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	口唇部直下に沈線に沿う微量隆帯が巡る。R Lの単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄褐	覆土下層	

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8136	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。胴部は逆U字状を描く沈線が垂下。RLの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	良好	明赤褐	覆土中層	
TP8137	縄文土器	深鉢	—	(12.4)	—	2本一組の微隆帯による区画文。RLの単節縄文を充填。	長石・石英・雲母	良好	にぶい褐	覆土中層	

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP8009	土器片円盤	2.1	2.0	0.9	4.5	長石・雲母, 灰黄褐	無文。周縁部が研磨され, 隅丸方形を呈する。	覆土中層	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8053	石鉢	(2.4)	2.0	0.3	(1.2)	チャート	基部中央が大きく湾入。	覆土	PL59

第206号住居跡 (第79・80図)

位置 調査2区の南部, F3c7区。

重複関係 第12号竪穴状遺構に掘り込まれている。第1720号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 東側の約半分が, 他遺構との重複や削平のため壁を検出することができなかったが, 柱穴及び西側に残存する壁溝の様相から, 径5.04mの円形と推定される。壁は, 残存する部分で高さ8cmである。

床 ほほ平坦である。炉の周囲で部分的に硬化した面が認められた。

ピット 10か所。床面からの深さは, P1・P6はそれぞれ53cm・64cm, P2～P5・P7～P10は7～18cmである。P1・P6は, 他のピットに比して著しく深く, 炉をはさんで対になる位置に掘り込まれていることから, 主柱穴と考えられる。また, P2～P5・P7～P10は, 炉を中心に環状に巡っていることから, 補助的な柱穴との想定が可能である。

炉 中央部やや南寄りに付設されている。長径90cm, 短径70cmの楕円形で, 床面をすり鉢状に28cmほど掘り込んで炉床とした地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量

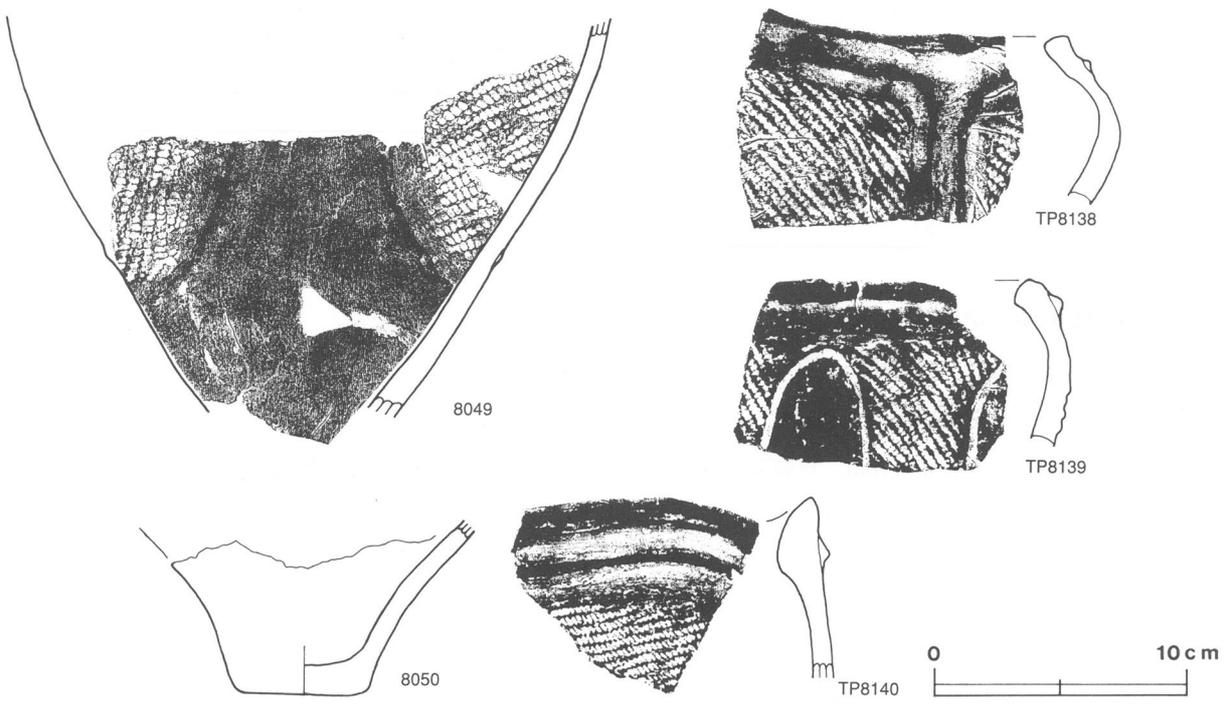
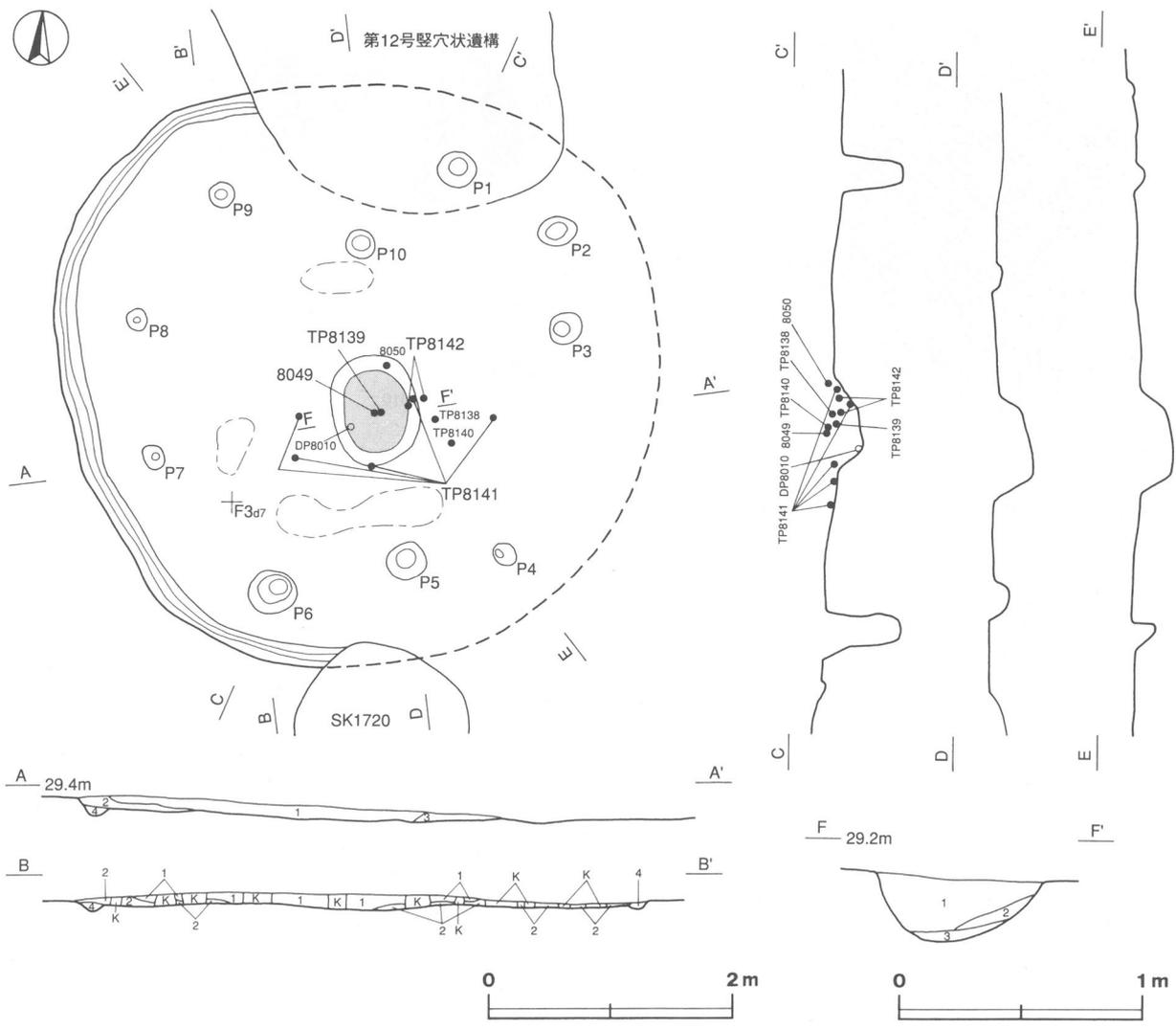
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。なお第4層は, 壁溝の覆土である。

土層解説

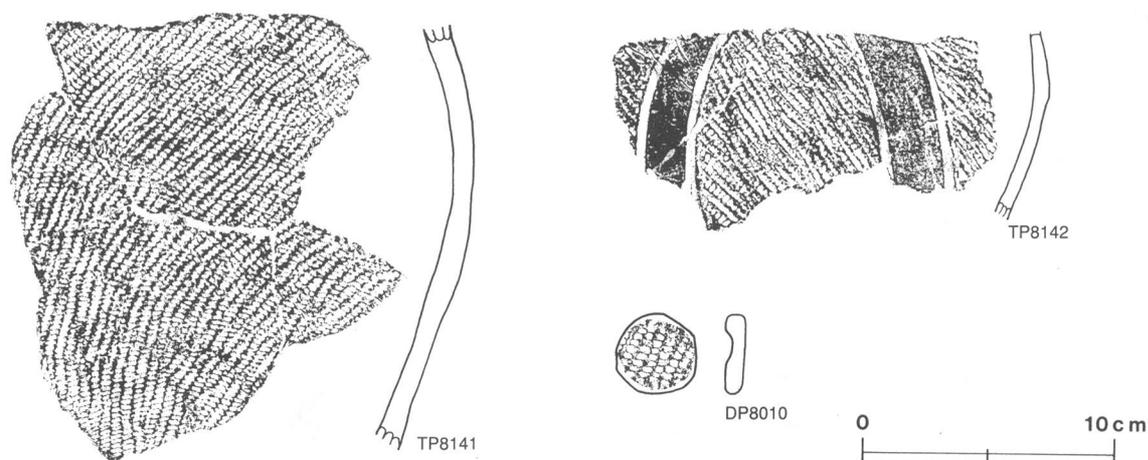
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片447点, 土器片円盤1点が出土している。土器のほとんどが細片で, 炉の周辺の床面に廃棄されたような状況で集中して出土している。8049, 8050, TP8139, TP8142の深鉢片は, いずれも炉の確認面及び覆土上層から出土している。DP8010の土器片円盤は炉の覆土下層からの出土である。またTP8138, TP8140の深鉢片は床面からの出土である。TP8141の深鉢片は, 炉周辺の床面に散在していた破片が接合したものである。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉(加曽利EIV式期)と考えられる。



第79图 第206号住居跡・出土遺物実測図



第80図 第206号住居跡出土遺物実測図

第206号住居跡出土遺物観察表 (第79・80図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8049	縄文土器	深鉢	—	(15.8)	—	2本一組の微隆帯による区画文。LRの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉覆土	外面煤附着
8050	縄文土器	深鉢	—	(6.6)	5.2	胴部下端無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐	炉覆土	内外面煤附着
TP8138	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	口唇部直下を巡る微隆帯が連続して垂下する。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	床面	
TP8139	縄文土器	深鉢	—	(6.7)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。胴部は沈線による逆U字状の懸垂文。LRの単節縄文。	長石・石英・雲母	良好	明褐灰	炉覆土	
TP8140	縄文土器	深鉢	—	(7.1)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。微隆帯の両端はよく研磨されている。RLの単節縄文。	長石・石英・雲母	良好	橙	床面	
TP8141	縄文土器	深鉢	—	(16.8)	—	RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明赤褐	床面	
TP8142	縄文土器	深鉢	—	(7.5)	—	2条一組の沈線により逆U字状の懸垂文を描出。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP8010	土器片円盤	3.4	3.5	0.9	10.4	長石・石英・雲母, にぶい橙	裏面に凹みを有する。RLの単節縄文。	床面	PL59

第209号住居跡 (第81・82図)

位置 調査2区の南部, E3f0区。

重複関係 覆土上層を第1836号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 平面形は長軸5.70m, 短軸3.45mの隅丸長方形である。主軸方向はN-23°-Wである。壁は外傾して立ち上がり, 壁高は32~50cmである。

床 ほぼ平坦である。北部の一部と中央部に硬化面が認められた。

ピット 7か所。P1・P3・P4は深さ64~66cmで, やや規則性を欠くもののその規模及び配置から支柱穴と考えられる。その他のピットの性格は不明である。

炉 確認されなかった。

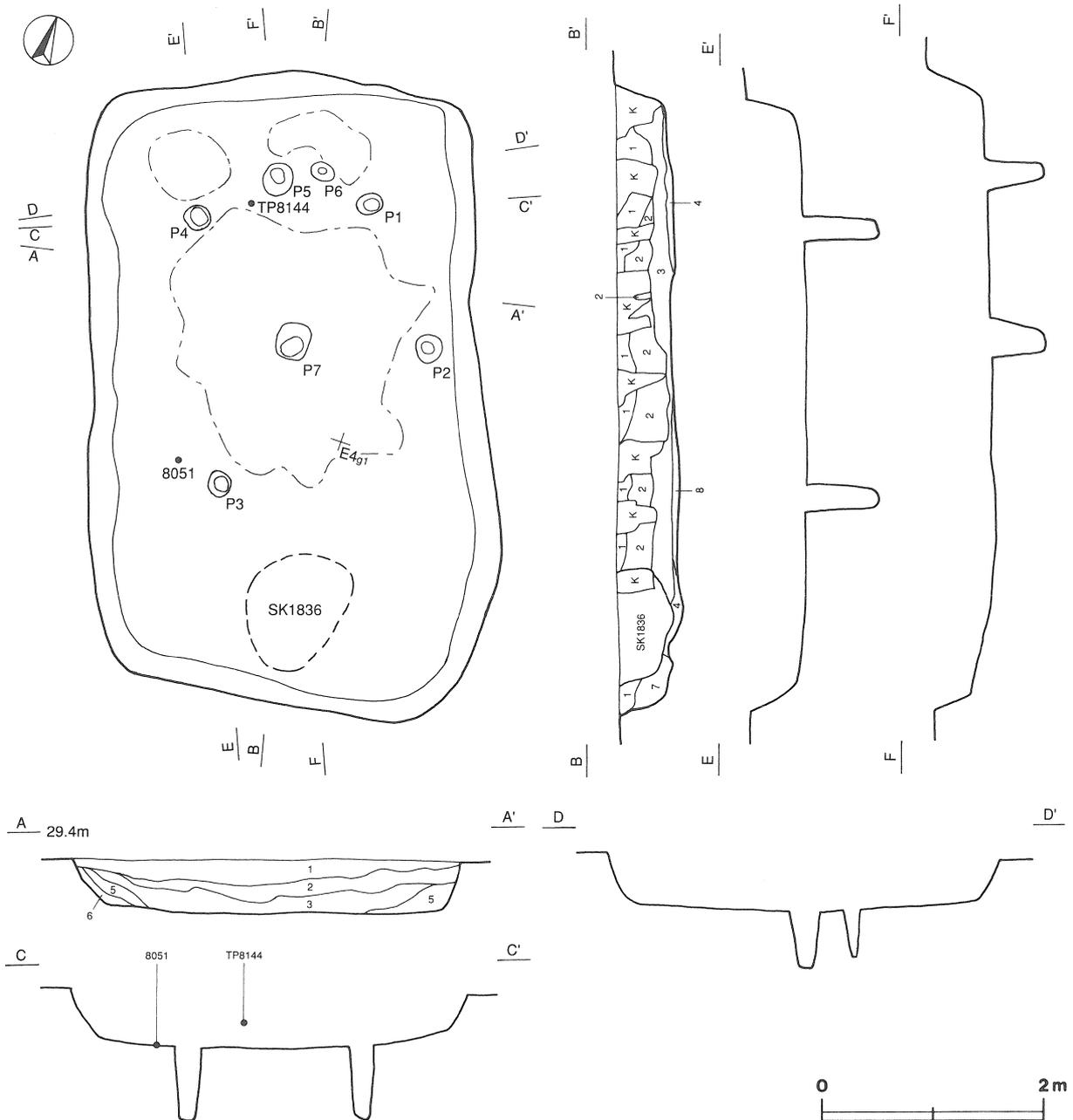
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

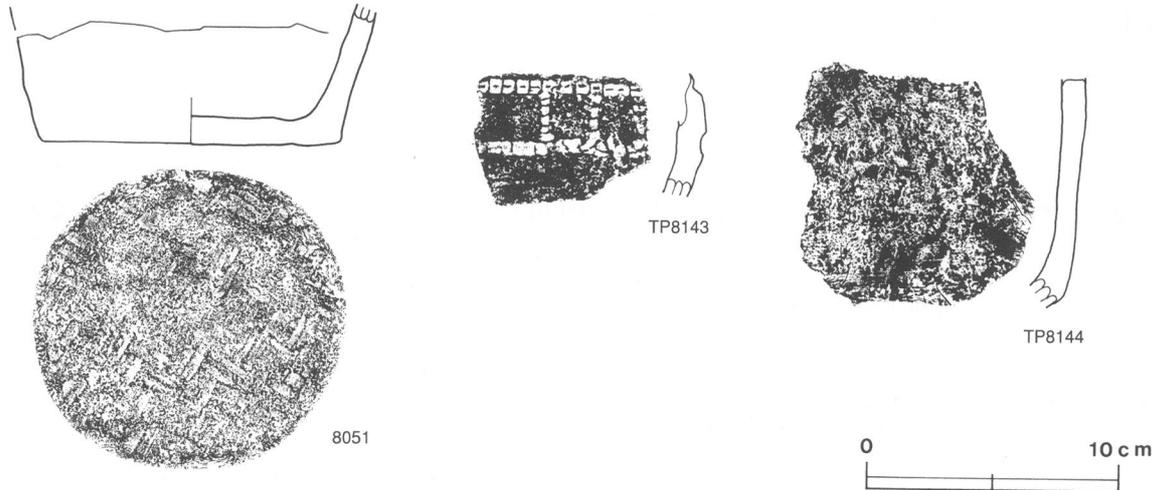
- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量 | 8 黒褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼バミスブロック微量 |

遺物出土状況 縄文土器片653点, 不明自然遺物1点が出土している。土器のほとんどが細片で, 覆土上層から床面にかけて散在する状況で出土しているが, 特に中層に集中する地点がみられる。8051の深鉢片は床面から出土しており, 時期決定の指標となる遺物である。TP8143, TP8144の深鉢片は覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ~Ⅳ式期)と考えられる。



第81図 第209号住居跡実測図



第82図 第209号住居跡出土遺物実測図

第209号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8051	縄文土器	深鉢	—	(5.4)	11.8	胴部下端無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	底部網代痕
TP8143	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	結節沈線により区画文を描出。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土中層	
TP8144	縄文土器	深鉢	—	(8.8)	—	無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土中層	

第210号住居跡 (第66・83図)

位置 調査2区の中央部, D2g7区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 第184号住居に掘り込まれている。第180号住居跡と重複しているが, 新旧関係は不明である。

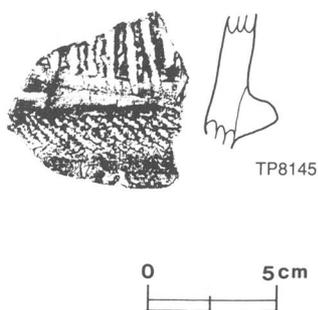
規模と形状 西部の約半分が調査区域外に及ぶため全容は不明であるが, 壁溝の様相から, 南北軸5.79m, 確認できた東西軸2.54mで, 円形または楕円形と想定され, 主軸方向はN-21°-Wと推定される。壁は外傾して立ち上がり, 壁高は34~36cmである。

床 壁際から中央部に向かってごく緩やかに下がっている。一部で確認された壁溝は, U字形の断面形をもって床面から10cmほど掘り込まれている。また東側の第180号住居跡との重複部分で確認された小ピット群は, 壁溝の残存部と考えられる。

ピット 3か所。P1・P2は, 床面からの深さがそれぞれ45cm, 48cmで, その規模と配置から柱穴と考えられる。P3の性格は不明である。

炉 確認されなかった。

覆土 ローム粒子を含み, 黒褐色土を基調としている。なお第10層は壁溝の, 第11層はP1の覆土である。



土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|---------|-----------|
| 6 黒褐色 | ローム粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック微量 | 10 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 8 黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック少量 |

第83図 第210号住居跡
出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片6点が覆土及びピットから出土している。TP8145の深鉢片は、P2の覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉～後葉（阿玉台Ⅳ式期～加曾利EⅠ式期）と考えられる。

第210号住居跡出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8145	縄文土器	深鉢	—	(5.6)	—	隆帯文の下面にRLの単節縄文を施文。隆帯上位は縦位の平行沈線文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	P2覆土	

第211号住居跡（第84図）

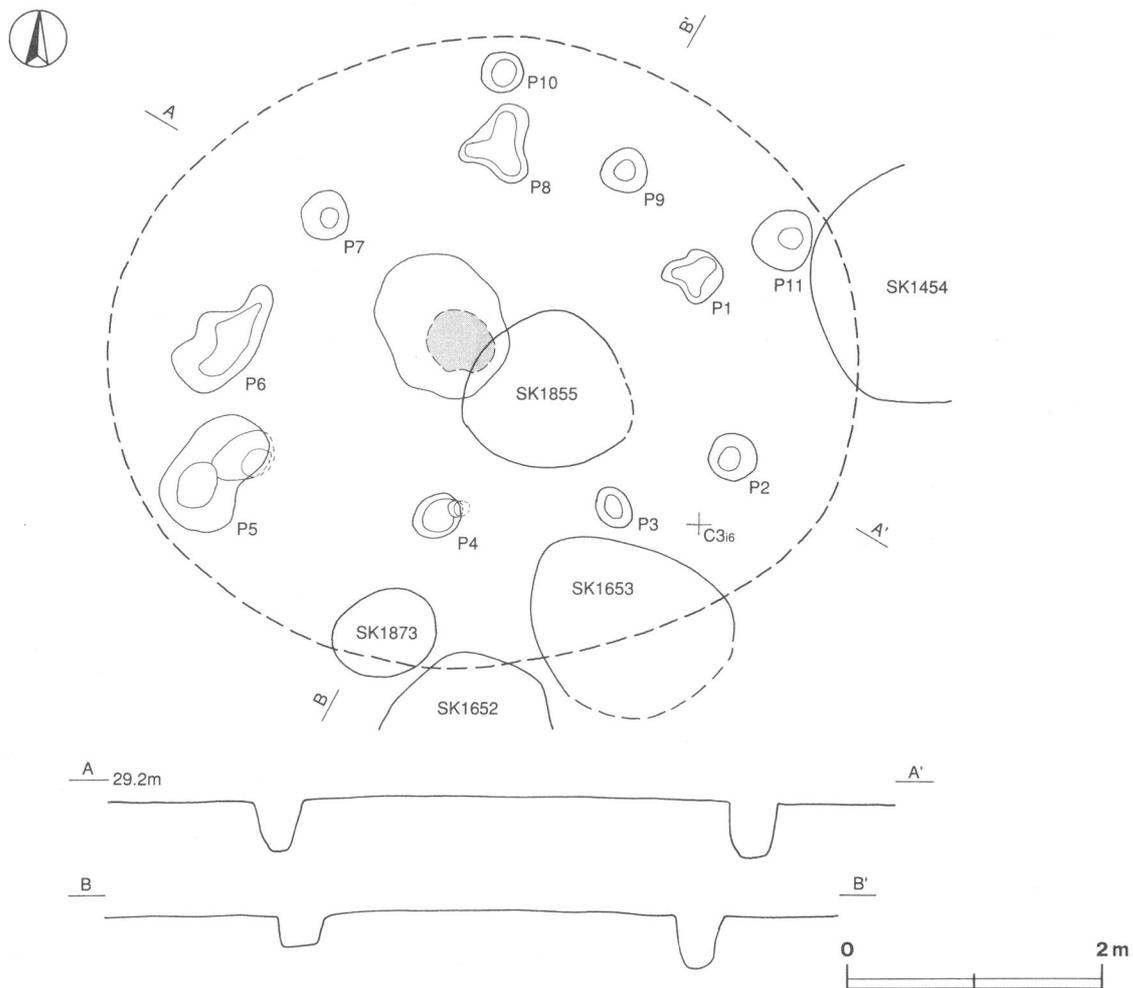
位置 調査2区の北部、C3h5区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1855号土坑の覆土上面に本跡の炉が構築されている。第1454・1652・1653・1873号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 覆土及び壁を検出できなかったため明確ではないが、炉とピットの配置から、平面形は長径5.75m、短径5.15mの楕円形と推定される。主軸方向はN-65°-Wと推定される。

床 はほぼ平坦で、全体的にやや踏み固められているが、顕著な硬化面は認められなかった。

ピット 11か所。P2～P4・P7・P9～P11は、床面からの深さ28～45cmで、その規模及び配置から柱穴と考えられる。P1・P5・P6・P8の性格は不明である。



第84図 第211号住居跡実測図

炉 ほぼ中央部に付設されていたと推定される。長径118cm，短径94cmの楕円形で，掘り込みはなく，床面を炉床とした地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

遺物出土状況 縄文土器片9点が確認面に散在した状況で出土している。いずれも細片であるため，抽出・図示できるものはなかった。

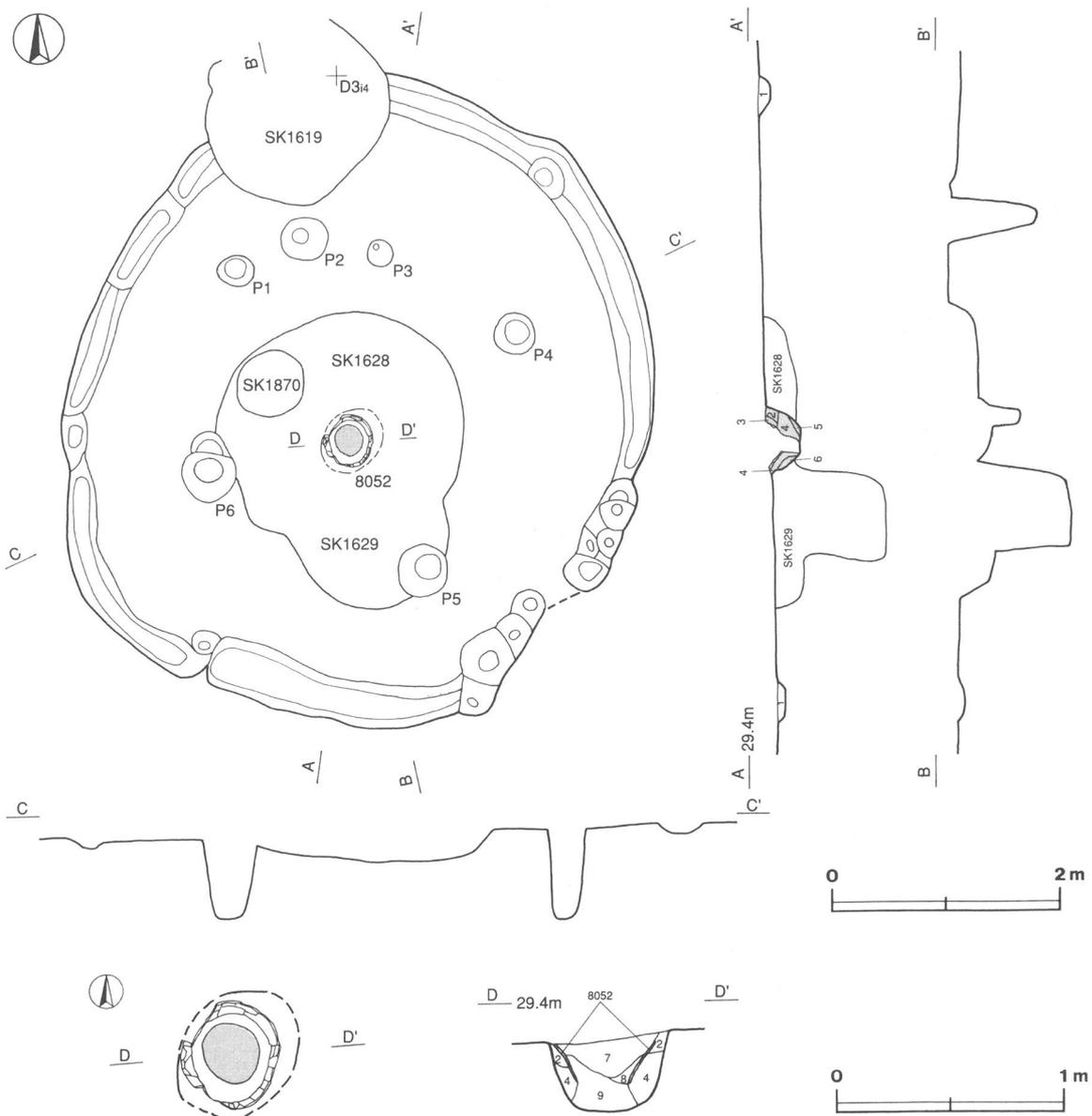
所見 出土土器が細片であるため明確な時期は不明であるが，中期中葉（阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期）の第1855号土坑より新しいことから，それ以降の縄文時代と考えられる。

第212号住居跡（第85・86図）

位置 調査2区の中央部，D3i4区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 第1628・1629号土坑の覆土上面に本跡の炉が構築されている。第1619号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は長径5.75m，短径5.10mの楕円形を呈する。主軸方向はN-36°-Eである。確認面が



第85図 第212号住居跡実測図

床面であるため壁は検出できなかつたが、壁溝によってプランが判明した。

床 ほぼ平坦であり、特に硬化した部分は認められなかつた。確認面からの深さ8～20cmの皿状の断面形をもつ壁溝が、ほぼ全周する。壁溝の一部には、ピット状の掘り込みが確認できた。

ピット 6か所。P2・P4・P5・P6は深さ72～81cmで、規模及び配置から支柱穴と考えられる。P1・P3の性格は不明である。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径61cm、短径50cm、深さ32cmの椀状の掘り方に、口縁部及び胴部下半を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設炉である。炉床は第9層下面で確認され、火熱を受けて赤変硬化している。なお第2～6層は、掘り方の覆土である。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|-------|--------------------------|
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子多量, ロームブロック少量 | 7 黒褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

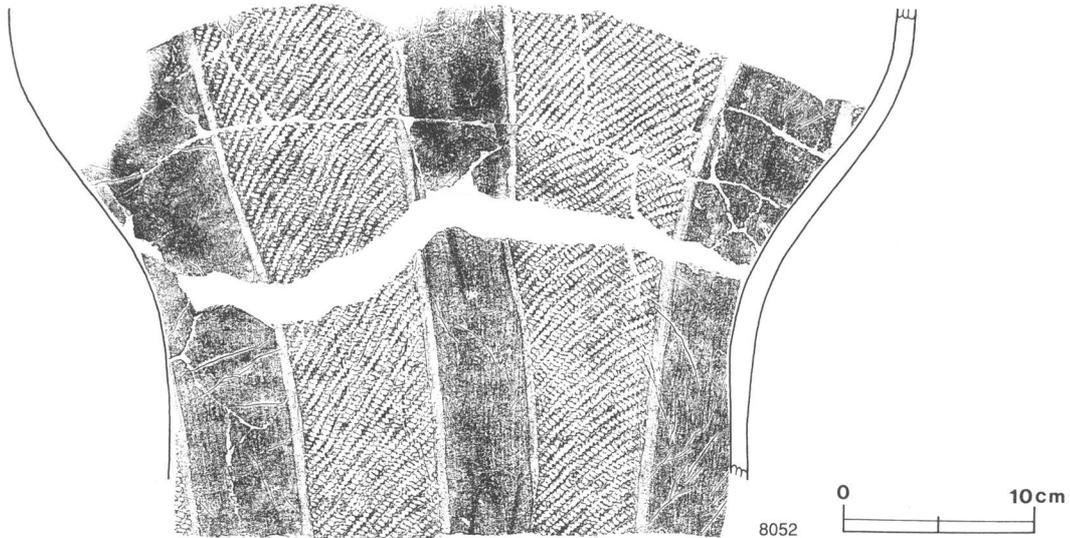
覆土 壁溝の覆土のみ確認できた。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片78点が出土している。8052の炉埋設土器を除きすべての土器が細片で、確認面及び壁溝の覆土から出土している。

所見 時期は、出土遺物から中期中葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第86図 第212号住居跡出土遺物実測図

第212号住居跡出土遺物観察表（第86図）

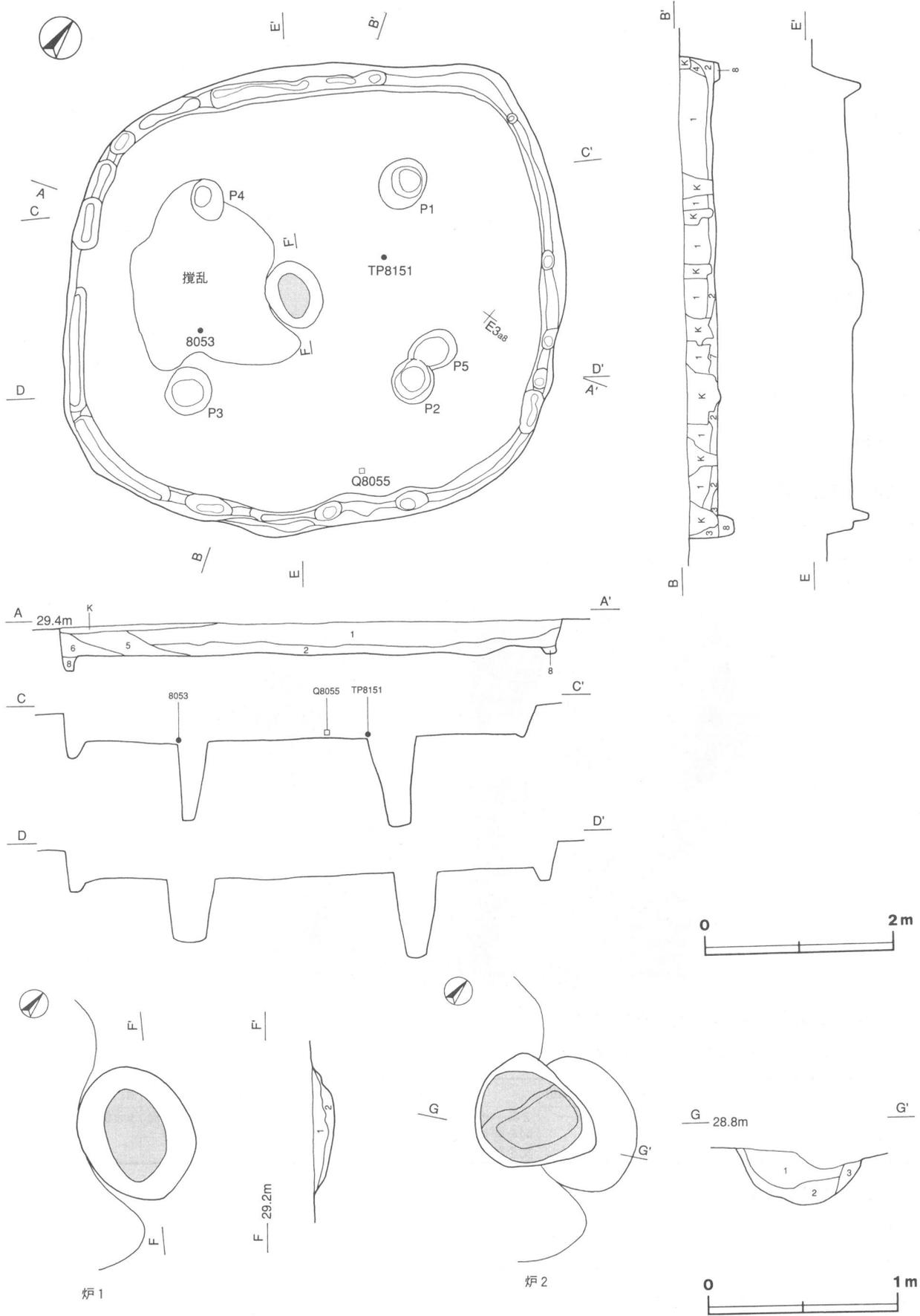
番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8052	縄文土器	深鉢	—	(25.2)	—	2条一組の沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐 にぶい橙	炉埋設土器	炭化物 附着 P L 40

第214号住居跡（第87～89図）

位置 調査2区の中央部、E3 a7区。住居跡群の外周域に位置する。

規模と形状 平面形は長軸5.25m、短軸4.90mの隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-50° -Eである。壁はほぼ直立し、壁高は25～35cmである。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。一部途切れる部分があるものの、深さ8～16cmの壁溝がほぼ全周す



第87图 第214号住居跡実測图

る。なお壁溝には、断続的にピット状に深く掘り込まれている箇所が認められ、壁柱穴との想定も可能である。
ピット 5か所。P1～P4は深さ70～95cmで、その規模及び配置から支柱穴と考えられる。P5の性格は不明である。

炉 2か所。ほぼ中央部に2基重複して検出された。炉1は、炉2の上面にやや北東にずれて構築されており、作り替えが想定される。長径74cm、短径58cmの楕円形を呈し、床面を皿状に12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉2は、炉1の下面で検出され、長径70cm、短径54cmの不整楕円形で、床面を30cmほど掘りくぼめた地床炉である。ともに炉床は、火熱により赤変硬化している。

炉1土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック微量 2 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック少量

炉2土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック・灰中量
 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、灰微量

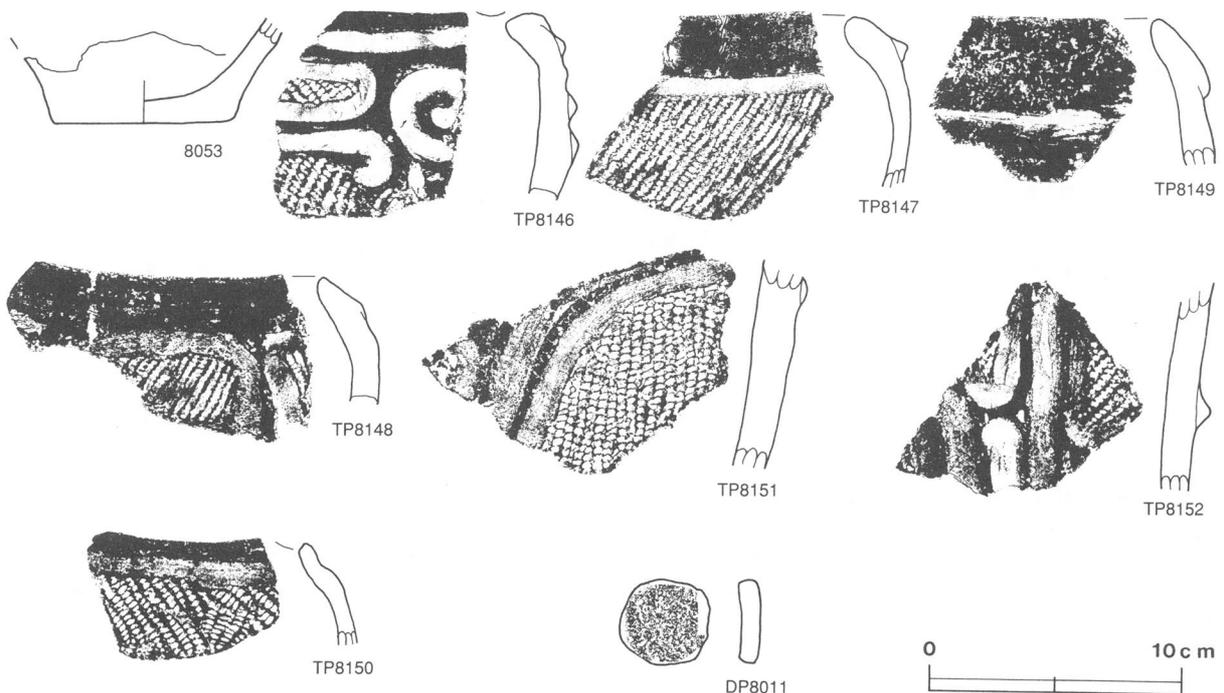
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。第8層は壁溝の覆土である。

土層解説

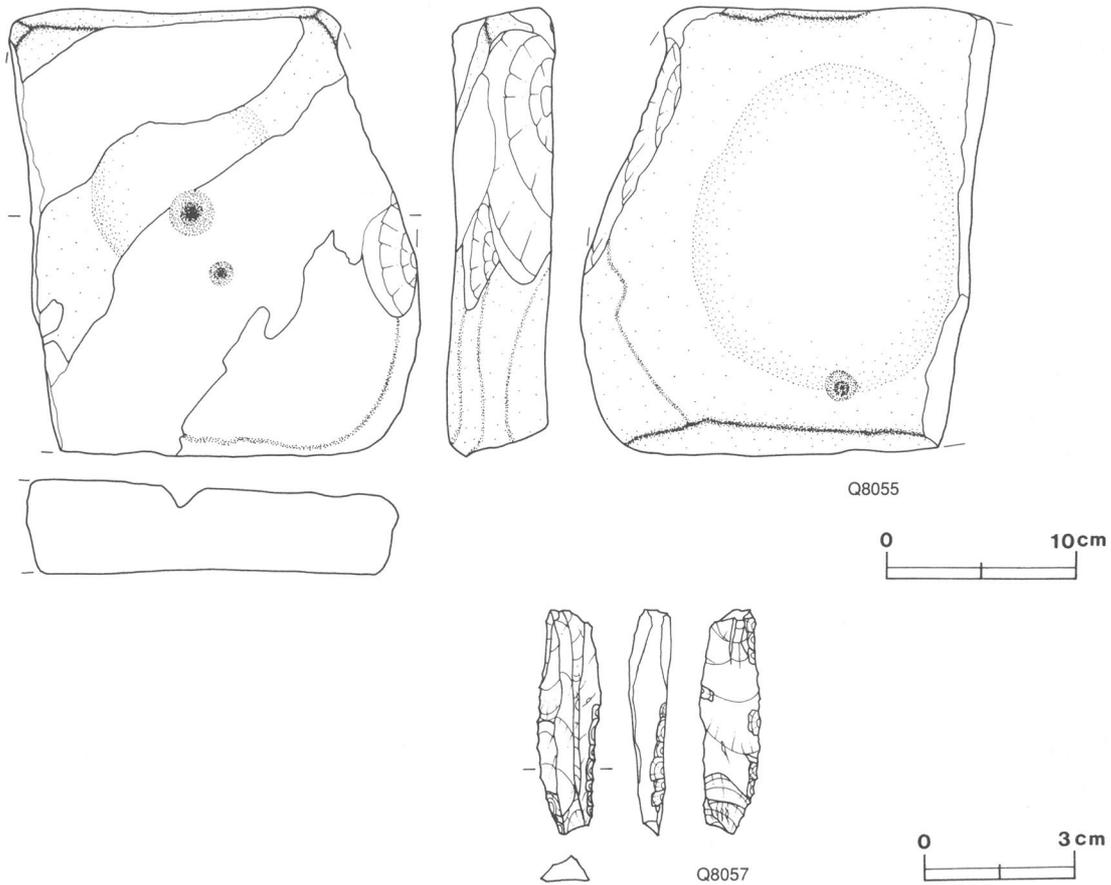
- 1 黒褐色 ロームブロック微量 5 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 2 黒褐色 ロームブロック少量 6 暗褐色 ローム粒子少量
 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
 4 暗褐色 ロームブロック少量 8 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片1169点、石皿1点、石鏃1点、不明石器1点、剥片1点、土器片円盤1点が出土している。土器のほとんどが細片で、確認面から覆土下層にかけて散在する状況で出土している。出土位置に特異な傾向は認められない。TP8146、TP8148の深鉢片はP4の覆土から出土しており、時期決定の指標となる遺物である。8053、TP8151の深鉢片は、床面からやや浮いた状況で出土している。Q8055の石皿は床面からの出土である。またTP8147、TP8150、TP8152の深鉢片、Q8057の二次加工痕を有する剥片及びDP8011の土器片円盤は、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第88図 第214号住居跡出土遺物実測図（1）



第89図 第214号住居跡出土遺物実測図(2)

第214号住居跡出土遺物観察表(第88・89図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8053	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	7.2	胴部下端無文。縦方向によく研磨されている。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土下層	
TP8146	縄文土器	深鉢	—	(7.4)	—	沈線に沿う隆帯による渦巻文・区画文。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	P4覆土	
TP8147	縄文土器	深鉢	—	(6.9)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	覆土	
TP8148	縄文土器	深鉢	—	(5.1)	—	微隆帯による区画文。区画内にはRLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	P4覆土	
TP8149	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	口縁部外面が肥厚する。無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄橙	覆土	
TP8150	縄文土器	深鉢	—	(4.1)	—	口縁部直下に沈線が巡る。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土	
TP8151	縄文土器	深鉢	—	(8.2)	—	2本一組の微隆帯による区画文。RLの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土下層	
TP8152	縄文土器	深鉢	—	(8.4)	—	微隆帯による区画文。RLRの複節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土	

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP8011	土器片円盤	3.4	3.5	0.9	12.6	長石・石英, 明黄褐	無文。周縁部を研磨。	覆土	P L59

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8055	石皿	23.9	(21.8)	5.3	(4533.5)	砂岩	両面とも機能面が皿状にわずかに凹む。凹石併用。	床面	
Q8057	剥片	(4.4)	1.2	0.9	(4.6)	チャート	二次加工痕を有する剥片。	覆土	

第216号住居跡 (第90図)

位置 調査2区の中央部、D3h7区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 第1890・1891号土坑の覆土上面に本跡の床が構築されている。第564・567号ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は長径3.40m、短径3.00mの楕円形である。主軸方向はN-40°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は7~10cmである。

床 ほぼ平坦であり、中央部に広い範囲で硬化面が認められる。

ピット 確認されなかった。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径74cm、短径70cmの円形を呈し、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床及び炉壁は、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|-------------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 | |

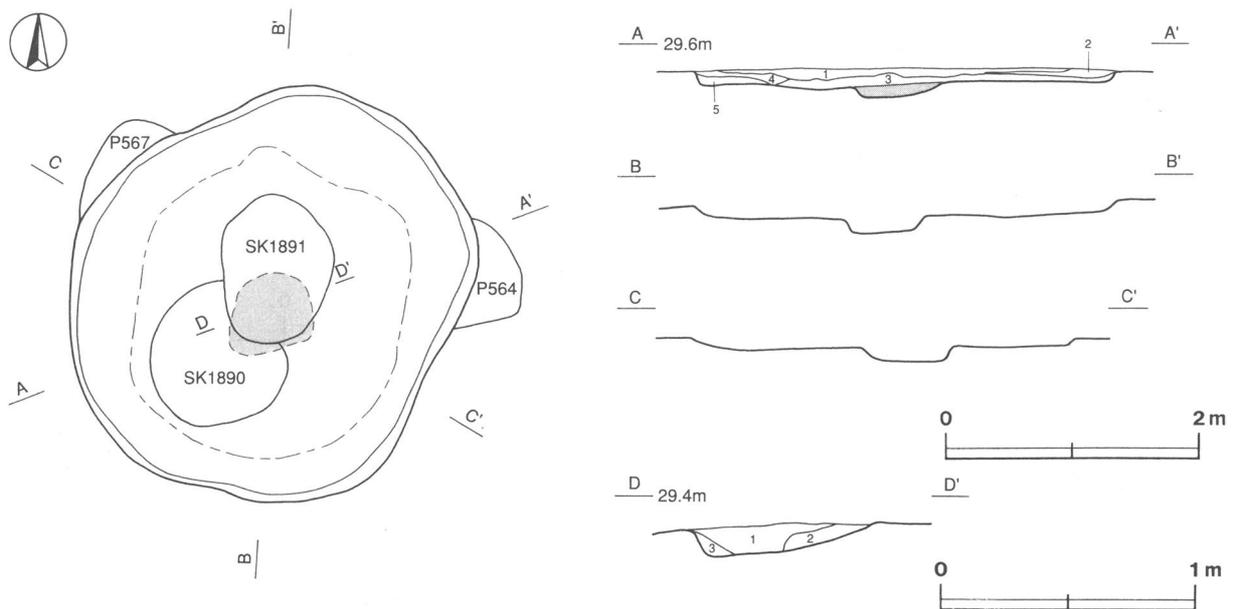
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 縄文土器片231点が覆土から散在する状況で出土している。いずれも細片であるため、抽出・図示できるものはなかった。

所見 覆土から出土した土器細片がすべて縄文土器片であることや住居の形態等から、縄文時代の住居跡であると考えられる。



第90図 第216号住居跡実測図

第217号住居跡（第91～93図）

位置 調査2区の北部，D3a7区。住居跡群域に位置する。

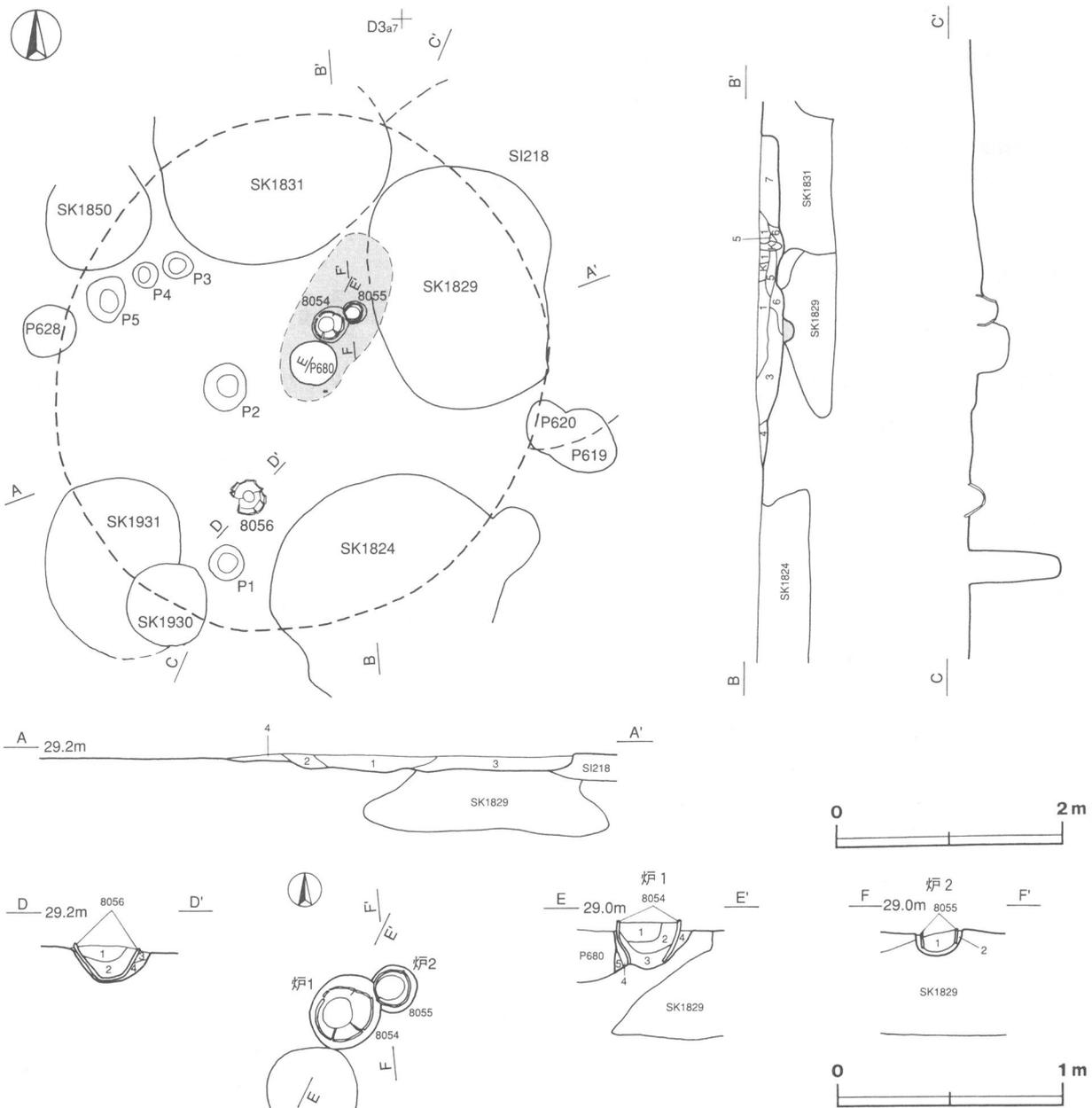
重複関係 第218号住居跡及び第1829・1831号土坑の覆土上層を掘り込んでおり，第680号ピットに炉体を掘り込まれている。第1824・1850号土坑及び第620・628号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 土層断面によって観察された壁及び炉・出入口ピットの位置から，長径4.60m，短径4.30mの円形と推定される。確認された壁は外傾して立ち上がり，壁高は12～14cmである。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 5か所。P1は，床面からの深さ82cmで土器埋設炉と屋内埋設土器を結ぶ直線上に位置することから，出入口に伴うピットと考えられる。P2～P5の性格は不明である。

炉 2か所。ほぼ中央部に大小2基（炉1，炉2）の土器埋設炉が検出された。炉1は，長径35cm，短径30cm，深さ21cmの楕円形の掘り方に，胴部下半を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設炉である。掘り方と土



第91図 第217号住居跡実測図

器の間の充填土は焼土を多く含み、火熱により赤変硬化している。一方、炉2は、径21cm、深さ11cmの円形の掘り方に深鉢の胴部を正位に埋設している。掘り方と土器間の充填土は、焼土ブロックを少量含むものの炉1ほどの赤変硬化は認められず、炉として機能していたか否かの判断は難しい。炉1と炉2の新旧関係は不明である。また、2基の炉を中心に南北160cm、東西70cmほどの楕円形の範囲で焼土粒子の広がりが認められ、その南西端には、火熱により赤化した炉石と思われる礫が検出されたが、本炉との関係は不明である。

炉1 土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック微量 | 5 暗赤灰色 | 焼土ブロック中量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | | |

炉2 土層解説

- | | | | |
|-------|--------|--------|----------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量 | 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量 |
|-------|--------|--------|----------|

土器埋設ピット 南部の床面を16cmほど掘り込んで、口縁部～胴部上半を欠く深鉢が埋設されていた。埋設土器内の覆土には骨粉あるいは破碎された貝類と考えられる白色の粒子が認められた。第3・4層は掘り方の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、白色粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |

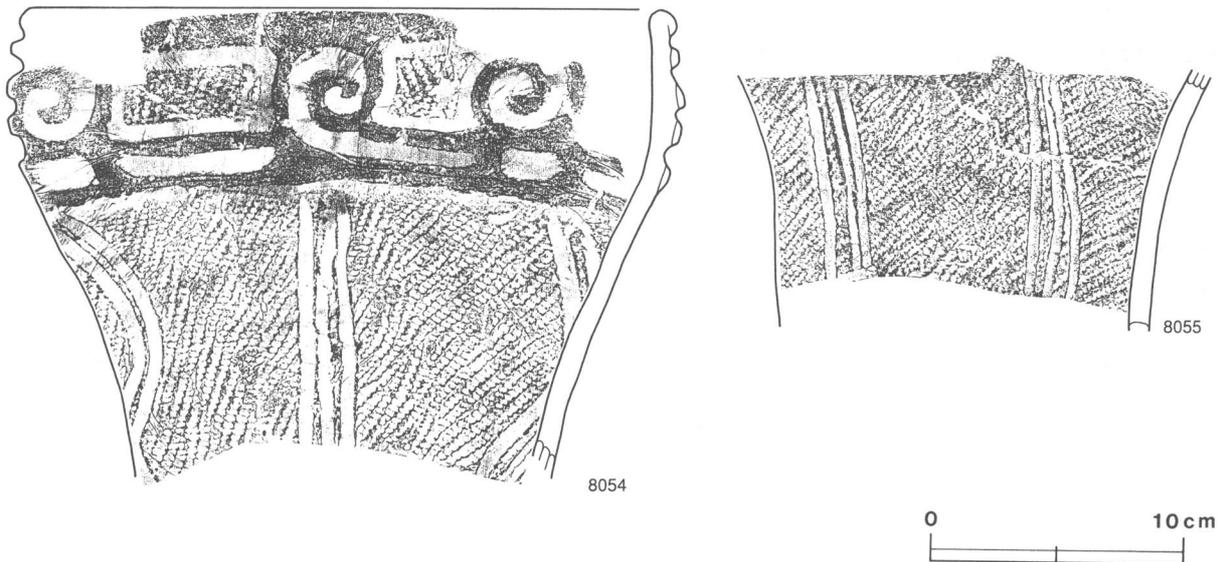
覆土 7層に分層される。不自然な堆積状況を示していることから人為堆積の可能性が考えられる。

土層解説

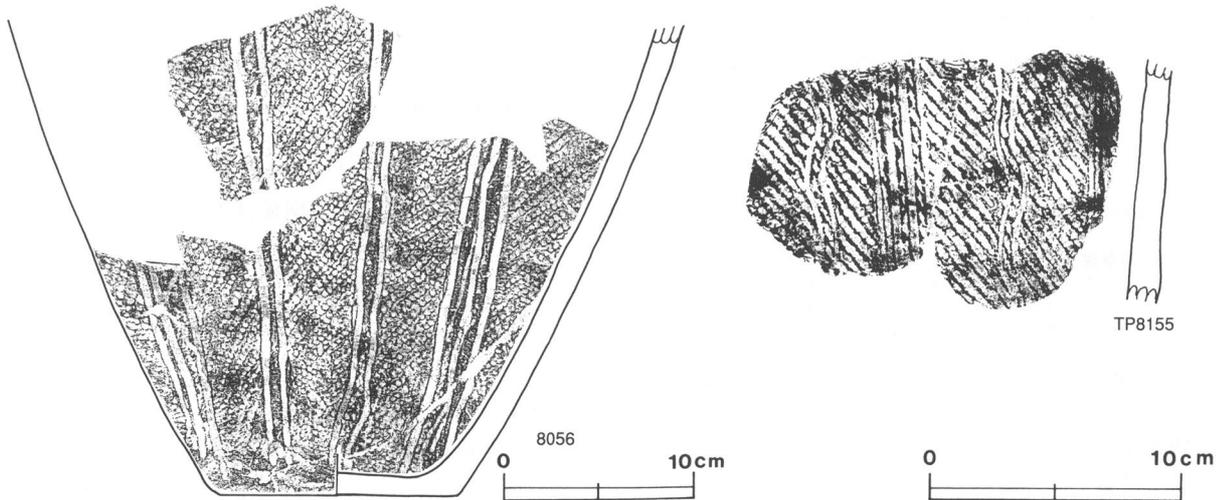
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片149点が出土している。8054・8055の深鉢片は炉埋設土器であり、時期決定の指標となる遺物である。TP8155の深鉢片は覆土からそれぞれ出土している。8056の深鉢片は土器埋設ピット内の屋内埋設土器である。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期後葉（加曾利EⅠ式期）と考えられる。8056の土器埋設ピットから出土した屋内埋設土器は、本跡との時期差が認められ、土器埋設ピットと含めて本跡に伴わない可能性も考えられる。



第92図 第217号住居跡出土遺物実測図（1）



第93図 第217号住居跡出土遺物実測図（2）

第217号住居跡出土遺物観察表（第92・93図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8054	縄文土器	深鉢	[24.6]	(18.5)	—	沈線に沿う隆帯による渦巻文・区画文。胴部は沈線による懸垂文。R Lの単節縄文。	長石・雲母	普通	にぶい橙	炉埋設土器	口縁部被熱痕, P L 40
8055	縄文土器	深鉢	—	(10.3)	—	3条一組の沈線による懸垂文。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉埋設土器	胴部被熱痕
8056	縄文土器	深鉢	—	(25.1)	12.9	3条一組と2条一組の沈線による懸垂文間を磨り消す。R Lの単節縄文を施文。	長石・石英・赤色粒子	普通	浅黄橙	屋内埋設土器	
TP8155	縄文土器	深鉢	—	(9.8)	—	4条一組の沈線と2条一組の波状沈線による懸垂文。L Rの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	明褐	覆土	

第218号住居跡（第94図）

位置 調査2区の北部，D3 a8区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1829・1830号土坑の覆土上面に本跡が構築されている。また，第1838号土坑を掘り込んでおり，第217号住居に掘り込まれている。また第1832号土坑及び第619・620号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 残存する壁の様相及び土層断面から，径3.30mの円形と推定される。残存する壁はほぼ直立し，壁高は15cmである。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 確認されなかった。

炉 確認されなかった

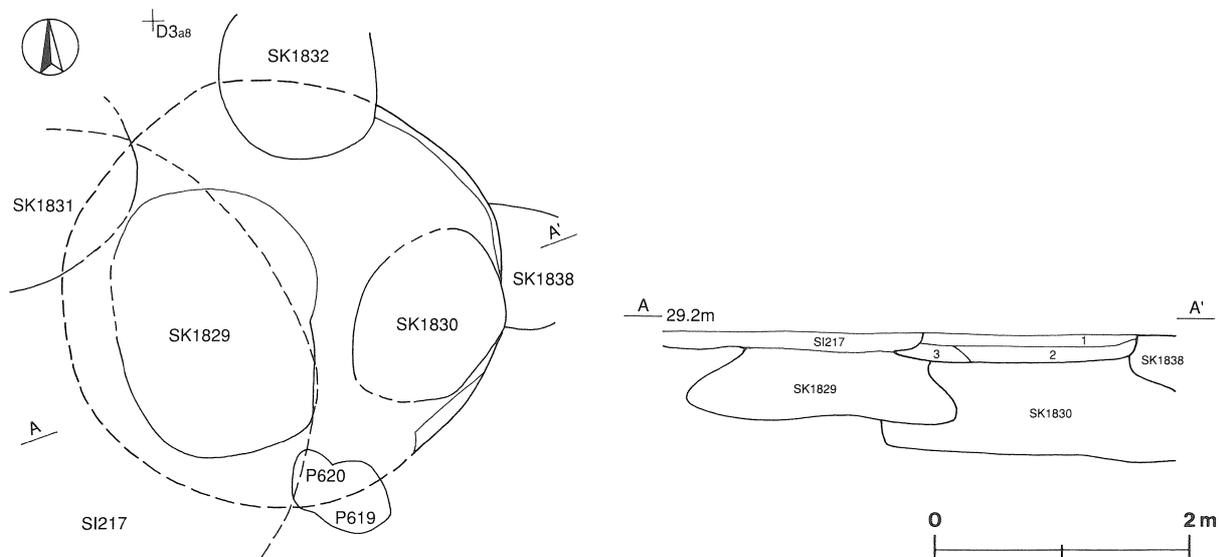
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量，鹿沼パミスブロック微量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は，遺物が出土していないため明確ではないが，中期後葉（加曽利 E I 式期）の第217号住居跡より古く，中期中葉（阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期）の第1829・1830号土坑より新しいことから，中期中葉～後葉にかけての時期（阿玉台Ⅳ式期～加曽利 E I 式期）と考えられる。



第94図 第218号住居跡実測図

第219号住居跡 (第95図)

位置 調査2区の中央部, D3j6区。住居跡群の外周域に位置する。

確認状況 確認面において, 炉とピットを検出した。

規模と形状 確認面が床面であったため, 正確な規模と形状は不明であるが, 炉と柱穴の配置から径5.00mの円形と推定される。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 6か所。P1～P4は深さ33～54cmで, 規模及び配置から主柱穴と考えられる。P5・P6の性格は不明である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

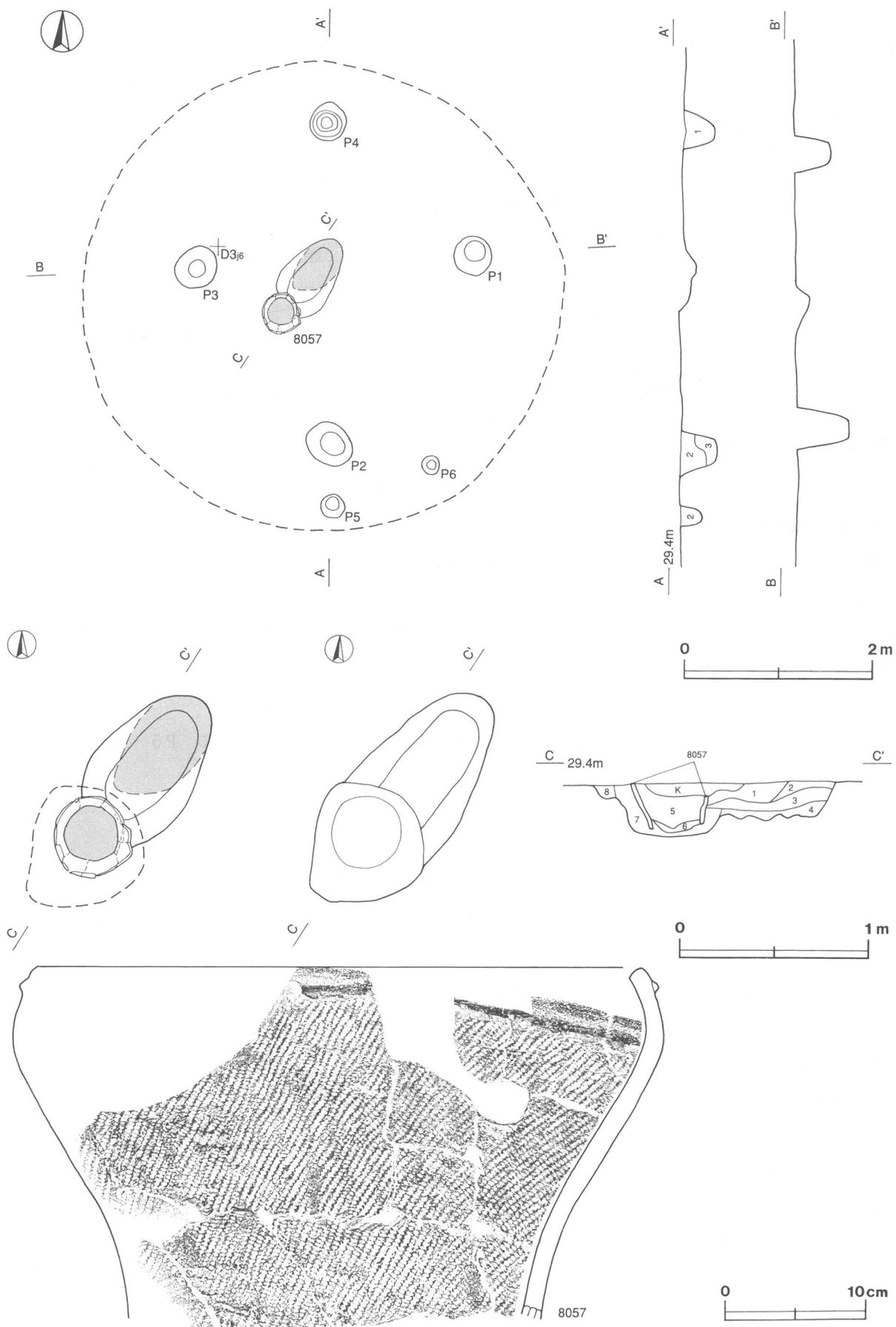
炉 ほぼ中央部に位置すると推定される。長径90cm, 短径58cm, 深さ18～20cmの楕円形に掘りくぼめられた炉部と, 径65cm, 深さ28cmほどの円形の掘り方に胴部下半を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設部からなる。炉部と土器埋設部との間には新旧関係は認められず, 複式炉的な使われ方をしていたことが想定できる。埋設土器内覆土の第6層は炉床と考えられ, 火熱により赤変硬化している。第7・8層は埋設土器掘り方の埋土である。また炉部の炉床から炉壁北東部にかけての第4層に火熱による赤変硬化が認められ, 土器埋設部の炉床より赤変硬化の度合いが高い。

炉土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------|--------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 におい赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 縄文土器片53点が出土している。土器の多数が細片で確認面に散在する状況で出土しており, 本跡の遺物と判断できるものは少ない。炉埋設土器である8057の深鉢のみが本跡に伴う遺物であると判断できた。

所見 時期は, 炉埋設土器である8057から中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。



第95图 第219号住居跡・出土遺物実測図

第219号住居跡出土遺物観察表（第95図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8057	縄文土器	深鉢	[42.6]	(25.3)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	にぶい黄橙	炉埋設土器	炭化物附着

第222号住居跡（第96・97図）

位置 調査2区の南部，E3j3区。

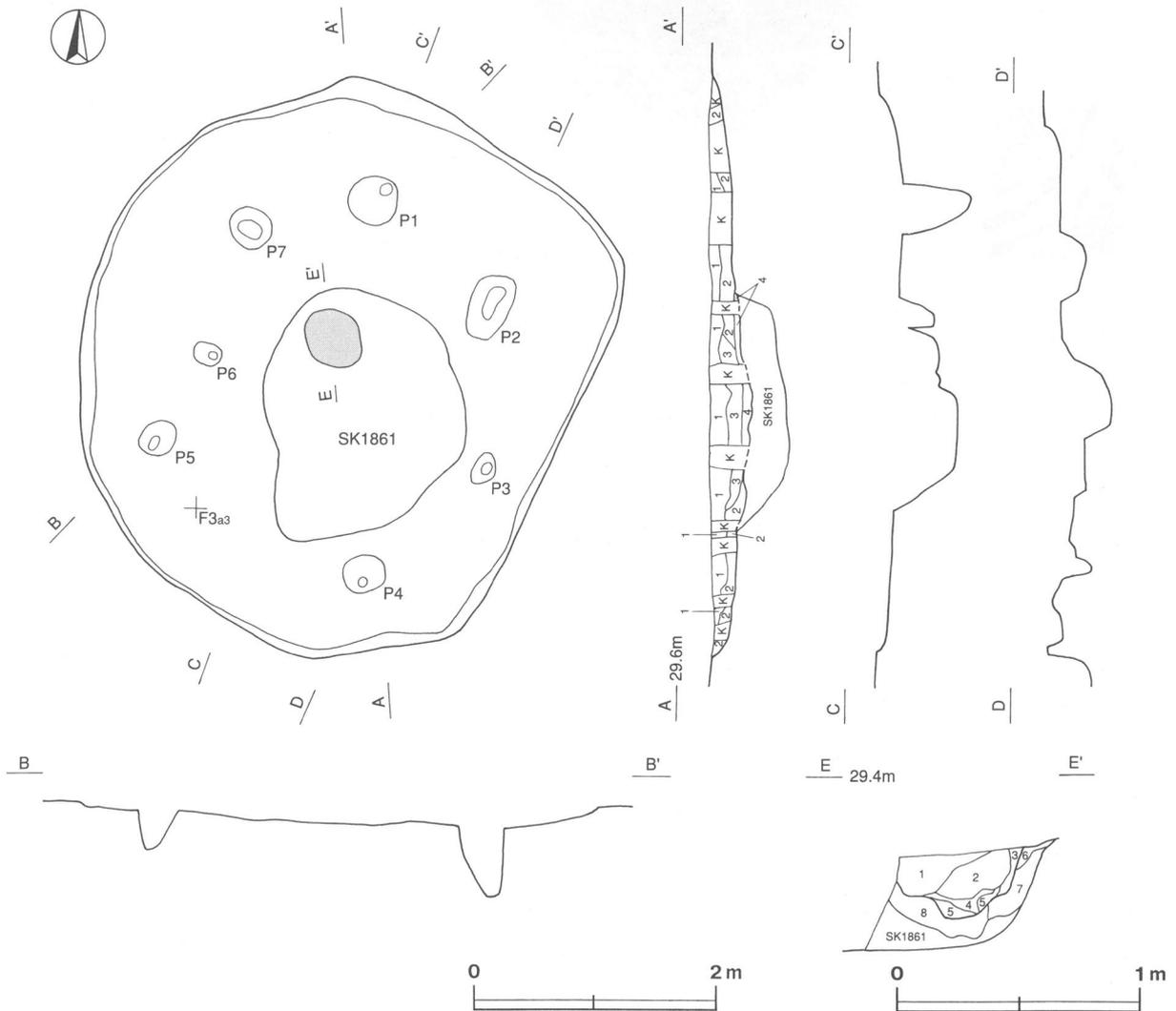
重複関係 第1861号土坑の覆土上面に構築されている。

規模と形状 平面形は長径4.55m，短径4.05mの楕円形である。主軸方向はN-23°-Eである。壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がり，壁高は5～10cmである。

床 中央部の第1861号土坑と重複する部分がややくぼんでいる他は，ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 7か所。P1・P2・P4・P5は深さ22～58cmで，やや規則性を欠いているが規模及び配置から支柱穴と考えられる。P3・P6・P7は深さが8～12cmと浅いが，炉を中心に環状に巡っていることから，補助的な柱穴の可能性はある。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径54cm，短径46cmの楕円形を呈する地床炉で，床面を25cmほど掘りく



第96図 第222号住居跡実測図

ほめて炉床としている。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。第6～8層の掘り方の埋土はロームブロック・粒子を中量含み、火熱により硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化物少量 |

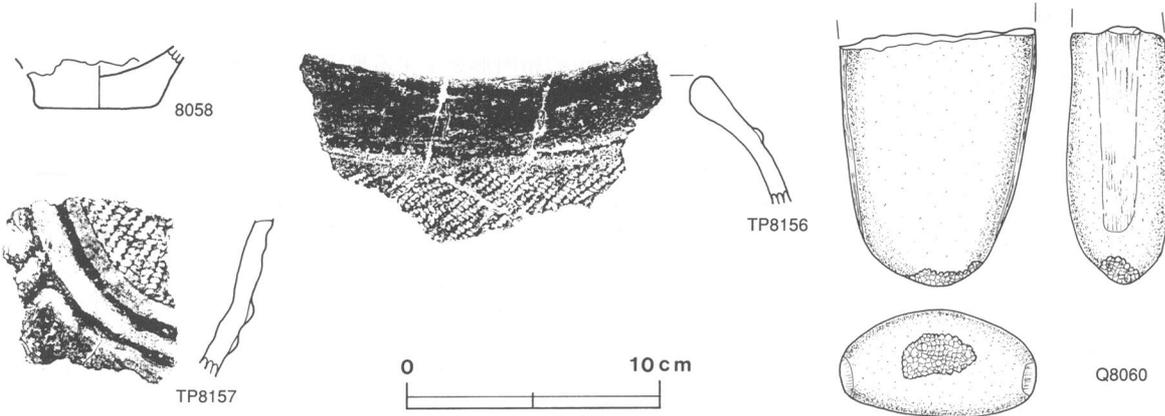
覆土 4層に分層される。全体的にロームブロックをやや多目に含んでいる。また第4層は、第1～3層に比べて締まりがある。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片203点, 磨石1点が出土している。すべての土器が細片で、覆土から出土している。8058, TP8156, TP8157の深鉢片は覆土上層から出土している。Q8060の磨石は床面から出土している。

所見 時期は、出土土器がいずれも細片のため明確ではないが、大半が中期後葉（加曾利EⅢ～Ⅳ式期）の土器片であったことや住居の形態等から、中期後葉（加曾利EⅢ～Ⅳ式期）と考えられる。



第97図 第222号住居跡出土遺物実測図

第222号住居跡出土遺物観察表（第97図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8058	縄文土器	深鉢	—	(2.0)	5.0	胴部下端無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土上層	
TP8156	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	口唇部直下に微隆帯が巡る。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土上層	
TP8157	縄文土器	深鉢	—	(6.3)	—	2本一組の微隆帯により文様を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土上層	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8060	磨石	(10.2)	(7.7)	4.2	(451.1)	砂岩	両側縁に使用痕。敲石併用、敲打痕1か所。	床面	

第224号住居跡（第98・99図）

位置 調査2区の中央部, D4il区。住居跡群の外周域に位置する。

規模と形状 平面形は、径4.15mほどの円形と推定される。

床 ほぼ平坦であり、全体がよく踏み締まっている。壁溝は北側で一部確認できなかったものの、全周して

いたと推定される。

ピット 13か所。深さは、P2・P3・P5・P8・P10～P13が18～38cm，P1・P6・P7・P9が40～53cmであり，これらのピットは，炉を中心に環状に巡っていることから柱穴と考えられる。P4は深さ8cmと他のピットと比べて浅く，性格は不明である。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径79cm，短径62cmの楕円形で，床面を25cmほど掘りくぼめて炉床としている。北東炉壁際に火熱を受けた石皿が出土しており，炉石に転用されたものと推定される。住居が使用されている時期には，石囲炉として機能していたと考えられる。

炉土層解説

- | | |
|------------------------------------|-------------------------|
| 1 黒色 焼土ブロック少量，ローム粒子微量 | 3 暗赤褐色 ローム粒子少量，焼土ブロック微量 |
| 2 極暗赤褐色 ロームブロック中量，ローム粒子・灰少量，砂質粘土微量 | |

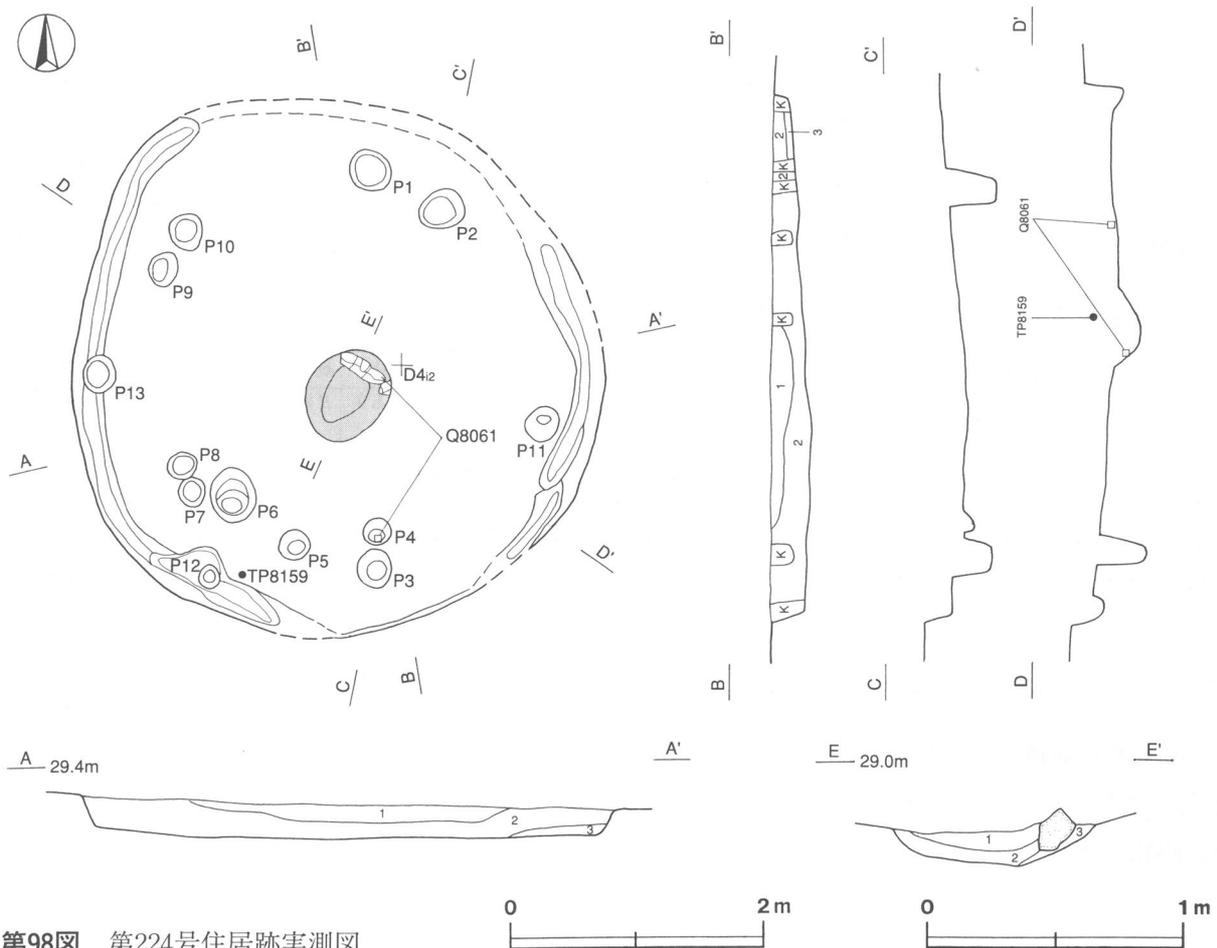
覆土 3層に分層される。全体的にローム粒子を含み，やや締まりがある。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

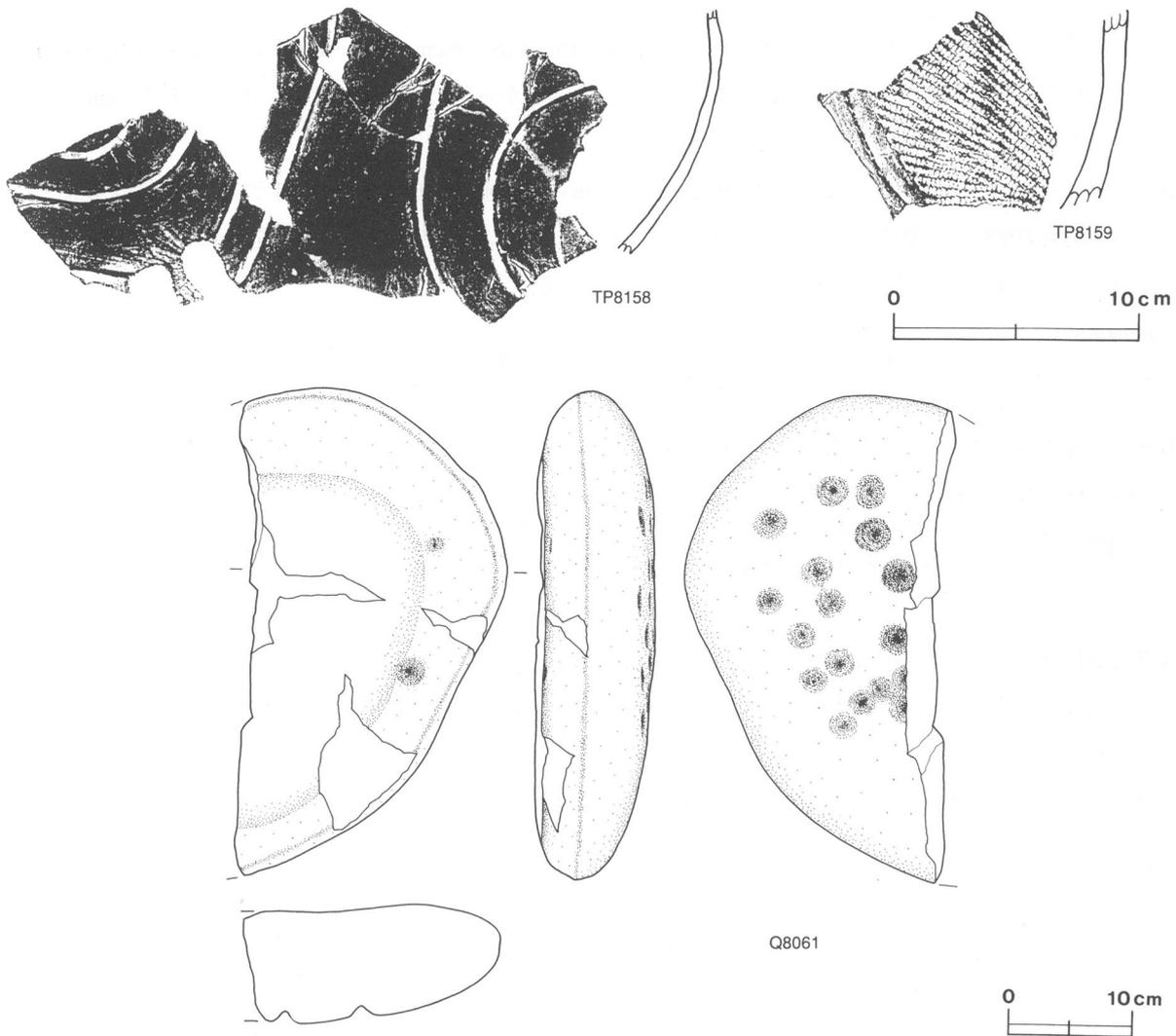
- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | |

遺物出土状況 縄文土器片703点，凹石1点，石核1点が出土している。ほとんどの土器が細片で，覆土に散在する状況で出土している。TP8158の深鉢片は床面からやや浮いた状況で，TP8159の深鉢片は覆土上層からそれぞれ出土している。Q8061の石皿は北側の炉壁から出土しており，炉石に転用されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第98図 第224号住居跡実測図



第99図 第224号住居跡出土遺物実測図

第224号住居跡出土遺物観察表（第99図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8058	縄文土器	壺	—	(10.0)	—	微隆帯による渦巻文。器面はよく研磨されている。	長石・石英	良好	褐灰	覆土下層	外面赤彩
TP8159	縄文土器	深鉢	—	(7.4)	—	微隆帯により文様を描出。L・Rの単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	良好	橙	覆土上層	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8061	石皿	(39.6)	(21.8)	(9.7)	(9480.1)	砂岩	表面は皿状に凹む。凹石併用。	炉石	

第233号住居跡（第100図）

位置 調査2区の中央部，D3f8区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 奈良・平安時代の第220号住居に掘り込まれている。第1895・1935号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が検出されなかったため，規模及び形状は不明である。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 5か所。P1～P4は深さ20～40cmで、その規模及び配置から主柱穴と考えられる。P5の性格は不明である。

P3土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

P4土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

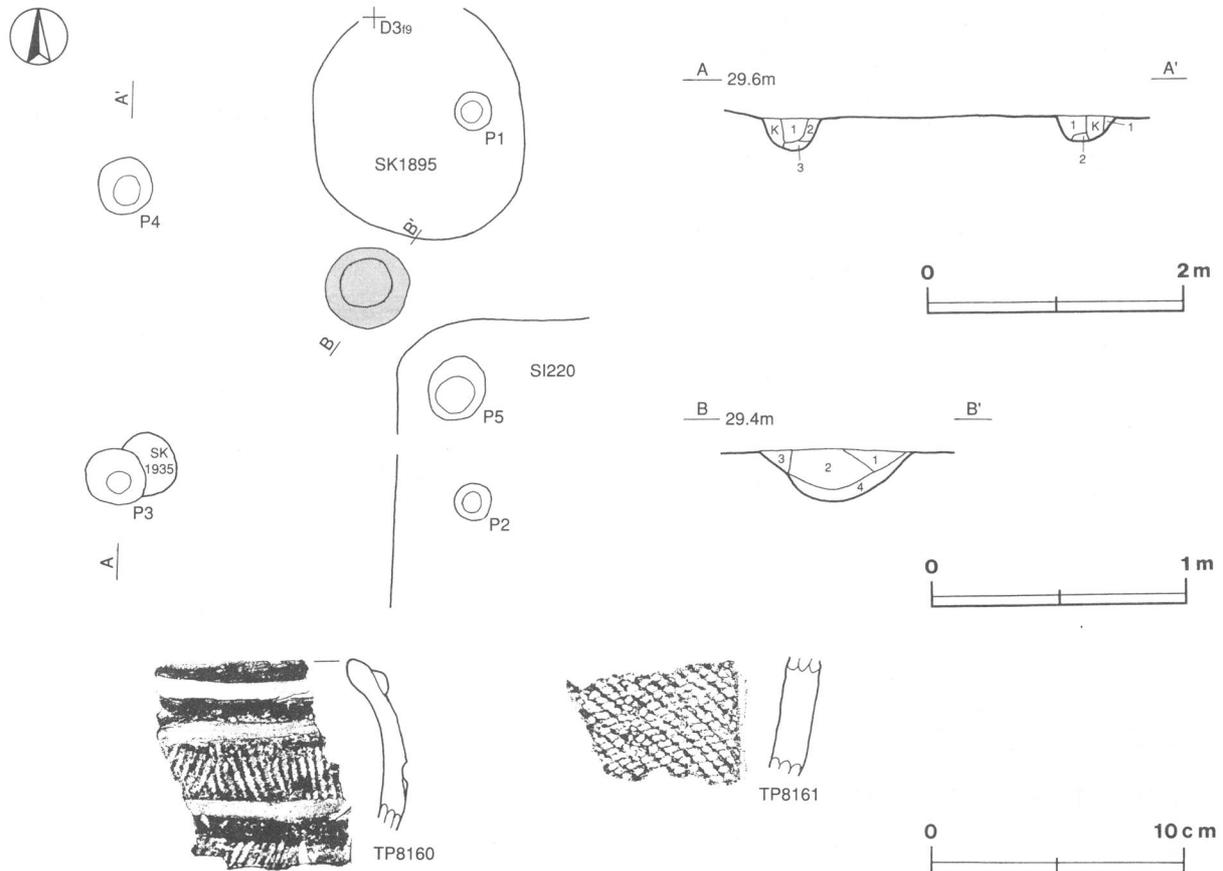
炉 主柱穴の配置との関係から、ほぼ中央部に付設されていたと推定される。径68cmの円形を呈し、床面を20cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量, ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック中量, 炭化物少量

遺物出土状況 縄文土器片26点が、確認面及び炉覆土中に散在する状況で出土している。出土位置に特異な傾向は認められない。TP8160, TP8161の深鉢片は、ともに炉の覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利E I～II式期）と考えられる。



第100図 第233号住居跡・出土遺物実測図

第233号住居跡出土遺物観察表（第100図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8160	縄文土器	深鉢	—	(6.9)	—	口縁部は沈線が沿う隆帯文。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消す。Rの無節縄文。	長石・石英・雲母	良好	にぶい褐	炉覆土	
TP8161	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	沈線による懸垂文。LRの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	浅黄橙	炉覆土	

第235号住居跡（第101図）

位置 調査2区の中央部，D4g1区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 奈良・平安時代の第221号住居に掘り込まれている。

規模と形状 西側を第221号住居に掘り込まれているため全容はつかめないが，平面形は径2.55mの円形と推定される。壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がり，壁高は6～9cmである。

床 ほぼ平坦である。全体的によく踏み締まっている。

ピット 確認されなかった。

炉 長径46cm，短径42cmの円形を呈し，床面を23cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

4 暗褐色 焼土ブロック少量，ロームブロック微量

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

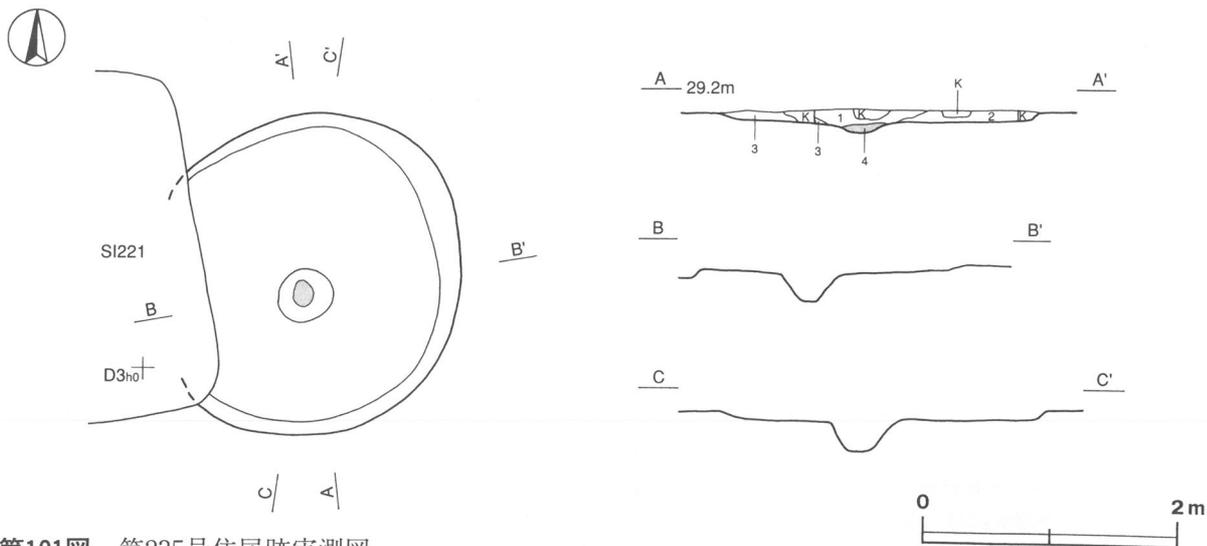
1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量

2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片58点が，覆土に散在する状況で出土している。いずれも細片であるため，抽出・図示できるものはなかった。

所見 覆土から出土した土器片がすべて縄文土器片であることや住居の形態等から，縄文時代の住居跡であると考えられる。



第101図 第235号住居跡実測図

第236号住居跡（第102・103図）

位置 調査2区の中央部，D3g9区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 奈良・平安時代の第220号住居及び第575・576号ピットに掘り込まれている。

規模と形状 平面形は長径5.67m，短径4.06mの隅丸長方形と推定される。推定される主軸方向はN-26°-Eである。壁は外傾して立ち上がり，壁高は5～8cmである。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 5か所。P1・P4は深さ42・28cm，P2・P3は深さ89・80cmで，南側の2か所が北側のそれより極端に深い，配置から支柱穴と考えられる。P5の性格は不明である。

炉 中央部やや北寄りに付設されている。径35cmほどの円形の掘り方に、胴部下半を欠く深鉢を正位に埋設した土器埋設炉である。埋設土器の周囲は長径104cm、短径90cmの楕円形の範囲で、焼土粒子を含む黒褐色土の広がり確認された。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

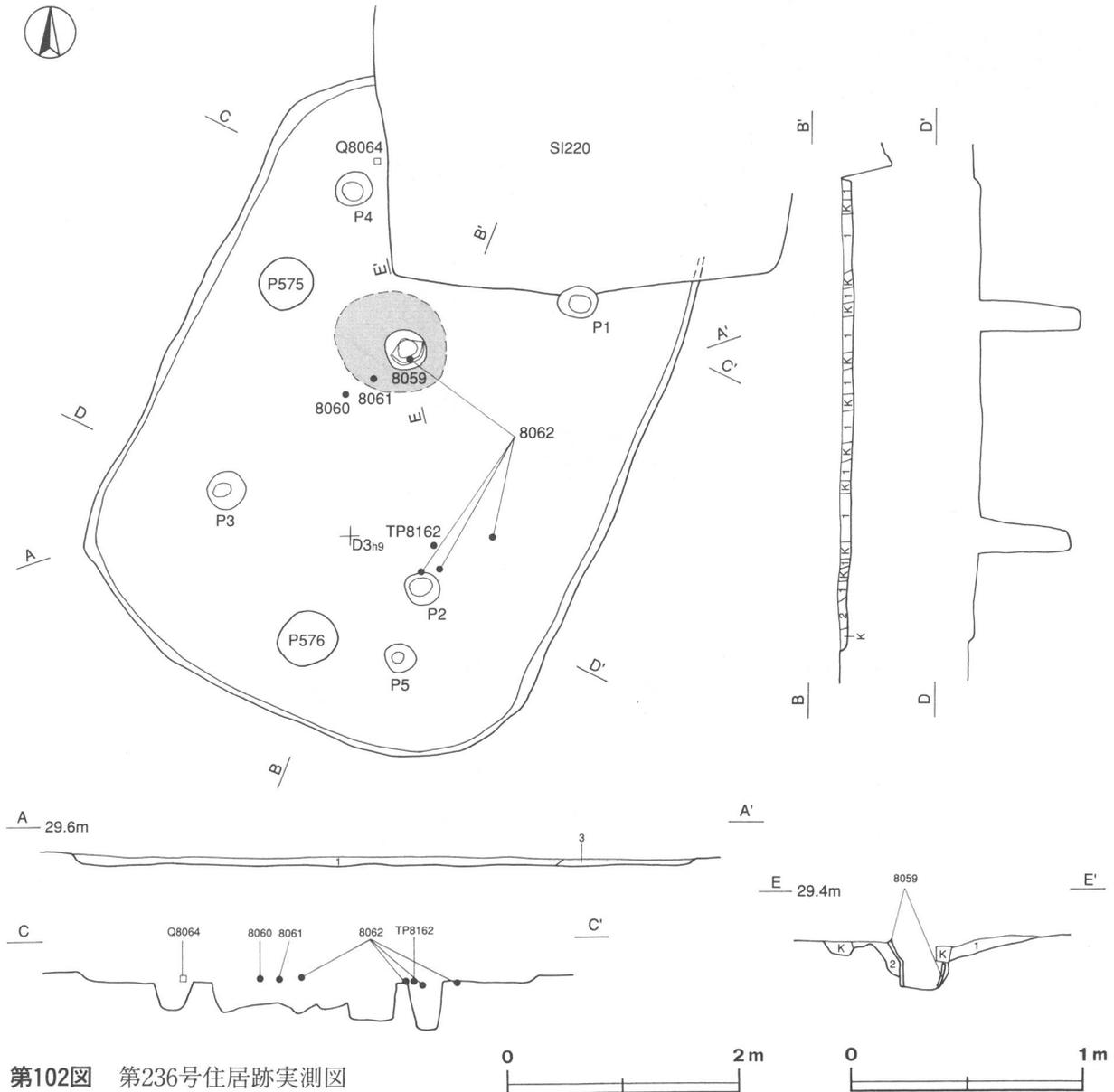
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

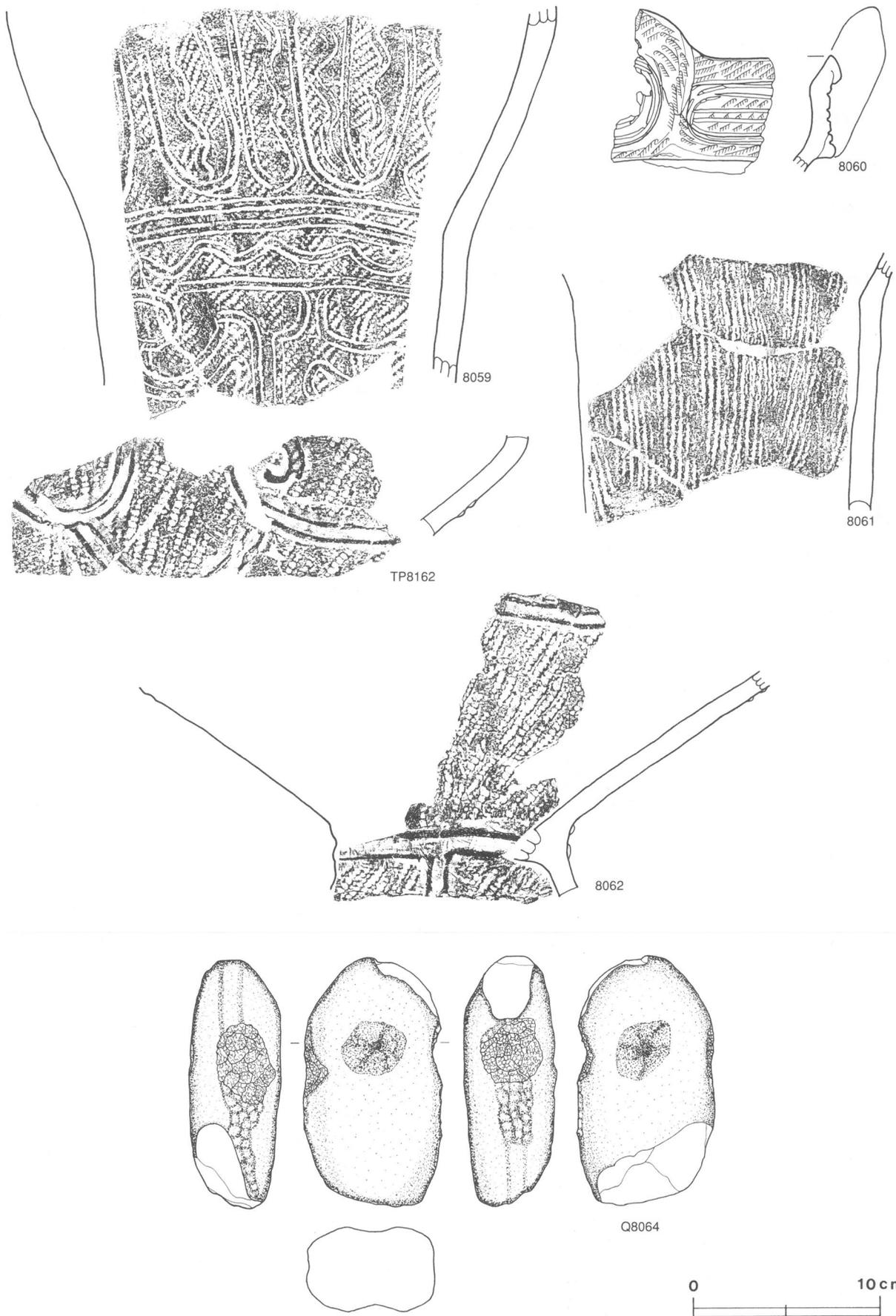
- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片346点、敲石1点、石核1点が出土している。覆土が薄いことから、多くの土器が床面もしくは床面からやや浮いた状態で散在しているなかで、特に炉の近辺に集中して出土している。8059の深鉢片は炉の埋設土器である。8061は炉の確認面から出土している。8060の深鉢片及びQ8064の敲石は、床面から出土している。また8062の台付鉢片は、南東部の床面と炉の確認面に散在していた破片が接合したものであり、近接して出土したTP8162とは同一個体である。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利E I式期）と考えられる。



第102図 第236号住居跡実測図



第103图 第236号住居跡出土遺物実測図

第236号住居跡出土遺物観察表 (第103図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8059	縄文土器	深鉢	—	(20.0)	—	半截竹管による平行沈線により文様を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙褐灰	炉埋設土器	
8060	縄文土器	深鉢	—	(8.7)	—	隆帯による区画文。隆帯の背にLの無節縄文。区画内には半截竹管による平行沈線文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	床面	
8061	縄文土器	深鉢	—	(13.7)	—	撚糸文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉覆土	
8062	縄文土器	台付鉢	—	(12.0)	—	2本一組の隆帯文。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	にぶい赤褐	床面	TP8162と同一
TP8162	縄文土器	台付鉢	—	(5.4)	—	2本一組の隆帯により渦巻文等を描出。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明赤褐	床面	8062と同一

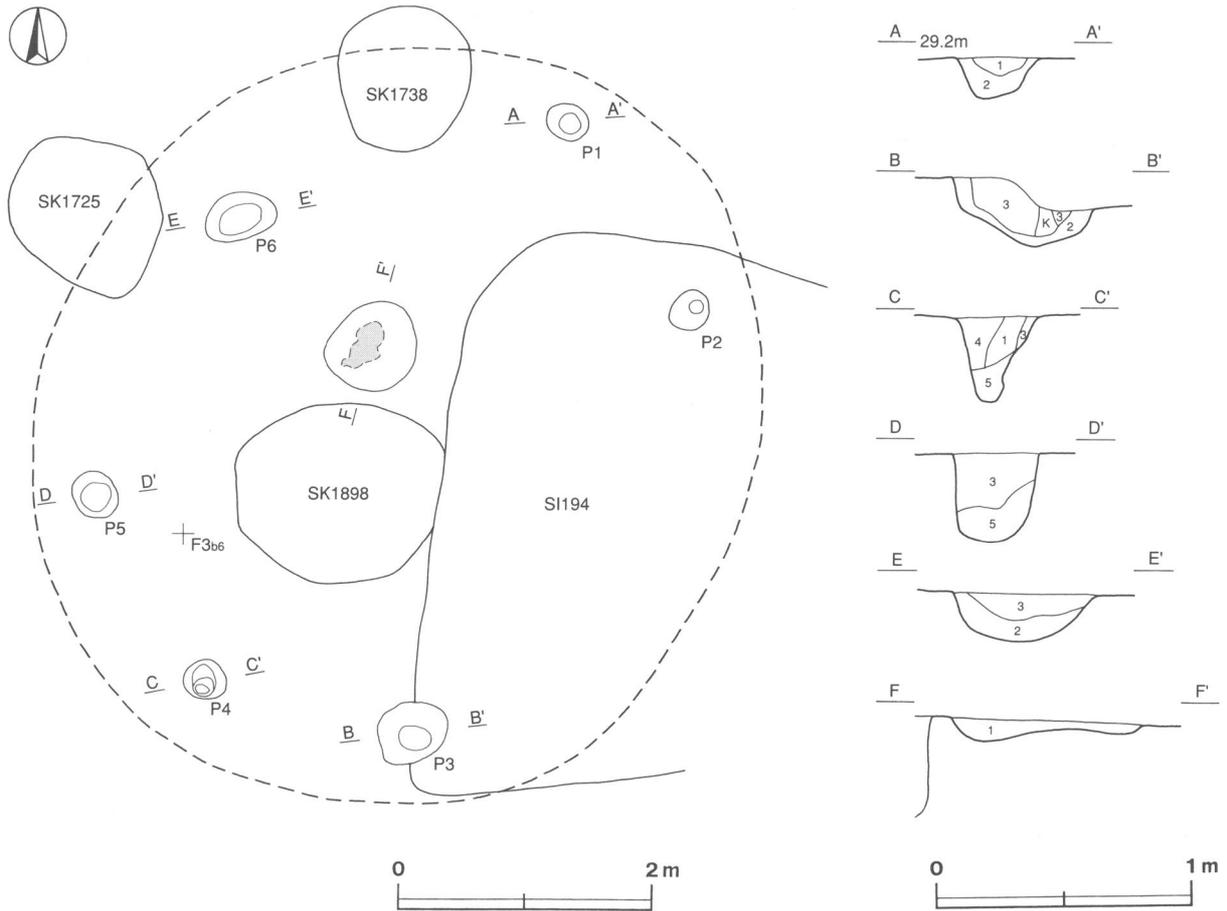
番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8064	蔽石	(13.3)	(7.8)	4.8	(707.7)	砂岩	両側縁が鐵釘により挟れる。凹石併用, 表裏面各1孔。	床面	

第239号住居跡 (第104図)

位置 調査2区の南部, F3 a6区。

重複関係 第194号住居に掘り込まれている。第1725・1738・1898号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が検出されなかったため明確ではないが、炉及び柱穴の配置から、平面形は長径6.15m、短径



第104図 第239号住居跡実測図

5.65mの円形と推定される。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 6か所。P1～P6は深さ18～35cmで、規模及び配置から柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- | | |
|------------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ロームブロック多量 | 5 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 | |

炉 中央部やや北寄りに位置する。長径73cm、短径67cmの円形を呈し、床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺物が出土していないため明確ではないが、住居の形態及び中期後葉（加曾利E IV式期）の第194号住居に掘り込まれていることから、加曾利E IV式期以前の縄文時代と考えられる。

第240号住居跡（第105図）

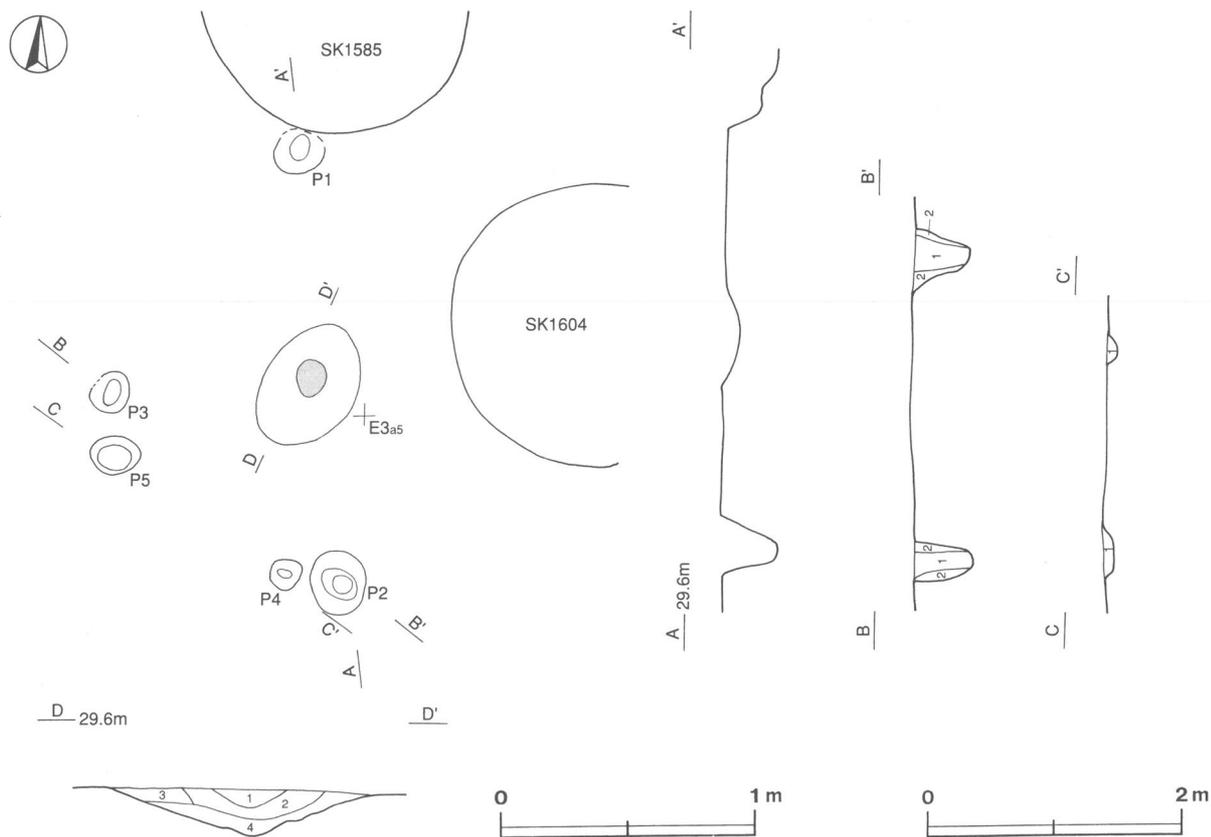
位置 調査2区の中央部、D3j4区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 第1585・1604号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が検出されなかったため、規模及び形状は不明である。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 5か所。P1～3は深さ26～46cmであり、その規模及び配置から主柱穴と考えられる。P4・5の性格は不明である。



第105図 第240号住居跡実測図

P 2・P 3 土層解説

- | | |
|-------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 2 暗褐色 ローム粒子中量 |
|-------------------------|---------------|

P 4・P 5 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量

炉 主柱穴の配置から、ほぼ中央部に付設されていたと推定される。長径102cm、短径72cmの楕円形を呈し、床面を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・白色粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は、遺物が出土していないため明確ではないが、住居の形態から縄文時代と考えられる。

第241号住居跡 (第106図)

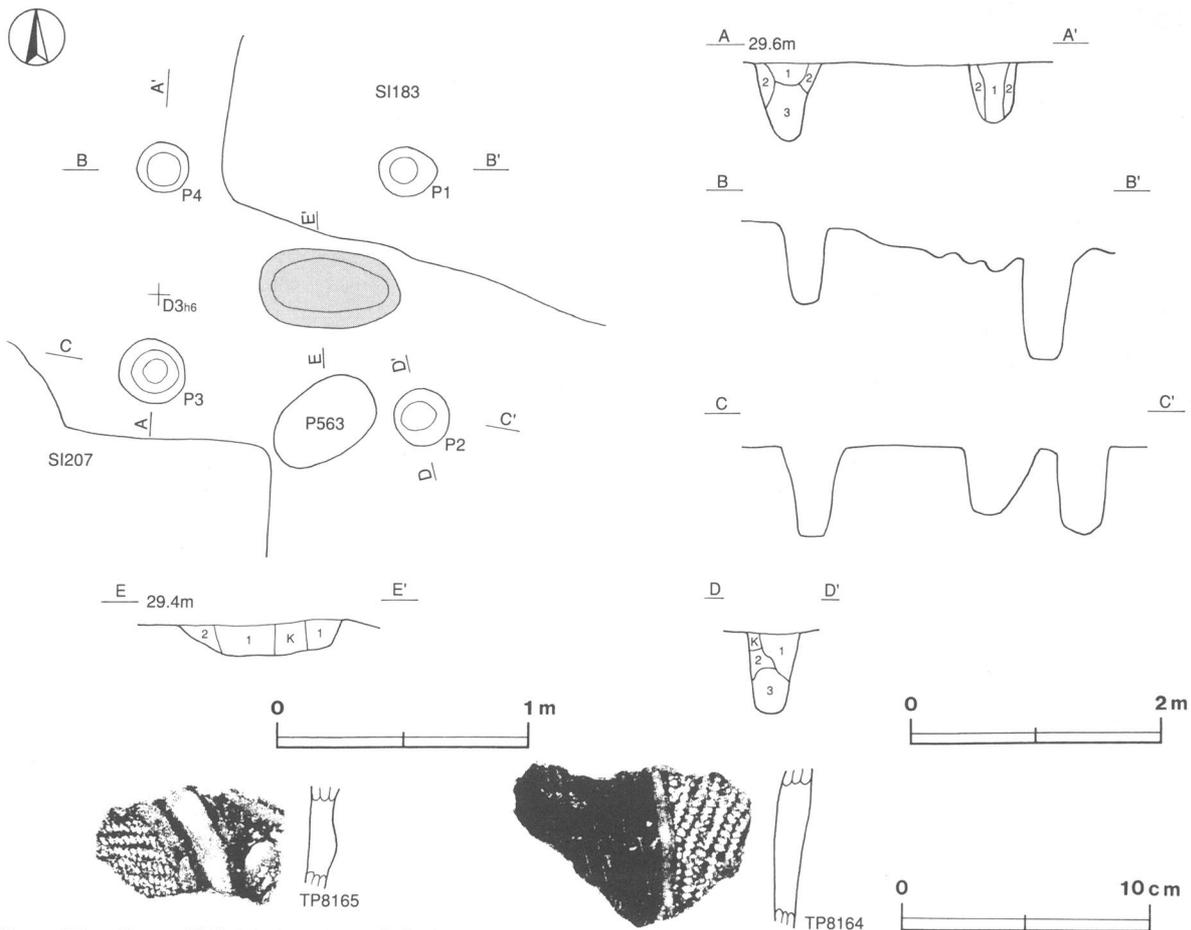
位置 調査2区の中央部, D3g6区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 奈良・平安時代の第183・207号住居に掘り込まれている。第563号ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が検出されなかったため、規模及び形状は不明である。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 4か所。P1は深さ110cm, P2～P4は深さ68～72cmで、やや規格性を欠いているが規模及び配置から主柱穴と考えられる。



第106図 第241号住居跡・出土遺物実測図

P 2 土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量, ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

- 3 極暗褐色 ロームブロック少量

P 3 土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

P 4 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

炉 支柱穴の配置から、ほぼ中央部に付設されていたと推定される。長径115cm、短径65cmの東西に長い楕円形を呈し、床面を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床及び炉壁は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片65点が出土している。土器のすべてが細片で、炉及びピットの覆土から出土している。TP8164, TP8165の深鉢片は、いずれも炉の覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利 E III～IV式期）と考えられる。

第241号住居跡出土遺物観察表（第106図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8164	縄文土器	深鉢	—	(6.5)	—	沈線による懸垂文間を磨り消す。R Lの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉覆土	
TP8165	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	微隆帯により文様を描出。R Lの単節縄文を施文。	石英・雲母	普通	橙	炉覆土	

第242号住居跡（第107図）

位置 調査2区の北部、D 3 b0区。住居跡群域に位置する。

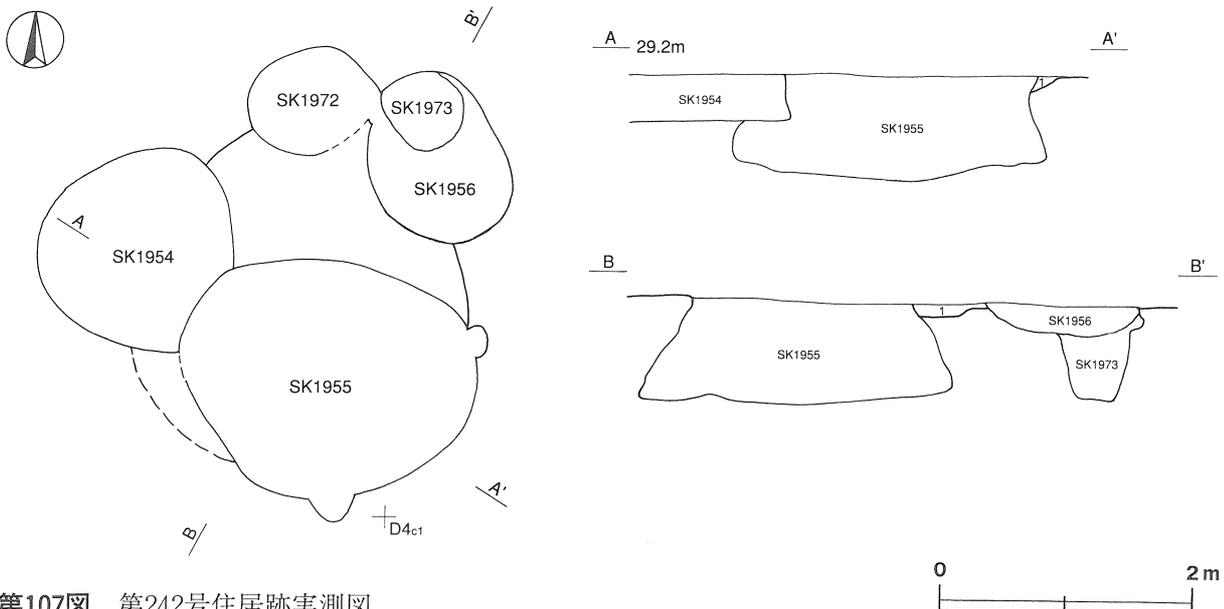
重複関係 第1954・1955・1956号土坑に掘り込まれている。第1972・1973号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁の大部分を重複する遺構に掘り込まれているため明確ではないが、残存する壁の様相から、平面形は径2.65mほどの円形と推定される。

床 残存部はほぼ平坦であり、やや踏み固められている。

ピット 確認されなかった。

炉 確認されなかった。



第107図 第242号住居跡実測図

覆土 確認できた覆土は黒褐色を基調とした単一層で、堆積状況の詳細は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片1点のみが覆土から出土している。細片であるため、抽出・図示できなかった。

所見 炉及びピットが確認できなかったが、外傾する壁の一部と床を検出したことから住居跡と判断した。細片1片のみの出土であるため、出土土器からの時期判断はできないが、中期後葉(加曾利E I 式期)の第1954・1955号土坑に掘り込まれていることから、それ以前の縄文時代と考えられる。

第244号住居跡 (第108図)

位置 調査2区の中央部, D3j9区。住居跡群の外周域に位置する。

重複関係 奈良・平安時代の第228号住居に掘り込まれている。第2005号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が検出されなかったため、規模及び形状は不明である。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した面は認められなかった。

ピット 4か所。P1～P4は深さ44～70cmで、その規模及び配置から主柱穴と考えられる。

P1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量

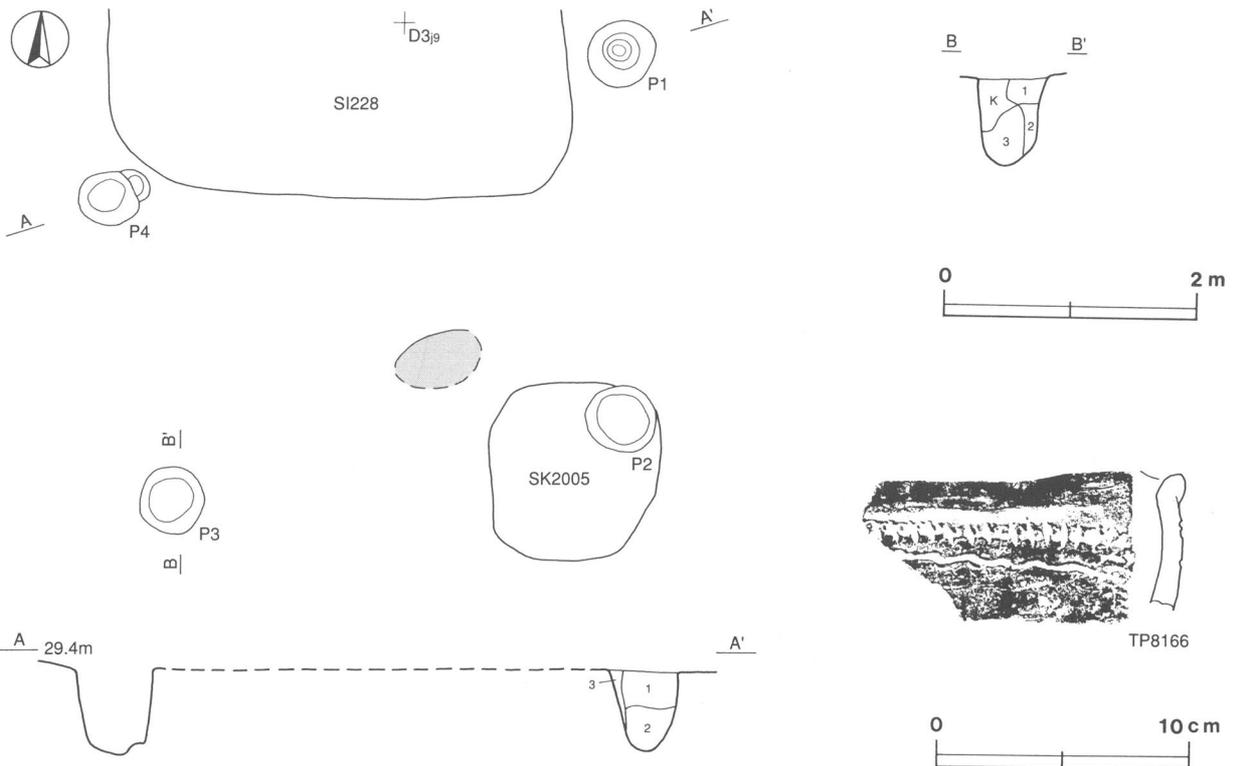
P3土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

炉 トレンチャーによる攪乱で、原形をとどめていない。床面に焼土の広がりや赤変硬化部が認められたため炉と判断した。長径70cm, 短径44cmの楕円形と推定される。

遺物出土状況 縄文土器片14点が出土している。土器のすべてが細片で、確認面及びピットの覆土から出土した。TP8166の深鉢片はP1の覆土から出土しており、時期決定の指標となる遺物である。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台II～III式期)と考えられる。



第108図 第244号住居跡・出土遺物実測図

第244号住居跡出土遺物観察表（第108図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP8166	縄文土器	深鉢	—	(5.4)	—	口唇部直下に爪形文と円形刺突文を交互に巡らせ、その下に波状沈線文を配する。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	P1覆土	

第245号住居跡（第109図）

位置 調査2区の北部、D3c7区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1927・1943号土坑に掘り込まれている。第621・622・661・665号ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が検出されなかったため明確ではないが、炉及び柱穴の配置から、平面形は径3.74mの円形と推定される。

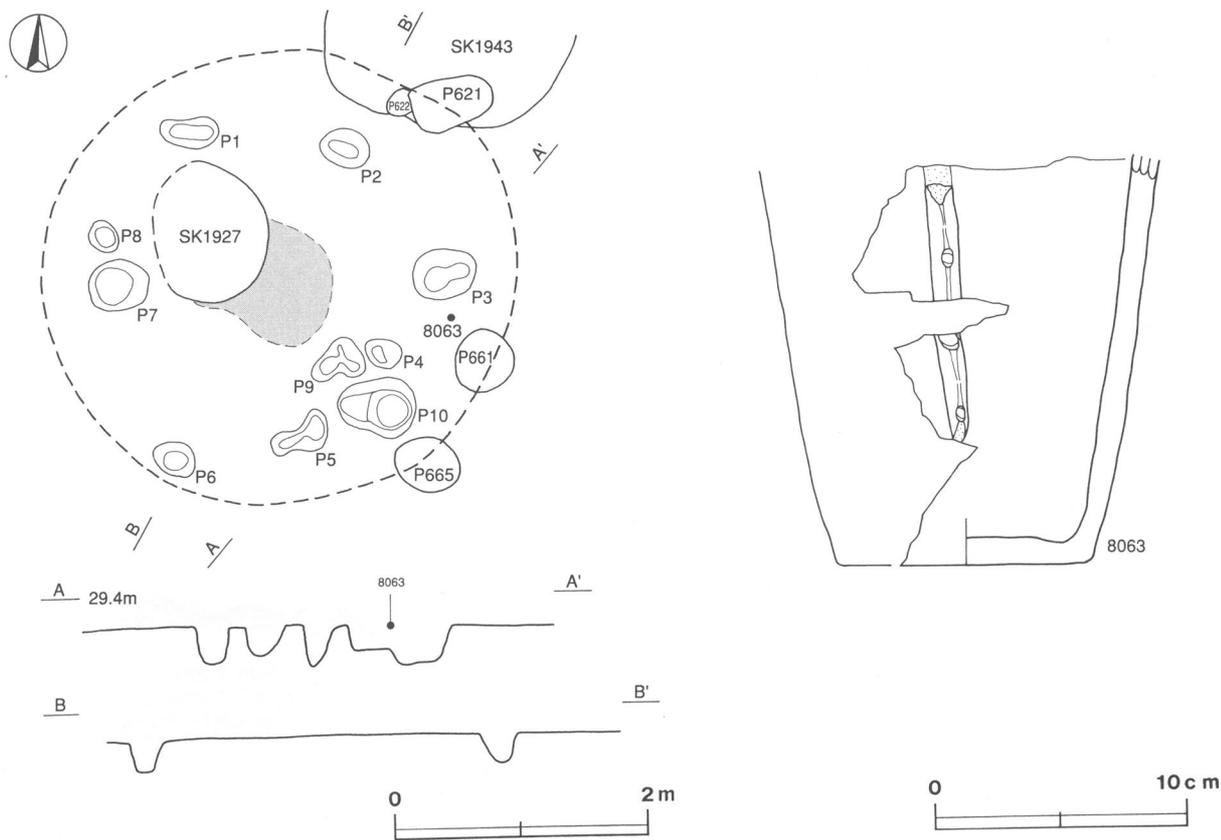
床 ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 10か所。P1～P7は深さ25～34cmで、配列から柱穴と考えられる。P8・P10の深さはそれぞれ98cm・125cmで、他の柱穴に比べ著しく深い。柱穴と考えられる。P9の性格は不明である。

炉 ほぼ中央部に位置すると推定される。北西部を第1927号土坑に掘り込まれており全容は不明であるが、南北軸100cm、東西軸110cmの範囲で赤変硬化部が認められることから、床面を炉床とする地床炉であると考えられる。

遺物出土状況 縄文土器片13点が出土している。床面から出土している8063の深鉢片以外は、すべてピットの覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器及び重複関係から中期中葉（阿玉台Ⅱ・Ⅲ式期）と考えられる。



第109図 第245号住居跡・出土遺物実測図

第245号住居跡出土遺物観察表 (第109図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8063	縄文土器	深鉢	—	(15.8)	10.0	押圧文を有する隆帯が垂下する。無文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	床面	

第246号住居跡 (第110・111図)

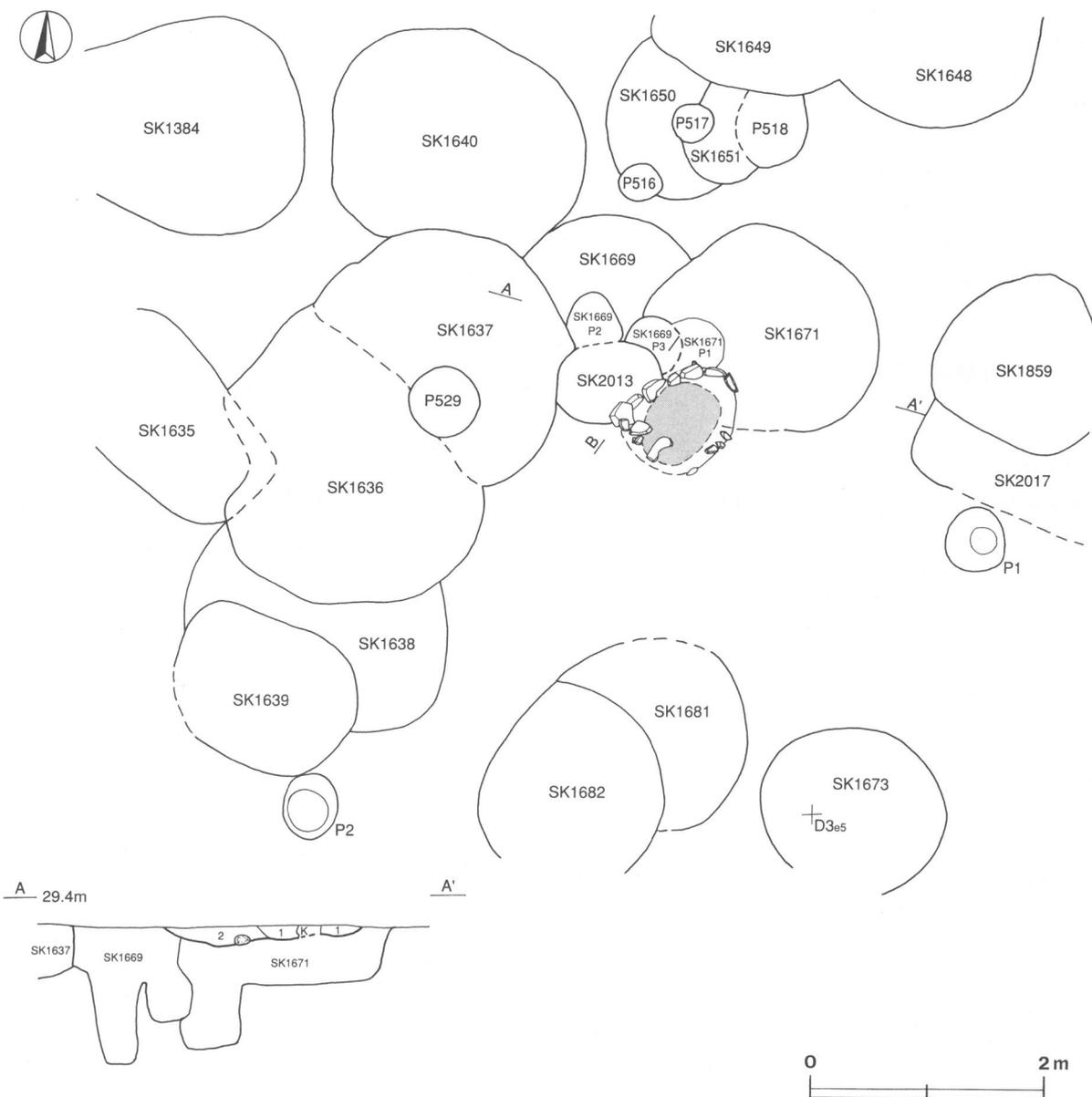
位置 調査2区の北部, D3c4区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第1669・1671・2013号土坑の覆土上面に炉が構築されている。

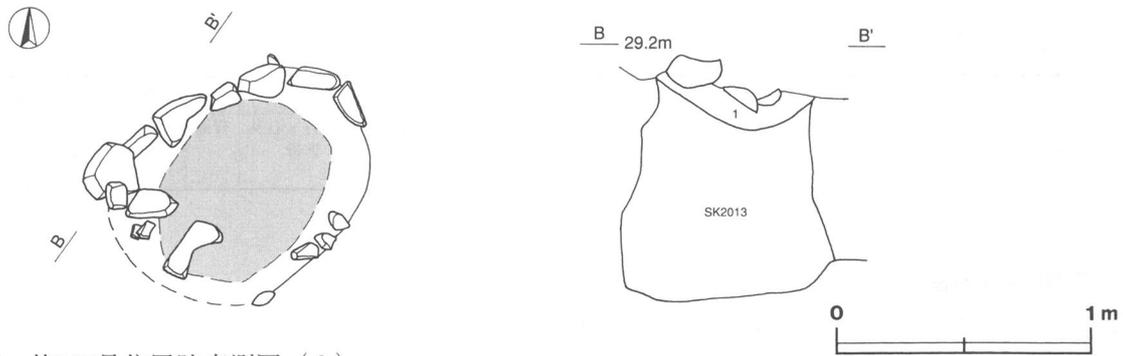
規模と形状 壁が検出されなかったため, 規模及び形状は不明である。

床 ほぼ平坦である。特に硬化した面は認められなかった。

ピット 2か所。深さはP1が106cm, P2が94cmで, 規模及び配置からP1・P2ともに支柱穴と考えられる。



第110図 第246号住居跡実測図 (1)



第111図 第246号住居跡実測図(2)

炉 長径104cm, 短径88cmの楕円形で, 床面を16cmほど掘りくぼめた石囲炉である。炉石は原位置をとどめているものが多い。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉掘り方土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量

覆土 2層に分層される。炉の近辺で一部が確認できた。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片2点, 凹石1点が出土している。土器はいずれも細片であったため, 抽出・図示できるものはなかった。

所見 細片2点の出土であるため, 出土土器からの時期判断はできない。加曽利E I~II式期の第2013号土坑, 加曽利E II式期の第1671号土坑の覆土上面に炉が構築されていることから, 時期は, 加曽利E II式期以降の中期後葉と考えられる。

第247号住居跡 (第112・113図)

位置 調査2区の中央部, E3 d9区。

重複関係 第1773号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は長径3.75m, 短径3.43mの円形である。壁は外傾して立ち上がり, 壁高は44~67cmである。

床 ほぼ平坦であり, 中央部に硬化面が点在するのが認められる。深さ4~6cmでU字形の断面形をもつ壁溝が, 壁際を全周している。

ピット 1か所。P1は深さ36cmで, 北側の壁溝際に位置する。単独で検出されているため, 柱穴との積極的な判断はしがたい。

炉 確認されなかった。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量

5 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物・鹿沼バミスブロック微量

2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量

6 褐色 ロームブロック中量

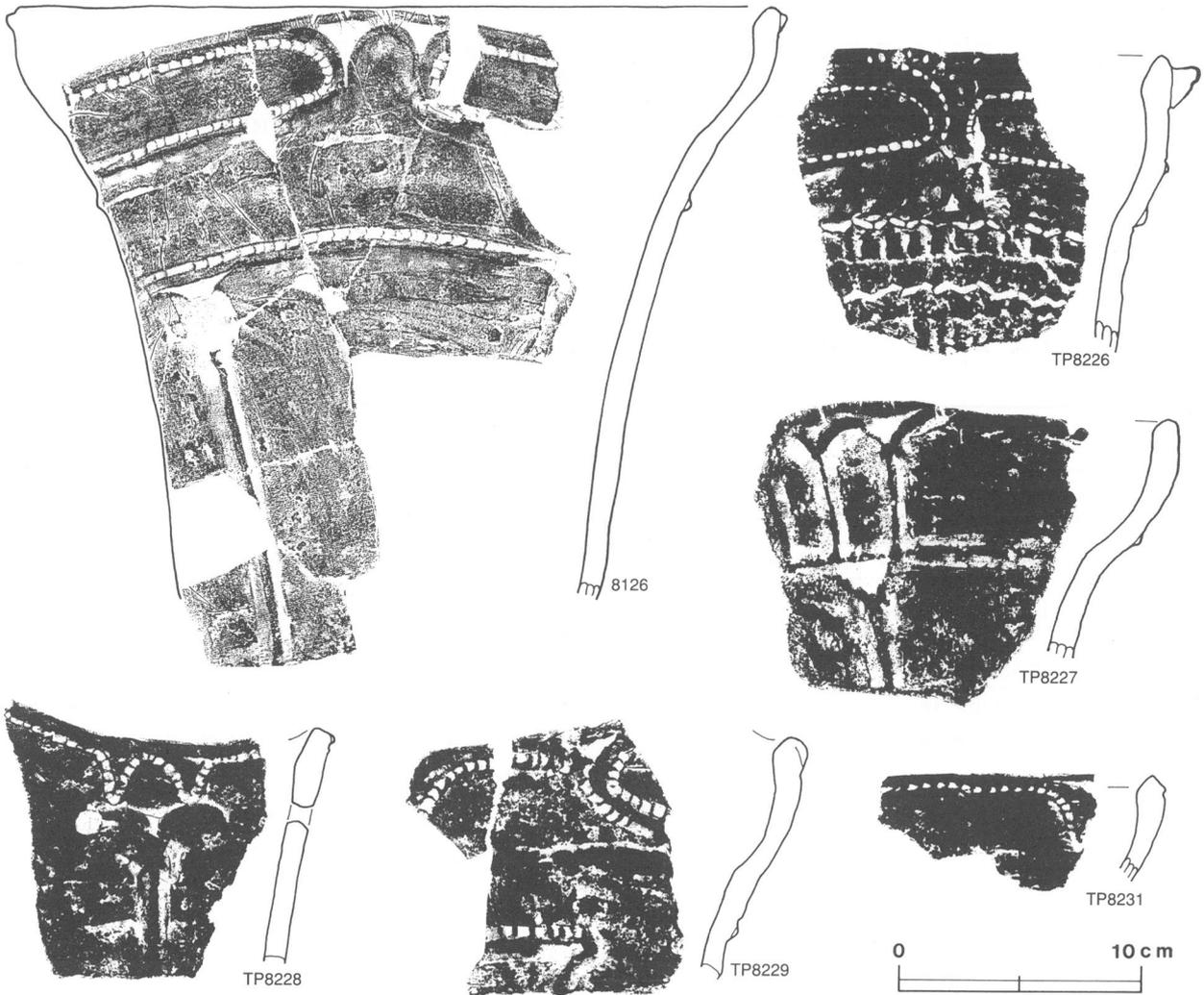
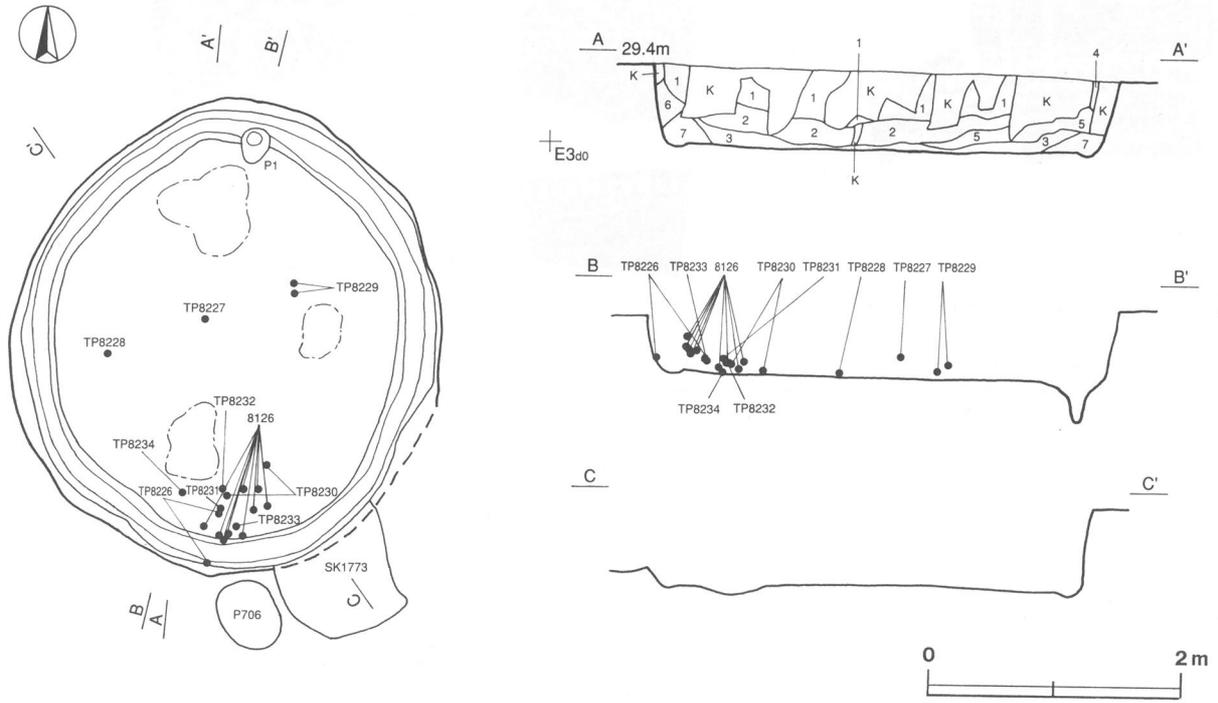
3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量

7 黒褐色 ロームブロック少量

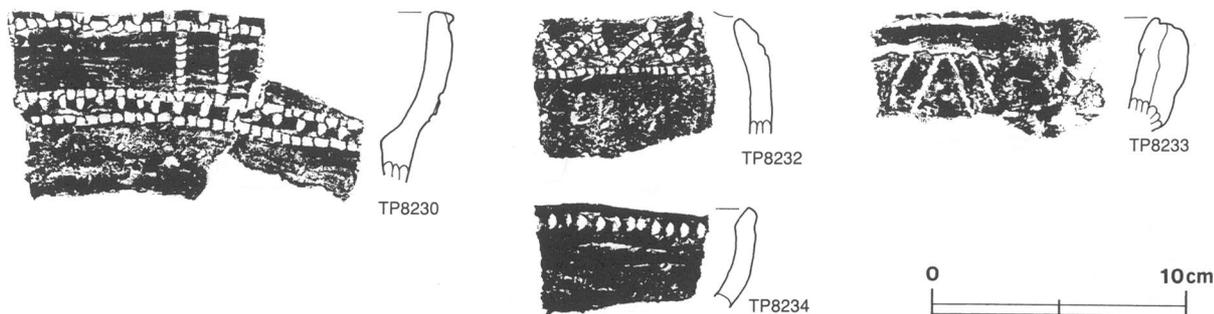
4 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片333点が出土している。南壁際の覆土上層から中央部床面に向かって投げ込まれたような状況で, 土器片が多数出土しており, 8126の深鉢片及びTP8226, TP8230~TP8234の深鉢片は, その一群からの出土である。またTP8227~TP8229の深鉢片は, 覆土下層から出土している。

所見 時期は, 炉をもたず, 高い壁と壁溝を有するという特徴をもつ住居の形態及び出土土器から, 中期中葉(阿玉台Ia・Ib式期)と考えられる。



第112图 第247号住居跡・出土遺物実測図(1)



第113図 第247号住居跡出土遺物実測図

第247号住居跡出土遺物観察表 (第112・113図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8126	縄文土器	深鉢	[30.6]	(24.3)	—	口縁部は結節沈線に沿う隆帯文。胴部は隆帯によるY字状文が垂下。	長石・石英・雲母	普通	黒褐にぶい褐	覆土上層～床面	
TP8226	縄文土器	深鉢	—	(12.3)	—	キザミを有する隆帯文。隆帯に沿って結節沈線文を施す。胴部は襞状の輪積痕を残す。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP8227	縄文土器	深鉢	—	(10.0)	—	頸部に隆帯文を巡らす。口縁部及び胴部には隆帯によるY字状文が垂下。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP8228	縄文土器	深鉢	—	(10.3)	—	口唇部外面を巡る隆帯文に沿って結節沈線文を施す。胴部は隆帯によるY字状文が垂下。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	補修孔あり
TP8229	縄文土器	深鉢	—	(11.0)	—	結節沈線に沿う隆帯により文様を描出。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP8230	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	キザミを有する隆帯文。隆帯に沿って結節沈線文を施す。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土下層	
TP8231	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	結節沈線に沿う隆帯により文様を描出。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP8232	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	—	口唇部直下に鋸歯状の結節沈線文を巡らす。その下位に結節沈線文が巡る	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP8233	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	—	口唇部直下の隆帯に沿って波状沈線文が巡る。口縁部には結節沈線文がハ字状に垂下。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP8234	縄文土器	深鉢	—	(4.1)	—	口唇部直下に爪形文が巡る。	長石・石英・雲母	普通	褐灰	床面	

表2 住居跡一覧表

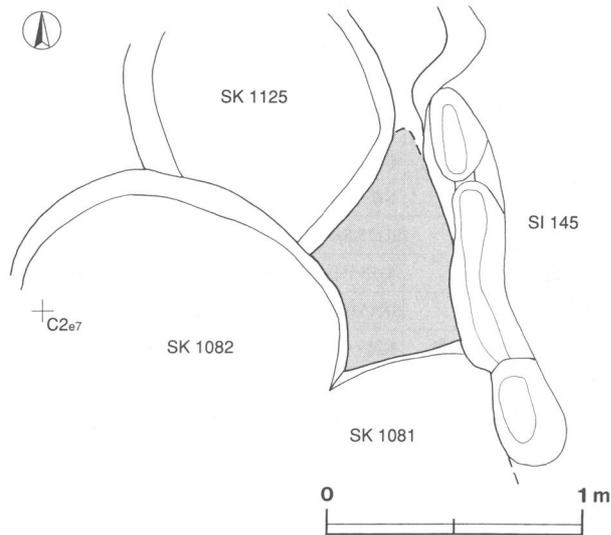
住居跡番号	位置	主軸方向(長軸方向)	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	壁溝	ピット				炉	覆土	主な出土遺物	重複関係(古→新)	発掘番号
								主柱穴	柱穴	出入口	不明					
138	C2h5	N-33'-W	隅丸方形	5.28×5.18	7	平坦	全周	4	5	—	—	地床炉	不明	深鉢, 浅鉢, 磨石	SK971→本跡→SD23	2001
139	C2d5	—	円形	[3.50]	38	平坦	—	1	—	2	—	自然	深鉢	SK979・980→本跡→SD23	2002	
140	C2c5	N-46'-E	楕円形	[4.60×4.00]	45~50	平坦	全周	—	2	—	—	地床炉	自然	深鉢, 石鏃, 石製垂飾	SK1022・1023・1037・1056・1108→本跡→P714~717	2003
141	C2c7	N-90'-E	隅丸長方形	[4.65]×3.83	30~45	平坦	—	4	—	2	—	地床炉	自然	深鉢, 石鏃, 磨石	本跡→SK1035	2004
142	C2j6	N-41'-W	隅丸長方形	[5.54]×4.80	7~12	平坦	全周	3	3	1	4	地床炉	自然	深鉢, 土器片円盤	本跡→SK1012・1013・1015・1016・1029・1042, SD23	2005
145	C2d8	N-85'-E	隅丸長方形	[9.70]×6.90	13~22	平坦	一部	4	—	—	19	石囲炉	自然	深鉢, 鉢, 石皿, 磨製石斧, 石鏃	FB, SK1036-1070-1072-1073-1078-1088-1089→本跡→SK1035-1075-1076-1104-1105, P685-686	2008
147	C2e5	—	円形	[6.20]	—	平坦	—	6	—	—	8	地床炉	—	深鉢, 磨製石斧	本跡→SD23	2010
149	C3e1	—	—	—	—	平坦	—	3	—	—	1	土器片囲炉	—	深鉢	SK1146・1166→本跡	2012
151	C2h7	—	円形	[5.60]	—	平坦	—	2	—	—	—	土器埋設炉	不明	深鉢, 磨製石斧	SK1220→本跡→SI152, SK1134・1160・1163・1168	2014
152	C2g8	N-52'-E	隅丸長方形	[9.15×7.93]	—	平坦	一部	4	—	—	10	石囲炉	不明	深鉢, 石鏃	SI151・153・157, SK1132・1134・1173・1174→本跡→T31, SK1195・1199, P393	2015
153	C2f9	—	円形	[8.32]	—	平坦	—	5	6	—	—	地床炉	—	深鉢	SK1255・1311→本跡→SI148・152	2016
154	C3f2	—	円形	[4.54]	16	平坦	—	—	—	—	1	石囲炉	自然	深鉢, 石鏃, 石皿, 凹石, 土器片円盤	SK1246・1249・1250・1332→本跡	2017
156	C3h1	N-5'-E	隅丸長方形	[4.45×4.00]	—	平坦	—	—	—	—	—	石囲炉	不明	深鉢, 石皿	SK1251・1344→本跡→SK1262・1323	2019
157	C2h8	N-3'-E	隅丸方形	[4.60×4.30]	—	皿状	—	4	—	—	1	土器埋設炉	—	深鉢	本跡→SI152, SK1172・1181	2020

住居跡 番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	ピット				炉	覆土	主な出土遺物	重複関係 (古→新)	発掘 番号
								主柱穴	柱穴	出入口	不明					
159	C 29	N-54'-E	隅丸長方形	[3.74×3.26]	6	平坦	-	4	3	-	3	石囲炉	不明	深鉢	SK1206→本跡→SK1205	2022
160	C 29	N-51'-W	楕円形	[6.30×5.70]	16	平坦	-	8	-	-	-	地床炉	不明	深鉢	SK1272-1273-1279-1346→本跡→SK1218-1221-1223-1234-1270-1271	2023
162	C 289	N-87'-W	隅丸長方形	[5.40×4.60]	-	平坦	-	4	-	-	-	地床炉	-	深鉢	本跡→SI150,SK1170-1280	2026
163	D 3a1	N-55'-W	隅丸長方形	[3.60×3.20]	10~34	平坦	-	2	-	-	-	地床炉	自然	深鉢, 磨石	SK1331-1339-1340-1341-1350-1361-1397→本跡→SI161	2027
164	C 3f2	-	-	-	-	平坦	-	-	1	-	1	地床炉	-	深鉢	SI154,SK1250-1306-1308-1332→本跡→SK1307	2028
165	D 3b2	N-58'-W	楕円形	[5.95×5.20]	-	平坦	-	-	7	-	-	土器埋設炉	-	深鉢	SK1476→本跡	2029
166	D 3a3	-	円形	[4.30]	10	平坦	-	-	6	-	4	-	不明	深鉢	本跡→SI158,SK1367-1425	2030
167	D 3b4	N-61'-W	隅丸長方形	[4.75×4.54]	16~22	平坦	-	-	8	-	1	石囲地床炉	自然	深鉢, 敲石, 土製耳飾, 土器片円盤	SI169-SK1416→本跡→SK1413-1417	2031
168	D 3a2	-	円形	[4.00]	-	平坦	-	4	-	-	-	[石囲炉]	不明	-	-	2032
169	D 3b4	-	隅丸長方形	[4.00×3.70]	-	平坦	-	-	3	-	-	-	不明	深鉢	SK1416→本跡→SI167,SK1415-1426	2033
170	C 3b4	N-73'-E	隅丸長方形	[7.85×6.64]	8~10	平坦	-	4	-	-	-	石囲炉	自然	深鉢, 鉢	SK1284-1285-1327-1436-1435-1438-1441-1444-1445-1456-1502-1663→本跡→SK1437	2034
172	C 3e5	N-39'-W	楕円形	[6.90×5.95]	-	平坦	-	-	11	-	-	地床炉	-	深鉢, 浅鉢	本跡→SK1312-1314	2036
174	C 3b8	N-37'-E	隅丸長方形	[5.10×4.60]	26~28	平坦	-	6	-	-	-	土器埋設炉	自然	深鉢, 敲石	SI175,SK1515-1516-1535-1666-1860→本跡	2038
175	C 3b8	N-90'-E	隅丸長方形	[7.10×6.53]	15~18	平坦	全周	-	5	-	-	-	自然	深鉢	SK1521-1523-1666-1690-1701→本跡→SI174,SK1516-1555-1556-1691	2039
177	C 3f9	N-25'-W	隅丸長方形	[4.05×3.25]	8~10	平坦	-	-	-	-	-	地床炉	不明	深鉢	SK1519-1524~1528→本跡	2041
180	D 2g8	N-6'-W	隅丸長方形	[4.45]×3.25	10~16	平坦	全周	4	3	-	2	-	自然	深鉢, 土器片円盤	本跡→SI184-SK1610	2044
181	D 2g0	-	円形	6.44×(3.20)	38	平坦	-	-	4	-	6	地床炉	自然	深鉢	SK1581→本跡	2045
182	C 4i2	-	円形	4.65	12~14	平坦	-	-	-	-	9	地床炉	不明	深鉢, 磨製石斧	SK1545-1546-1679-1680-1839-1853-1970→本跡→SI173,P590-591	2046
184	D 2g7	-	円形	4.20×(1.50)	38	皿状	一部	-	5	-	1	地床炉2	自然	深鉢, 有孔鋤付, 土器片円盤	SI180-210→本跡	2048
193	F 3b5	N-3'-W	隅丸長方形	5.08×5.00	17~23	平坦	-	-	6	-	2	石囲炉	自然	深鉢, 打製石斧	本跡→SK1744-1745	2057
194	F 3a6	N-77'-W	隅丸長方形	4.46×3.96	7~14	平坦	-	4	-	-	4	地床炉	自然	深鉢, 石鏃	SI239,SK1729→本跡	2058
196	F 3b6	-	円形	4.40×4.30	6~18	平坦	全周	-	8	-	-	地床炉	不明	深鉢	本跡→SD24,SE12	2060
199	E 4i1	N-85'-W	(上隅丸長方形 下隅丸長方形)	6.66×4.56 4.84×2.84	12~16 20~30	有段	-	-	[1]	-	3	-	自然 土器	深鉢, 甕, 敲石	本跡→SB63-64,P551-552	2063
200	E 3j4	N-2'-E	隅丸長方形	4.10×[3.82]	42~48	有段	-	-	-	-	21	-	自然	深鉢	-	2064
203	F 3d5	N-8'-W	隅丸長方形	5.00×(3.95)	26~40	平坦	一部	3	-	-	2	土器埋設 地床炉	自然	深鉢, 石鏃, 土器片円盤	本跡→P602	2067
206	F 3c7	-	円形	[5.04]	8	平坦	全周	2	-	-	8	地床炉	自然	深鉢, 土器片円盤	本跡→竪穴状遺構12	2071
209	E 3f0	N-23'-W	隅丸長方形	5.70×3.45	32~50	平坦	-	3	-	-	4	-	自然	深鉢	本跡→SK1836	2074
210	D 2g7	N-21'-E	楕円形	5.79×(2.54)	34~36	平坦	一部	-	2	-	1	-	不明	深鉢	本跡→SI184	2075
211	C 3b5	N-65'-W	楕円形	[5.75×5.15]	-	平坦	-	-	7	-	4	地床炉	-	深鉢	SK1855→本跡	2076
212	D 3i4	N-36'-E	楕円形	5.75×5.10	-	平坦	全周	4	-	-	2	土器埋設炉	不明	深鉢	SK1628-1629→本跡	2077
214	E 3a7	N-50'-E	隅丸長方形	5.25×4.90	25~35	平坦	全周	4	-	-	1	地床炉2	自然	深鉢, 石皿, 石鏃, 土器片円盤	-	2079
216	D 3b7	N-40'-E	楕円形	3.40×3.00	7~10	平坦	-	-	-	-	-	地床炉	自然	深鉢	SK1890-1891→本跡	2081
217	D 3a7	-	円形	[4.60×4.30]	12~14	平坦	-	-	-	1	4	土器埋設炉	人為	深鉢	SI218,SK1829-1831→本跡→P680	2082
218	D 3a8	-	円形	[3.30]	15	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	-	SK1829-1830-1838→本跡→SI217	2083
219	D 3j6	-	円形	[5.00]	-	平坦	-	4	-	-	2	土器埋設炉	-	深鉢	-	2084
222	E 3j3	N-23'-E	楕円形	4.55×4.05	5~10	平坦	-	4	3	-	-	地床炉	自然	深鉢, 磨石	SK1861→本跡	2087
224	D 4i1	-	円形	[4.15]	-	平坦	全周	-	12	-	1	石囲炉	自然	深鉢, 壺, 石皿	-	2089
233	D 3f8	-	-	-	-	平坦	-	4	-	-	1	地床炉	-	深鉢	本跡→SI220	2098
235	D 4g1	-	円形	[2.55]	6~9	平坦	-	-	-	-	-	地床炉	自然	深鉢	本跡→SI221	2100
236	D 3g9	N-26'-E	隅丸長方形	[5.67×4.06]	5~8	平坦	-	4	-	-	1	土器埋設炉	自然	深鉢, 台付鉢, 敲石	本跡→SI220,P575-576	2101
239	F 3a6	-	円形	[6.15×5.65]	-	平坦	-	-	6	-	-	地床炉	-	-	本跡→SI194	2104
240	D 3j4	-	-	-	-	平坦	-	3	-	-	2	地床炉	-	-	-	2105
241	D 3g6	-	-	-	-	平坦	-	4	-	-	-	地床炉	-	深鉢	本跡→SI183-207	2106
242	D 3b0	-	円形	[2.65]	-	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	深鉢	本跡→SK1954~1956	2107
244	D 3j9	-	-	-	-	平坦	-	4	-	-	-	-	-	深鉢	本跡→SI228	2109
245	D 3c7	-	円形	[3.74]	-	平坦	-	-	9	-	1	地床炉	-	深鉢	本跡→SK1927-1943	2110
246	D 3c4	-	-	-	-	平坦	-	2	-	-	-	石囲炉	不明	深鉢	SK1669-1671-2013→本跡	2111
247	E 3d9	-	円形	3.75×3.43	44~67	平坦	全周	-	-	-	1	-	自然	深鉢	-	SK200

2 屋外炉

今回の調査で、壁や床、ピットが確認できず、炉のみを検出した遺構11基を屋外炉とした。その中で、出土遺物及び重複関係から縄文時代の屋外炉と考えられる3基について記載する。

第8号屋外炉（屋外炉1）（第114図）



第114図 第8号屋外炉実測図

位置 調査2区の北部，C2d7区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第145号住居及び第1081・1082・1125号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 重複が著しく全容はつかめない。現存する範囲は、南北軸92cm，東西軸55cmの不定形である。確認面が炉床であったため炉壁は検出できなかった。また炉床は、火熱を受けて凹凸状に赤変硬化している。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、中期後葉（加曾利EⅡ式期）の第145号住居に掘り込まれていることから、それ以前の縄文時代と考えられる。

第10号屋外炉（屋外炉3）（第115図）

位置 調査2区の北部，C2g7区。住居跡群域に位置する。

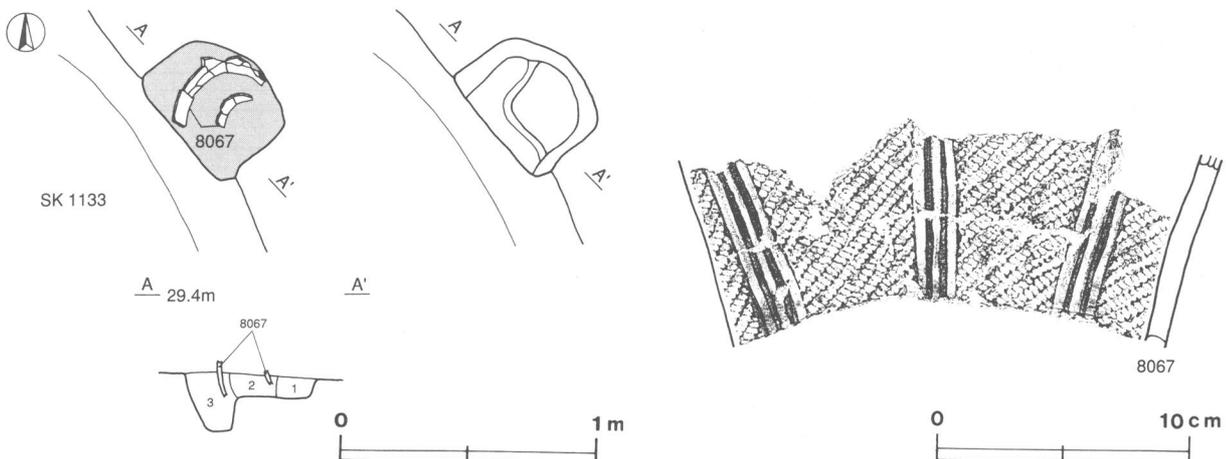
重複関係 第1133号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 径58cm，確認面からの深さ24cmのほぼ円形を呈する掘り方に、深鉢の胴部を正位に埋設した土器埋設炉と考えられる。埋設土器は北側のみで確認されている。炉床は、赤変の度合いは低いが、埋設土器とほぼ同径の円形の範囲で、ロームが周囲の掘り方より12cmほど盛り上がり硬化していた。

覆土 3層に分層される。第1・3層は掘り方の覆土である。

土層解説

- | | |
|----------------------------|----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子微量 | 3 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量 | |



第115図 第10号屋外炉・出土遺物実測図

遺物出土状況 8067は炉埋設土器である。

所見 縄文時代の住居跡の可能性も考えられるが、壁、床及びピットが確認できなかったため屋外炉とした。本跡の時期は、埋設土器から中期後葉（加曾利 EⅡ式期）と考えられる。

第10号屋外炉出土遺物観察表（第115図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
8067	縄文土器	深鉢	—	(7.4)	—	3条一組の沈線による懸垂文間を磨り消す。RLの単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	炉埋設土器	

第17号屋外炉（SI2103）（第116図）

位置 調査2区の中央部、D3g7区。

重複関係 第1938・2002号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 主軸方向をN-26°-Eにもつ、長径114cm、短径86cmの楕円形を呈する地床炉と推定される。確認面から5cmの深さで炉床が検出された。炉床は、火熱を受けて凹凸状に赤変硬化している。

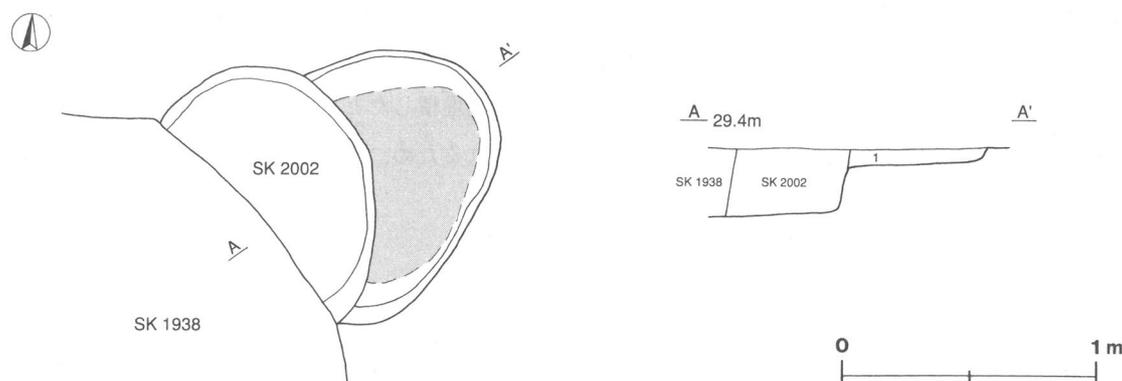
覆土 単一層である。

土層解説

1 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 覆土から縄文土器の細片5点が出土している。

所見 遺構確認時は中央部に炉をもつ住居跡ととらえ調査を開始したが、壁、床及びピットが確認されなかったため、屋外炉とした。出土土器が細片で、かつ覆土からの出土であるため、時期は不明であるが、縄文時代中期の第1938・2002号土坑に掘り込まれていることから、それ以前の縄文時代の遺構と考えられる。



第116図 第17号屋外炉実測図

表3 屋外炉一覧表

屋外炉番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模(cm)		出土遺物	重複関係 (旧→新)	備考 (旧番号)
				長径×短径	深さ			
8	C 2 d7	—	不明	(92×55)	—	—	本跡→SI145, SK1081・1082・1125	屋外炉1
10	C 2 g7	—	円形	58	24	深鉢	本跡→SK1133	屋外炉3
17	D 3 g7	[N-26°-E]	[楕円形]	[114×86]	5	縄文土器片	本跡→SK1938・2002	SI2103

3 土坑

今回の調査で、縄文時代の土坑1026基を確認した。これらの土坑のうち、遺構の残存状況や遺物の出土状況が良好なものについて解説を加え、それ以外のものは一覧表で記載した。

第955号土坑（第117～119図）

位置 調査2区の北部，B3g1区。土坑墓群域に位置する。

重複関係 第956号土坑に北壁の上部を掘り込まれている。

規模と形状 開口部の平面形は、長径3.20m，短径2.86mの不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、平面形は径3.04mの円形である。確認面からの深さは1.04mである。壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり，上位で緩やかに立ち上がる。また，底面からくびれ部までの高さは，平均64cmである。

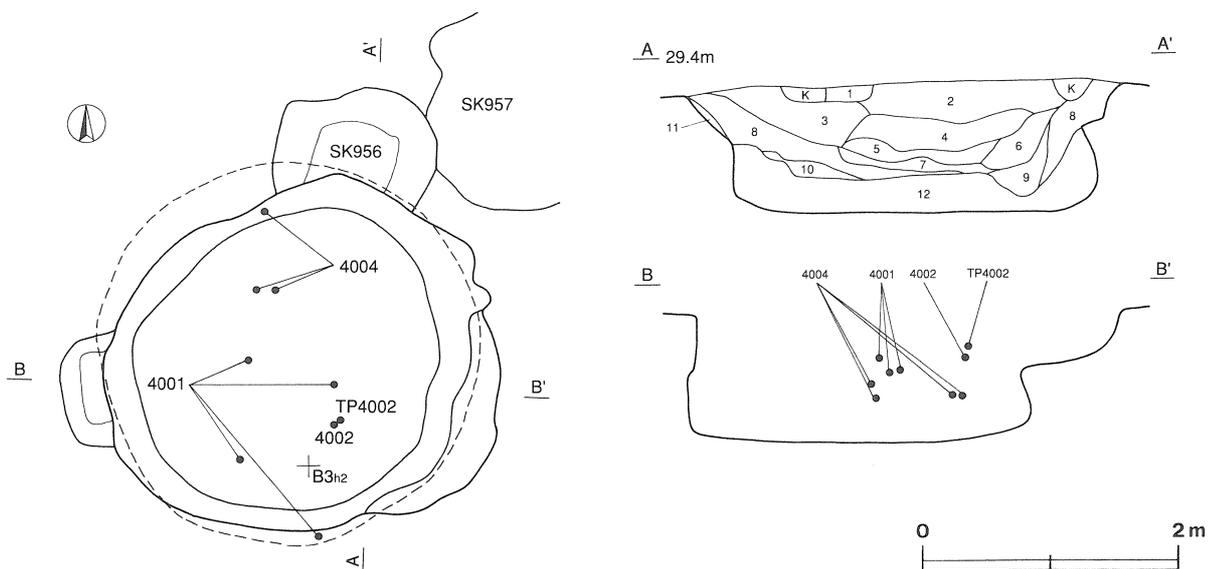
覆土 12層に分層される。最下層の第12層はロームブロックが主体で，出土遺物もわずかなため，天井部の崩落土などが主体となった比較的短時間に自然堆積した土層と考えられる。中層の第4・5層からは，縄文土器の大形破片が廃棄されたような状態で出土していることや，鹿沼パミスを多量に含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

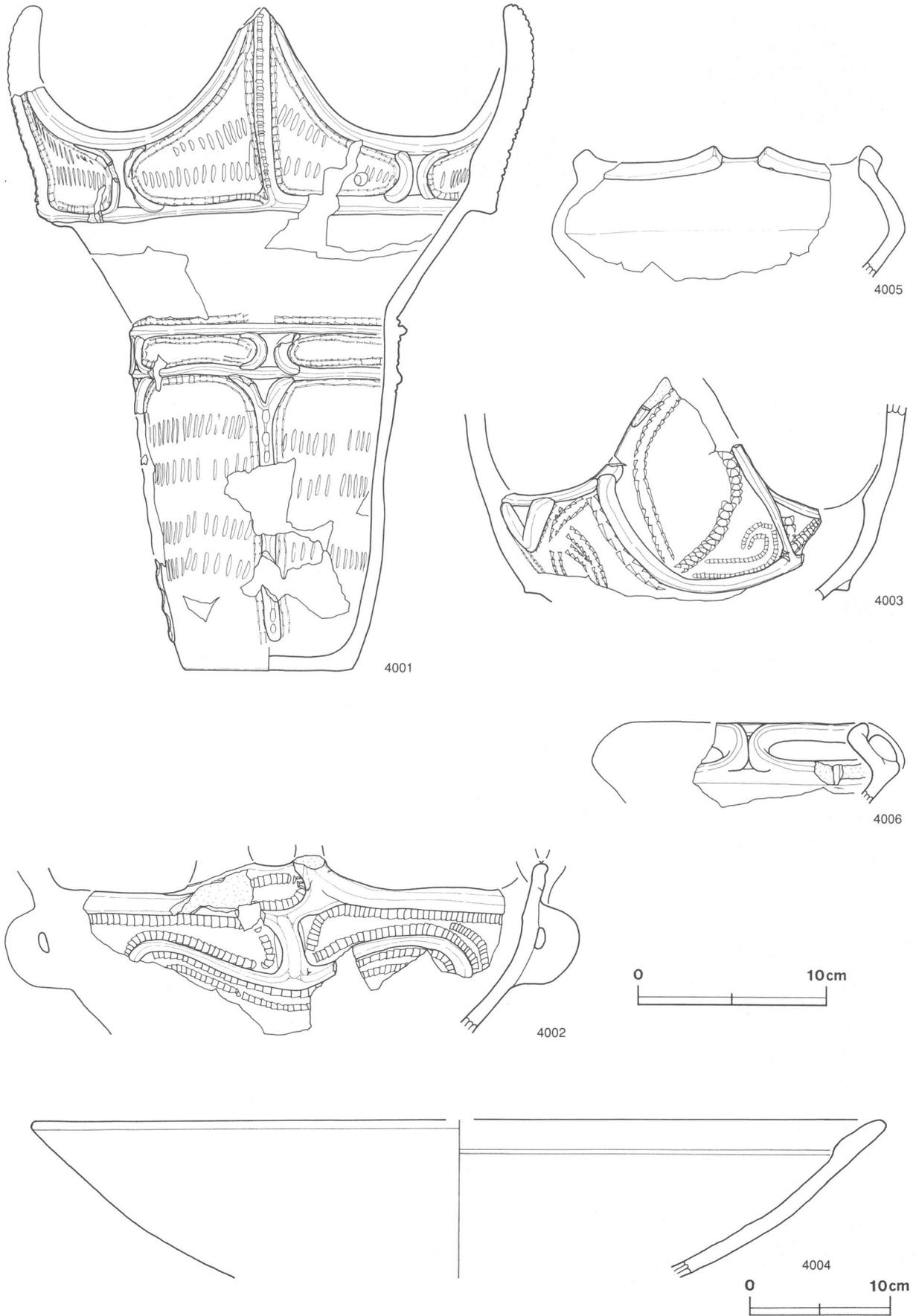
- | | | | |
|-------|-------------------|--------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 7 黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 褐色 | 鹿沼パミス多量，ロームブロック少量 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 黒色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 12 褐色 | ロームブロック多量，炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片431点，打製石斧1点，凹石1点，礫31点が，主に覆土中層から廃棄されたような状態で出土している。

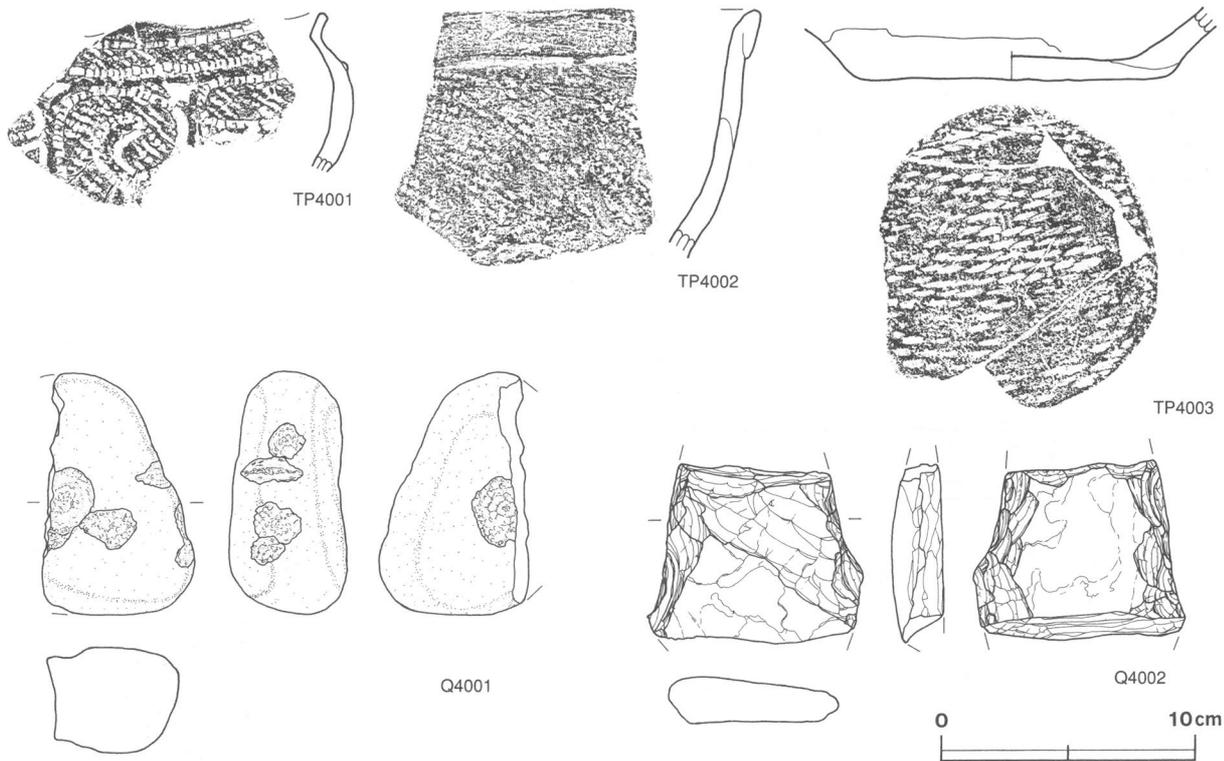
所見 覆土最下層の第12層がロームブロックを主体とすることから，開口部は天井部の崩落により大きく広がったことが考えられる。出土した縄文土器の大形破片は，特に集中することはないが，同じ出土レベルで接合している。本跡の廃絶時期は，覆土の最下層が短期間に自然堆積したと推測され，縄文土器の大形破片が廃棄された覆土中層の堆積時とほとんど時間差がないと考えられるため，その出土土器などから，縄文時代中期中葉（阿玉台Ⅱ式期）と判断される。



第117図 第955号土坑実測図



第118图 第955号土坑出土遗物实测图(1)



第119図 第955号土坑出土遺物実測図（2）

第955号土坑出土遺物観察表（第118・119図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4001	縄文土器	深鉢	26.1	35.3	8.9	半截竹管による結節沈線に沿う隆帯で区画文を作出、胴部は刻みのある隆帯を垂下させ、幅広の爪形文を横走させる。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土中層	P L 41
4002	縄文土器	深鉢	(26.0)	(9.5)	—	半截竹管による結節沈線に沿う断面台形の隆帯で文様を描出。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土中層	
4003	縄文土器	深鉢	—	(12.0)	—	断面三角形の隆帯と半截竹管による結節沈線で曲線的なモチーフを描出。	長石・石英・雲母	普通	赤褐	覆土中層	
4004	縄文土器	浅鉢	[62.0]	(11.3)	—	内外面丁寧なナデ。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土中層	
4005	縄文土器	浅鉢	[15.0]	(7.0)	—	内外面赤彩、口唇部に隆帯を貼り付ける。	長石・雲母	普通	赤褐	覆土中層	
4006	縄文土器	浅鉢	[12.0]	(4.5)	—	隆帯で楕円区画文を描出。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土中層	
TP4001	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	半截竹管による結節沈線文で渦巻き状のモチーフを描出。	長石・雲母	普通	黒	覆土中層	
TP4002	縄文土器	深鉢	—	(9.9)	—	折り返し口縁、外面粗いナデ、地文はLR単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	橙	覆土中層	
TP4003	縄文土器	浅鉢	—	(2.9)	[12.1]	内面ナデ。	石英・雲母	普通	明褐	覆土中層	底部網代痕

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4001	凹石	9.6	(6.0)	(4.6)	(350.5)	砂岩	両面及び側面にくぼみを有する。	覆土中層	
Q4002	打製石斧	(7.1)	(8.4)	(2.0)	(155.1)	流紋岩	板状礫を素材に両面調整、両面に節理面を残す。	覆土中層	

第960号土坑（第120・121図）

位置 調査2区の北西部，C2b7区。土坑墓群と住居跡群に挟まれた区域に位置する。

重複関係 北側で第976号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 開口部の平面形は，長径2.56m，短径2.40mの楕円形である。底面はほぼ平坦で，平面形は長径2.60m，短径2.38mの楕円形である。確認面からの深さは54cmで，壁は内傾して立ち上がり，部分的には直立する。ピットは5か所で，P1は南壁際に，P2～P5は中央部南側に集中して位置する。P1は深さ23cm，P2は深さ40cm，P3は深さ64cm，P4は深さ29cm，P5は深さ46cmである。

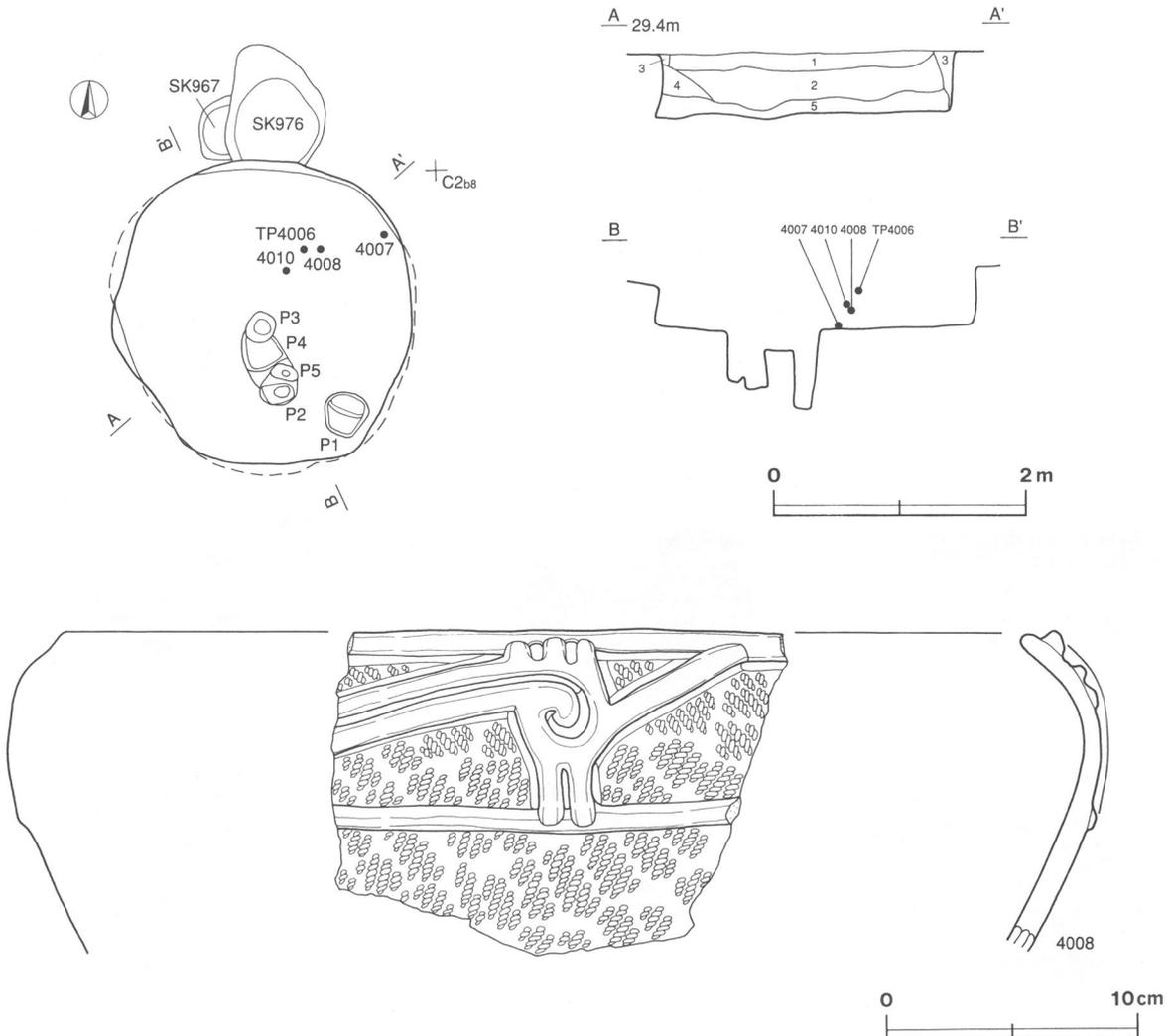
覆土 5層に分層される。中層の第2層は，他の層に比べて炭化物や炭化粒子を多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子・焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片184点，礫11点が，主に覆土中層から廃棄されたような状態で出土している。また，完形の縄文土器の深鉢が，東壁際の底面から横位の状態で出土している。

所見 本跡の廃絶時期は，東壁際の底面から横位の状態で出土している4007・4008などから，縄文時代中期後葉（加曾利EⅠ期）と判断される。



第120図 第960号土坑・出土遺物実測図



第121图 第960号土坑出土遺物実測図

第960号土坑出土遺物観察表（第120・121図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4007	縄文土器	深鉢	19.7	27.8	7.7	口縁部を沈線の沿う隆帯で横位区画、区画内に剣状のモチーフを描出。地文はRL単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	底面	P L41
4008	縄文土器	深鉢	[39.2]	(12.8)	—	口縁部を隆帯で横位区画、区画内に沈線の沿う隆帯でS字状のモチーフを描出。地文はRL単節縄文。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土中層	
4009	縄文土器	深鉢	—	(12.4)	(12.4)	2～3本の沈線を縦位に垂下させる。地文はLR単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・小石	普通	橙	覆土中層	
4010	縄文土器	ミニチュア	8.2	3.2	4.3	無文。内外面ナデ。口唇部に沈線を巡らす。	長石・石英・雲母	普通	明褐	覆土中層	
4075	縄文土器	深鉢	[27.0]	(17.3)	—	口縁部を沈線の沿う隆帯で長方形区画文を描出。胴部は沈線が垂下する。地文はLR単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	浅黄橙	覆土中層	
4077	縄文土器	深鉢	—	(7.7)	—	隆帯により渦巻き文を描出。地文はRL単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	にぶい橙	覆土中層	
TP4004	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	沈線の沿う微隆帯文。地文はRL単節縄文を斜め方向に施文。	石英・雲母	普通	赤褐	覆土中層	
TP4005	縄文土器	深鉢	—	(6.7)	—	折り返し口縁部無文。RL単節縄文を縦方向に施文。	石英・雲母	普通	赤	覆土中層	
TP4006	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	沈線の沿う隆帯文。地文はRL単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	黒褐	覆土中層	
TP4007	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	沈線の沿う隆帯文。地文はRL単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	橙	覆土中層	
TP4008	縄文土器	深鉢	—	(6.2)	—	口縁端部は横方向のLR単節縄文を施文。以下縦方向に施文。	長石・雲母	普通	暗褐	覆土中層	
TP4096	縄文土器	深鉢	—	(7.8)	—	沈線の沿う隆帯文。地文はLR単節縄文を横・斜め方向に施文。	長石・雲母	普通	褐	覆土中層	

第962号土坑（第122図）

位置 調査2区の北西部，C2e4区。住居跡群域に位置する。

重複関係 東側で第963号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部の平面形は、長径2.05m、短径1.75mの不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、平面形は径1.94mの不整円形である。確認面からの深さは73cmで、壁は東壁側が直立、他は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり、上位で緩やかに立ち上がる。また、底面からくびれ部までの高さは、平均49cmである。ピットは2か所で、南壁際に位置する。P1は深さ21cm、P2は深さ21cmである。

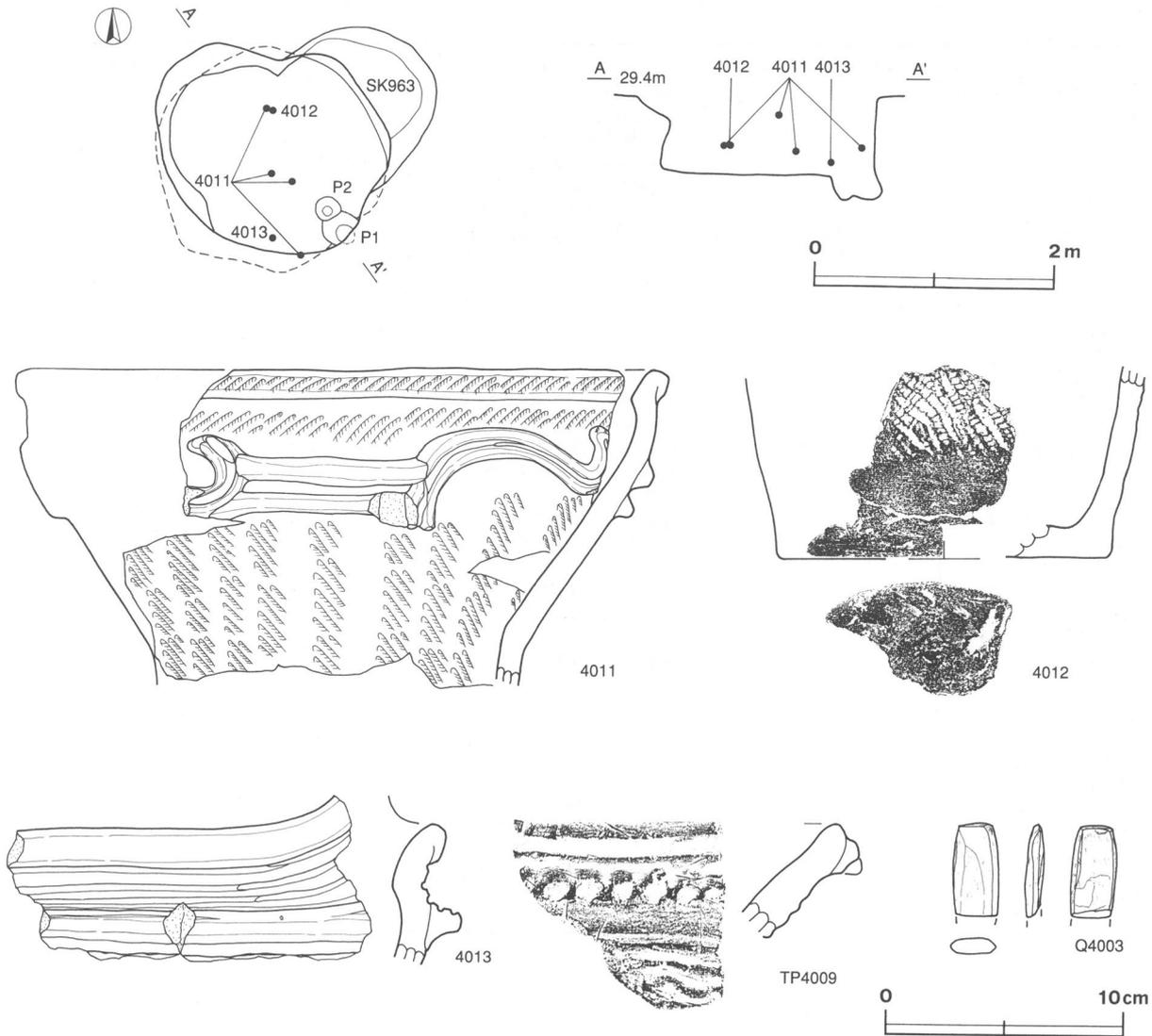
覆土 4層に分層される。最下層の第3層は、ローム粒子や鹿沼パミスを比較的多く含んでいるため、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片106点、磨製石斧1点、礫11点が、主に覆土中層から廃棄されたような状態で出土している。

所見 縄文土器の大形破片は、覆土中層に廃棄されたものと考えられる。本跡の廃絶時期は、覆土最下層が人為的に埋め戻されたと推測され、縄文土器の大形破片が廃棄された覆土中層の堆積時とほとんど時間差がないと考えられるため、その出土土器などから、縄文時代中期後葉（加曾利EI式期）と判断される。



第122図 第962号土坑・出土遺物実測図

第962号土坑出土遺物観察表 (第122図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4011	縄文土器	深鉢	[25.8]	(13.4)	—	断面台形の隆帯で連結するS字状のモチーフを描出。地文はL無節縄文を縦横方向に施文。	長石・石英	普通	にぶい褐	覆土中層	
4012	縄文土器	深鉢	—	(8.0)	[14.0]	L R単節縄文を縦方向に施文。胴部下端横方向のナデ。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土中層	
4013	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	口縁端部と凸帯状の隆帯間に沈線を巡らす。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土中層	
TP4009	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	指頭による刻みを有する隆帯と沈線を巡らす。	石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土中層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4003	磨製石斧	(3.9)	1.9	0.7	(10.8)	頁岩	両面及び側面を丁寧に研磨、刃部欠損。	覆土中層	

第971号土坑（第123・126図）

位置 調査2区の北西部，C2g5区。住居跡群の外周域に位置する。

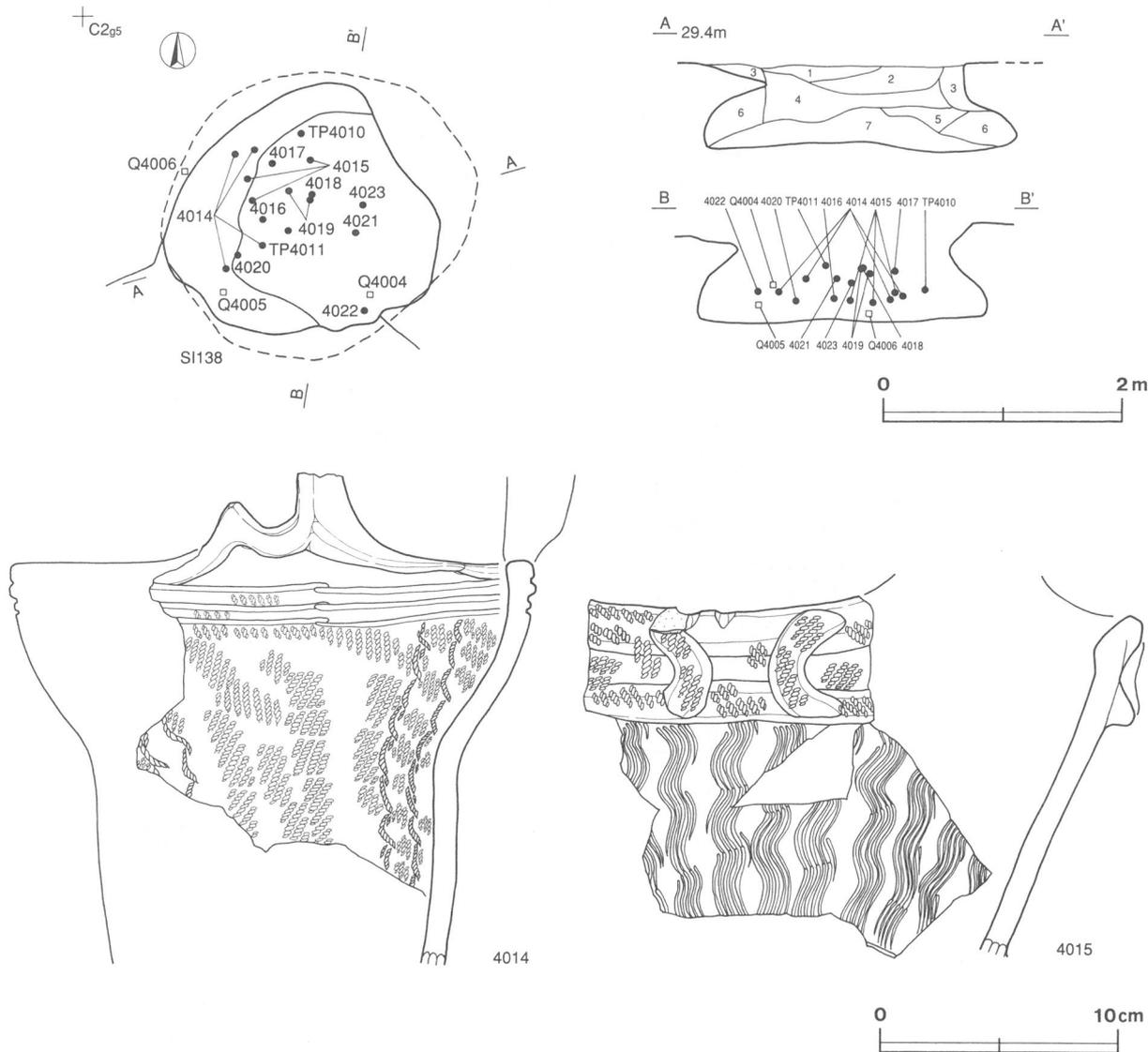
重複関係 第138号住居に南壁の上部を掘り込まれている。

規模と形状 開口部の平面形は，長径2.34m，短径2.10mの不整楕円形である。底面はほぼ平坦で，平面形は長径2.57m，短径2.33mの楕円形である。確認面からの深さは73cmである。壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり，上位は東壁側で直立し，他では緩やかに立ち上がる。そのため，本跡の西側半分では天井部が庇状を呈している。また，底面からくびれ部までの高さは，平均53cmである。

覆土 7層に分層される。最下層の第7層は，ローム粒やローム粒子を多く含み，出土遺物もわずかなため，天井部の崩落土などが主体となった比較的短時間に自然堆積した土層と考えられる。遺物は中層の第2・4層を主体に，縄文土器の大形破片が廃棄されたような状態で出土している。また，同層は炭化粒子を微量に含むことなどから，土器片などの廃棄活動に伴う人為堆積と考えられる。

土層解説

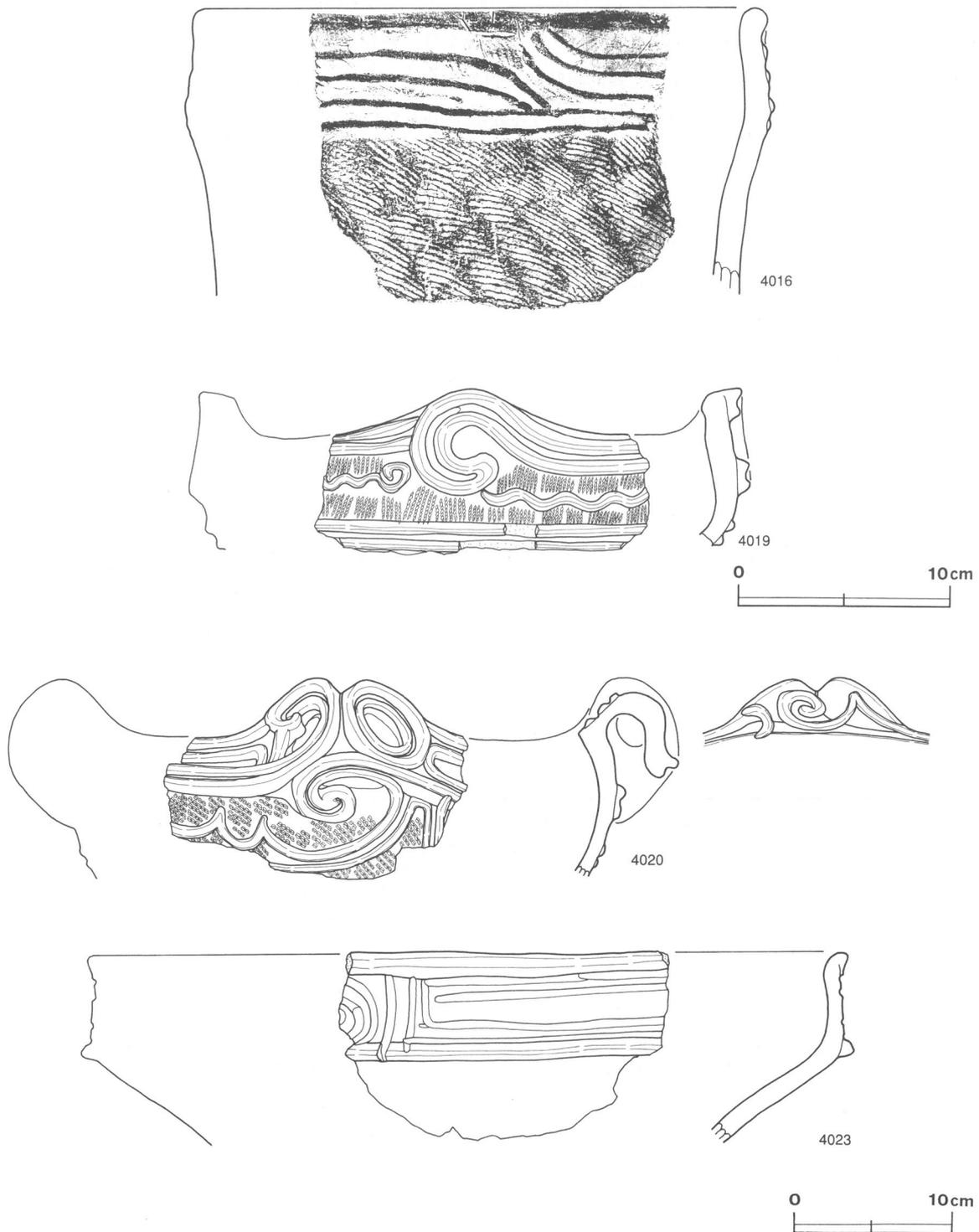
- | | | | |
|-------|------------------|--------|-----------|
| 1 黒色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | 7 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 | | |



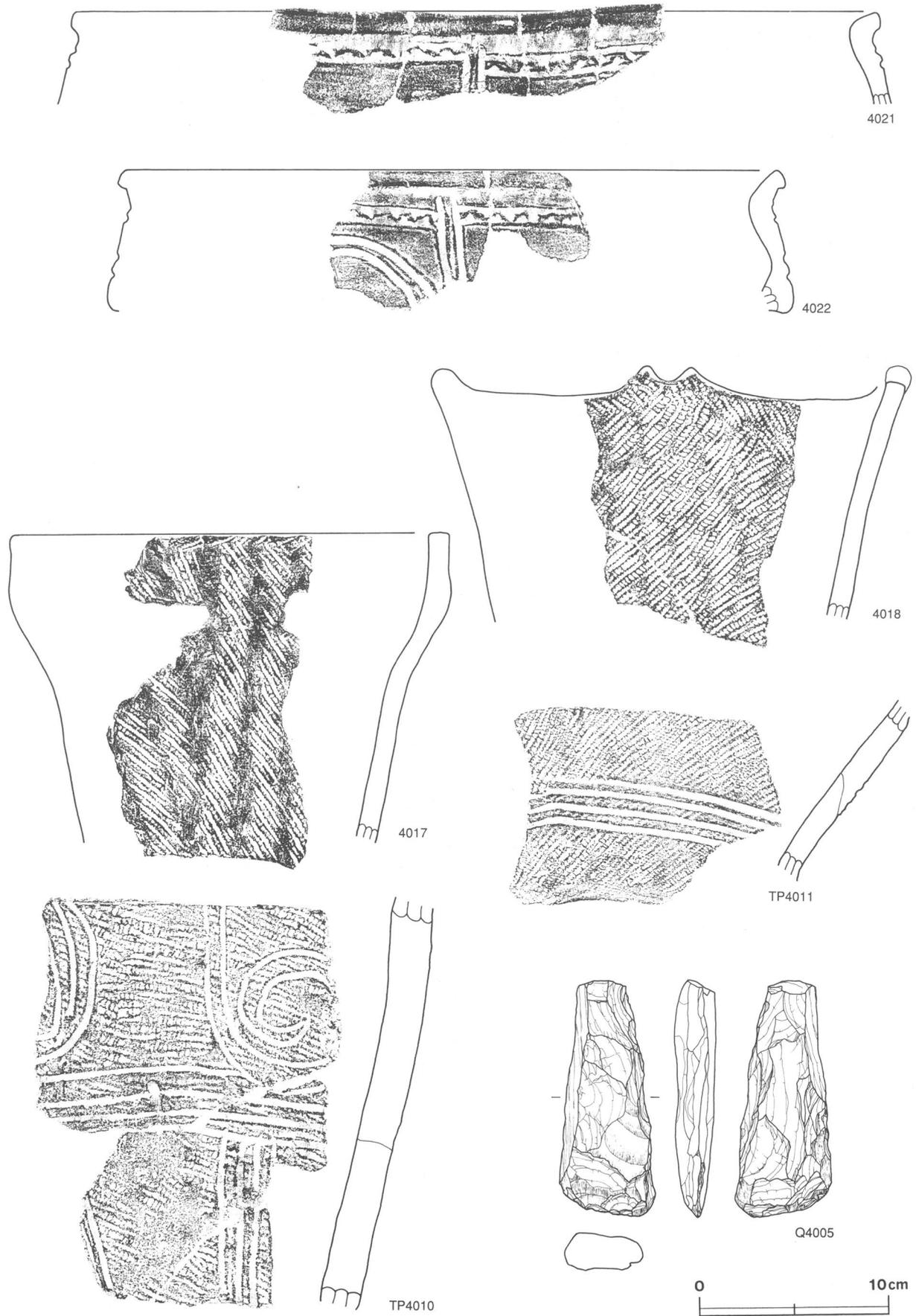
第123図 第971号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片196点、打製石斧1点、磨製石斧1点、石皿1点、礫16点が、主に覆土中層から廃棄されたような状態で出土している。

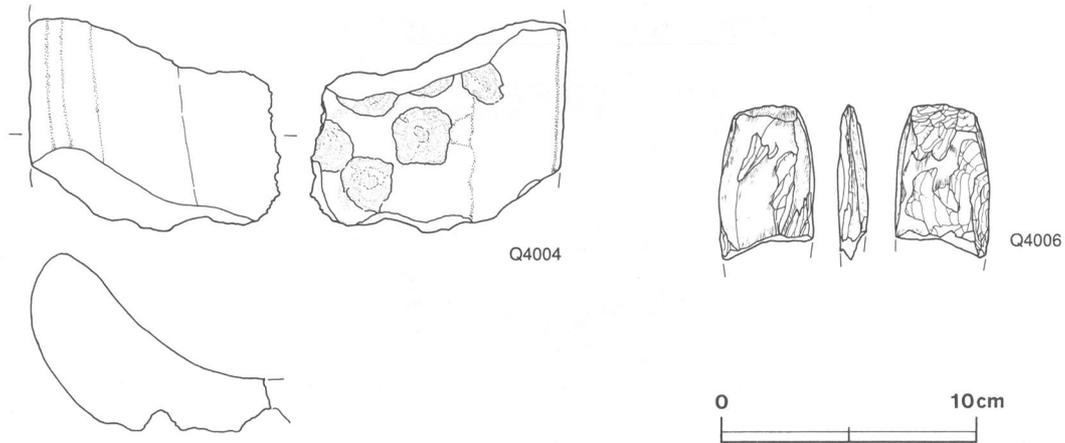
所見 縄文土器の大形破片は、覆土中層に一括廃棄されたものと考えられる。本跡の廃絶時期は、覆土の最下層が短期間に自然堆積したと考えられ、縄文土器の大形破片が一括廃棄された覆土中層の堆積時とほとんど時間差がないと考えられるため、出土土器などから、縄文時代中期後葉（加曾利 E I 式期）と判断される。



第124図 第971号土坑出土遺物実測図（1）



第125图 第971号土坑出土遗物实测图（2）



第126図 第971号土坑出土遺物実測図(3)

第971号土坑出土遺物観察表(第123~126図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4014	縄文土器	深鉢	20.8	(20.5)	—	口縁部に3本沈線を巡らし、地文はLR単節縄文と結節回転文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土中層	
4015	縄文土器	深鉢	—	(15.4)	—	口縁部は2本の隆帯を巡らせ、LR単節縄文を粗く施文、胴部は縦方向の波状集合沈線文を施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土中層	
4016	縄文土器	深鉢	[27.0]	(13.5)	—	口縁部は両端になぞりを施した隆帯による区画文、地文はL無節縄文を斜め方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土中層	
4017	縄文土器	深鉢	[22.8]	(16.5)	—	地文は縦方向の付加条縄文を間隔をあけて施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土中層	
4018	縄文土器	深鉢	[24.0]	(13.5)	—	小波状口縁を呈し、地文は縦方向の付加条縄文を施文。	長石・石英	普通	灰褐	覆土中層	
4019	縄文土器	深鉢	[23.4]	(7.4)	—	2本1組の隆帯による区画文、区画内は然糸文を施文し、波状隆帯を貼り付ける。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土中層	
4020	縄文土器	深鉢	[34.0]	(12.6)	—	2本1組の隆帯により透し彫り状の把手が作出され、地文はRLR複節縄文を横方向に施文。	長石・石英	普通	橙	覆土中層	
4021	縄文土器	深鉢	[42.0]	(4.9)	—	口縁部に2本沈線を巡らせ、その間に波状隆帯を配し、上下に交互刺突文を施文。	長石・石英	普通	明赤褐	覆土中層	
4022	縄文土器	深鉢	[34.4]	(7.5)	—	口縁部に2本沈線を巡らせ、その間に波状隆帯を配し、上下に交互刺突文を施文。	長石・石英	普通	明赤褐	覆土中層	
4023	縄文土器	浅鉢	[47.2]	(12.1)	—	断面三角形の隆帯による区画文、区画内は沈線による重圏、重四角文を描出。内外面赤彩。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄橙	覆土中層	
TP4010	縄文土器	深鉢	—	(21.3)	—	集合沈線を縦横に巡らし、沈線により渦巻き状のモチーフを描出。地文は付加条縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土中層	
TP4011	縄文土器	深鉢	—	(9.0)	—	横方向に集合沈線を巡らす。地文はRL単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	明赤褐	覆土中層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4004	石皿	(8.4)	(10.4)	(3.9)	(305.4)	安山岩	片面に磨耗による皿状のくぼみを有し、裏面で凹石に併用。	覆土中層	
Q4005	打製石斧	12.5	5.1	2.0	167.8	粘板岩	両面調整、刃部付近に研磨痕。	覆土中層	P L 60
Q4006	磨製石斧	(6.0)	3.7	1.3	(35.4)	頁岩	剥離による両面調整後、全体を磨製、刃部欠損。	覆土中層	

第972号土坑 (第127・128図)

位置 調査2区の北西部, C2i4区。住居跡群の外周域に位置する。

確認状況 西半分が調査区域外に位置する。

規模と形状 開口部の平面形は, 長径2.41m, 短径1.96m程度の楕円形と推定される。底面はほぼ平坦で, 平面形は長径2.50m, 短径2.00m程度の楕円形と推定されるが, 詳細は不明である。確認面からの深さは54cmで, 壁は確認された大半の部分で直立する。部分的には下位から中位にかけて内傾して立ち上がり, 上位は直立する。また, 底面からくびれ部までの高さは, 平均64cmである。

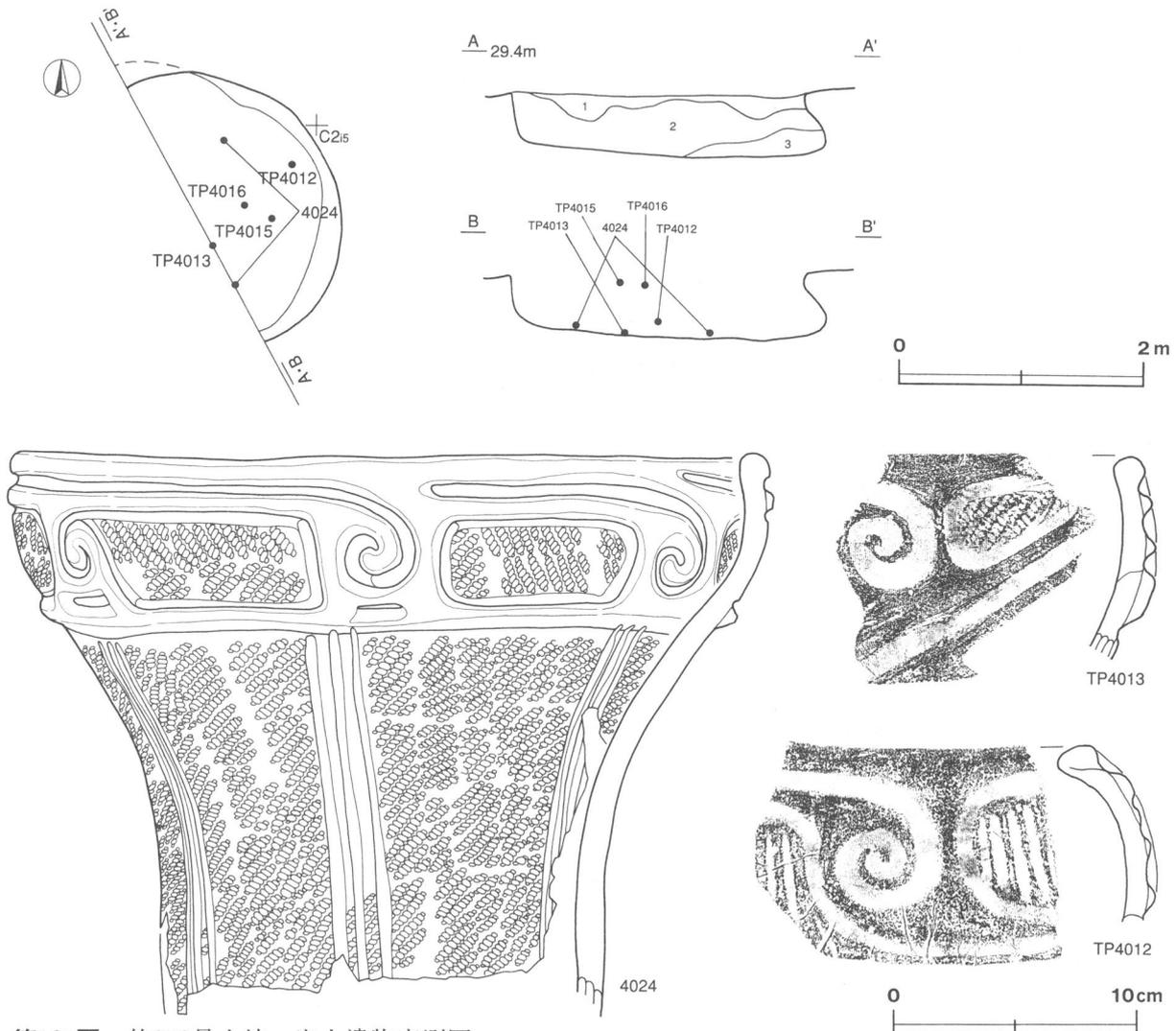
覆土 3層に分層される。最下層の第3層は, 締まりと粘性の強い黒色土である。第2層はローム粒やローム粒子を多く含んだ締まりの弱い褐色土である。遺物は, この第2層から縄文土器の大形破片などが満遍なく出土している。このため, 同層は土器片などの廃棄活動に伴う人為堆積と考えられる。

土層解説

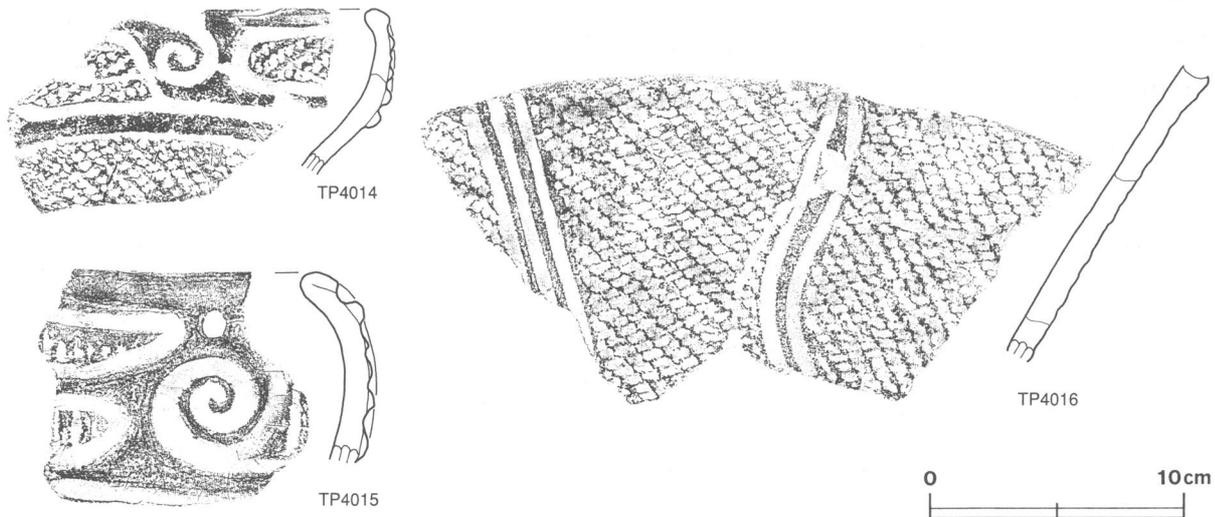
- | | | | |
|-------|----------------------|------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量 | 3 黒色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片229点, 礫7点が, 覆土中から満遍なく出土している。なお, 4024は底面直上から出土しているため, 本跡の廃絶時期を考える上で参考となる。

所見 本跡の廃絶時期は, 覆土下層の第3層が人為堆積と考えられることや, 4024が底面直上から出土していることなどから, 縄文時代中期後葉(加曾利EⅡ式期)と判断される。



第127図 第972号土坑・出土遺物実測図



第128図 第972号土坑出土遺物実測図

第972号土坑出土遺物観察表（第127・128図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4024	縄文土器	深鉢	31.0	(21.7)	—	隆帯と沈線で口縁部文様帯の渦巻文や楕円区画文を描出、胴部の懸垂文は3本沈線間を磨り消す。地文はRL単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	底面	
TP4012	縄文土器	深鉢	—	(7.2)	—	隆帯と沈線で口縁部文様帯の渦巻文や楕円区画文を描出。	長石・石英・雲母	普通	明赤褐	覆土下層	
TP4013	縄文土器	深鉢	—	(8.4)	—	隆帯と沈線で口縁部文様帯の渦巻文や楕円区画文を描出。地文はLR単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP4014	縄文土器	深鉢	—	(6.5)	—	隆帯と沈線で口縁部文様帯の渦巻文や楕円区画文を描出。地文はRLR複節縄文を施文。	石英・雲母	普通	極暗褐	覆土中層	
TP4015	縄文土器	深鉢	—	(7.6)	—	隆帯と沈線で口縁部文様帯の渦巻文や楕円区画文を描出。	石英・雲母	普通	赤褐	覆土中層	
TP4016	縄文土器	深鉢	—	(11.6)	—	2本沈線、3本沈線間を磨り消す懸垂文。地文はLR単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明赤褐	覆土中層	

第975号土坑（第129・130図）

位置 調査2区の北部、B2i0区。土坑墓群と住居跡群に挟まれた区域に位置する。

重複関係 第22号溝に東壁及び南壁の上部を掘り込まれている。

規模と形状 開口部の平面形は、長径1.09m、短径0.97mの楕円形である。底面はほぼ平坦で、平面形は径2.84mの円形である。確認面からの深さは124mで、壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり、上位で直立する。また、底面からくびれ部までの高さは、平均93cmである。

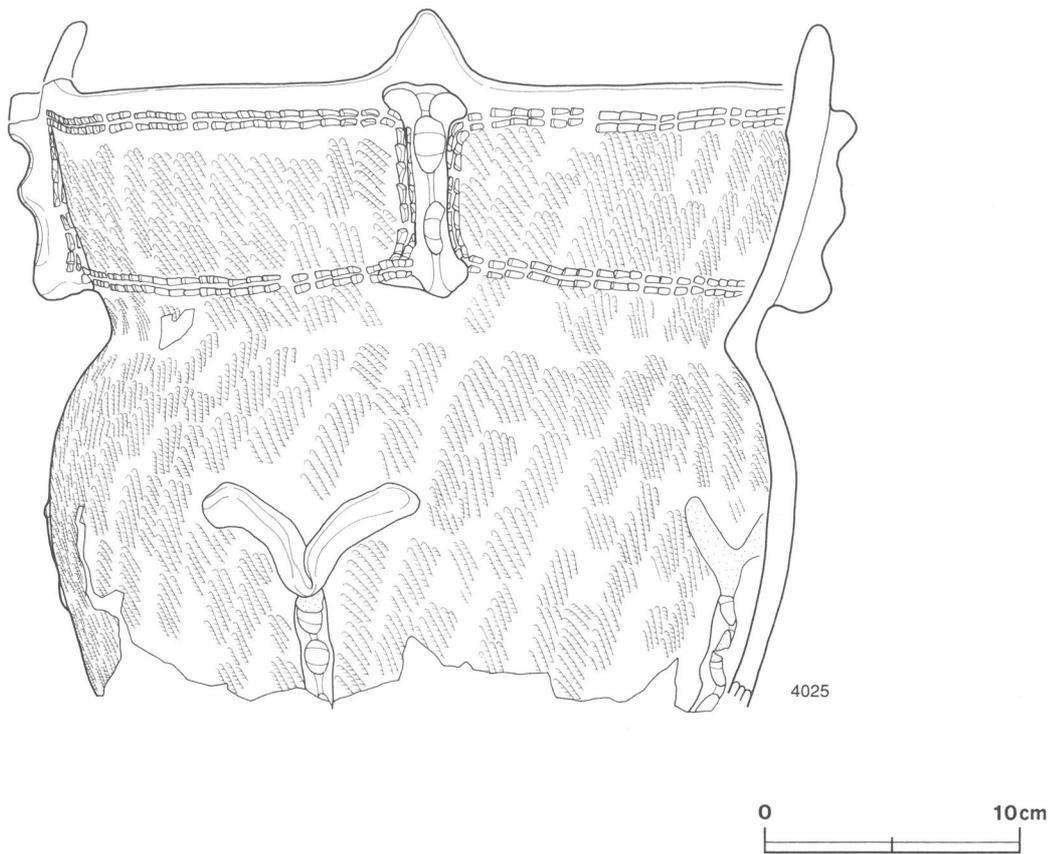
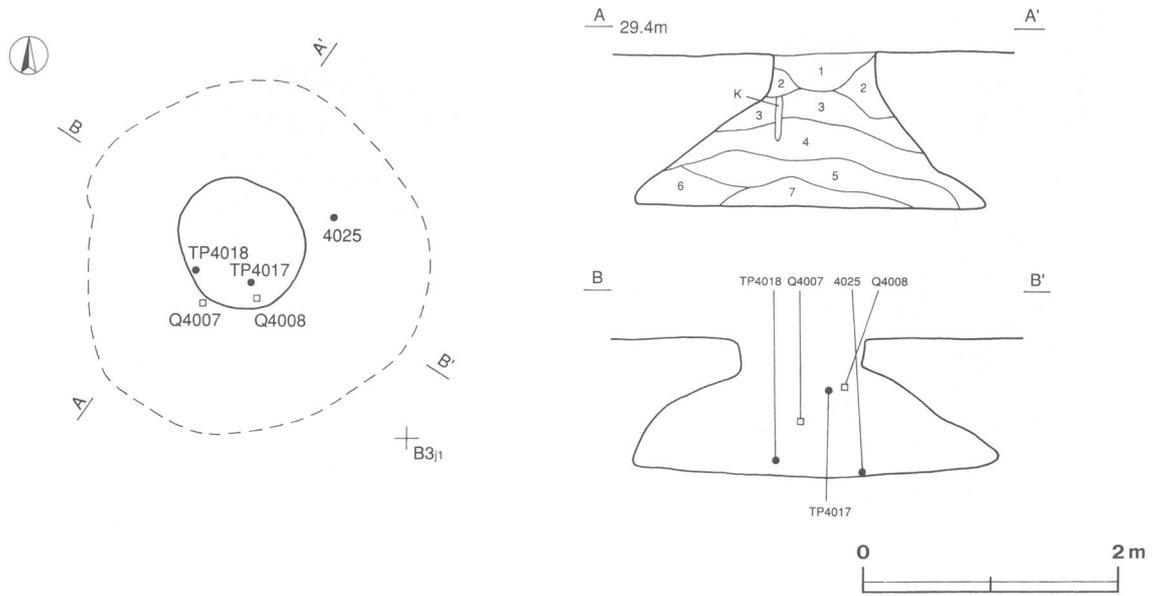
覆土 7層に分層される。堆積状況が示すとおり、各層は凸状に盛り上がった堆積状況を呈している。これは、開口部からの土砂の流入によるもので、自然堆積と考えられる。

土層解説

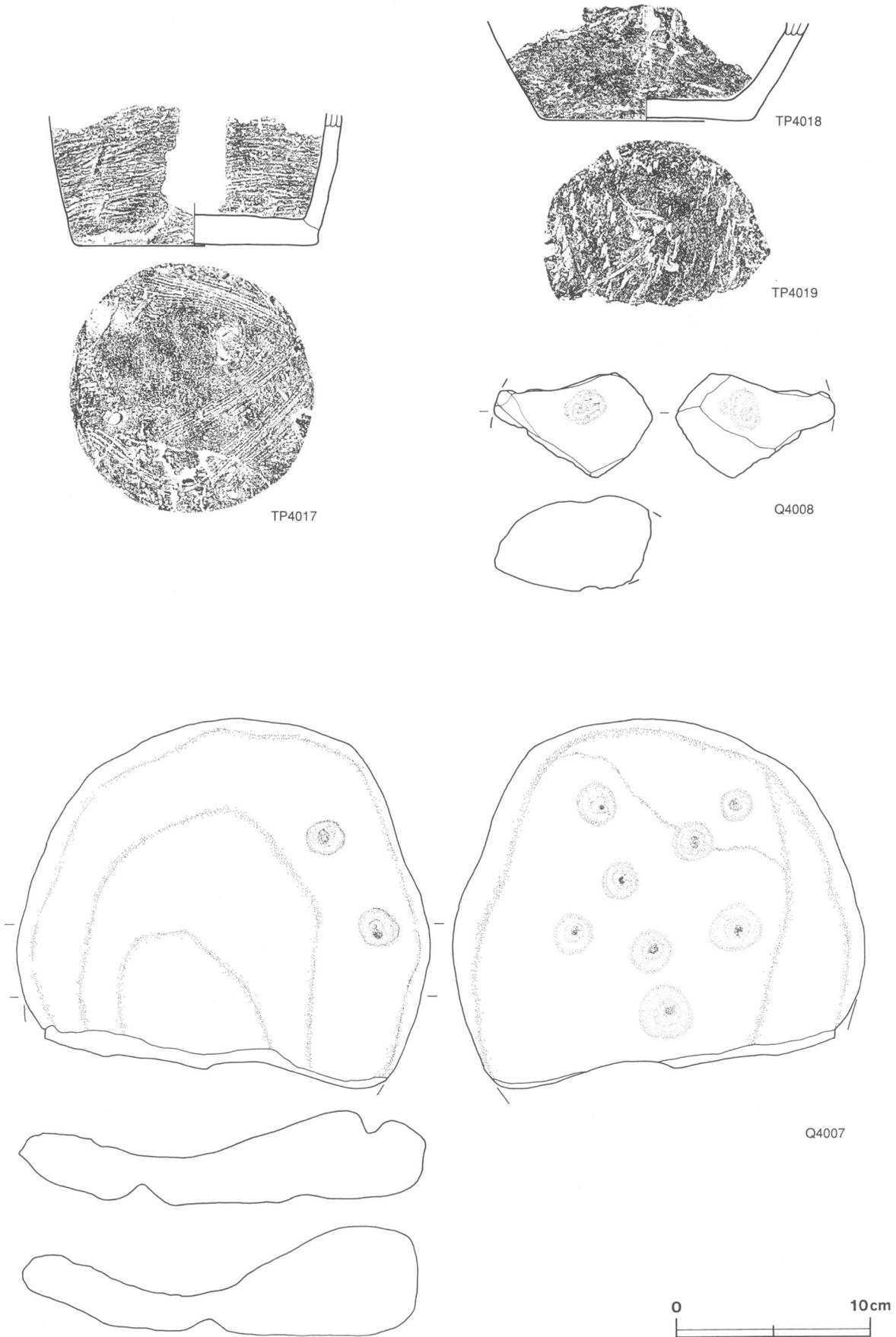
- | | | | |
|-------|----------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、ローム大ブロック微量 | 6 黒色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 黒色 | 炭化物中量、ロームブロック少量 |
| 4 黒色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片46点、凹石1点、石皿1点、礫2点が、主に覆土中層から廃棄されたような状態で出土している。なお、4025はほぼ底面から出土しているため、本跡の廃絶時期を考える上で参考となる。

所見 本跡の廃絶時期は、覆土が自然堆積と考えられることや、底面から出土した4025などから、縄文時代中期中葉（阿玉台Ⅱ式期）と判断される。



第129図 第975号土坑・出土遺物実測図



第130图 第975号土坑出土遺物実測図

第975号土坑出土遺物観察表（第129・130図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4025	縄文土器	深鉢	29.3	(28.0)	—	押圧を施した隆帯を4本懸垂させ、口縁部は2列の結節沈線で隆帯間を区画。地文はL無節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	底面	P L41
TP4017	縄文土器	深鉢	—	(6.7)	12.7	外面粗い削り。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土中層	底部網代痕及び条痕
TP4018	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	(11.1)	内外面ナデ。	長石・石英・雲母	普通	明赤褐	覆土中層	底部網代痕

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4007	石皿	(19.3)	21.4	5.8	(2464.0)	雲母片麻岩	片面に磨耗による皿状のくぼみを有し、裏面中心に凹石に併用。	覆土中層	P L61
Q4008	凹石	(5.5)	(10.2)	5.0	(217.5)	砂岩	両面に敲打による浅いくぼみを有する。	覆土中層	

第977号土坑（第131～133図）

位置 調査2区の北部，B3h1区。土坑墓群域に位置する。

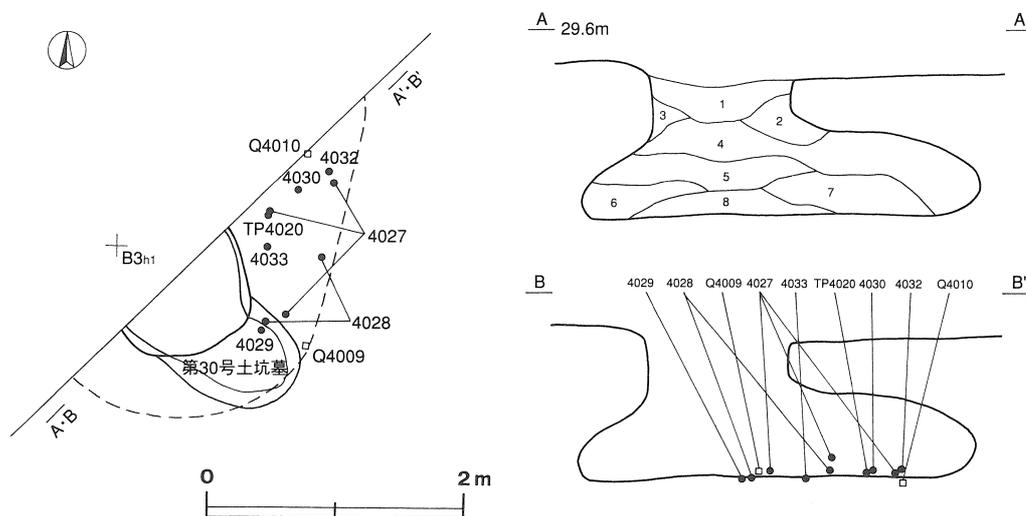
重複関係 第30号土坑墓に南壁の上部を掘り込まれている。

規模と形状 本跡の約半分が調査区域外に位置するため，平面形の詳細は不明である。開口部の平面形は，長径1.38m，短径1.16m程度の楕円形と推定される。底面はほぼ平坦で，平面形は楕円形と推定されるが，規模などの詳細は不明である。確認面からの深さは116cmで，壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり，ほぼ水平の天井部に至る。くびれ部から上位の壁は直立する。また，底面からくびれ部までの高さは，平均73cmである。ピットなどは確認した範囲には存在しない。

覆土 8層に分層される。覆土下層の第7・8層は，締まりの弱い土層で，鹿沼パミスを比較的多く含む点で共通している。また，第7層はローム粒子やロームブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

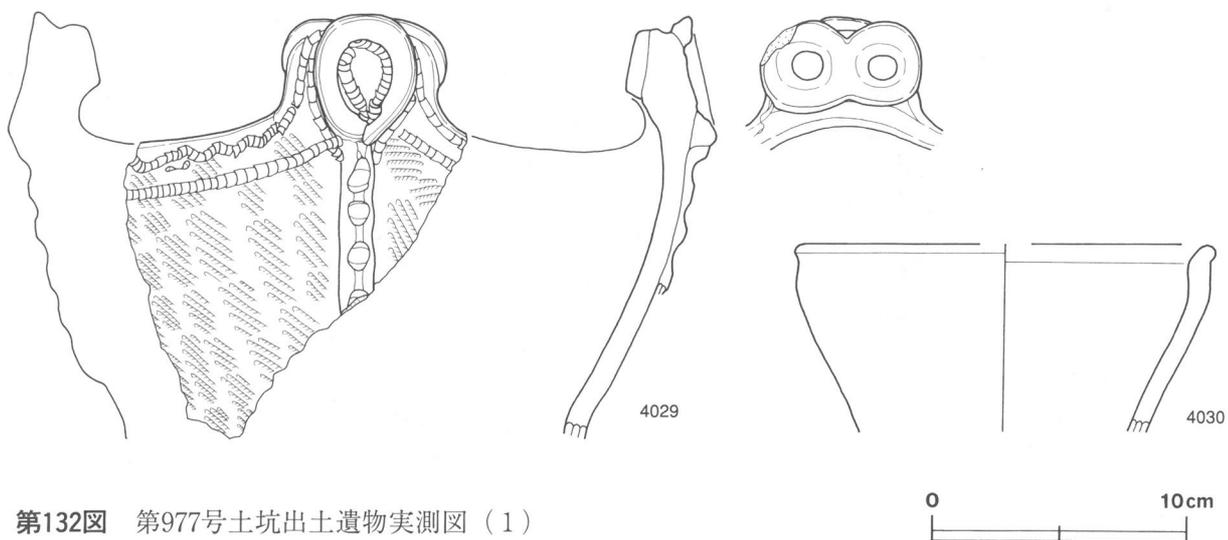
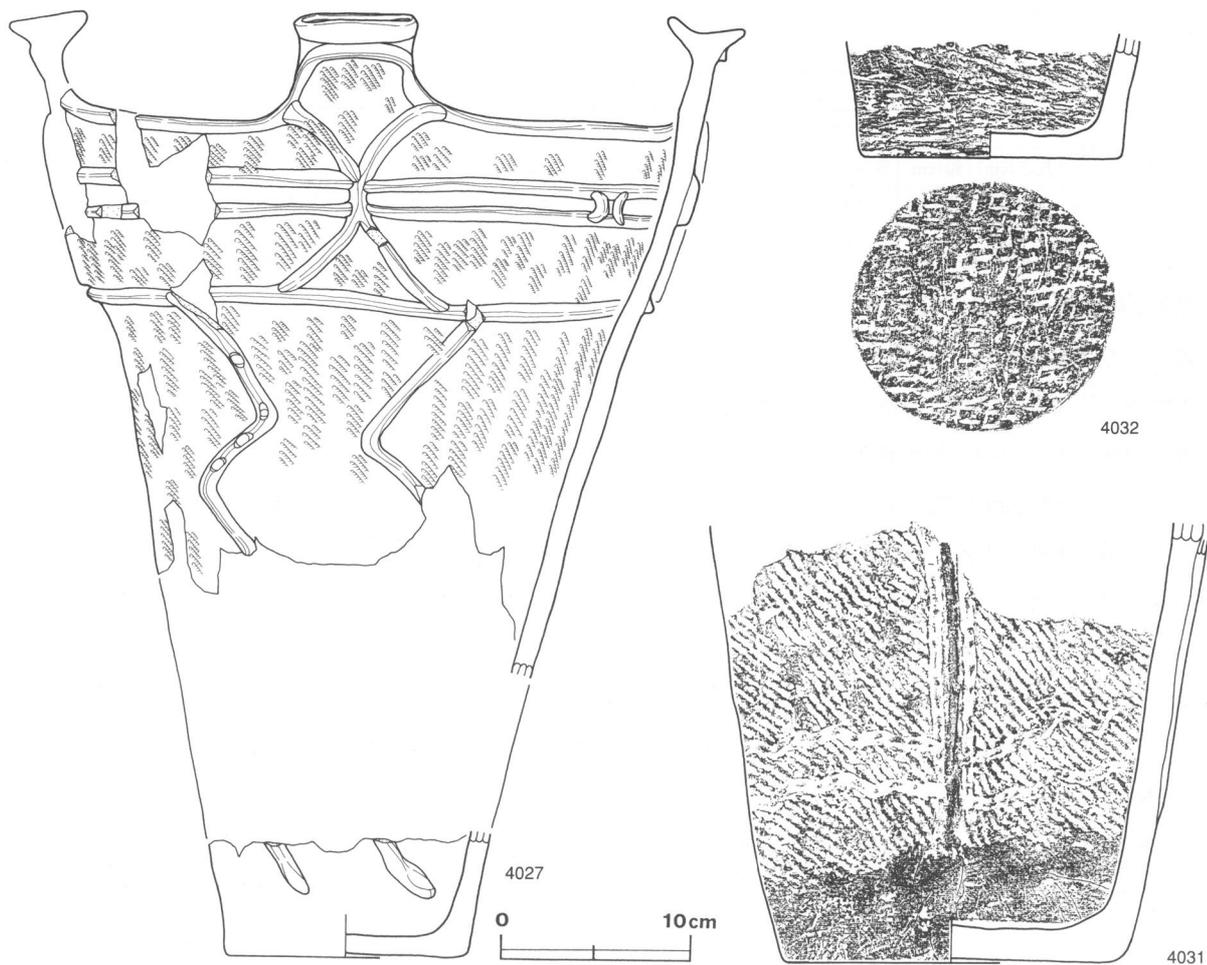
- | | | | |
|--------|--------------------|--------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 5 極暗褐色 | 炭化物・炭化粒子・鹿沼パミス少量，ロームブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 7 褐色 | 鹿沼パミス中量，ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・鹿沼パミス少量 |



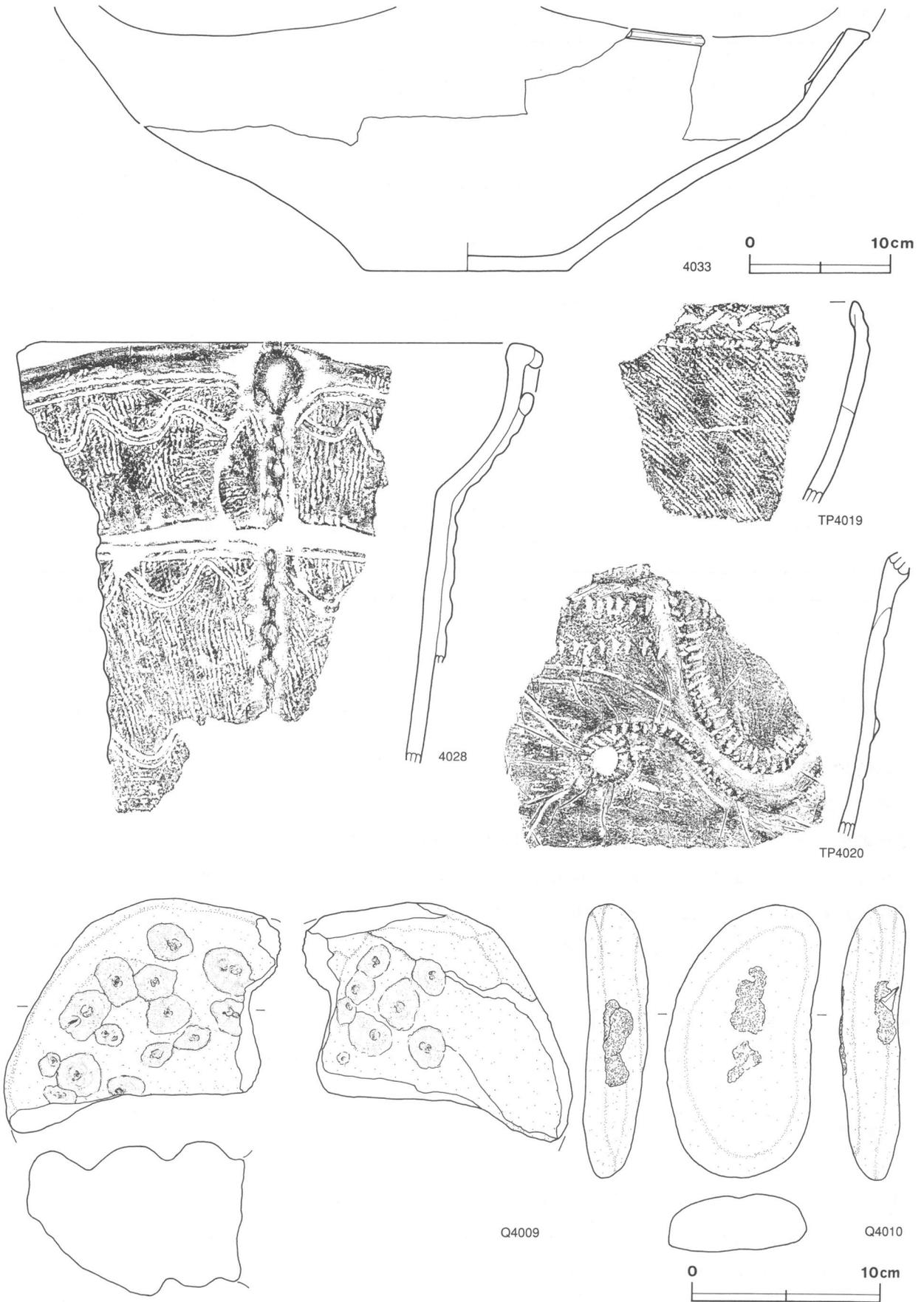
第131図 第977号土坑実測図

遺物出土状況 縄文土器片51点、凹石1点、敲石1点、礫2点が、主に覆土下層から一括廃棄されたような状態で出土している。

所見 本跡の廃絶時期は、覆土下層が人為堆積と考えられ、縄文土器の大形破片が一括廃棄された覆土下層の堆積時とほとんど時間差がないと考えられるため、出土土器などから、縄文時代中期中葉(阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期)と判断される。



第132図 第977号土坑出土遺物実測図(1)



第133图 第977号土坑出土遗物实测图(2)

第977号土坑出土遺物観察表（第132・133図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4027	縄文土器	深鉢	[49.8]	34.2	12.4	断面三角形の隆帯をX字状や鋸歯状に連結させる。地文はL無節縄文を縦方向に間隔をあけて施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土下層	
4028	縄文土器	深鉢	[25.6]	(22.6)	—	押圧を施した隆帯を4本懸垂させ、2本1組の平行沈線文や波状沈線文を配す。地文はL無節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土下層	
4029	縄文土器	深鉢	[24.2]	(16.8)	—	波頂部から押圧を施した隆帯を懸垂させ、口縁部に結節沈線を2列巡らす。地文はL無節縄文を縦方向に間隔をあけて施文。	長石・石英	普通	黒褐	覆土下層	
4030	縄文土器	浅鉢	[16.0]	(7.5)	—	内外面ナデ。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土下層	
4031	縄文土器	深鉢	—	(17.4)	12.8	結節沈線に沿う隆帯を懸垂させ、波状結節沈線を横方向に巡らす。地文はL無節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	橙	覆土下層	
4032	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	10.3	外面粗い削り。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土下層	底部網代痕
4033	縄文土器	浅鉢	[57.0]	(17.4)	14.7	内外面丁寧な磨き。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土下層	
TP4019	縄文土器	深鉢	—	(10.8)	—	口縁部に結節沈線を巡らす。地文はL無節縄文を縦方向に間隔をあけて施文。	長石・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP4020	縄文土器	深鉢	—	(14.6)	—	刻み目を施した幅広の隆帯が懸垂し、爪形文を巡らす。	石英・雲母	普通	明赤褐	覆土下層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4009	凹石	(12.8)	(14.5)	(8.1)	(1240.2)	砂岩	両面にV字状のくぼみを多数有する。	覆土下層	P L 61
Q4010	敲石	14.7	8.2	3.2	565.7	砂岩	片面及び両側縁に敲打による浅いくぼみを有する。	覆土下層	P L 61

第983号土坑（第134・135図）

位置 調査2区の北西部，C2c6区。住居跡群域に位置する。

重複関係 北側で第1000号土坑，南側で第1066号土坑，第985号土坑を掘り込んでいる。また，南側で第141号堅穴住居跡，東側で第361号ピット及び第362号ピットと重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は，長軸2.46m，短軸2.14mの不整六角形である。確認面からの深さは，30cmで，壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。ピットは7か所で，P1は深さ32cm，P2は深さ84cm，P3は深さ64cm，P4は深さ61cm，P5は深さ63cm，P6は106cm，P7は深さ60cmである。

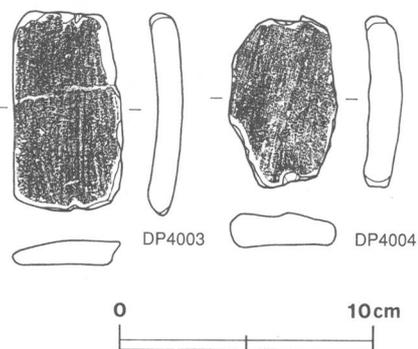
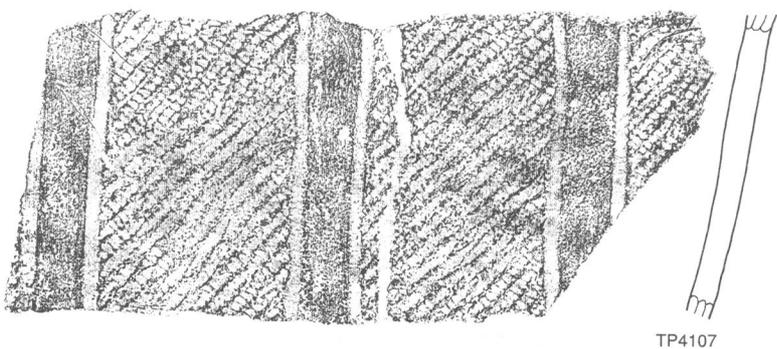
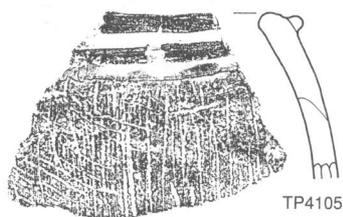
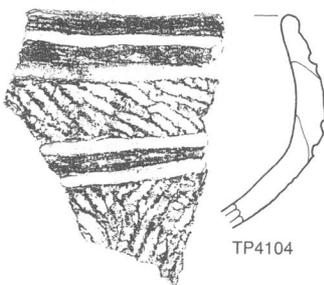
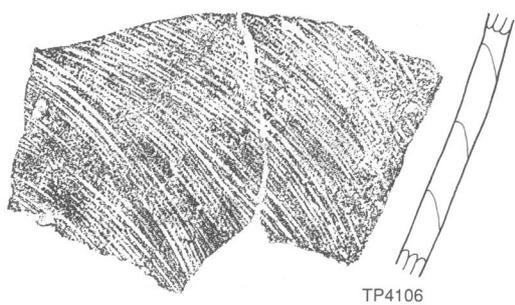
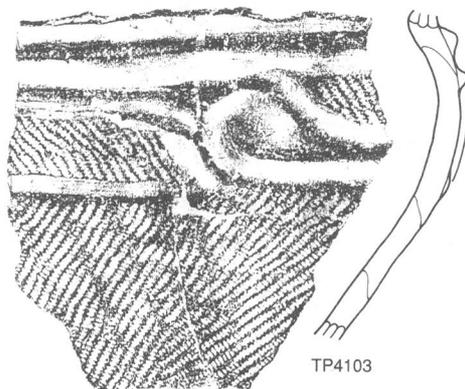
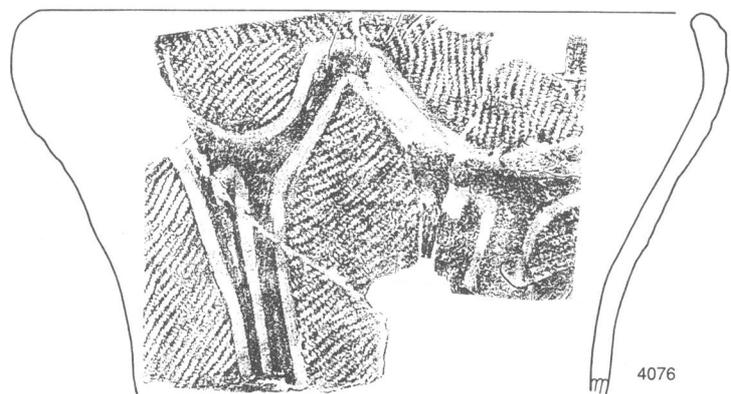
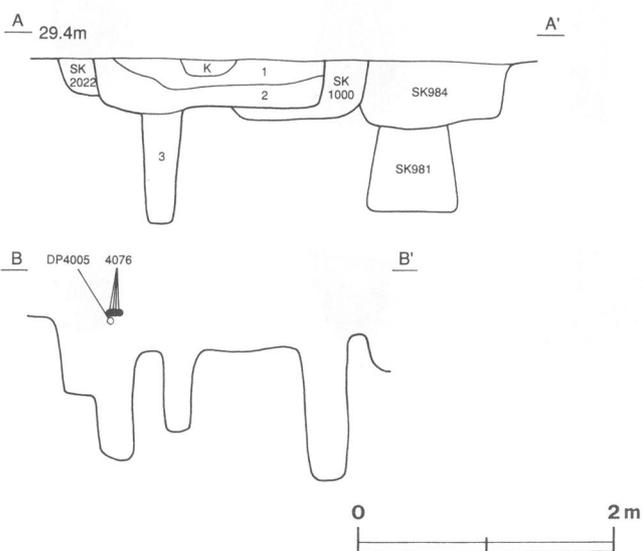
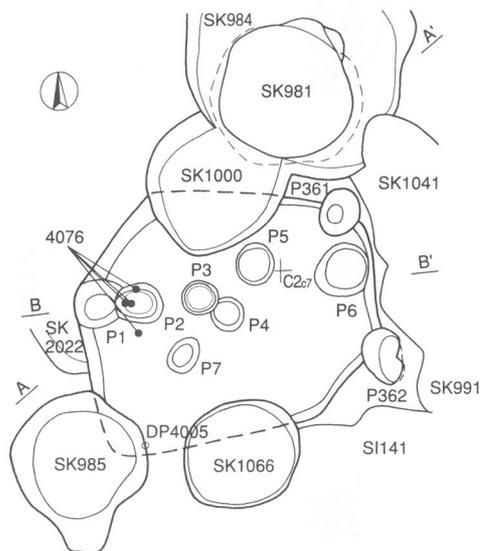
覆土 2層に分層される。第1層は本跡の他，第1000号土坑，第981号土坑，第984号土坑に関係する覆土であり，第3層はP2の覆土であるため，本跡の純粋な覆土は第2層のみである。単一層であることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

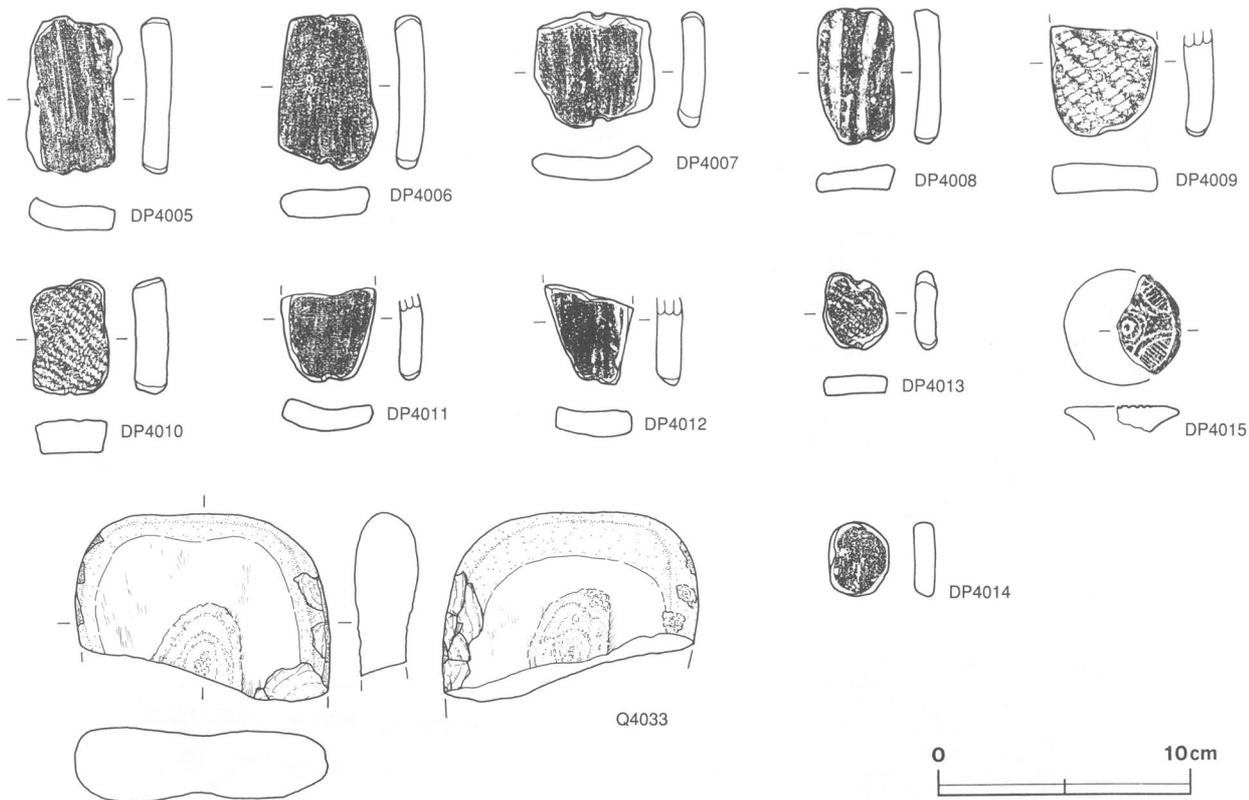
- | | | | |
|-------|-------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片527点，土器片錘11点，土器片円板1点，土製耳飾1点，凹石1点，磨石1点，剥片5点，礫19点が，主に覆土上層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。

所見 本跡は，平面形が不整六角形を呈し，覆土が単一層であることから，人為堆積と考えられ，土器片錘，土器片円盤，土製耳飾がまとまって出土している点に特徴がある。本跡の廃絶時期は，出土遺物などから，縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ式期）と判断される。



第134图 第983号土坑·出土遺物実測図



第135図 第983号土坑出土遺物実測図

第983号土坑出土遺物観察表 (第134・135図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4076	縄文土器	深鉢	[28.0]	(15.2)	—	波状懸垂文と逆U字状懸垂文が入り組み、蕨手状沈線文が垂下する。地文はRL単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土上層	
TP4103	縄文土器	深鉢	—	(12.7)	—	沈線に沿う隆帯で楕円区画文やS字状文を描出。地文はRL単節縄文を縦・横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	暗褐	覆土中層	
TP4104	縄文土器	深鉢	—	(8.5)	—	沈線による横位区画文，地文はLR単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	暗褐	覆土中層	
TP4105	縄文土器	深鉢	—	(6.5)	—	口縁部に1本隆帯を巡らす。地文は集合条線文を縦・斜め方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土中層	
TP4106	縄文土器	深鉢	—	(10.0)	—	地文は集合条線文を斜め方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	暗褐	覆土中層	
TP4107	縄文土器	深鉢	—	(12.0)	—	懸垂文，2本沈線間を磨り消す。RL単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土中層	

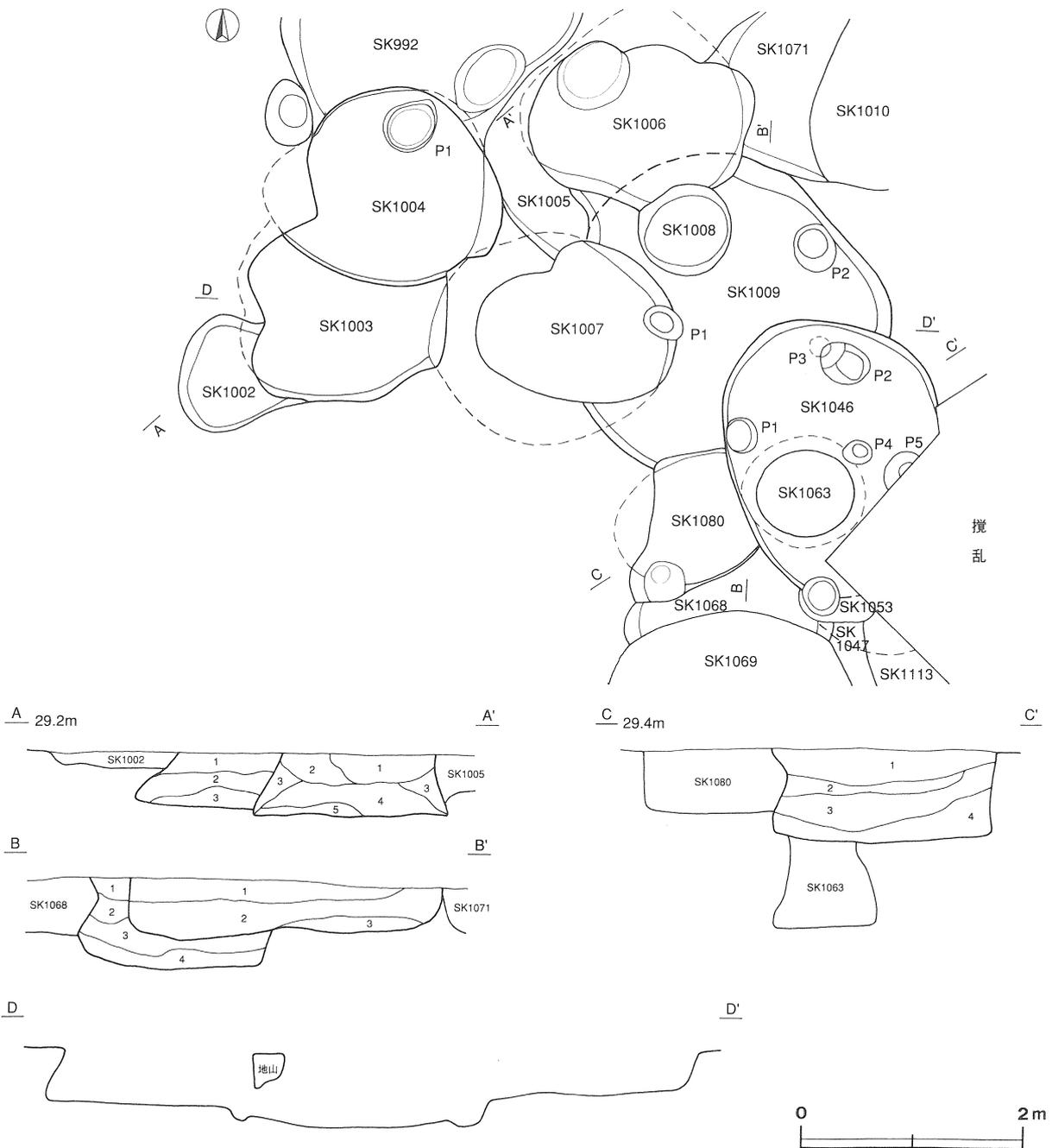
番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP4003	土器片錘	8.0	4.4	1.1	48.4	長石・石英・雲母，灰褐	口縁部片利用，長方形，長軸方向1対。	覆土上層	P L 58
DP4004	土器片錘	6.7	4.3	1.3	39.8	長石・石英・雲母，暗褐	胴部片利用，長方形，長軸方向1対。	覆土上層	P L 58
DP4005	土器片錘	6.3	3.6	1.1	33.1	長石・石英・雲母，暗褐	胴部片利用，長方形，長軸方向1対。	覆土上層	P L 58
DP4006	土器片錘	6.2	3.8	1.0	32.1	長石・石英・雲母，褐	胴部片利用，長方形，長軸方向1対。	覆土上層	P L 58
DP4007	土器片錘	4.6	4.8	0.9	25.2	長石・石英・雲母，暗褐	胴部片利用，長方形，短軸方向1対。	覆土上層	P L 58
DP4008	土器片錘	5.4	3.1	0.9	21.3	長石・石英・雲母，暗褐	胴部片利用，長方形，長軸方向1対。	覆土上層	P L 58
DP4009	土器片錘	(4.4)	4.3	1.0	(26.5)	長石・石英・雲母，褐	胴部片利用，方形，長軸方向1対，欠損。	覆土上層	P L 58
DP4010	土器片錘	4.6	3.1	1.3	25.7	長石・石英・雲母，明褐	胴部片利用，長方形，長軸方向1対。	覆土上層	P L 58
DP4011	土器片錘	(3.7)	3.7	0.9	(15.3)	長石・石英・雲母，暗褐	胴部片利用，方形，長軸方向1対，欠損。	覆土上層	P L 58

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP4012	土器片鍾	(4.0)	3.5	1.0	(13.0)	長石・石英・雲母, 灰褐	胴部片利用, 不整形, 長軸方向1対, 欠損。	覆土上層	P L 58
DP4013	土器片鍾	3.1	2.5	0.8	6.8	長石・石英・雲母, 褐	胴部片利用, 楕円形, 長軸方向1対。	覆土上層	P L 58
DP4014	土器片円盤	2.9	2.4	0.8	6.9	長石・石英・雲母, 暗褐	胴部片利用, 楕円形, 側縁研磨。	覆土上層	P L 58
DP4015	耳飾	(3.9)	(2.5)	(1.1)	(6.0)	長石・石英・雲母, 暗褐	刺突, 重圏・連弧の線刻, 欠損。	覆土上層	P L 58

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4033	凹石	(7.5)	(10.1)	(2.9)	(277.0)	石英斑岩	両面に浅いくぼみを有する。磨石に併用。	覆土中層	

第1003号土坑 (第136~138図)

位置 調査2区の北西部, C2b8区。土坑墓群と住居跡群域に位置する。



第136図 第1003・1004・1009・1046号土坑実測図

重複関係 第1004号土坑に北壁の大半、第1007号土坑に東壁の下位が掘り込まれている。第1002号土坑を掘り込んでいます。

規模と形状 開口部の平面形は、長径2.08m、短径1.48m程度の不整楕円形と推定される。底面はほぼ平坦で、平面形は径1.92m程度の円形と推定されるが、詳細は不明である。確認面からの深さは57cmで、南壁はほぼ直立し、西壁は内傾して立ち上がる。

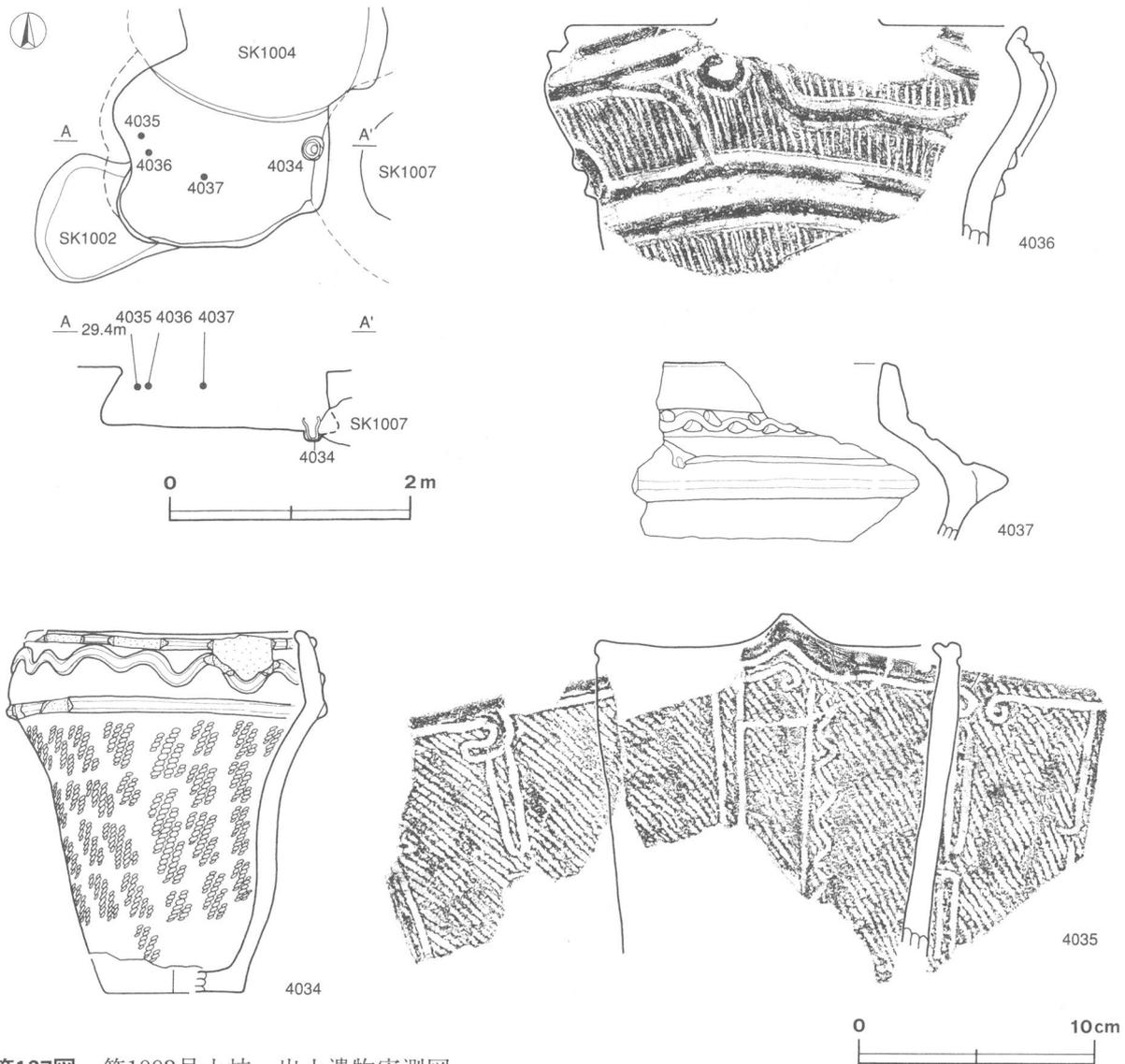
覆土 3層に分層される。各層は凸状に盛り上がった堆積状況を呈している。これは、開口部からの土砂の流入によるもので、自然堆積であると考えられる。

土層解説

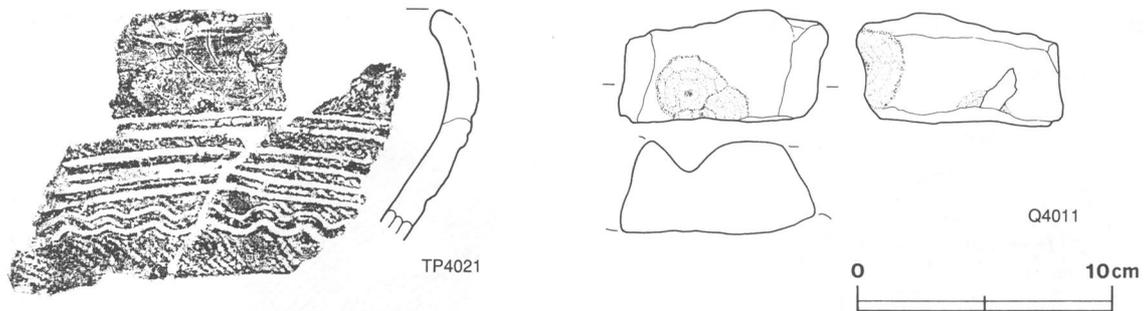
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片83点、凹石1点、礫3点が、主に覆土中層から廃棄されたような状態で出土している。また、第1007号土坑に掘り込まれた東壁際の底面からは、ほぼ完形の深鉢が正位の状態出土している。

所見 本跡の廃絶時期は、東壁際の底面から出土している4034などから、縄文時代中期後葉（加曾利E I式期）と判断される。



第137図 第1003号土坑・出土遺物実測図



第138図 第1003号土坑出土遺物実測図

第1003号土坑出土遺物観察表 (第137・138図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4034	縄文土器	深鉢	[11.2]	15.2	[6.0]	口縁部を隆帯で横位区画し、区画内に波状隆帯を巡らす。地文はR L単節縄文を間隔をあけて施文。	長石・石英	普通	橙	底面	P L41
4035	縄文土器	深鉢	15.3	(14.4)	—	口縁部から2本1組の沈線を垂下させて胴部区画し、U字状・逆U字状・波状沈線を配す。地文はL R単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土中層	
4036	縄文土器	深鉢	[19.2]	(9.5)	—	沈線に沿う2本1組の隆帯で口縁部を区画し、区画内にクランク文を描出、地文は燃糸文を斜め方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土中層	
4037	縄文土器	浅鉢	—	(7.5)	—	2本沈線を巡らせ、その間に波状隆帯を配し、上下に交互刺突文を施文。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土中層	
TP4021	縄文土器	深鉢	—	(9.3)	—	平行沈線、波状沈線を巡らし、地文はL R単節縄文を縦方向に施文。	石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土中層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4011	凹石	(4.5)	(8.2)	(33.7)	(155.5)	砂岩	両面にV字状のくぼみを有する。磨石に併用。	覆土中層	

第1004号土坑 (第136・139図)

位置 調査2区の北西部，C2 b8区。土壙墓群と住居跡群に挟まれた区域に位置する。

重複関係 第992号土坑に北壁の大半を掘り込まれている。南側で第1003号土坑，東側で第1005号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部の平面形は、長径1.44m，短径1.30mの楕円形である。底面はほぼ平坦で、平面形は長径2.02m，短径1.80mの楕円形である。確認面からの深さは60cmで、壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり、上位で直立する。また、底面からくびれ部までの高さは、平均38cmである。ピットは1か所で、P1は北壁寄りに位置し、深さ78cmである。

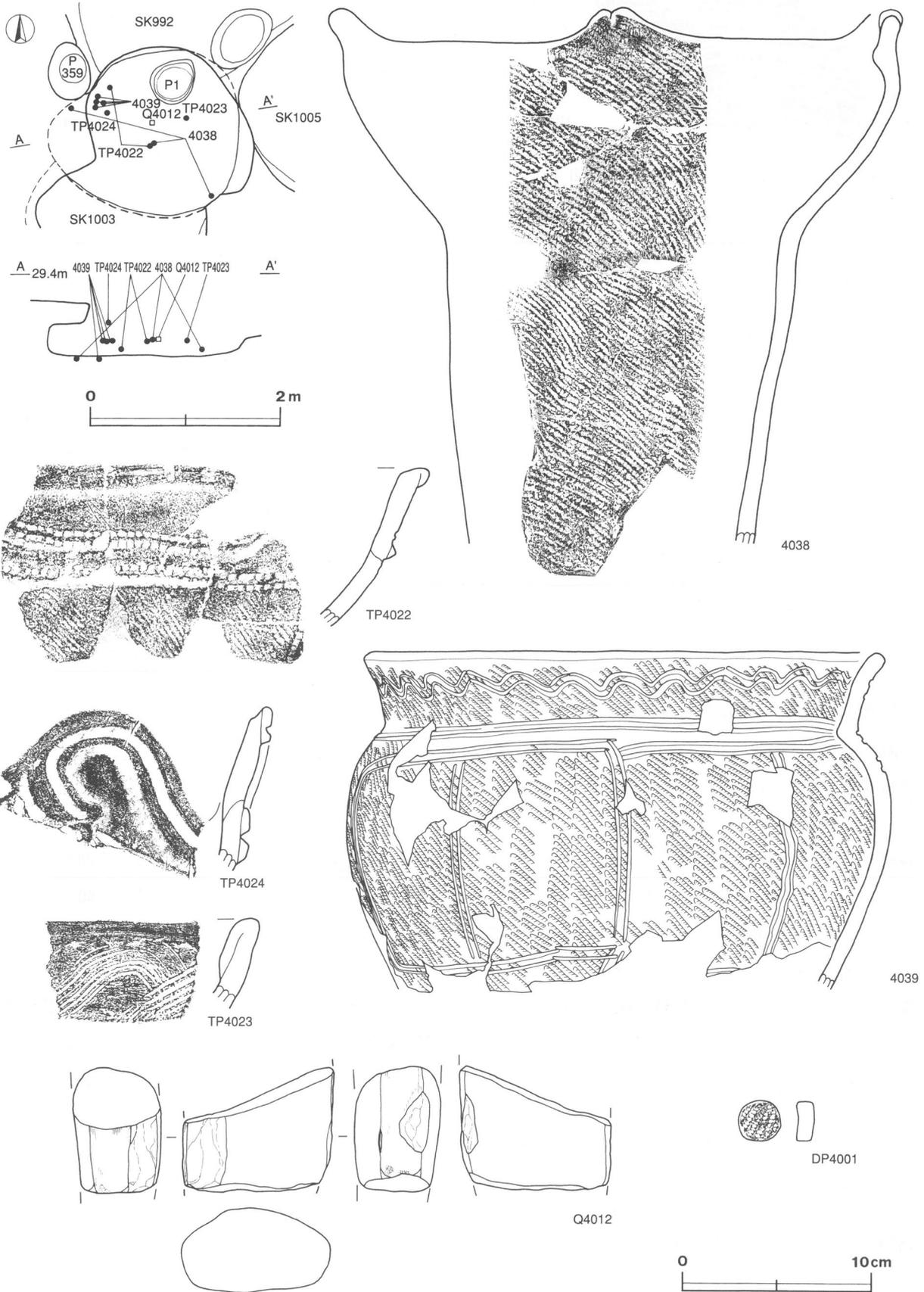
覆土 5層に分層される。堆積状況が示すとおり、最下層の第5層はローム粒子やロームブロックを比較的多く含み、厚さ10cm程度で平坦に堆積している。その上層の第4層は凸状に盛り上がり、堆積している。これは、最下層の第5層が人為的に埋め戻された可能性を示唆し、第4層は開口部からの土砂の流入による自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片160点，土器片円盤1点，磨石1点，礫5点，主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。

所見 本跡の廃絶時期は、底面から横位の状態で出土している4039などから、縄文時代中期中葉（阿玉台Ⅳ式期）と判断される。



第139図 第1004号土坑・出土遺物実測図

第1004号土坑出土遺物観察表（第139図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4038	縄文土器	深鉢	[29.2]	(28.6)	—	小波状口縁部、地文はLR単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土下層～底面	
4039	縄文土器	深鉢	[26.7]	(18.1)	—	口縁部は波状沈線を巡らし、胴部は2本1組の沈線で杵状に区画。地文はL無節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	暗褐	覆土下層～底面	
TP4022	縄文土器	深鉢	—	(8.4)	—	2本1組の結節沈線を巡らす。地文はLR単節縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	暗褐	覆土下層	
TP4023	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	集合条線文を施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	
TP4024	縄文土器	深鉢	—	(8.7)	—	波状口縁を呈する。波頂部に2本1組の隆帯でS字状のモチーフを作出。	長石・石英・雲母	普通	暗褐	覆土中層	

番号	器種	計測値				胎土・色調	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
DP4001	土器片円盤	2.2	2.2	0.9	4.9	長石・石英・雲母、暗褐	円形、側縁研磨。	覆土中層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4012	磨石	(6.7)	(8.1)	(4.5)	(322.5)	砂岩	両側縁研磨。	覆土下層	

第1009号土坑（第136・140・141図）

位置 調査2区の北西部，C2b9区。土壌墓群と住居跡群に挟まれた区域に位置する。

重複関係 西側で第1007号土坑，北側で第1038号土坑，南東側で第1046号土坑を掘り込んでいる。北西側で第1005号土坑と第1036号土坑，南側で第1080号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 開口部の平面形は，径2.98m程度の不整形円形と推定される。底面はほぼ平坦で，平面形は直径2.72m程度の円形と推定されるが，詳細は不明である。確認面からの深さは57cmで，壁は直立する。ピットは2か所で，P1は中央やや西寄りに位置し，深さ24cmである。P2は東壁際に位置し，深さ24cmである。

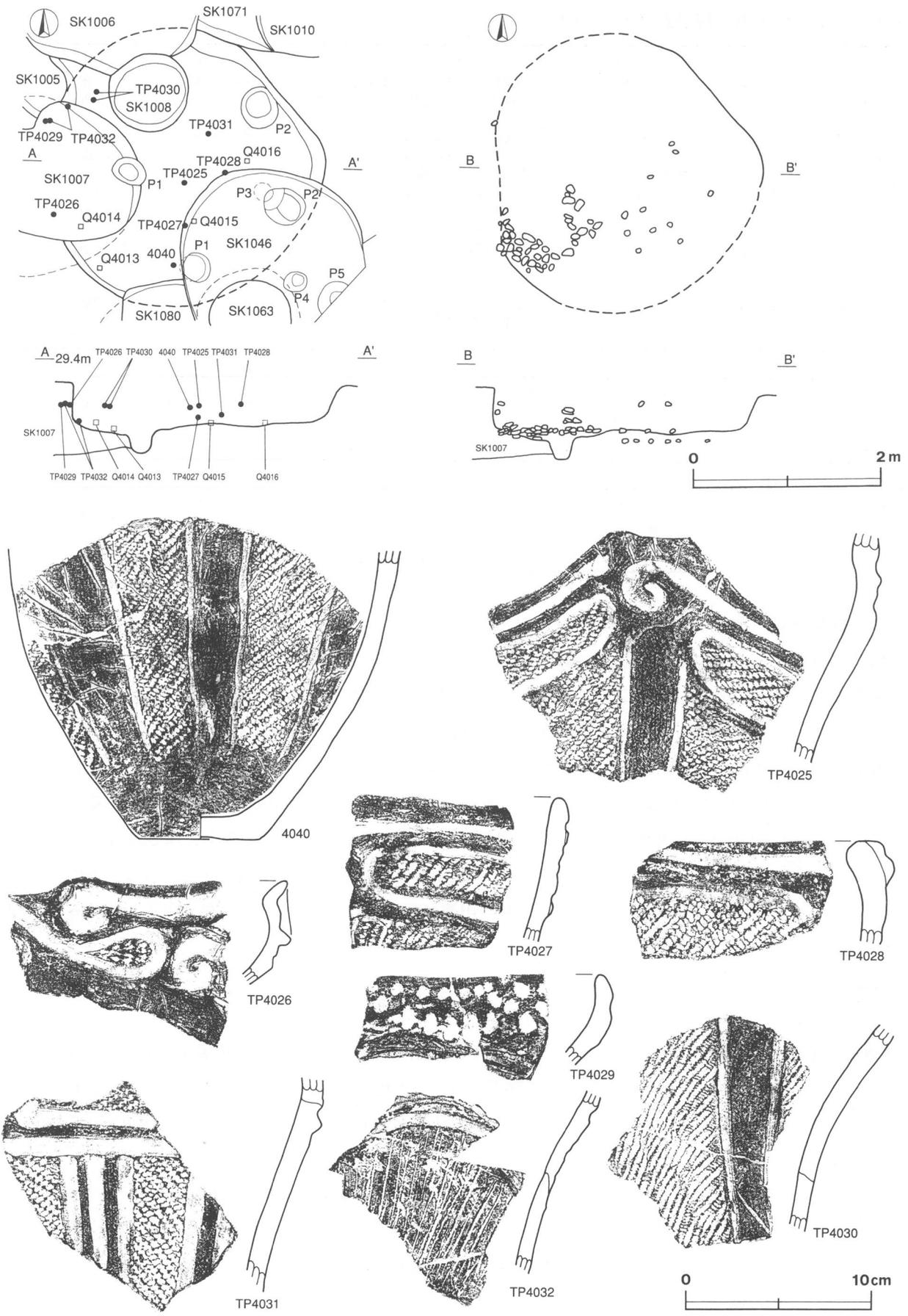
覆土 3層に分層される。中層から下層にかけて，縄文土器の大形破片などが廃棄されたような状態で出土している。また，下層から底面直上にかけて，多数の円礫が敷き詰められたような状態で出土していることから，下層は人為堆積の可能性が高いと思われる。

土層解説

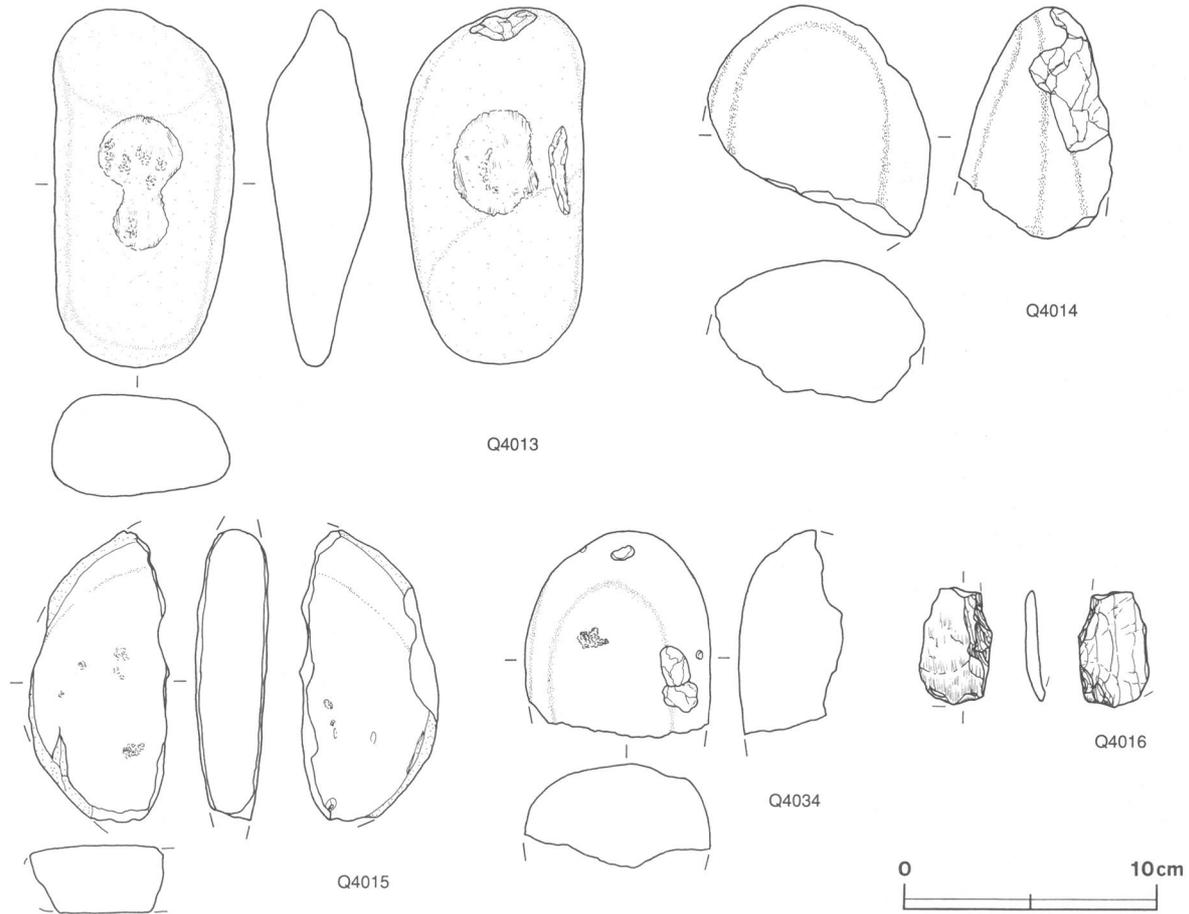
- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
 2 極暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子・焼土粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片196点，磨製石斧1点，磨石4点，礫68点が，主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。また，第1007号土坑との重複部分及び南西部の底面直上からは，敷き詰められたような状態で多数の円礫が出土し，さらに，縄文土器の大形口縁部破片が西壁際の底面直上から横位の状態で出土している。

所見 底面直上から，多数の円礫が敷き詰められたような状態で出土していることは，フラスコ状土坑の2次的な利用形態や廃絶過程などを考える上で重要となる。本跡の廃絶時期は，覆土下層から廃棄されたような状態で出土した土器などから，縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ式期）と判断される。



第140图 第1009号土坑·出土遗物实测图



第141図 第1009号土坑出土遺物実測図

第1009号土坑出土遺物観察表 (第140・141図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4040	縄文土器	深鉢	—	(15.6)	6.6	2本沈線間を磨り消す懸垂文, 地文はRL単節縄文を縦方向に施文。	石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土中層	
TP4025	縄文土器	深鉢	—	(12.0)	—	口縁部は沈線による楕円区画文, 胴部の懸垂文は2本沈線間を磨り消す。地文はRL単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土中層	
TP4026	縄文土器	深鉢	—	(5.6)	—	沈線による渦巻文や楕円区画文を描出, 頸部は無文。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土中層	
TP4027	縄文土器	深鉢	—	(7.9)	—	沈線に沿う隆帯による楕円区画文, 地文はRL単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英	普通	橙	覆土下層	
TP4028	縄文土器	深鉢	—	(6.4)	—	沈線に沿う隆帯による楕円区画文, 地文はLR単節縄文を横方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土中層	
TP4029	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	刺突状の列点文を巡らす。	長石・石英・雲母	普通	橙	覆土中層	
TP4030	縄文土器	深鉢	—	(10.6)	—	2本沈線間を磨り消す懸垂文, 地文は0段多条縄文を縦方向に施文。	長石・雲母	普通	褐	覆土中層	
TP4031	縄文土器	深鉢	—	(11.5)	—	3本沈線間を磨り消す懸垂文, 地文はLR単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英・雲母	普通	明褐	覆土下層	
TP4032	縄文土器	深鉢	—	(9.5)	—	沈線を巡らし, 集合条線文を施文。	長石・石英	普通	黒褐	覆土中～下層	

番 号	器 種	計 測 値				石 質	特 徴	出土位置	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4013	磨 石	14.1	7.2	4.1	550.6	安山岩	両面中央部に研磨痕を有する。	底 面	P L61
Q4014	磨 石	(9.2)	(8.7)	(6.1)	(434.9)	安山岩	全面に研磨痕を有する。	覆土下層	
Q4015	磨 石	(11.5)	(5.5)	(2.8)	(234.5)	安山岩	両面に研磨痕を有する。	底 面	
Q4016	磨 石	(8.1)	(7.3)	(4.1)	(308.4)	石英斑岩	全面に研磨痕を有する。	底 面	
Q4017	磨製石斧	(4.6)	(2.9)	(0.5)	(8.0)	緑色片岩	刃部片，剥離後2次調整を施す。	覆土下層	

第1011号土坑（第142～144図）

位置 調査2区の北西部，B2j9区。土坑墓群と住居跡群に挟まれた区域に位置する。

重複関係 北側で第1048号土坑と接している。南西側で第997号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 開口部の平面形は，長径0.80m，短径0.65mの楕円形である。底面はほぼ平坦で，平面形は長径2.69m，短径2.44mの楕円形である。確認面からの深さは108cmである。壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり，上位で直立する。また，底面からくびれ部までの高さは，平均81cmである。

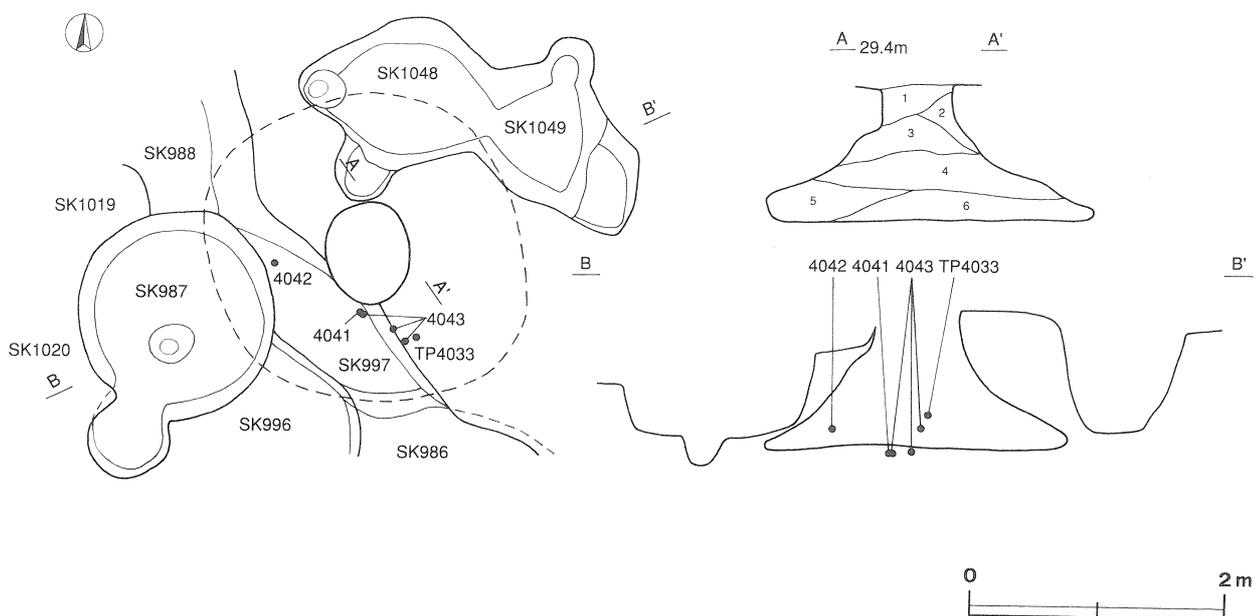
覆土 5層に分層される。堆積状況が示すとおり，各層は凸状に盛り上がった堆積状況を呈している。これは，開口部からの土砂の流入によるもので，自然堆積と考えられる。

土層解説

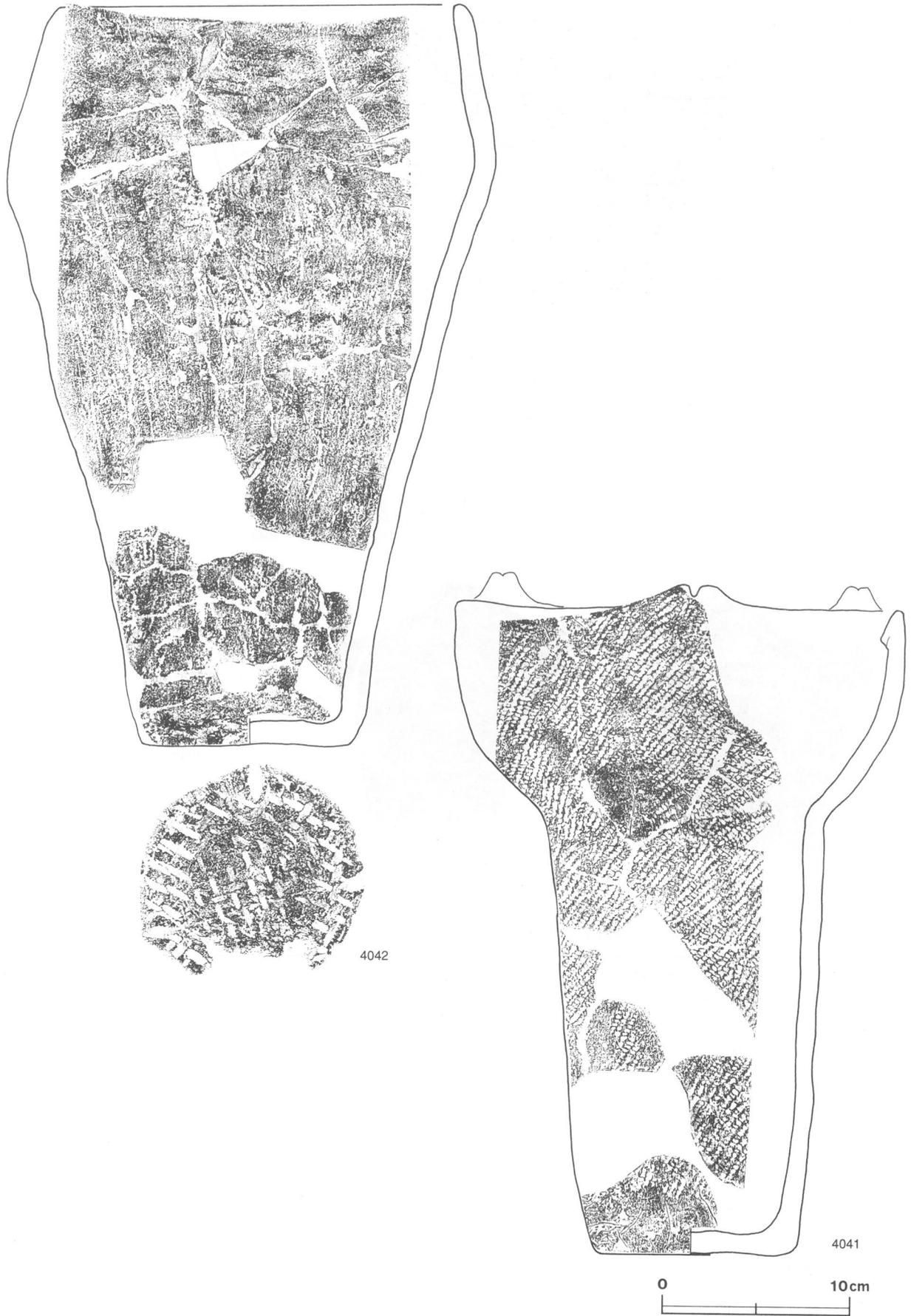
- | | | | |
|-------|----------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 黒 色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量，ローム大ブロック微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片40点，礫3点が，主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。また，底面直上からほぼ完形の縄文土器の深鉢が横位の状態で出土している。

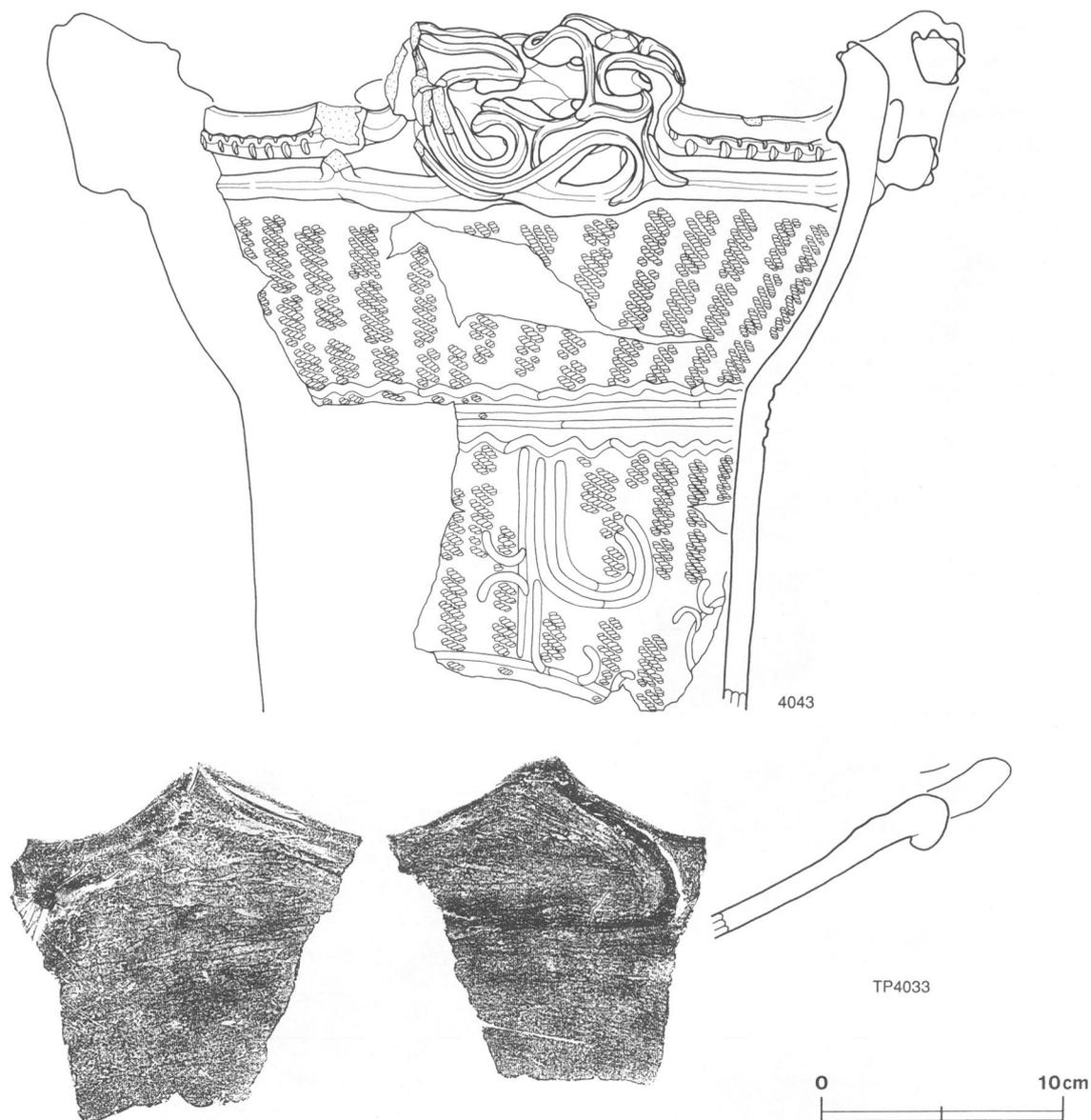
所見 本跡の廃絶時期は，覆土が自然堆積と考えられることや，底面から出土した4041などから，縄文時代中期中葉（阿玉台Ⅳ式期）と判断される。



第142図 第1011号土坑実測図



第143图 第1011号土坑出土遺物実測図（1）



第144図 第1011号土坑出土遺物実測図

第1011号土坑出土遺物観察表 (第143・144図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4041	縄文土器	深鉢	[23.5]	36.5	10.3	小波状口縁を呈し、地文はR・L単節縄文を縦方向に施文。	長石・石英	普通	にぶい橙	底面	P L 42
4042	縄文土器	深鉢	[21.4]	(39.6)	(11.3)	外面粗いナデ。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土下層	底部網代痕
4043	縄文土器	深鉢	[28.2]	(29.1)	—	口縁部は交互刺突を加えた隆帯を巡らせ、透し彫り状の把手を作出、胴部は波状沈線文や懸垂文を描出、地文はL・R単節縄文。	長石・石英	普通	灰褐	覆土下層～底面	
TP4033	縄文土器	浅鉢	—	(8.8)	—	内外面丁寧な磨き、口縁部に微隆帯を巡らす。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土下層	

第1013号土坑 (第145・146図)

位置 調査2区の北西部、C2i6区。住居跡群域に位置する。

重複関係 第142号住居跡及び第1015号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は長径1.76m、短径1.41mの不整楕円形である。確認面からの深さは28cmで、壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 2層に分層される。堆積状況に乱れなどもないため、自然堆積と考えられる。

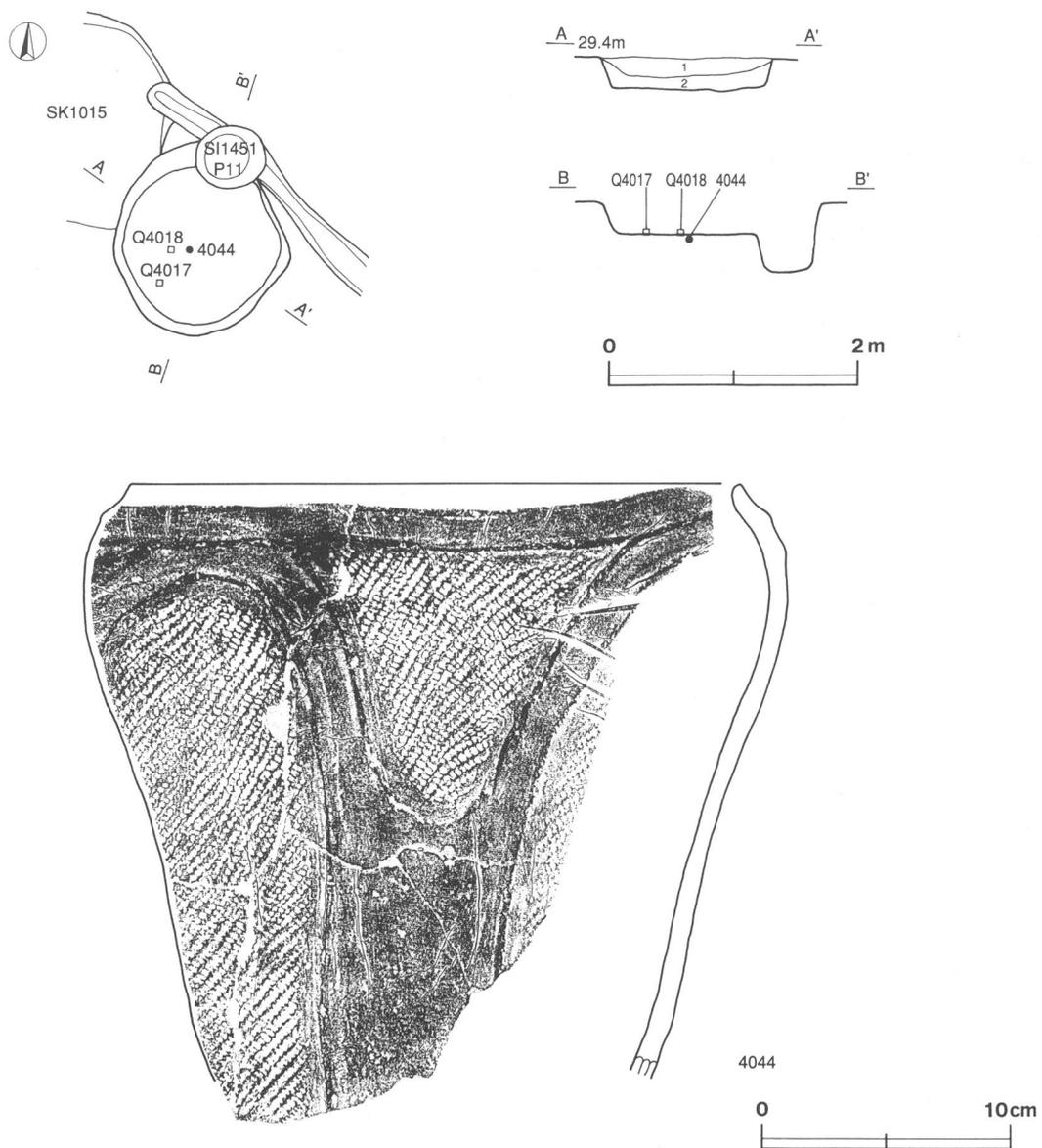
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

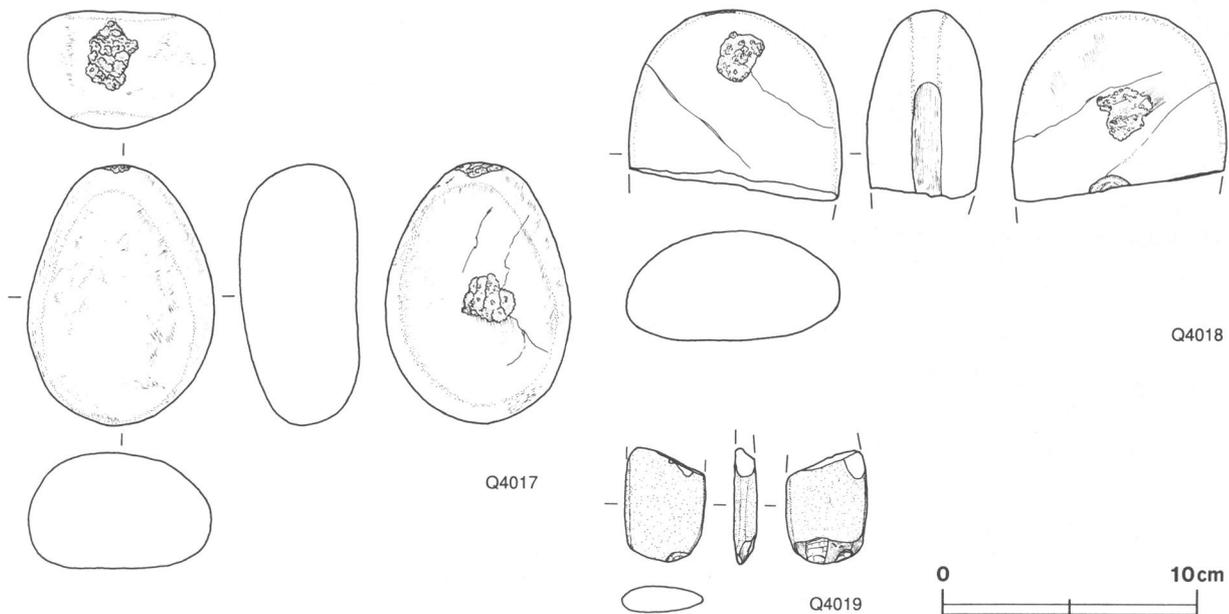
2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片73点、磨製石斧1点、磨石2点、礫6点が、主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。

所見 本跡の廃絶時期は、覆土下層から廃棄されたような状態で出土した土器などから、縄文時代中期後葉(加曾利E IV式期)と判断される。



第145図 第1013号土坑・出土遺物実測図



第146図 第1013号土坑出土遺物実測図

第1013号土坑出土遺物観察表（第145・146図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P4044	縄文土器	深鉢	[24.4]	(24.3)	—	懸垂する隆起帯で縄文部と無文部を区画，地文はRL単節縄文を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	底面	

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4017	磨石	10.3	7.2	4.6	497.7	砂岩	上端片面中央部に敲打痕，全面に研磨痕を有する。	底面	
Q4018	磨石	(7.6)	8.4	4.5	(402.4)	安山岩	両面に敲打痕，側面に明瞭な研磨痕を有する。	底面	
Q4019	磨製石斧	(4.5)	3.2	1.0	(20.1)	砂岩	刃部片，片刃で上半部を欠損する。	覆土下層	

第1034号土坑（第147～149図）

位置 調査2区の北部，C3b1区。土坑墓群と住居跡群に挟まれた区域に位置する。

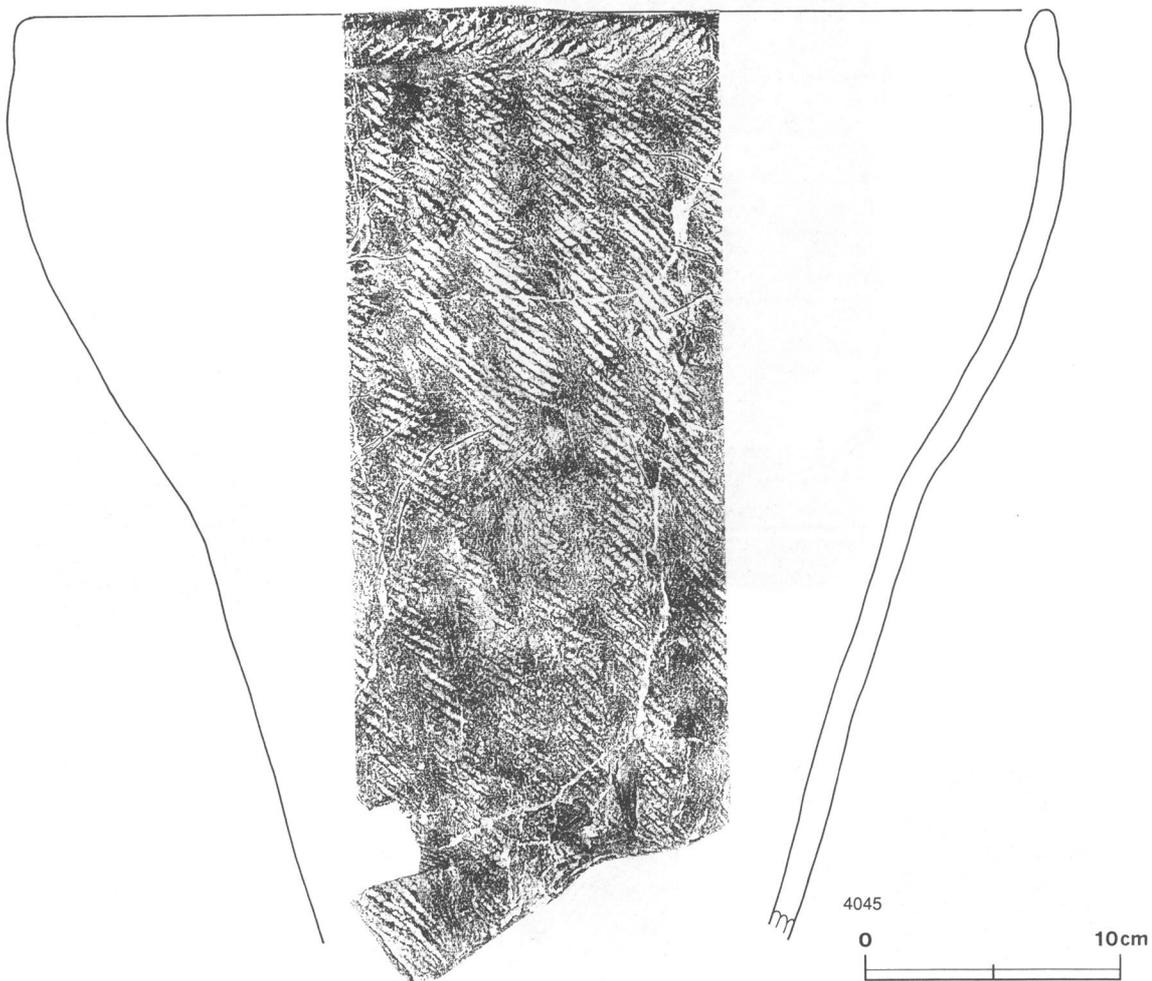
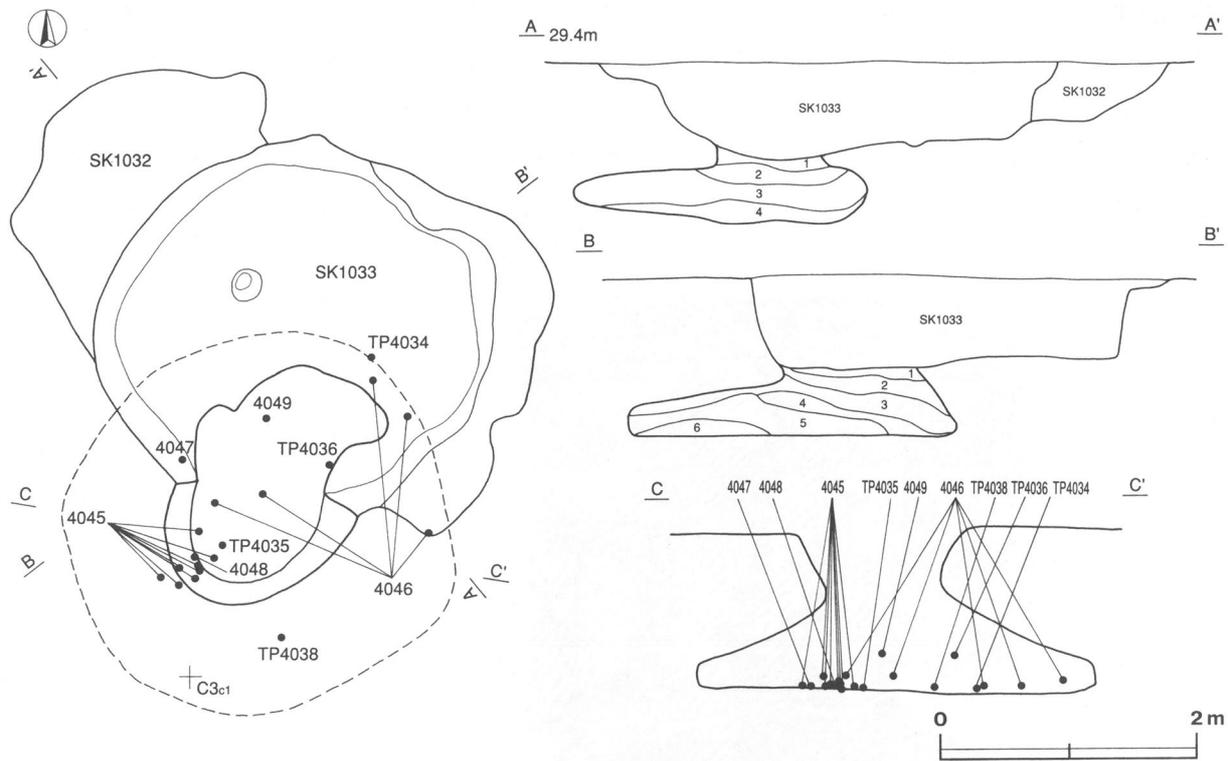
重複関係 第1033号土坑に北側半分の壁の上部を掘り込まれている。

規模と形状 開口部の平面形は，長径2.08m，短径1.48mの不整楕円形である。底面ほぼ平坦で，平面形は径3.10mのほぼ円形である。確認面からの深さは134cmである。壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり，ほぼ水平の天井部に至る。くびれ部から壁の上位は外傾して立ち上がる。また，底面からくびれ部までの高さは，平均60cmである。

覆土 6層に分層される。下層の第4～6層には，粘土粒子や鹿沼パミス，焼土粒子などが含まれ，また，縄文土器の大形破片などが一括廃棄されたような状態で出土しているため，同層は人為堆積の可能性が高いと思われる。

土層解説

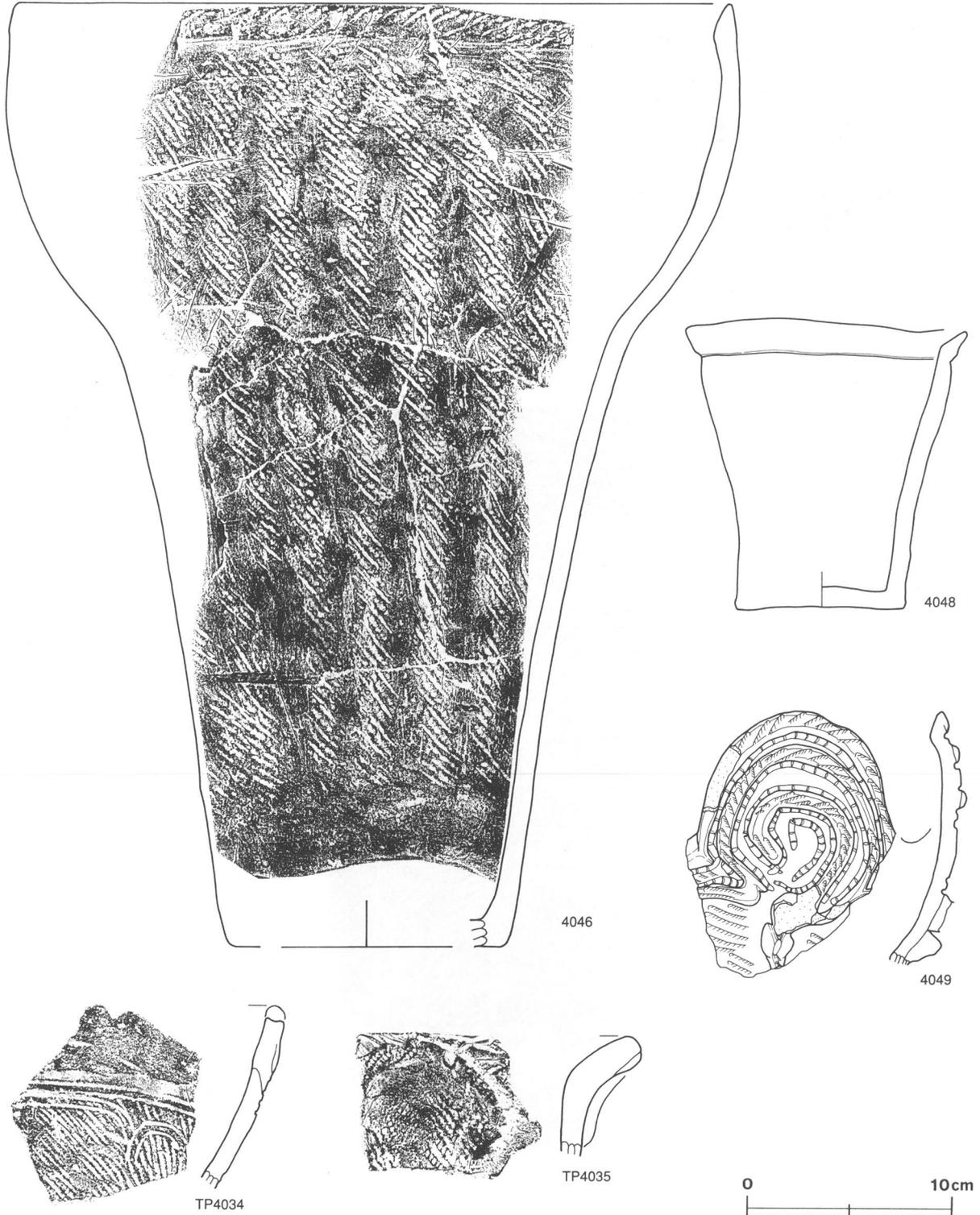
- | | | | |
|--------|---------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量，ロームブロック微量 | | |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子中量，ロームブロック・炭化物・粘土粒子・鹿沼パミス少量 | | |



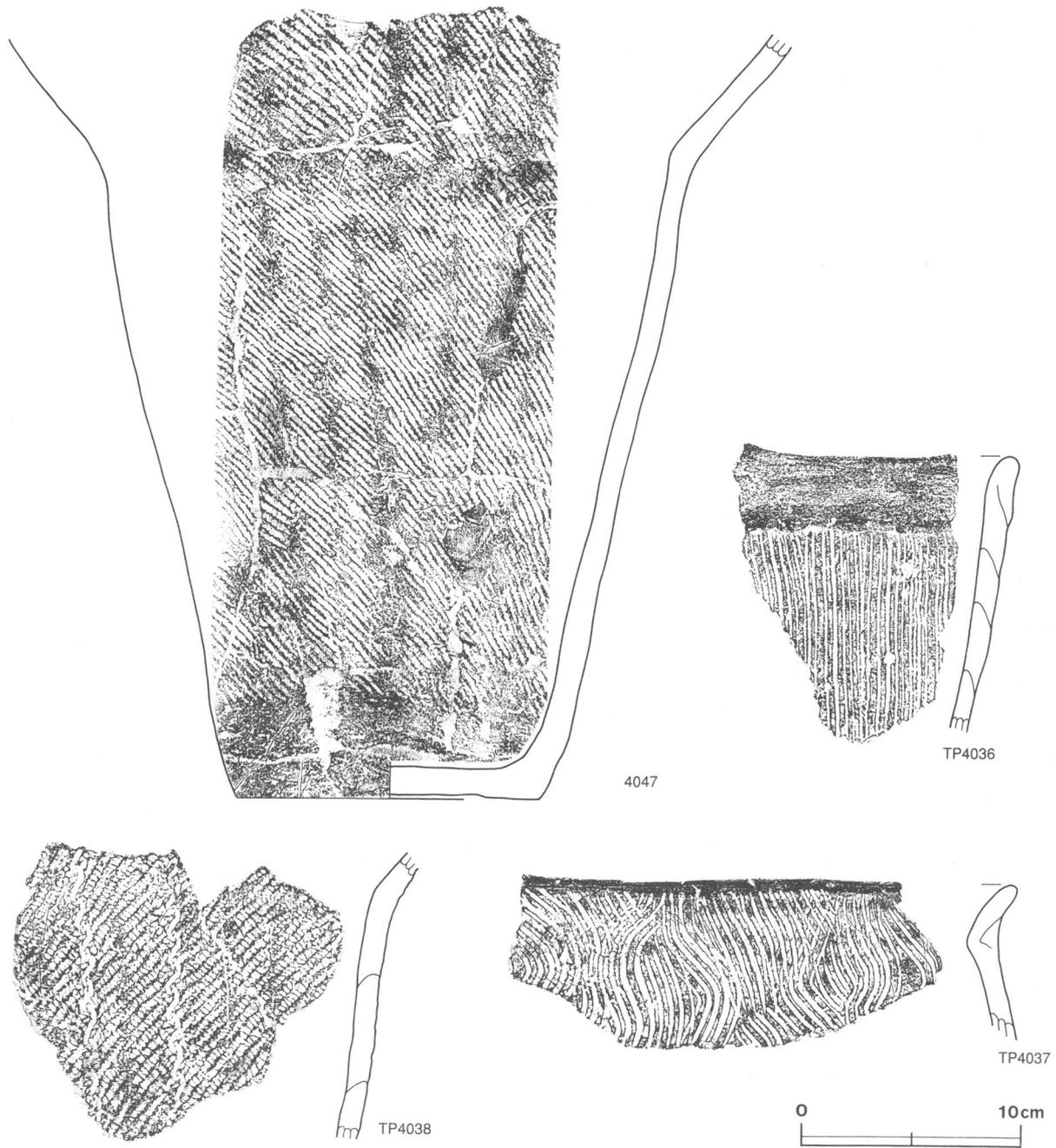
第147图 第1034号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片169点，礫4点が，主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。特に，底面中央やや南側の床面からは，縄文土器の大形破片などが潰れたような状態で集中して出土している。

所見 底面中央やや南側の床面に遺物の集中が見られ，一括廃棄された様相を呈している。本跡の廃絶時期は，底面及び覆土下層から廃棄されたような状態で出土した4045・4046などから，縄文時代中期中葉（阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期）と判断される。



第148図 第1034号土坑出土遺物実測図（1）



第149図 第1034号土坑出土遺物実測図(2)

第1034号土坑出土遺物観察表(第147~149図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4045	縄文土器	深鉢	[39.9]	(36.8)	—	L R単節縄文を口縁部端は横位、胴部は間隔をあけて縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	底面	
4046	縄文土器	深鉢	[34.8]	46.3	13.5	付加条縄文を口縁部端は横位に、胴部は間隔をあけて縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土下層	
4047	縄文土器	深鉢	—	(35.0)	13.7	胴部にL R単節縄文を間隔をあけて縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい黄橙	底面	
4048	縄文土器	深鉢	13.8	14.3	8.3	無文、折り返し口縁部。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	底面	
4049	縄文土器	深鉢	—	(13.0)	—	把手部、半截竹管状工具による結節沈線文を同心円状に施文。地文は無節縄文を施文。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土中層	

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP4034	縄文土器	深鉢	—	(9.0)	—	平行沈線を横位に一条巡らし、下位に弧状のモチーフを描出。地文はL R単節縄文を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐色	覆土下層	
TP4035	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	口縁部に微隆帯で横位のS字状のモチーフを描出。地文はL R単節縄文を粗く施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐色	覆土中層	
TP4036	縄文土器	深鉢	—	(12.6)	—	口縁部上端を無文、下位に縦位の集合沈線を密に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐色	覆土下層	
TP4037	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	口縁部端から縦位に蛇行する集合沈線を粗く施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐色	覆土下層	
TP4038	縄文土器	深鉢	—	(13.0)	—	縦位のS字状結節文、地文はR L単節縄文を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐色	覆土中層	

第1035号土坑（第150・151図）

位置 調査2区の北西部、C2 d7区。住居跡群域に位置する。

重複関係 北側で第1050号土坑、南西側で第1182号土坑を掘り込み、さらに、第141号住居跡の南東部と、第145号住居跡の北西部を掘り込んでいる。

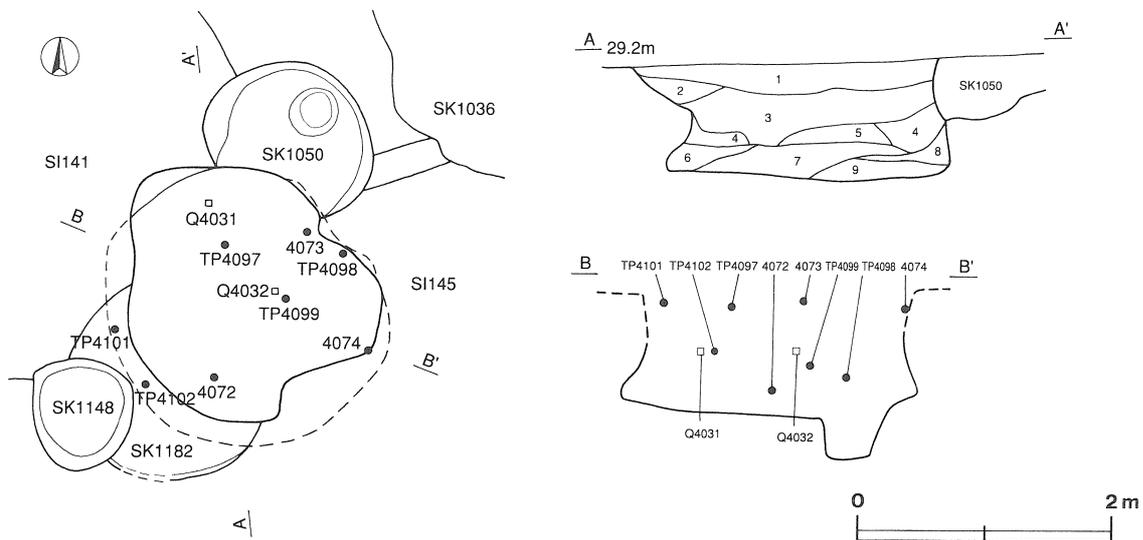
規模と形状 開口部の平面形は、長径2.24m、短径1.90mの楕円形である。底面はほぼ平坦で、平面形は長径2.24m、短径2.08mの楕円形である。確認面からの深さは94cmで、壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり、上位で緩やかに立ち上がる。ピットは1か所で、P1は東壁寄りに位置し、深さ35cmである。

覆土 9層に分層される。下層の第7～9層はロームブロックやローム粒子、鹿沼パミスを比較的多く含んでいる。第2層は廃棄された焼土が主体となった土層であり、人為堆積と考えられる。

土層解説

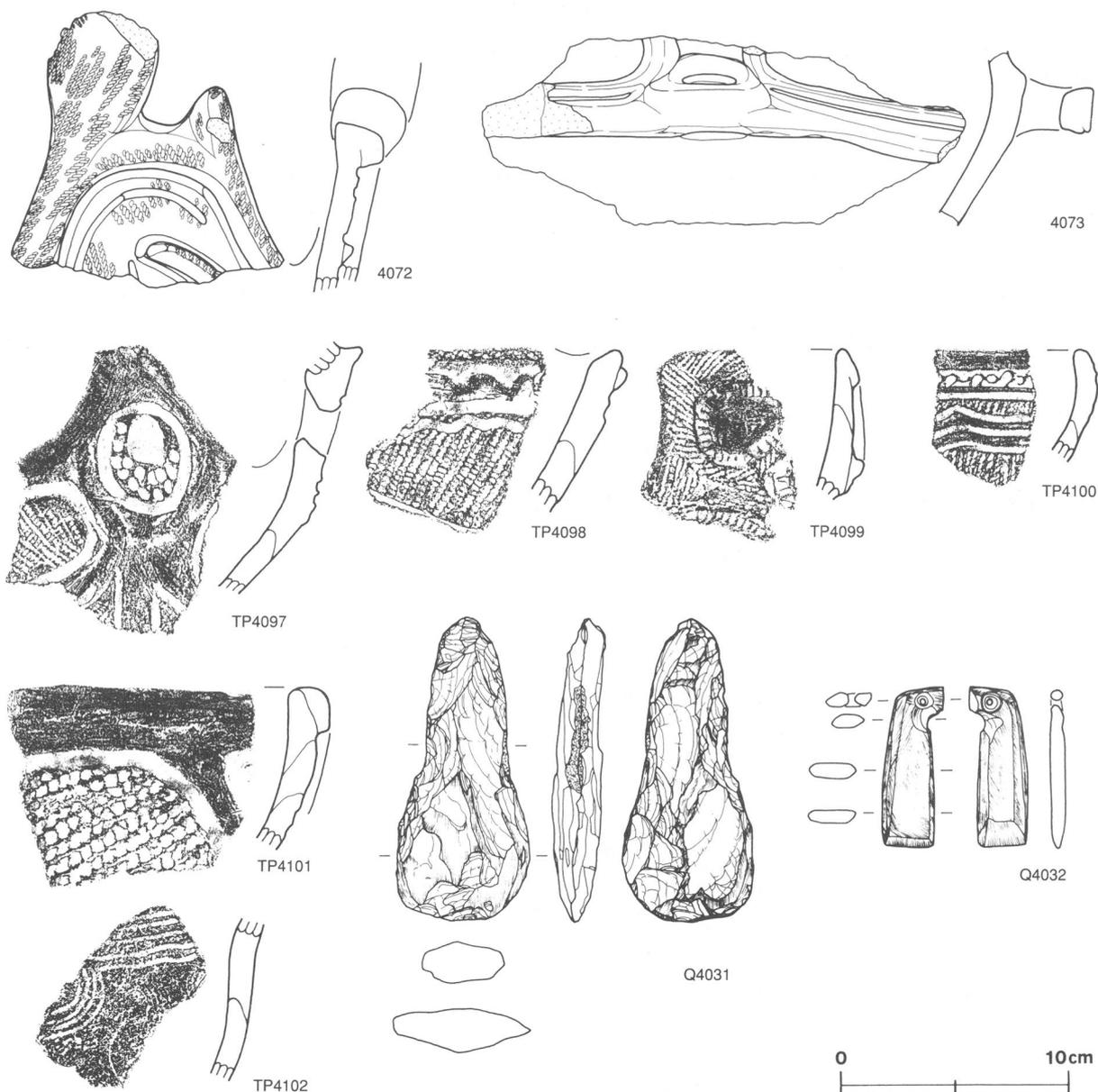
- | | | | |
|--------|-------------------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 黒色 | 炭化粒子中量、ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子・焼土小ブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック微量 | 8 極暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| | | 9 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片394点、打製石斧1点、磨石1点、玦状耳飾り1点、礫29点が、覆土中層を主体に廃棄されたような状態で出土している。また、覆土の第3層からは、半分に欠損した頁岩製の玦状耳飾が出土している。



第150図 第1035号土坑実測図

所見 覆土上層から中層にかけて縄文土器の大形破片などが、廃棄されたような状態で出土している。同様に、頁岩製の塊状耳飾も、欠損によって埋まりかけの本跡に廃棄されたものと考えられる。本跡の廃絶時期は、遺構の新旧関係や出土遺物などから、縄文時代中期後葉（加曾利 E II 式期）と判断される。



第151図 第1035号土坑出土遺物実測図

第1035号土坑出土遺物観察表（第151図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4072	縄文土器	深鉢	—	(12.2)	—	把手部、隆帯で作出された区画内に沈線を巡らす。地文はRL単節縄文を粗く施文。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土下層	
4073	縄文土器	深鉢	—	(7.8)	—	胴部片、背に沈線を施した隆帯が鐮状に巡り、接合部には環状の隆帯を貼り付ける。	長石・石英・雲母	普通	にぶい橙	覆土上層	
TP4097	縄文土器	深鉢	—	(10.3)	—	波状口縁部、沈線を伴う隆帯で楕円区画、区画内に附加条縄文・刺突文を施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土上層	
TP4098	縄文土器	深鉢	—	(7.5)	—	口縁部端に交互押捺を加えた隆帯、直下に2条の沈線を沿わせる。地文はRL単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	暗褐	覆土中層	

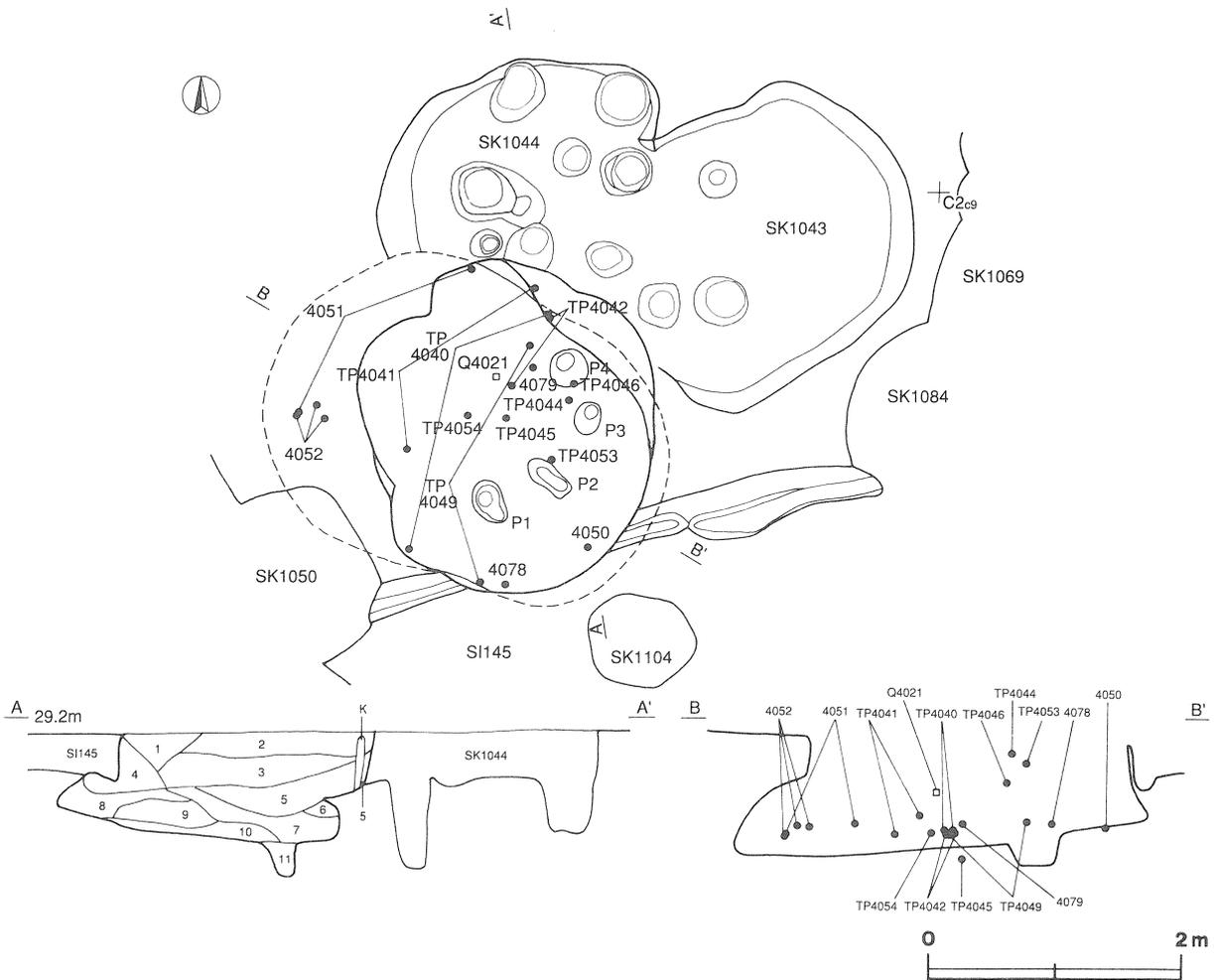
番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP4099	縄文土器	深鉢	—	(6.6)	—	把手部、半截竹管状工具による結節沈線を伴う隆帯で楕円区画、隆帯上にL R単節縄文を施文。	長石・石英・雲母	普通	黒褐	覆土中層	
TP4100	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	上下に沈線を伴う棒状工具による交互刺突文と沈線を巡らす。地文は縦位の捺糸文を施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土中層	
TP4101	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	沈線を伴う隆帯で楕円区画、地文はR L R複節縄文を縦位に施文。	長石・石英・雲母	普通	褐	覆土上層	
TP4102	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	半截竹管状工具による沈線でモチーフを描出する。	長石・石英・雲母	普通	暗褐	覆土中層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4031	打製石斧	13.3	5.9	2.1	163.9	頁岩	両面調整で撥形を呈する。刃部付近に研磨痕、側縁部に摩滅痕。	覆土中層	P L 60
Q4032	塊状耳飾	7.1	(2.7)	0.7	17.4	頁岩	全面に研磨痕、両面から穿孔した補修孔あり。	覆土中層	P L 58

第1036号土坑（第152～156図）

位置 調査2区の北西部，C2c8区。土坑墓群と住居跡群域に挟まれた区域に位置する。

重複関係 北西側で第1043号土坑，第1044号土坑を掘り込み，第145号住居跡に南壁の上部を掘り込まれている。



第152図 第1036号土坑実測図

規模と形状 開口部の平面形は、長径2.48m、短径2.24mの不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、平面形は長径3.28m、短径2.47mの楕円形である。確認面からの深さは102cmである。壁は下位から中位にかけて内傾して立ち上がり、上位で直立する。また、底面からくびれ部までの高さは、平均54cmである。ピットは4か所で、弧を描くように中央部からやや東側寄りに位置する。P1は深さ32cm、P2は深さ22cm、P3は深さ27cm、P4は深さ27cmである。

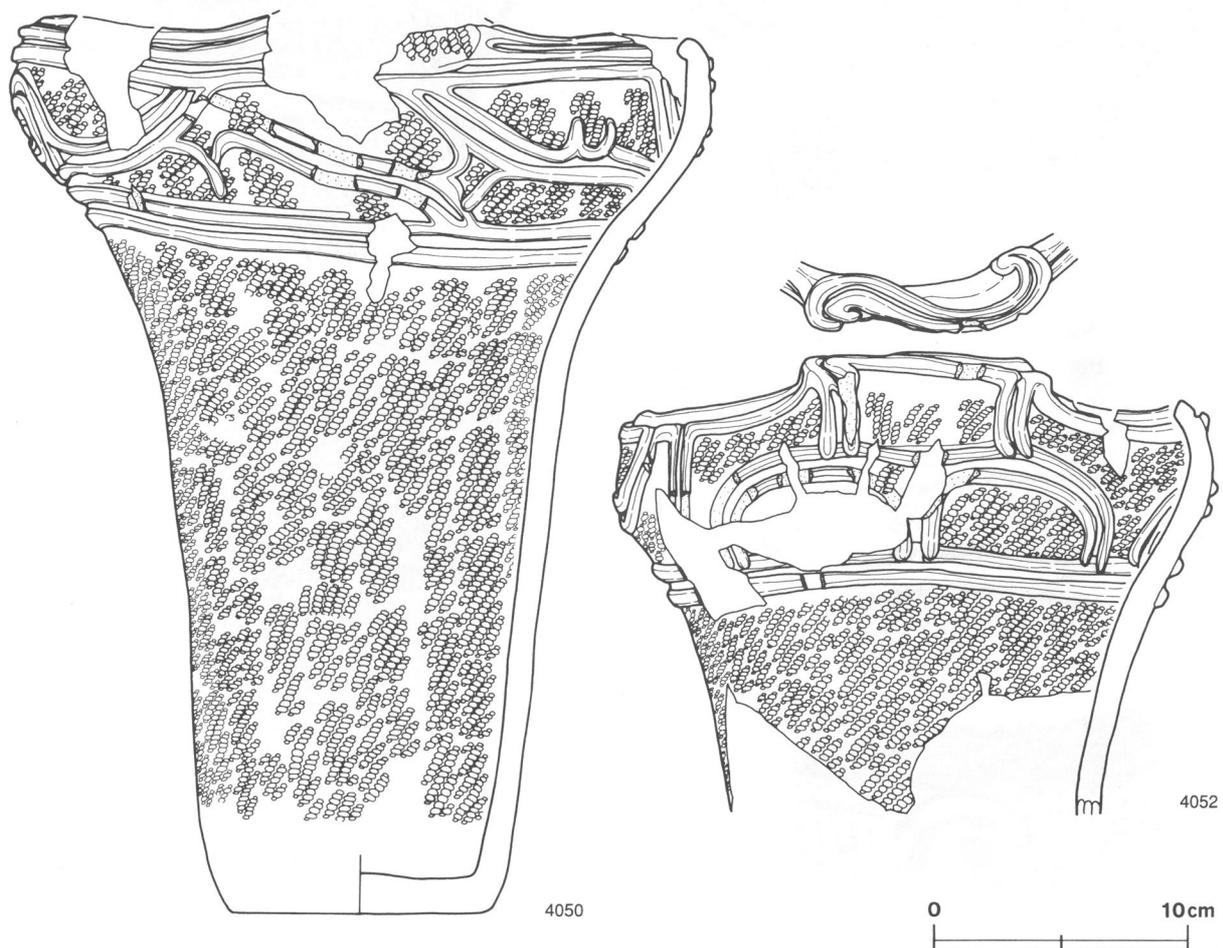
覆土 7層に分層される。最下層の第5層は底面に平坦に堆積し、ロームブロックやローム粒子が比較的多く含まれている。また、第4層はロームブロックを主体とし、狭い範囲に凸状に堆積している。中層から下層にかけて、縄文土器の大形破片などが一括廃棄されたような状態で出土していることから、第4・5層ともに人為堆積の可能性が高いと思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック少量，炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片847点、凹石1点、磨石2点、敲石1点、礫21点が、主に覆土中層から下層にかけて一括廃棄されたような状態で出土している。また、ほぼ完形の縄文土器の深鉢が、床面直上から横位の状態で出土している。

所見 本跡の廃絶時期は、底面から横位の状態で出土している4050などから、縄文時代中期後葉（加曾利E I式期）と判断される。



第153図 第1036号土坑出土遺物実測図（1）